

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第180集

兵庫館跡・梅ノ木台地Ⅱ遺跡 発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

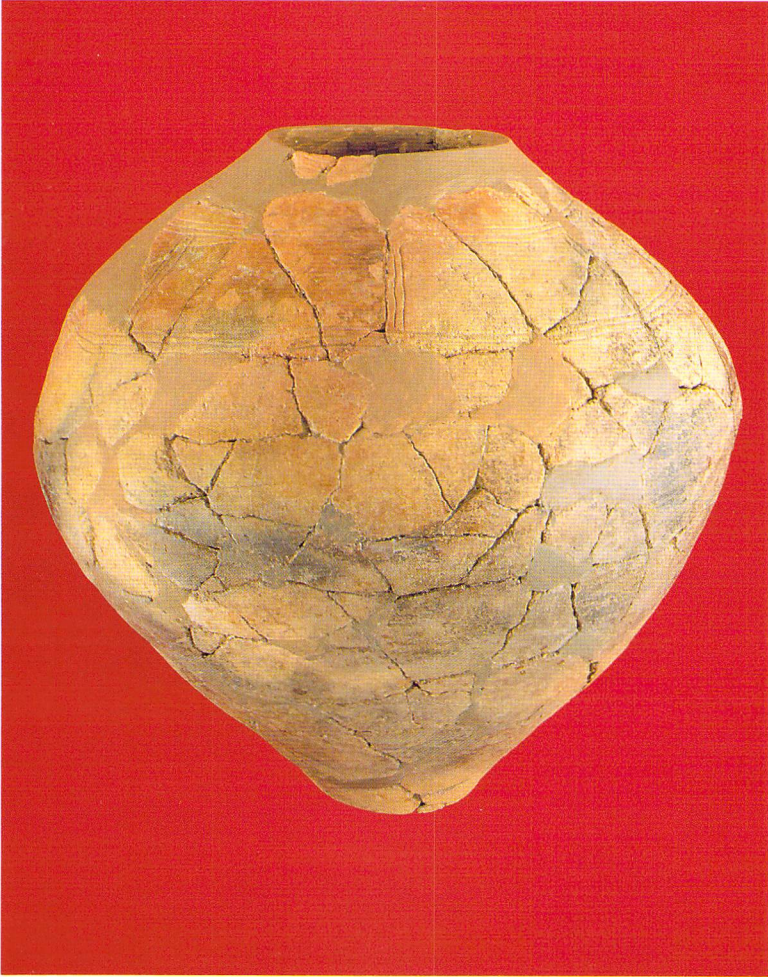
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

兵庫館跡・梅ノ木台地Ⅱ遺跡正誤表

ページ	行	誤	正
3	19	層厚30～40 <u>m</u>	層厚30～40 <u>cm</u>
37	5	壺13、14、15（3号土器、 5号土器、5号土器は合 わせ口土器）	壺13、14、15（3号土器、 4号土器、9号土器：9 号土器は合わせ口土器）
45	土器観察表 30	成形 <u>非</u> ロクロ	成形 <u>ロ</u> クロ
45	土器観察表 31	成形 <u>ロ</u> クロ	成形 <u>非</u> ロクロ
72	石器一覧表(2) 327	石 <u>鏃</u>	石 <u>核</u>
84	17	<u>19～22</u> は	<u>19、20、22</u>
139	表3	ラウンドス <u>フ</u> レーパー	ラウンドス <u>ク</u> レーパー
185	キャプション	竪穴住居跡2出土遺物 <u>3</u>	竪穴住居跡2出土遺物

兵庫館跡・梅ノ木台地Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査



遠賀川系土器

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。このように埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成元年度・平成3年度に発掘調査した兵庫館跡、梅ノ木台地II遺跡の調査結果をまとめたものであります。両遺跡ともに和賀川右岸の段丘の縁辺に立地し、調査の結果、兵庫館跡は堀跡、土塁、柵列等の中世の遺構と、弥生時代の墓壇から遠賀川系土器が、また、梅ノ木台地II遺跡では弥生時代の土器や平安時代の竪穴住居跡が発見され、新しい資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書の作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、北上市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成5年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

例言

1. 本報告書は岩手県北上市和賀町煤孫6地割64-6ほかに所在する^{ひょうごだて}兵庫館跡、同じく岩崎20地割24-1ほかに所在する^{うめのきだいち}梅ノ木台地II遺跡の発掘調査を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は東北横断自動車道秋田線建設に伴う記録保存を目的とした調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号、調査期間、発掘調査面積、調査担当者は本文中の中扉に記したとおりである。
4. 両遺跡ともに報告書の執筆は、Iが佐々木嘉直、他は川村均が担当した。
5. 各種鑑定にあたっては、次の方々に依頼した（敬称略）。

石材鑑定	佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）
炭化材鑑定	早坂松次郎（岩手県木炭協会）
黒曜石石材産地分析	藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
土器胎土分析	清水芳裕（京都大学埋蔵文化財研究センター）
6. 野外調査にあたっては、北上市教育委員会及び地元の方々のご協力をいただいた。
7. 発掘調査、整理にあたっては次の方々からご指導、ご助言をいただいた。（敬称略順不同）
小田野哲憲（岩手県教育委員会文化課）、昆野靖（岩手県総合教育センター）、本堂寿一（北上市博物館）、佐藤嘉広（岩手県立博物館）、菅原俊行（秋田市教育委員会）、浅田知世（北上市埋蔵文化財センター）、小田島恭二（北上市教育委員会）、須藤隆（東北大学）
8. 本報告に先立ち、調査略報や岩手考古学会で資料報告をしている。相違がある場合は本報告を正しいものとする。
9. 本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

本文

序	溝状遺構	31
例言	〔2〕 弥生時代の遺構と遺物	32
I 調査に至る経過	〔3〕 平安時代の遺構と遺物	43
II 位置と環境	〔4〕 その他の遺構	43
1 位置	〔5〕 遺構外の出土遺物	50
2 地理的環境	(1) 土器・土製品・金属類	50
3 地形と地質	(2) 石器・石製品	52
4 基本層序	4 まとめ	73
5 周辺の遺跡	V 梅ノ木台地II遺跡	79
III 調査方法と整理方法等	1 検出された遺構と遺物	83
1 野外調査	〔1〕 竪穴住居跡	83
2 室内整理	〔2〕 埋設土器	94
IV 兵庫館跡	〔3〕 土坑	94
1 遺跡の現状	〔4〕 焼土	96
2 文献にみる兵庫館	〔5〕 溝跡	102
3 検出された遺構と遺物	2 遺構外の出土遺物	104
〔1〕 館跡に伴う遺構と遺物	〔1〕 土器・土製品	104
堀跡	〔2〕 石器・石製品・金属製品	113
土塁	〔3〕 黒曜石	113
柵列	3 まとめ	127
柱穴列	付編	
掘立柱建物跡	土器胎土分析	129
門跡	黒曜石石材産地分析	131
土橋		

表 目 次

第1表 和賀川下流域段丘対比表	3	第4表 兵庫館跡石器一覧表(2)	72
第2表 周辺の遺跡一覧表	8	第5表 梅ノ木台地II石器一覧表(1)	125
第3表 兵庫館跡石器一覧表(1)	71	第6表 梅ノ木台地II石器一覧表(2)	126

図版目次

第1図	遺跡位置図	2	域	5	
第2図	地形分類図	4	第4図	土層柱状図	6
第3図	兵庫館跡、梅ノ木台地II遺跡調査区		第5図	周辺の遺跡位置図	9

兵庫館跡

第1図	兵庫館跡遺構配置図(全体)	15	第19図	土坑1、2・掘立柱建物跡2	47
第2図	地形断面図	17	第20図	焼土・炭化物集中地点	48
第3図	現状地形測量図	19	第21図	炭窯跡・溝跡	49
第4図	主要遺構配置図	21	第22図	遺構外出土土器1	54
第5図	堀跡出土遺物	24	第23図	遺構外出土土器2	55
第6図	堀跡・土橋・土塁断面図	25	第24図	遺構外出土土器3	56
第7図	柵列・柱穴列	27	第25図	遺構外出土土器4	57
第8図	土塁3・柵列断面図	29	第26図	遺構外出土土器5	58
第9図	V N10B埋設土器	32	第27図	遺構外出土土器6	59
第10図	V N10B埋設土器・出土遺物	33	第28図	遺構外出土土器7	60
第11図	V N9B埋設土器・配石遺構	35	第29図	遺構外出土土器8	61
第12図	V N5F埋設土器・墓壇	36	第30図	遺構外出土土器9	62
第13図	V N9B埋設土器・V N5F埋設土器・墓壇出土遺物1	39	第31図	遺構外出土土器10	63
第14図	墓壇出土遺物2	40	第32図	遺構外出土土器11、土製品、金属類	64
第15図	墓壇出土遺物3・7号土器	41	第33図	遺構外出土石器1	65
第16図	配石遺構・V N9B埋設土器関連出土遺物	42	第34図	遺構外出土石器2	66
第17図	竪穴住居跡	44	第35図	遺構外出土石器3	67
第18図	竪穴住居跡出土遺物	45	第36図	遺構外出土石器4・石製品	68
			第37図	遺構外出土石器5	69
			第38図	遺構外出土石器6	70

梅ノ木台地II遺跡

第1図	梅ノ木台地II遺跡遺構配置図	81	第6図	竪穴住居跡1出土遺物4	90
第2図	竪穴住居跡1	85	第7図	竪穴住居跡2	92
第3図	竪穴住居跡1出土遺物1	87	第8図	竪穴住居跡2出土遺物	93
第4図	竪穴住居跡1出土遺物2	88	第9図	埋設土器	94
第5図	竪穴住居跡1出土遺物3	89	第10図	埋設土器等実測図	95

第11図	土坑	97	第24図	遺構外出土石器 7・土製品	112
第12図	土坑 2 出土遺物	98	第25図	黒曜石出土分布図	114
第13図	土坑 3 出土遺物	98	第26図	遺構外出土石器 1	115
第14図	焼土(1)	99	第27図	遺構外出土石器 2	116
第15図	焼土(2)	100	第28図	遺構外出土石器 3	117
第16図	焼土 6 出土遺物	102	第29図	遺構外出土石器 4	118
第17図	溝跡	103	第30図	遺構外出土石器 5	119
第18図	遺構外出土石器 1	106	第31図	遺構外出土石器 6	120
第19図	遺構外出土石器 2	107	第32図	遺構外出土石器 7	121
第20図	遺構外出土石器 3	108	第33図	遺構外出土石器 8・石製品・金属類	122
第21図	遺構外出土石器 4	109			
第22図	遺構外出土石器 5	110	第34図	黒曜石 1	123
第23図	遺構外出土石器 6	111	第35図	黒曜石 2	124

写真図版目次

兵庫館跡

写真図版 1	遺跡遠景	143	連遺物	156	
写真図版 2	遺跡現状近景	144	写真図版15	竪穴住居跡出土遺物	157
写真図版 3	完掘状況・基本層序	145	写真図版16	遺構外出土石器 1	158
写真図版 4	堀跡・土塁(1)	146	写真図版17	遺構外出土石器 2	159
写真図版 5	土塁(2)	147	写真図版18	遺構外出土石器 3	160
写真図版 6	柵列・柱穴列	148	写真図版19	遺構外出土石器 4	161
写真図版 7	埋設土器・配石遺構	149	写真図版20	遺構外出土石器 5	162
写真図版 8	墓墳	150	写真図版21	遺構外出土石器 6	163
写真図版 9	竪穴住居跡	151	写真図版22	遺構外出土石器 7	164
写真図版10	土坑・炭窯跡	152	写真図版23	遺構外出土石器 8	165
写真図版11	堀跡・V N10B 埋設土器出土遺物	153	写真図版24	遺構外出土石器 9・金属類	166
写真図版12	V N9B、V N5F 埋設土器・墓墳出土遺物 1	154	写真図版25	遺構外出土石器 1	167
写真図版13	墓墳出土遺物 2・7号土器	155	写真図版26	遺構外出土石器 2	168
写真図版14	配石遺構・V N9B 埋設土器関		写真図版27	遺構外出土石器 3	169
			写真図版28	遺構外出土石器 4	170
			写真図版29	遺構外出土石器 5	171

梅ノ木台地II遺跡

写真図版30	梅ノ木台地II遺跡全景 ……173	写真図版44	遺構外出土土器 1 ……187
写真図版31	遺跡現状 ……174	写真図版45	遺構外出土土器 2 ……188
写真図版32	基本層序 ……175	写真図版46	遺構外出土土器 3 ……189
写真図版33	竪穴住居跡 1 (1) ……176	写真図版47	遺構外出土土器 4 ……190
写真図版34	竪穴住居跡 1 (2) ……177	写真図版48	遺構外出土土器 5・土製品 191
写真図版35	竪穴住居跡 2 ……178	写真図版49	遺構外出土石器 1 ……192
写真図版36	埋設土器等 ……179	写真図版50	遺構外出土石器 2 ……193
写真図版37	土坑(1) ……180	写真図版51	遺構外出土石器 3 ……194
写真図版38	土坑(2) ……181	写真図版52	遺構外出土石器 4 ……195
写真図版39	焼土・溝跡 ……182	写真図版53	遺構外出土石器 5 ……196
写真図版40	竪穴住居跡 1 出土遺物 1 ……183	写真図版54	遺構外出土石器6・石製品・金属類 ……197
写真図版41	竪穴住居跡 1 出土遺物 2 ……184	写真図版55	黒曜石 ……198
写真図版42	竪穴住居跡 2 出土遺物 3・埋設土器 ……185		
写真図版43	土坑 2、3・焼土 6 出土遺物 ……186		

I 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長 107 km の高速道路である。このうち、第 9 次・第 10 次施工命令区間は、北上ジャンクションから秋田県境までの延長 33,9 km である。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和 56 年から分布調査を行っており、昭和 62 年 4 月 13 日付け「仙建北工第 35 号」による依頼をうけて分布調査結果を同年 5 月 25 日付け「教文第 117 号」により日本道路公団仙台建設局に回答し、その取り扱いについて協議が重ねられ、止むを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

発掘調査の実施については、昭和 63 年度以降、岩手県教育委員会が発掘調査事業を日本道路公団仙台建設局に照会し、回答を受けたのち日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の 3 者の協議を経て、埋蔵文化財センターが担当することとした。事業着手後に調査の変更がある場合もその都度協議しながら進め、岩手県教育委員会文化課の調整を経て事業計画を変更して進めた。

本報告書の兵庫館跡と梅ノ木台地 II 遺跡調査は、昭和 63 年 12 月 27 日及び平成元年 1 月 21 日の 3 者協議を経て、平成元年・3 年に実施することとした。しかし、保安林の解除がおくれた梅ノ木台地 II 遺跡は 3 年度だけの調査となった。

II 位置と環境

1 位置

兵庫館跡、梅ノ木台地 II 遺跡は隣接し北上市と賀町岩崎、煤孫に所在する。北上市は岩手県の南西部に位置し、北は花巻市、東は東和町、江刺市、南は金ヶ崎町と胆沢町、西は湯田町と沢内村に接する。岩手県北部から南流する北上川と奥羽山脈から東流する和賀川の合流地点に発達した都市である。同市西部を東日本旅客鉄道北上線が東西に横断する。遺跡は、東日本旅客鉄道藤根駅の南約 2.3 km に位置する。同地点は国土地理院発行の 5 万分の 1 の地形図では、きたかみ〔NJ-54-14-13〕(一関 13 号) の図葉中北緯 39 度 17 分、東経 141 度 2 分付近である。

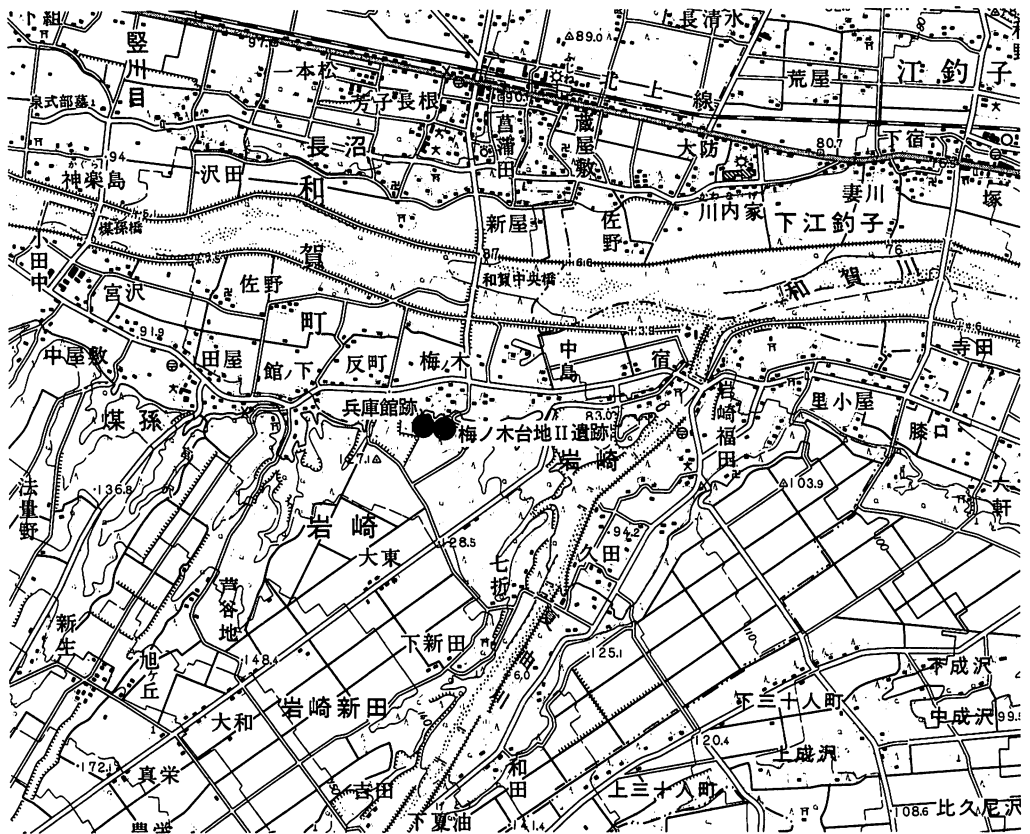
2 地理的環境

北上市では年平均気温は 10.8℃、年間降水量は 1,334 mm で県内では中程度である。ただし、町の西部は奥羽山脈の一部であり冬季の積雪量は多量であり、隣接する湯田町、沢内村などは県内では有数の豪雪地帯である。初雪は 11 月中旬、終雪は 3 月下旬で積雪期間は約 4 カ月であ

る。風向は年間を通じ西風が多いが、特に冬季間は北西の季節風が強い。遺跡の北約1kmには和賀川が東流し、東約8kmには北上川が南流する。和賀川は奥羽山脈の和賀岳に端を発し、沢内村、湯田町を経て、北上市古川で北上川に注ぐ全長75kmの1級河川である。同河川は夏油川等1級河川だけでも13河川を支流とする当地では最大の河川であり、古来から人々に生活の場を提供したため、同流域には多くの集落が発生した。西（上流域）から順に仙人、岩沢、横川目、豎川目、藤根、長沼、煤孫、岩崎の9集落が並んでいる。また、湯田町と北上市和賀町の境界にある当楽峡谷でせき止められて湯田ダム（錦秋湖）を作り、北上市和賀町一体の水田を潤す農業用水として重要な役割を担っている。

3 地形と地質

遺跡が所在する北上市和賀町岩崎付近は北上盆地のほぼ中央に位置する。北上盆地は古生界を主とする北上山地と第三系を主とする奥羽山脈が南北に並走する間にあって、北上川とその支流が開析したものである。北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どは奥羽山脈に水源をもつことから、北上川西岸には河岸段丘や扇状地などがよく発達しているのに対し、東岸には極



第1図 遺跡位置図

1 : 50,000 北上

めて部分的にしか見られない。したがって、北上川の本流は著しく東側によって流れている。このように、北上盆地の主体部は東流する何本かの大きな河川によって作り出されたものであるため、大小の段丘や扇状地、河岸平野及び起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている。北上市の地形はこのような北上盆地のもつ特徴をそのまま持っている。

図2の地形分類図にみるように遺跡は和賀川右岸の洪積世の低位段丘に立地している。北上川中流域西岸では大別すると洪積世の段丘が3面みられる。高位段丘は西根段丘、中位段丘は村崎野段丘、低位段丘は金ヶ崎段丘と呼ばれている。これらの段丘は表1のように日本の第4系標準地域である南関東地域のそれと同表のように対比されている。金ヶ崎段丘は北上川中流域中最も広く分布するが和賀川左岸に局部的にみられる段丘面を金ヶ崎段丘II、それ以外を金ヶ崎段丘Iとしている。遺跡付近の段丘は夏油川により形成された扇状地であり金ヶ崎段丘Iに相当する。和賀川と夏油川との合流点まではやく1.8kmの直線距離である。この段丘と和賀川の河岸平野とは急激な崖となって接する。河岸平野は沖積世に形成された平坦面で氾濫原や自然堤防が発達している。

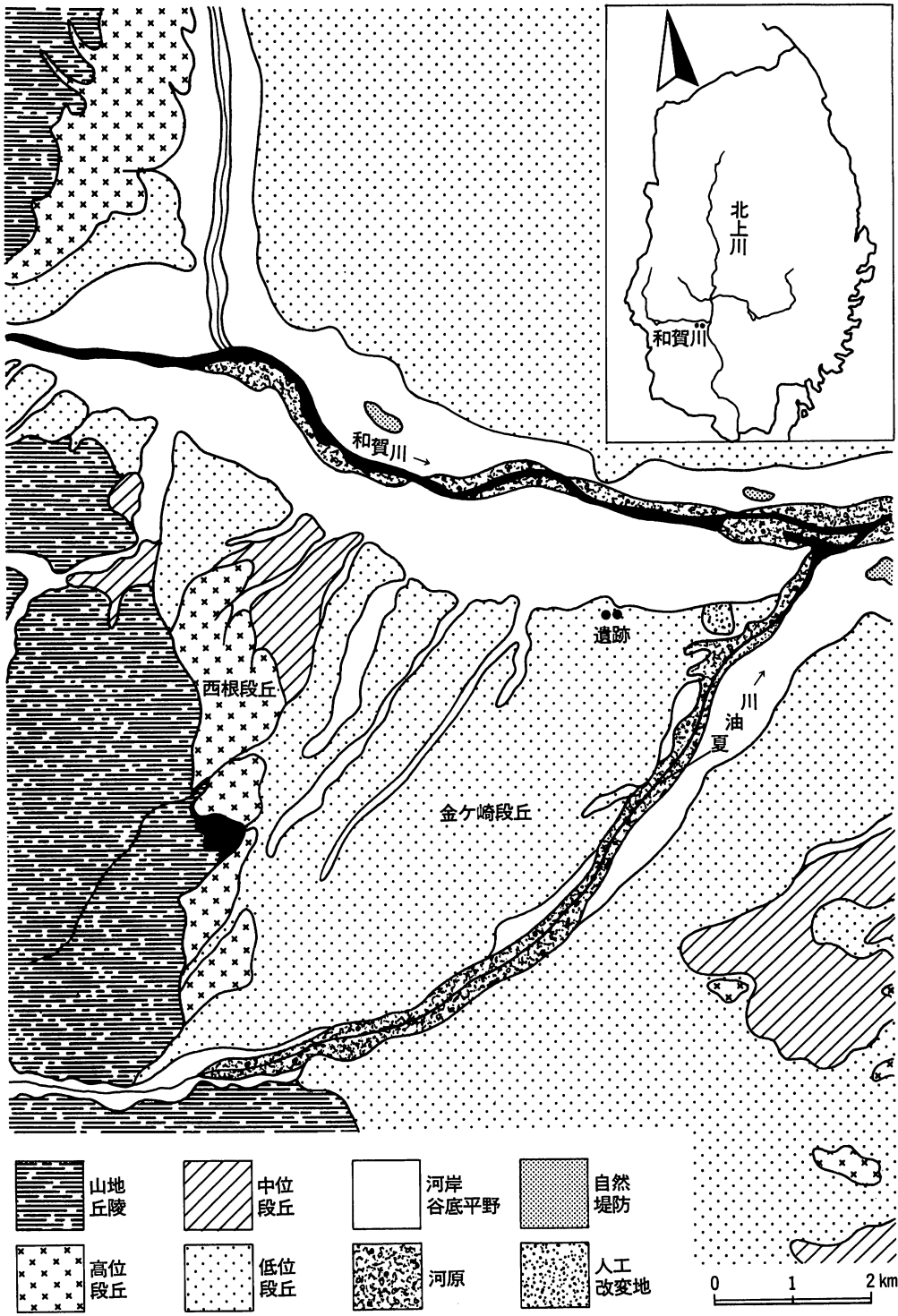
遺跡の標高は122~123m、河岸平野との比高は37~40mである。梅ノ木台地II遺跡の西に兵庫館跡があり平坦な地形を呈している。調査区の北側20~50m程で崖線である。崖下にはすぐ民家が散在する。現況は山林(赤松、落葉松、杉等の人工林)である。

遺跡付近の露頭をみるとこの段丘の基盤層は礫層(瘤木礫層とよばれる)で10m以上の層厚を有している。村崎野段丘にみられる黄橙色浮石は観察されない。礫層の上部にはローム層が層厚1.5m前後にわたりのっている。表層は黒ボク土壌で層厚30~40mである。同層内には断片的、かつ少量の灰白色の火山灰(十和田火山の噴出物で十和田a降下火山灰か?)が認められる。

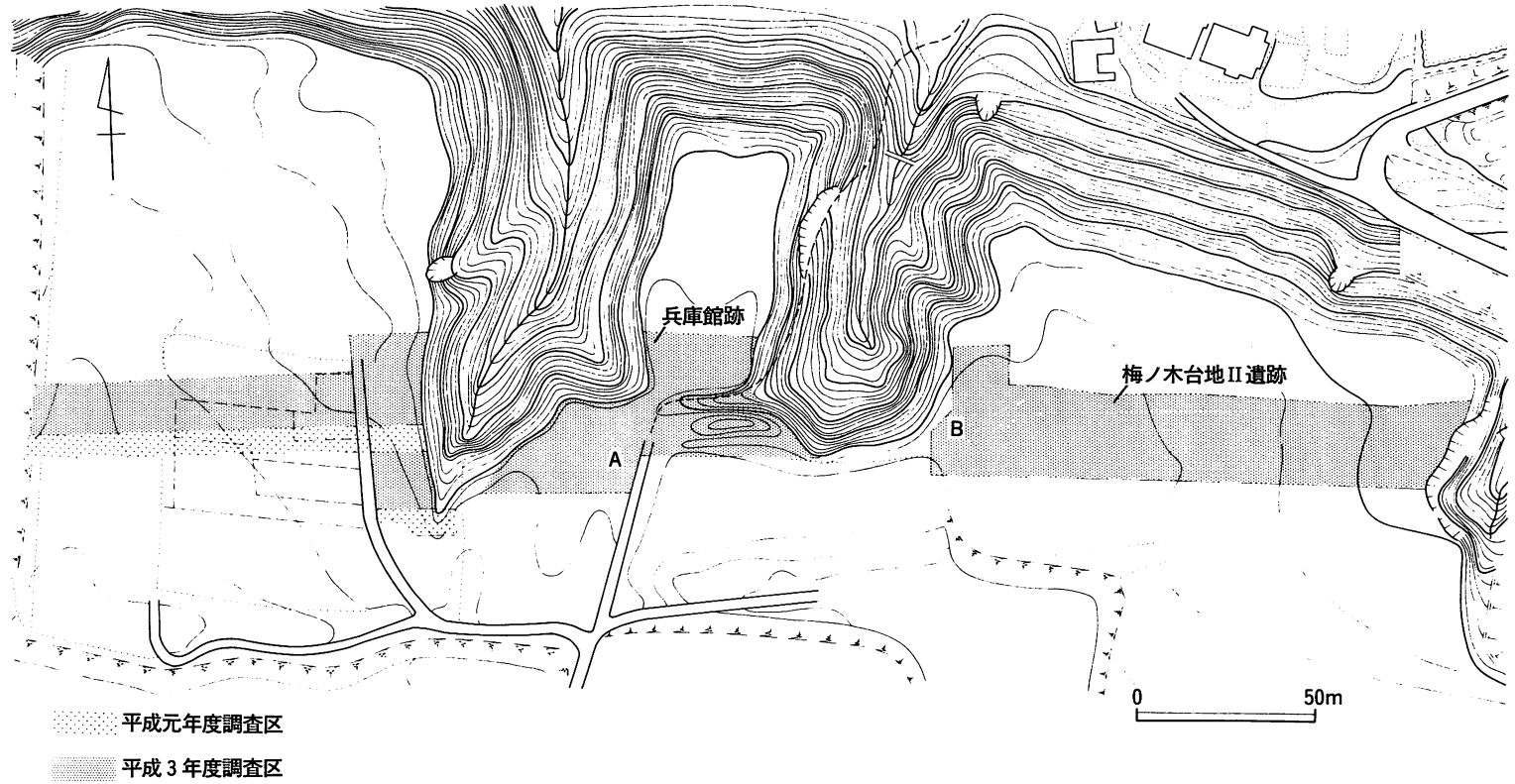
第1表 和賀川下流域段丘対比表

		南 関 東	和 賀 川 流 域
	沖積世	海岸平野	河岸平野
積 洪 世	後 期	立川段丘 武蔵野段丘	金ヶ崎段丘II 金ヶ崎段丘I
	中 期	下末吉段丘 多摩II段丘 多摩I段丘	村崎野段丘 西根段丘

佐藤二郎(1982)「和賀川流域の地形について」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII』岩手県教育委員会より



第2図 地形分類図



第3図 兵庫館跡・梅ノ木台地II遺跡 調査区域 (*A, Bは土層確認地点)

4 基本層序 (第4図)

兵庫館跡と梅ノ木台地II遺跡は連続した遺跡であり、基本的には共通するが以下遺跡別に層序の概略を述べる。なお、土層確認地点は兵庫館跡が第3図のA、梅ノ木台地IIがB地点である。

兵庫館跡

I層 10 YR 3 / 3 暗褐色 腐葉土を主体として現表土である。シルトでしまりない層厚 10~20 cm

II層 10 YR 3 / 2 黒褐色 I層から続く植生根があり、しまりがややあるシルトである。遺物を包含する部分的に灰白色の火山灰がみられる。古代の遺構確認面である。層厚 12~20 cm

III層 10 YR 3 / 3 暗褐色 しまりはII層よりない。シルト質で黄褐色土ブロックが混入する。II層より少ないが遺物を包含する。層厚 15~25 cm

IV層 10 YR 5 / 6 黄褐色 粘土質シルト。かたくしまる。
粘性があり、下部は礫層になる層厚 1 m 以上である。

梅ノ木台地II遺跡

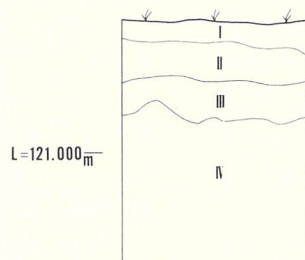
I層 10 YR 2 / 3 黒褐色 腐葉土を主体として現表土である。シルトでしまりない層厚 10~20 cm

II層 10 YR 3 / 2 黒褐色土シルト質でしまりややあり、植生根、若干炭化物が見られる。遺物を包含する部分的に灰白色の火山灰がみられる。古代の遺構確認面である。層厚 8~15 cm

III層 10 YR 3 / 3~3 / 4 暗褐色 シルト質で部分的にしまりがある。黄褐色土ブロックが混入する。遺物を包含する。遺跡中央より東側はこの層から礫がみられる。層厚 10~20 cmである

IV層 10 YR 5 / 6 黄褐色土 粘土質シルトで粘性があり、下部は礫層となり層厚 1 m 以上である。

L=122.000m

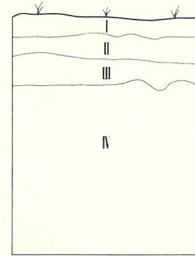


兵庫館跡

L=121.400m

L=121.000m

L=121.000m



梅ノ木台地II遺跡

第4図 土層柱状図

5 周辺の遺跡 (第5図、第2表)

第5図には兵庫館跡、梅ノ木台地II遺跡を中心として85カ所の遺跡を掲載した。和賀川右岸の低位段丘縁、左岸の段丘、自然堤防には多数の遺跡が確認されている。時期としては旧石器、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世に至るまでかなり幅広い。今回の遺跡の調査結果として、兵庫館跡は館跡の他に弥生時代、平安時代の遺構が検出され、また、梅ノ木台地II遺跡では弥生時代、平安時代の遺構がみつき、両遺跡とも複合遺跡であることが明らかとなった。検出された遺構のなかでも館跡に伴う遺構、弥生時代の遺構が際立っていることから、ここでは弥生時代、館跡にしばって記述を進めたい。

従来、周辺地域で弥生時代の遺構、遺物の確認されている遺跡はそれほど多くはない。念仏車(71) [初頭谷起島]、蔵屋敷(72) [初頭谷起島]、本宿(81) [後期天王山系] 等が知られている。これらの遺跡はいずれも和賀川左岸の低地帯に位置している。これに対し和賀川右岸では、最近の東北横断自動車道秋田線建設関連発掘調査で遺構、遺物が確認されている。遺構が確認されている遺跡は、上鬼柳I遺跡(60) 竪穴住居跡7棟 [時期初頭]、土器片として終末赤穴式併行の土器も出土、上鬼柳II(61) 竪穴住居跡1棟 [初頭]、上鬼柳IV(63) 土坑 [初頭]、上反町(35) 土坑 [初頭]、中屋敷(30) フラスコピット [初頭] である。遺構は確認されていないものの弥生土器が出土している遺跡は岩崎城西(39) [初頭、後期天王山]、梅ノ木台地I(38) [後期天王山]、法量野I(31) [前期]、八幡館(24) [前期] 等である。このように弥生時代の遺構、遺物が発見され徐々に資料が増加してきており、和賀川流域の弥生時代研究に好資料を提供している。

次に中世城館についてみると、北上市和賀町内で城館と推定される地点は20カ所前後である。これらの分布地帯は和賀川右岸段丘と尻平川右岸段丘、和賀川低地帯である。これらのうち最も館跡が多く立地するところは和賀川右岸段丘であり、夏油川より上流には14カ所確認されている。和賀川上流より水沢館(5)、岩沢館(9)、馬場館(13)、山口館(15)、田中館(21)、八幡館(24)、月館(25)、林崎館(上煤孫館)(29)、観音館(下煤孫館)(34)、兵庫館(36)、岩崎城(40)、七折館(49) が分布している。グランドプランの類型をみると複郭型と単郭型にわけられる。複郭型は岩崎城、観音館、林崎館、田中館であり、他については単郭型とみられる。岩崎城は当地方を代表する城館である。中世の岩崎氏の持城で大型の堀や土塁が多用され組小路や城内などの地名が今なお残っている。岩崎城をはじめとしてこれらの城館は段丘先端部に立地し前面の自然崖面を利用し、段丘の後背を堀切りしたものである。段丘から北側を望めば広々とした水田地帯がひろがり、中島、梅ノ木、反町、館ノ下、田屋、宮沢、小田中、瀬畑などの集落が散在している。館跡は中世の社会構造を反映している一象徴とみると、単独の存在は考えられない。これらの集落と館跡の立地は何らかの対応関係にあるとみられる。

第2表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	和賀仙人	散布地	旧石器	仙人	44	代官森Ⅰ	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
2	切留Ⅰ	散布地	縄文土器(中・後期)	仙人	45	代官森Ⅱ	散布地	土坑・石器	岩崎新田
3	人当Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)・石器	仙人	46	神楽	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
4	法ヶ松Ⅰ	散布地	縄文土器・石器	岩沢	47	蒲沢	散布地	縄文土器	岩崎新田
5	水沢館	館跡	中世	岩沢	48	水神	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
6	岩沢Ⅰ	散布地	縄文土器(後・晩期)	岩沢	49	七折館	館跡	中世	岩崎
7	下岩沢Ⅰ	集落跡	土坑、縄文土器、弥生土器	岩沢	50	花會根上	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎
8	鳥谷森	散布地	縄文土器(晩期)石器	横川目	51	七折	集落跡	縄文土器、石器、紡錘車	岩崎
9	岩沢館	館跡	縄文土器、陶器	下仙人	52	花會根	散布地	須恵器	岩崎
10	愛宕山	散布地	縄文土器、石器	横川目	53	新田Ⅰ	散布地	石碑、土師器、須恵器	岩崎
11	田代	集落跡	縄文土器(晩期)石器	山口	54	八天坂	散布地	土師器、須恵器	岩崎
12	福田	散布地	縄文土器(中・後期)石器	山口	55	久田Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	岩崎
13	馬場館	館跡	中世	山口	56	寺村	散布地	縄文土器、土師器	岩崎
14	福田塚	塚		山口	57	小寺	散布地	土師器、須恵器	岩崎
15	山口館	館跡	中世	山口	58	小平	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎
16	八幡館	館跡	縄文土器(晩期)弥生土器石器	横川目	59	里小屋	散布地	土師器、須恵器	岩崎
					60	上鬼柳Ⅰ	集落跡	弥生堅穴住居跡、土師器	上鬼柳
					61	上鬼柳Ⅱ	集落跡	堅穴住居跡(平安)	上鬼柳
17	館森	散布地	縄文土器(中・後期)石器	横川目	62	上鬼柳Ⅲ	集落跡	堅穴住居跡(縄文平安)掘立・柱建物跡土師器窯跡	上鬼柳
18	大橋	散布地	縄文晩期注口土器、石器	横川目	63	上鬼柳Ⅴ	集落跡	土坑(縄文)堅穴住居跡(平安)畑跡(平安)	上鬼柳
19	蛭川館	館跡	堀、土塁、縄文土器(中期)	横川目	64	柳上	集落跡	縄文土器、堅穴住居跡(平安、縄文)	鬼柳
20	瀬の森古墳群	古墳群	古銭、人骨	横川目	65	六軒	散布地	縄文土器(晩期)	鬼柳
21	田中館	館跡	土師器、石器	山口	66	下成沢Ⅰ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	成沢
22	八幡野Ⅰ	散布地	縄文土器	煤孫	67	成沢	集落跡	土師器、須恵器	成沢
23	八幡野Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	山口	68	大谷地	集落跡	縄文土器	相去
24	八幡館	館跡散布地	縄文土器、中世	山口	69	菖蒲田古墳群	古墳群	土器、腕手刀	長沼
					70	長沼古墳群	古墳群	腕手刀、勾玉、切子玉	長沼
					71	念仏車	散布地	縄文土器、弥生土器	長沼
26	石會根	集落跡	堅穴住居跡、縄文土器、石器、弥生土器、土師器	煤孫	72	蔵屋敷	集落跡	弥生土器、土師器	江釣子
					73	稲葉Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	藤根
					74	蓮見館	館跡	縄文土器、土師器、須恵器	藤根
27	本郷	集落跡	堅穴住居跡、縄文土器(中期)石器、土師器、須恵器	煤孫	75	長清水Ⅰ	散布地	縄文土器(前期末)土師器	藤根
28	荒屋沢	散布地	縄文晩期壺	煤孫	76	新平	駅家跡	縄文、弥生土器土師器	江釣子
29	林崎館	館跡	縄文土器、中世	煤孫	77	芦萱	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
30	中屋敷	散布地	土器、土師器	煤孫	78	下江釣子羽場	集落跡	土師器	江釣子
31	法量野Ⅰ	散布地	石器	煤孫	79	五条丸古墳群	古墳群	土師器	江釣子
32	法量野Ⅱ	散布地	縄文土器、石器	煤孫	80	猫谷地古墳群	古墳群	腕手刀、勾玉、土師器	江釣子
33	煤孫	集落跡	堅穴住居跡、縄文土器(中期)土師器、須恵器	煤孫	81	本宿	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
					82	下谷地	散布地	平安	相去
					83	鳩岡崎高台	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
34	観音館	館跡	堀、土塁、須恵器	煤孫	84	鳩岡崎上の台	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
35	上反町	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	煤孫	85	滝ノ沢	集落跡	土坑、縄文土器(中期)	相去
36	兵庫館	散布地	縄文土器剥片石器	岩崎					
37	梅ノ木台地Ⅱ	集落跡	弥生、土師器	岩崎					
38	梅ノ木台地Ⅰ	集落跡	縄文土器	岩崎					
39	岩崎城西	散布地	縄文土器、溝跡、陶器	岩崎					
40	岩崎城	館跡	銅鉄鏡、鉄塊、縄文土器	岩崎					
41	岩崎台地遺跡群	集落跡	堅穴住居跡、土師器須恵器	岩崎					
42	望野Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)石器	煤孫					
43	望野Ⅱ	集落跡	縄文土器(前後期)旧石器	煤孫					



第5図 周辺の遺跡位置図

III 調査方法と室内整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区割の設定

兵庫館跡と梅ノ木台地II遺跡ともに道路公団の中心杭の2点を基点とし、2点を通る直線を基準線としてグリットを設定した。

兵庫館跡

兵庫館跡は平成元年度分と平成3年度分の調査区を合わせると東西220m、南北最大幅約60mである。平成元年度分は館本体箇所から離れた西側の台地部分でトレンチ調査であった。館本体周辺は杉林が未伐採であったため、西側調査区の道路公団の設置した中心杭STA 41+00(基点1)、STA 40+80(基点2)の2点間を見通す直線を基準線とした。基準線上を基点1から西へ60m延長した点を原点とした。原点をもとに、基準線に平行または直交する直線で40m毎に区切り大グリットとした。大グリットをさらに10等分して、4m×4mの小グリットとした。基準線より北をN区、南をS区した。グリットの名称は、大グリットを西から東へIN区、IIN区、IS区、IIS区…とし、小グリットは大グリット毎に南北方向には1～10の算用数字、東西方向にはA～Jのアルファベットを与えた。小グリット名は大グリットと組み合わせるとIN3A、IVN6Fというように呼称した。なお、基準線に直交する線は座標系の北に対して約6度東偏する。基点の平面直角座標第X系による成果は下記のとおりである。

基点1 $X = -80,117.68528$ $Y = 17,035.18118$ $H = 122.652$ m

基点2 $X = -80,118.57713$ $Y = 17,055.16114$ $H = 122.286$ m

梅ノ木台地II遺跡

調査区は東西150m、南北最大幅50mである。道路公団の設置した中心杭STA 39+00(基点1)とSTA 38+20(基点2)の2点間を見通す直線を基準線とした。基点1を原点として基準線に平行または直交する直線で40m毎に区切り大グリットとした。大グリットをさらに10等分して4m×4mの小グリットとした。基準線より北側はN区、南側はS区とした。グリットの名称は、大グリットを西から東へIN区、IIN区、IS区、IIS区…とし、小グリットは大グリット毎に南北方向には1～10の算用数字、東西方向にはa～jのアルファベットを与えた。小グリット名は大グリットと組み合わせるとIN3a、IVN6fというように呼称した。なお、基準線に直交する線は座標系の北に対して約5度東偏する。基点の平面直角座標第X系による成果は下記のとおりである。

基点1 $X = -80,131.72426$ $Y = 17,234.67375$ $H = 121.536$ m

基点2 $X = -80,138.96205$ $Y = 17,314.34533$ $H = 120.898$ m

(2) 粗掘り、精査

両遺跡ともに雑物撤去後にトレンチを手掘りで行って、土層、遺物の出土状況を確認し、遺物の出土しない地区は重機により表土除去作業を行った。遺構検出面までの土の除去、遺構の検出は手掘りで行った。兵庫館跡の堀の排土にはベルトコンベアーを使用した。検出した遺構には検出順に住居跡1、2のように連番を付した。

(3) 遺構の精査、出土遺物の取り上げ

住居跡は4分法、土坑、埋設土器遺構は2分法を用いた。堀や溝などは必要に応じてベルトを残し土層確認しながら掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影など必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは遺構内のは遺構名、出土層位を記録し、遺構外のは小グリット単位で層位を記入して取り上げた。

(4) 実測・写真撮影

平面実測はグリット軸に合わせた1 m メッシュを基本とする簡易遺り方測量法で行い、断面図は任意の高さで作成した。縮尺率は1/20を基本としているが必要に応じて任意の縮尺とした。写真撮影には6×7cm版モノクロ1台、35mm版のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用した。

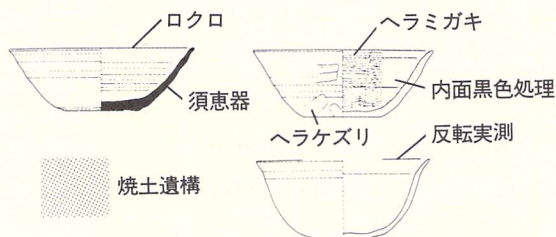
2 室内整理

(1) 作業手順

遺構については現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については注記、接合、復元、仕分け、登録を行った後、原則として実測図や拓本の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

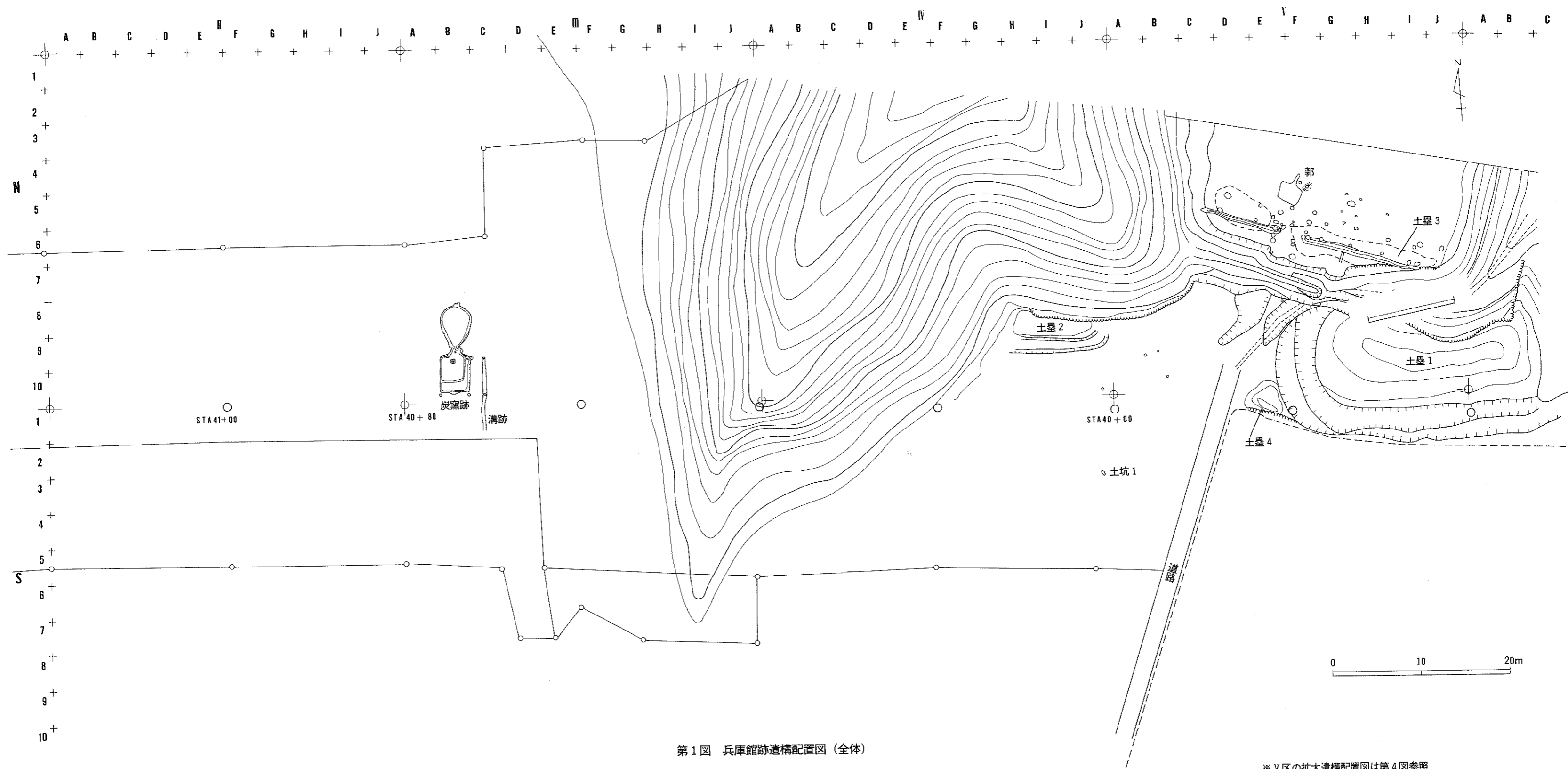
(2) 図版

本報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は兵庫館跡、梅ノ木台地II遺跡ともに1/40を原則としたがこれに該当しないものには別にスケールを付した。方位は座標系の北を示す。遺物実測図および土器拓影図の縮尺は石鏝が1/2、その他は1/3を原則としたが、これらに該当しないものには縮尺を別に付した。遺物は各遺跡毎に連番を付し、遺物図版と写真図版は同一番号で統一した。遺構図版や遺物実測の表現方法は以下のとおりである



IV ^{ひょうご} 兵庫 ^{だて} 館跡

所在地 北上市和賀町煤孫6地割64-6ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成元年7月17日～8月15日
平成3年4月15日～8月22日
調査対象面積 平成元年度980㎡、平成3年度2,150㎡
発掘調査面積 平成元年度980㎡、平成3年度2,150㎡
遺跡番号・略号 ME64-2019・HGD-89、HGD-91
調査担当者 平成元年度 中村良一・川村 均
平成3年度 川村 均・藤村 隆
協力機関 北上市教育委員会



第1図 兵庫館跡遺構配置図(全体)

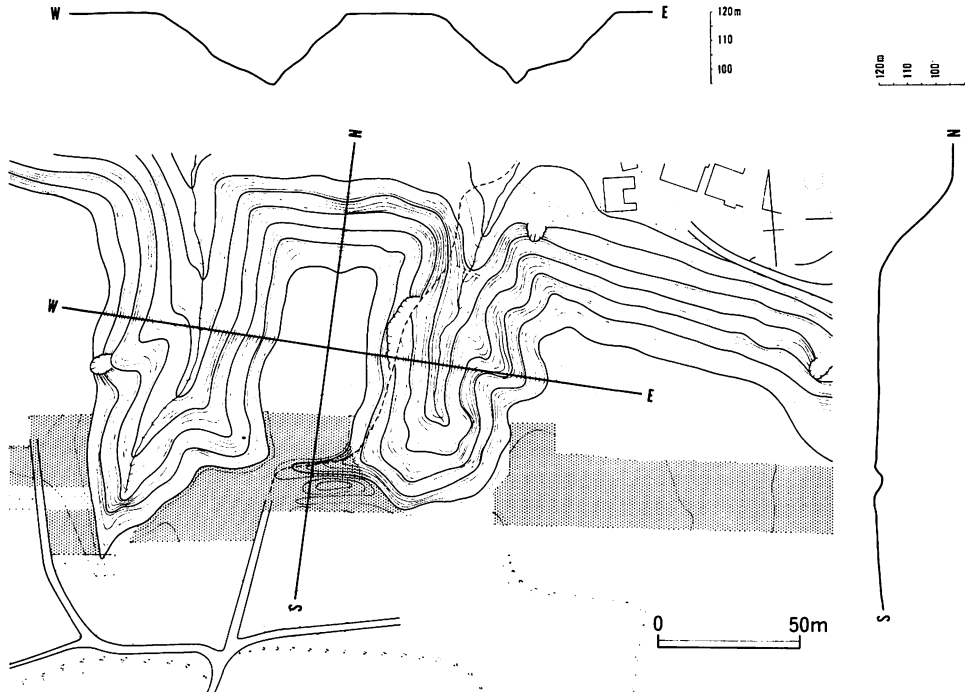
※V区の拡大遺構配置図は第4図参照

1 遺跡の現状

本遺跡は金ヶ崎段丘の縁辺にあり、舌状に張り出した台地の先端に位置する。館跡は単郭で東西 32 m、南北 65 m の長方形を呈し面積は約 2080 m²である。北側は自然の段丘崖、東側と西側は小河川によって開析されたV字状の沢であり、南側は堀切され空堀となっている。空堀の一部は埋められており現在も道路として利用されている。東側の沢の段丘崖では湧水が流れだし崖下の集落の生活用水として利用されている。郭の外（南側）には3つの土塁があることが認められるが、1つについては土取りが広範囲にわたりなされており大部分が破壊され一部の痕跡しか残っていない。郭部分の発掘面積はおよそ 450 m²で郭全体の約 1/5 である。標高は 121~122 m で集落との比高は約 37 m であり、現況は山林（人工林）である。なお、本遺跡と史料上係わり深い城館への直線距離は次のとおりである。岩崎城跡は東へ 1.7 km、観音館（下煤孫館）は西へ 1 km、七折館は南東へ 1.3 km 程度である。また、本遺跡の行政上の地割は岩崎、煤孫、岩崎新田 3 地区に分けられている。

2 文献にみる兵庫館

兵庫館という名称は慶長 5、6 年（西暦 1600、1601 年）の岩崎一揆に係わる記録にみられる。岩崎一揆は秀吉の奥羽仕置に不満をもつ旧和賀氏一党が岩崎城に籠城、これに対し南部利直軍



第 2 図 地形断面図

が攻撃し落城した事件である。名称がみられる文献資料には『奥羽永慶軍記』、奥南盛風記』『公国史』、『奥南旧指録』、『和賀記』、『和賀略譜並一揆』、『奥南軍秘録』等がある。

次に『奥羽永慶軍記』奥南盛風記』『奥南軍秘録』を例に資料に登場する箇所を列挙する。

なお、資料は「北上市史 第3巻近世(1)」より抜粋した。

『奥羽永慶軍記』……「十月十八日ニ打立て江釣子村ノ三月田ニ宿陣シ、長沼ノ瀬ヲ渡テ岩崎ノ西兵野楯ニ三日対陣シ、物見ヲ以テ敵ノ要害ヲ伺フテ後」、……また、「南部利直再攻岩崎城事では……煤孫の寺坂ヲ上リ兵野楯ニ陣取給フ。利直カ子テ岩崎ノ城ノ南七折ト云所ヲ向陣ニ取テヒカヘタリ。」

『奥南盛風記』=盛岡公民館 [利直公岩崎御出馬物見敵粧之事] ……「人馬ノ労ヲ休メ、同月中旬花巻ニ御出馬、暫松斎ヲ始諸老位ト相議シ、同十八日花巻ヲ出テ江釣子村三ケ月ニ御一宿、翌日横川目ヘ懸リ、田中瀬ヲ渡テ煤孫ノ寺坂ヨリ上馬場ヘ押行キ、岩崎城ノ西兵庫館ニ御陣取有東ノ出鼻ヲ普請シテ此ニ在陣シ玉フ事数日ナリ廿日余。此間利直公自ラ敵城近ク馬ヲ出サレ三度迄巡見シ玉フニ、城中矢玉之カラス。攻レトモ勞レス。其上打続キ大雪ニテ、人馬ノ足ヲ埋没ス。此故ニ先城攻ヲ止メ南右馬介、浄法寺修理ヲ残シー揆ヲ押ヘ利直公ハ十一月中旬三戸ヘ帰玉フ。」

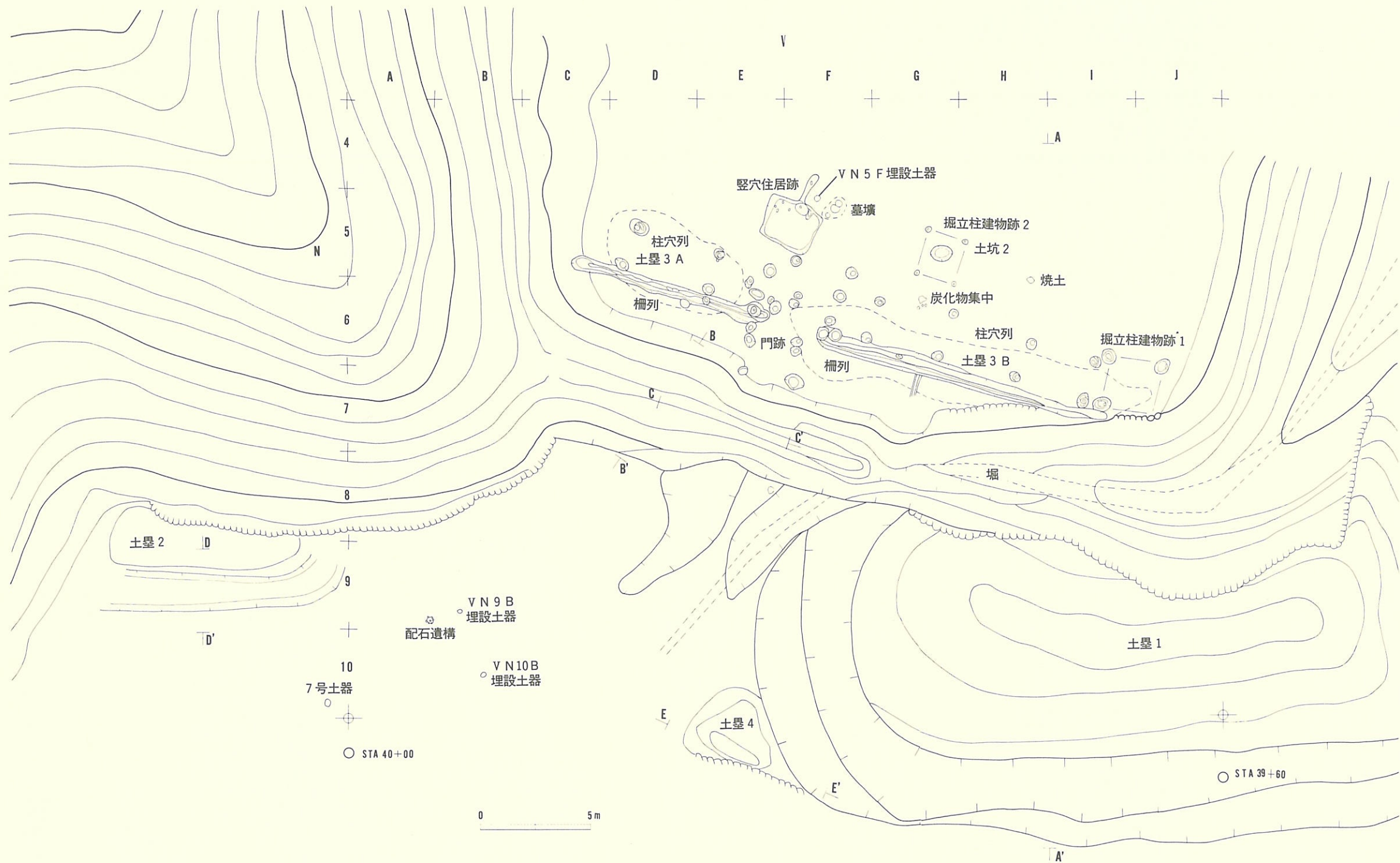
『奥南軍秘録巻九』……「間もなく桜田安房を侍大将として岩崎江押寄、兵庫館と云所に備を立、廿日斗り逗留し……彼是延引三月十日出馬去年之陣場兵庫館といふ所に備へて所々へ堀をほり、柵を結、用心して扣へ給へけるに……」

岩崎城攻めの経過について簡単にふれてみると次ぎのとおりである。

籠城する一揆軍に対して、岩崎城攻の南部軍は、慶長5年10月から兵庫館に陣取る。しかし、11月には冬雪の季に入り、一部の勢力を残し、主力部隊を撤収している。翌年、3月に再征、陣立は1番から8番まで、総勢4,571人で岩崎城大手に当たる七折館に本陣を構え、三方から包囲の態勢で攻撃を始める。籠城軍の守りが堅く、決着がつかないが、4月、大風に乗じ火をかけ城が陥落……という経過のようである。

兵庫館は、各資料とも、岩崎城攻めの陣地として記録している。場所については資料により多少の違いがあるが、岩崎城の西で煤孫村の間ということが出来る。しかし、岩崎城攻めの陣場としては『和賀稗貫郷村史』では「岩崎城庄陣場 下中嶋といふ所に有。今に陣場前に堀りの跡今悉く田と成り」とあり、和賀川沖積地にも陣場が存在した記録もあり、「岩崎村史集」(大正14年3月発行)によれば「岩崎村大字煤孫故館の南方(岩崎城の西)にありしと雖も其の地判然せず」となっており、長い間兵庫館の位置は不明で確認されていなかった模様である。

なお、岩崎一揆以前の兵庫館に関する資料はみあたらない。



第4図 主要遺構配置図

3 検出された遺構と遺物

〔1〕 館跡に伴う遺構と遺物

館跡に関連する遺構から出土した遺物はほとんどが縄文時代や弥生時代の土器、石器であることから、一部を除いて遺構外の出土遺物の項で扱うこととする。

堀跡（第4、5図、写真図版4）

調査区IV N 6 D からIV N 8 J 付近に直線状に延びており、両端は自然の段丘崖に続いている。

現状では中央部が埋まっており台地の南側から郭内へ道路が通じている。道路の両脇は凹地となっており空堀として確認できる。また、空堀（東側）は沖積地の集落から岩崎新田台地へ通じる小道として古くから利用されている。長さ東西 30 m、上幅 6.2~4.0 m、底部幅 0.7 m、深さ 2.5~3.0 m を測る。断面形状は箱葉研状を呈し、法面の勾配は 53°~55°である。中央部の幅は北側の法面に凹凸があることから狭く、底部の掘り方も一様ではない。さらに郭東側に続く法面は西側に比べ大きく削り取られている。これは地元の人によれば道路を補修するために削り取ったものといわれ、本来は東側はもっと狭かったものと思われる。

遺物（第5図、写真図版11）

1 は土師器の甕の体部片、2 は同じく底部である。3、4 は須恵器杯の底部である。5 は鏡の破片で圧縮をうけ変形している。外形は菱形状を呈し、外区の文様は鳥、内区文様は唐草、外縁の断面形は台形状である。時期的には平安時代に属するものとみられる。6 は寛永通宝である。

土塁（第1、3、4、6、8図、写真図版4、5）

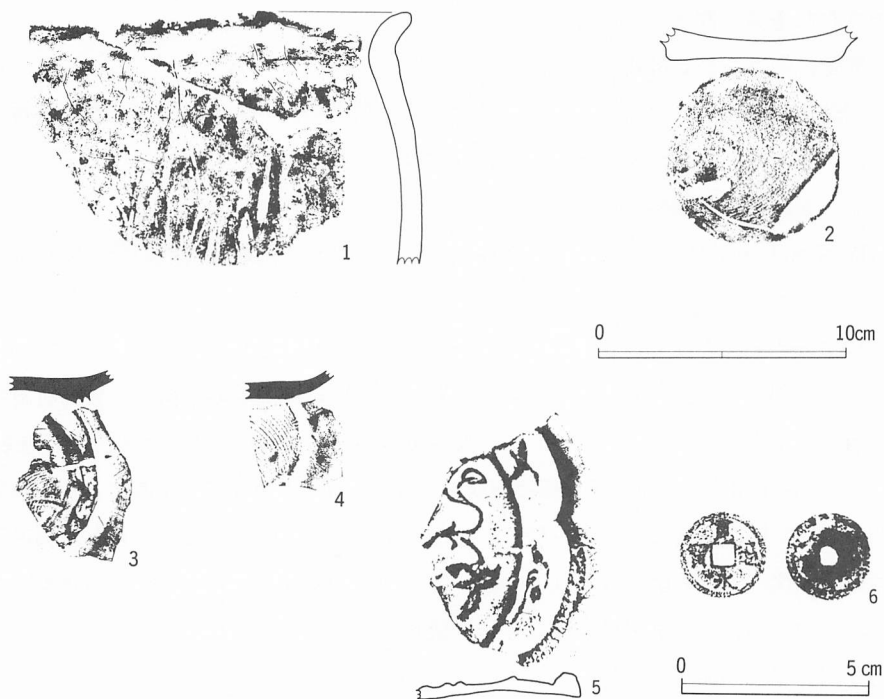
郭外と郭内にみられる。郭外には土塁1、2、4、郭内には3 A、3 Bがある。

土塁1

V N 9 G~VI N 9 B グリット付近に位置し堀跡の南側法面から連続し東西にのびる。形状は馬の背状を呈し、東西の長さ 13 m、最大幅 5 m、高さ 3 m を測り、最も大型のものである。東端は段丘崖へ続き急勾配となっている。いわゆる版築ではなく、自然層に周辺の土を盛り上げただけのものである。断面をみると地山の黄褐色土（礫混入）が 1 m もの層としてみられ、堀と土塁の周辺から順次土盛りをしたことが窺える。下部には濠のような掘り込み跡が 2 段みられ、その最深部は 1 m に達する。

土塁2

IV N 9 I グリット付近に位置し、現状では小規模な高まりとして確認できる。長さ 10 m、幅 3 m、高さ 0.8 m であり、北側は崖となっており崩落した可能性がある。周囲は溝になっており土塁を構築するために掘ったものと思われる。



第5図 堀跡出土遺物

土塁3

郭内にあり、堀跡に並行する小規模な高まりとして確認できる。現在道路となっている部分は低く土塁が途切れていることから西側を土塁3A、東側を土塁3Bとして記述する。

土塁3Aは長さ7m、幅3.5m、高さ0.5m、土塁3Bは長さ17m、幅3m、高さ0.6mである。緻密な計画に基づいて造られた形跡はない。黄褐色土や礫を雑に盛り上げただけである。堀を掘った際に積み上げたものと思われ、拳大から人頭大の礫がかなり含まれている。

土塁4

調査区の南V S 1 Eグリットに位置する。土採りによって破壊され一部が残るだけである。現状では長さ5m、幅3m、高さ1mである。盛り土は黒褐色土が主で礫はみられない。地元の人によれば土採りされる前はこの土塁は南側へ長く延びていたということである。

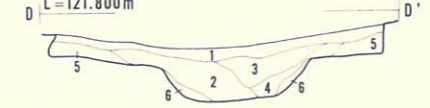
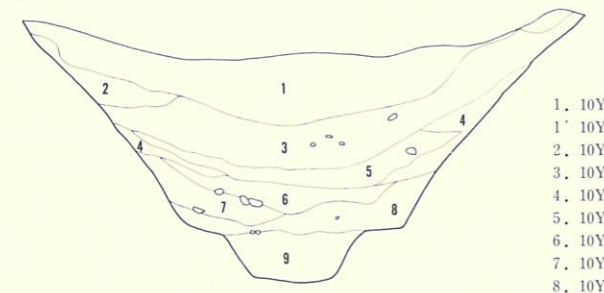


L = 121.800m

L = 123.500m

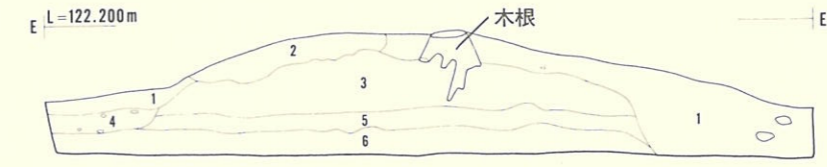
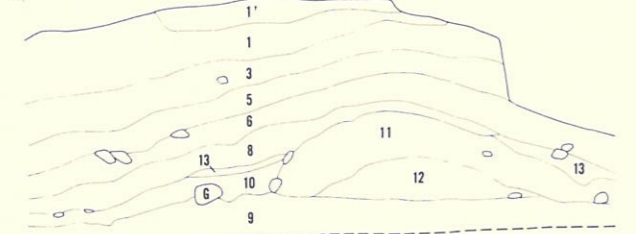
L = 121.200m

L = 121.800m



L = 121.000m

L = 122.200m



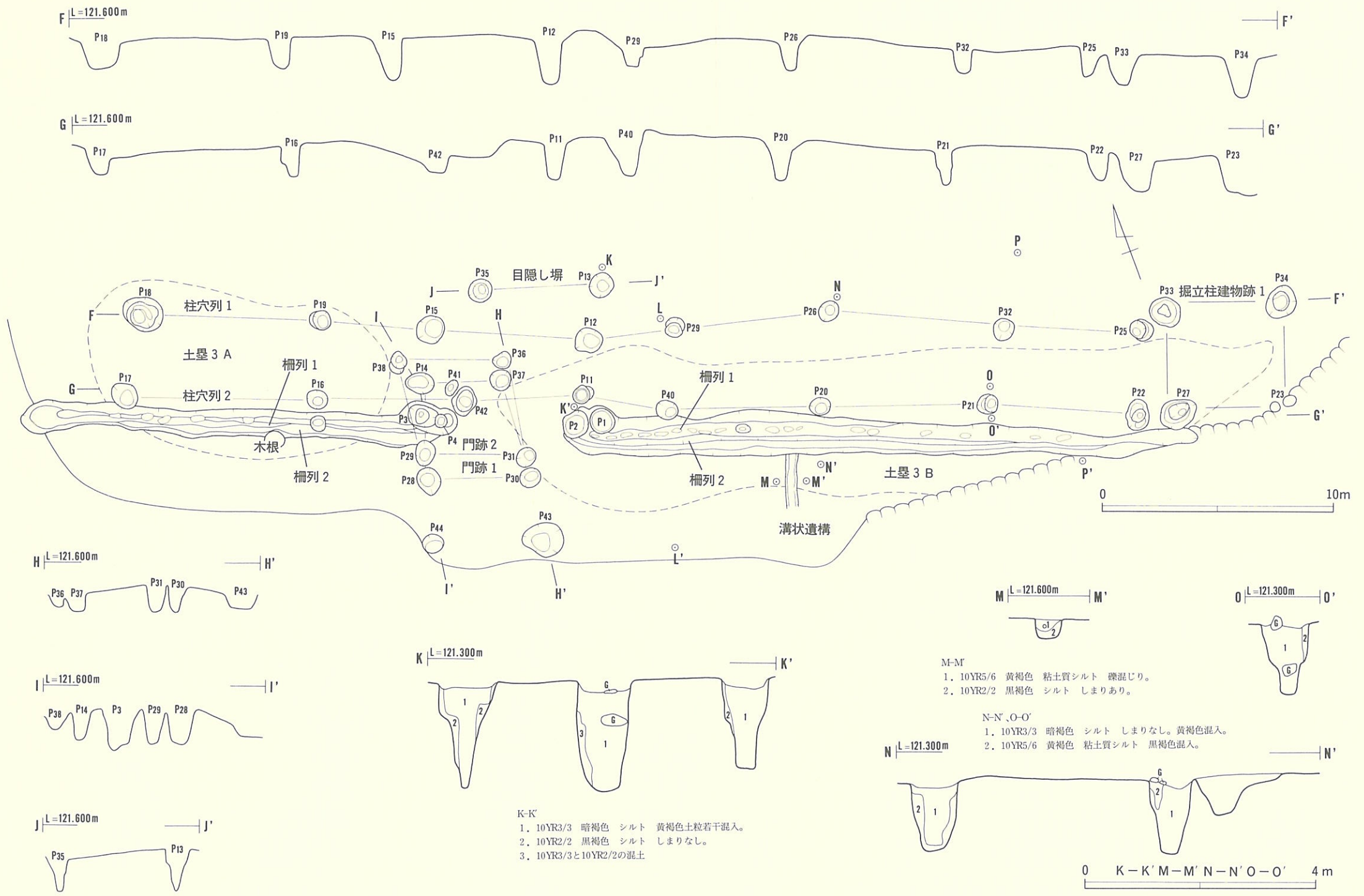
- 1. 10YR2/1 黒色 シルト しまりなし。植生根多い。
- 2. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりなし。礫混入。(地山土と同じ)
- 3. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりなし。植生根多い
- 4. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりややあり。黄褐色土40%混合。
- 5. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり上部なし下部あり。
- 6. 10YR2/2 黒褐色 シルト 礫多量。(径1~5cm程度)
- 7. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。下部に黒褐色土混じる。
- 8. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト しまりなし。一部礫混入。
- 9. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。黒褐色土混じる。
- 10. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。
- 11. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりあり。
- 12. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりなし。礫、黄褐色土混合。
- 13. 10YR2/1 黒色 シルト しまりなし。
- 14. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 木根あり。
- 15. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりややあり。 I層
- 16. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりあり。土器片あり。 II層
- 17. 10YR2/3 黒褐色 シルト III層
- 18. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。粘性あり。 IV層

- D-D'
- 1. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト しまりなし。粘性ない。木根混入。
 - 2. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりあり。粘性ない。木根混入。
 - 3. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまりあり。粘性ない。下部に木根混入。
 - 4. 10YR4/6 褐色 シルト しまりなし。粘性ない。6層まばらに混入。
 - 5. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりあり。粘性ない。かなり黒っぽい。
 - 6. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。粘性あり。

- E-E'
- 1. 10YR2/3 黒褐色 シルト 植生根多い。しまりなし。
 - 2. 10YR4/4 褐色 シルト しまりあり。
 - 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト 下部はしまりあり。—基本土層II層
 - 6. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。地山。

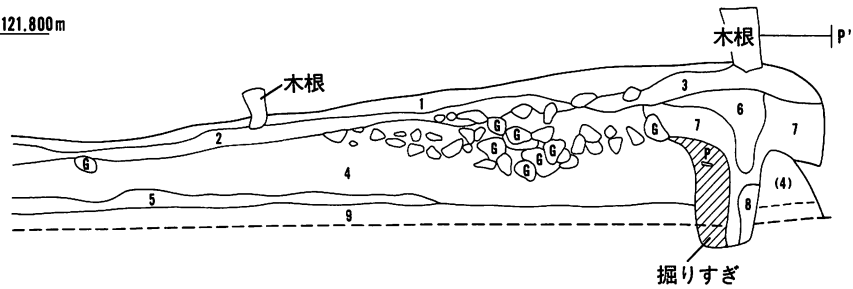


第6図 堀跡・土橋・土壘断面

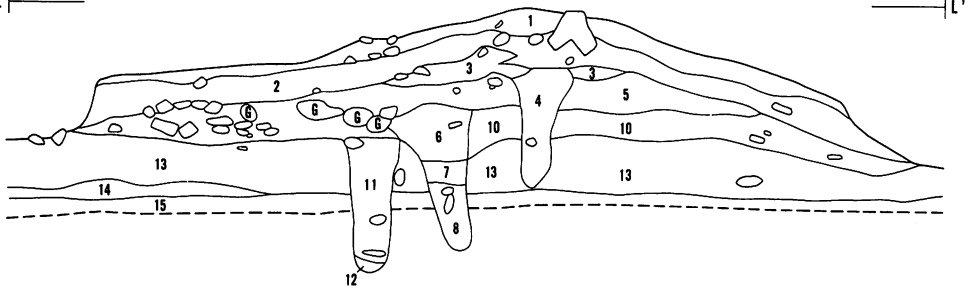


第7図 柵列・柱穴列

p|L=121.800m



L|L=121.950m



P-P

1. 腐葉土植生根あり。礫混入。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 植生根あり。しまりなし。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりなし。黄褐色粒混入。
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりややあり。
5. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりややあり。黄褐色土ブロックあり。
6. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりなし。礫混入。
7. 10YR5/6 黄褐色 シルト 礫混じる。
8. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりなし。黄褐色土混入。
9. 10YR3/3 黒褐色 シルト しまりあり。黄褐色粒混合。

0 1 m

郭内土壘L-L'

1. 腐葉土 (植生根)
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 径1~10cm前後の礫混入。
3. 10YR4/4 褐色 シルト しまりあり。径2~5cm前後の礫、黄褐色土混入。
4. 10YR4/3 におい黄褐色 シルト しまりあり。黄褐色土、径3~5cm前後の礫混入。
5. 10YR3/3 暗褐色 シルト 部分的にしまりあり。黄褐色粒混入。(土壘構成土)
6. 10YR5/6 黄褐色 シルト しまりあり。砂、礫混入。(埋めた土)
7. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりなし。上部に黄褐色土が混入。
8. 10YR4/6 褐色 シルト 黄褐色土と黒褐色土との混土。(溝状の最深部)
9. 10YR3/3 黒褐色 シルト しまりあり。上部に径5cm前後の礫6個あり。
10. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり。黄褐色土ブロック混入。
11. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりなし。炭化材少量混入。大礫が上部にあり。(柱穴?)
12. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト ブロック 褐色土との混土。
13. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりややあり。黄褐色土が13より少ない。(自然層に近い)
14. 10YR2/1 黒色 シルト しまりあり。
15. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト

第8図 土壘3 柵列断面図

柵列（第7図、写真図版6）

郭内で土塁3を掘り下げるとき帯状に走る黄褐色土（礫混入）を確認し検出した。2本とも溝状を呈している。この2条は柱穴P1・P2、P3・P4を軸として東と西に直線状に走る。

柵列1

P3を軸に西へ走行する。長さは8.5m、上幅0.30m、底部幅0.10m、深さ0.60mである。一方、P1を軸に東へ走行する柵列の長さは13m、上幅0.40m、底部幅0.15m、深さ0.60mを測る。底部には長径10～15cmの楕円形状の凹みが所々にみられる。

柵列2

P4を軸に西へ走行する柵列とP2を軸に東へ走行するものがある。前者は長さ9m、上幅0.30m（断面からの推定）、底部幅0.10m、深さ0.20m、後者は13.5m、0.40m、0.15m、0.20mを測る。断面形はともにU字形をなし、埋土には黄褐色土の混入があり、自然層とは明確な相違を示している。

柱穴列（第7図、写真図版6）

柵列にほぼ並行し南北2列が検出された。検出面はII層～III層上位面である。

柱穴列1

P18-P19-P15-P12-P29-P26-P32-P25の柱穴群である。柱間はP18から順に3.90-2.45-3.30-1.80-3.40-3.75-2.80mとなっている。間隔にややばらつきがある。方向はE-20°-Sを示す。掘り方の形状は円形ないし楕円形である。開口部径は最小42、最大91cmで平均すると50cm前後である。検出面からの深さは34～95.5cmである。埋土は黒褐色土および暗褐色土に黄褐色土が混入した状態である。ほとんどの柱穴の中には人頭大の礫が幾つも入っており根固石として使用したと思われる。柱痕跡がみられるものは少ない。

柱穴列2

P17-P16-P42-P11-P40-P20-P21-P22の柱穴群である。柱間は西のP17から順に4.10-3.20-2.50-1.80-3.30-3.70-3.20mを測る。柱穴列1同様間隔にばらつきがある。掘り方の形状は円形ないし楕円形であり、開口部径最小35cm、最大65cm、検出面からの深さは38～72.5cmである。方向、埋土等の状況は柱穴列1とかわりない。

掘立柱建物跡1（第7図）

V N 7 I 付近郭南東隅に位置する。P27周辺は人頭大の礫が厚さ30cmほどに積み上げられており、その礫を除去した後確認検出された。P33、P34、P23、P27で構成される4本柱の建物である。柱間はP33-P34-P23-P27-P33の順に2.50、2.20、2.40、2.20mで東西方向が若干長い。掘り方は口径58～75cm前後で円形をなし、深さは66.5～91cmを測る。P23は付近が削り取られているため底部の痕跡が残っているだけである。埋土は黒褐色土や暗

褐色土に黄褐色土が混入し礫が入っている状況である。他の柱穴に比べ掘り方、深さが一回り大きいことから、櫓状の建物跡と推定される。

門跡（第7図、写真図版6）

V N 6 E 付近で土塁3が途切れる所に位置する。P 14、P 37、P 30、P 28（門跡1）とP 38、P 36、P 31、P 29（門跡2）の2つの建物が検出されている。門跡1の柱間はP 14-P 37-P 30-P 28 P-P 14の順に1.9、2.15、2.20、2.10 mを測る。掘り方は楕円形ないし円形をなし、深さ40~82 cmである。門跡2の柱間はP 38-P 36-P 31-P 29-P 38の順に2.20、2.10、2.20、2.10 mを測る。掘り方は1とほぼ同じで深さは29.5~77.5 cmとなっている。南側のP 29、31、28、30の深さが北側の柱穴より30~40 cmほど深い。P 36・P 37、P 31・P 30、P 29・P 28がそれぞれ対をなすことから建て替えと考えられる。

なお、上記の他にすでに記述した柵列や柱穴列のなかで入り口と推定される箇所がみられる。それらは柵列1ではP 3とP 1、柵列2ではP 2とP 4、また、柱穴列1、2においてはP 15とP 12、P 42とP 11である。全部で4組あり、これらは冠木門と推定される。P 35、P 13は対をなし、掘り方は円形で開口部径45~55 cm、深さ74 cm、90.5 cmを測る。この2つの柱穴は目隠し塀の働きをしているものと推定される。

土橋（第3、4、7図、写真図版4）

V N 7 E 付近は現状では道路となっており、20 cm以上にわたり採石、河川礫が敷き詰められていた。調査の過程で地山造りだしあるいは版築構造の土橋を想定し発掘を行ったが、そのような形態の土橋はみられなかった。断面をみるかぎり小山状に層が重なっており、単に空堀を埋めていったことが考えられる。埋土は堅く締まりがあり、汚れた黄褐色土で構成される。また、V N 8 E グリット付近（堀跡南側法面上部）は船底状に地山を掘り込んでいる状況がみられる。地山面から最大90 cm掘っており南西方向に行くにしたがって徐々に浅くなり、緩やかなスロープのように立ち上がる。この部分が土橋への通路と思われる。さらに、この東側の船底状の掘り込みは現在利用されている小道である。

溝状遺構（第7図）

V N 7 G グリットにあり柵列2に直交する。土塁の上部を掘り下げるうち黄褐色土が帯状に走り検出された。長さ1.30 m、幅0.25 m、深さ0.18 mを測る。板塀のようなものがあったと考えられる。

〔2〕 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は埋設土器 3 基、墓墳 1 基、配石 1 基が検出された。遺物は各時代の中で最も多い。これらの遺構から出土した土器は完形または一部が欠けているものの復元ができた個体が多い。野外調査の中で検出した順、または整理中に復元できた土器に 1 号、2 号、… というような個体名をつけている。

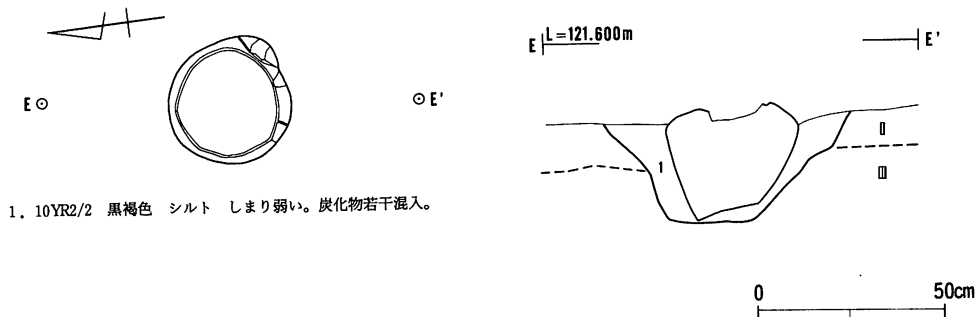
V N 10 B 埋設土器 (第 9 図、写真図版 7)

V N 10 B グリット表層の植生根を含む土を 10 cm ほど掘り下げた II 層上面で口縁破片が出土したことから検出される。器種は甕で、口縁は壊れているが体部の残り良好である。ただし、体部はかなり風化しており剝離が著しい。正立に埋設されているが、底部は欠けている。埋設方法は開口部径 60 cm、底径 25 cm 前後の掘り込みをしたあと埋置したものである。蓋は検出されていない。周辺には住居跡は存在しないし、火力を用いた痕跡はみられない。室内整理中に土器埋土上部に小型の壺 7 (8 号土器) が逆さ状態で発見され、また、石斧状の石器 8 が出土している。

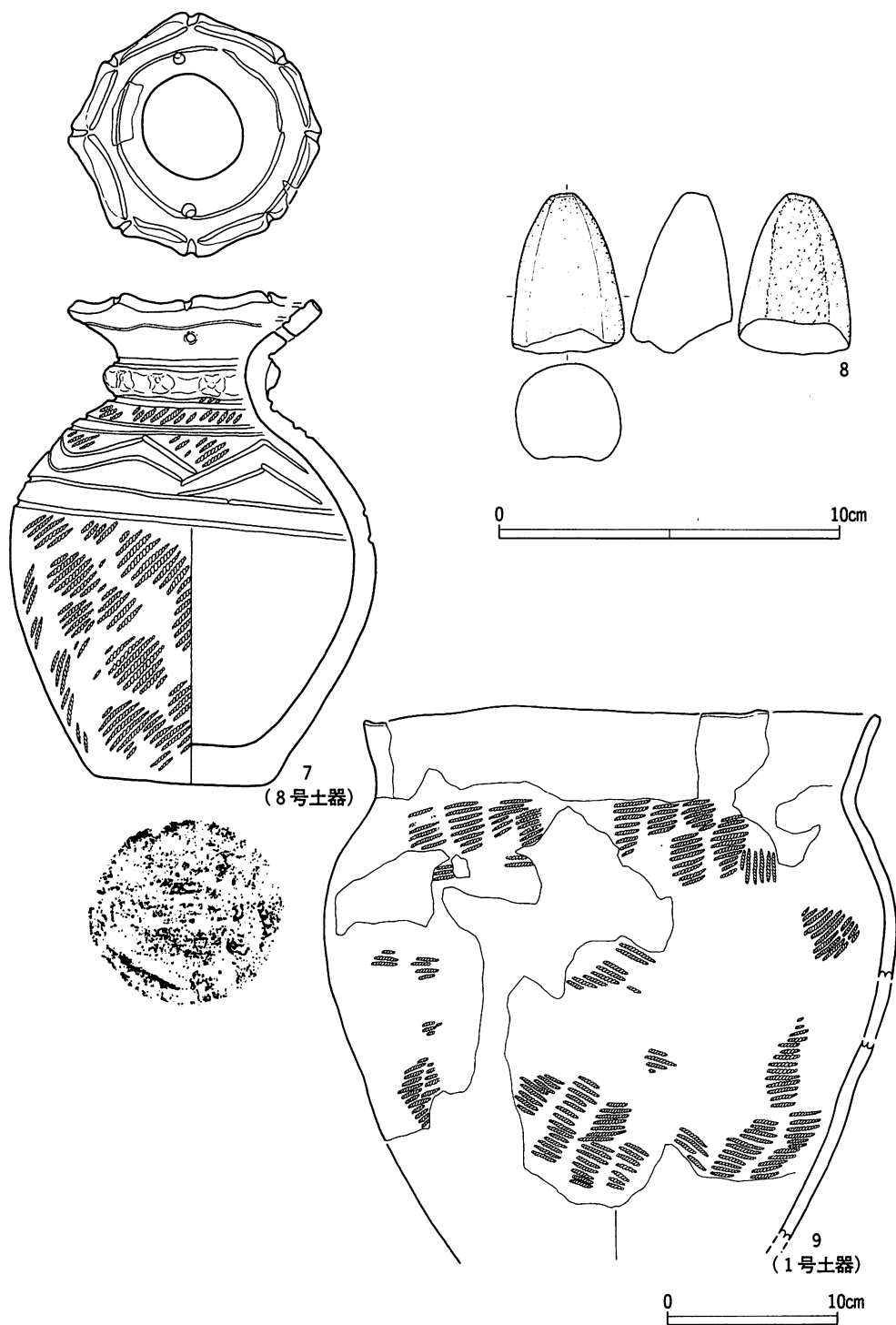
遺物 (第 10 図、写真図版 11)

9 (1 号土器) は体部上半に最大径をもち長めの口縁部がやや外反する。体部に LR 縄文が横走する。口縁部はヨコナデである。土器表面はもろく剝離が著しい。内面の体部上半から口縁部にかけては斜位の擦痕がみられる。底部はなく、欠失した状態で埋置したものである。

7 (8 号土器) は小形の壺である。底部から緩やかに立ち上がり体部中位に最大径をもち、体部上半から内弯しながら頸部に至る。口縁部は強く外反する。口縁部、頸部に 1 本沈線、体部には 2 組の平行沈線が施文され、7 単位の山形状の沈線が平行沈線間に入れられている。体部全体に LR 縄文が斜行し、山形状沈線と最下部の沈線間は磨消されている。また、頸部には小さな突起みられる。口縁部は 8 単位の波状を呈し、その波頂部には刻みがみられる。内面にも弧



第 9 図 V N 10 B 埋設土器



第10图 V N10B埋設土器 出土遺物

状沈線と1本沈線が巡り、丁寧なミガキが施される。また、対応する2個の小孔がある。8は欠けているが、石斧状の形態をしており、表面が研磨されている。石質は緑色凝灰岩である。

V N 9 B埋設土器 (第11、16図、写真図版7)

V N 9 BグリットのII層上面で、一自然礫と石核を検出、その周囲に口縁の破片が散らばっていることから検出される。器種は壺でほぼ正立に埋設されており、上部に自然礫と石核22が配置されている。周辺からは23~27の剥片も出土している。これらは22と石質が同じである。口縁は破壊されているが肩部から下部は完全に残る。現状では、自然礫と石核は土器の真上になく南へずれているが、当初は真上にあったのではないかと思われる。埋設方法は径50cm、底径20cm前後の掘り込みを設け、その後埋置したと思われる。その他、掘り込みの表面およびその周辺に火力を用いた痕跡は見当たらない。土器内からの遺物は出土していない。

遺物 (第13図、写真図版12、14)

10(2号土器)は底部からしだいに立ち上がり体部上半に最大径をもち、肩部から強く内弯しながら頸部にいたり、口縁は緩やかに外反する。(口縁については完全に接合できなかったため図上復元したものである)口縁には乳首状の突起が4単位つく。外面は丁寧にミガキが施され、一部に黒斑もみられる。口縁内面もミガキがみられる。底部には網代痕がかすかにみられる。22は石核とみられ、長さ14.0、幅11.3、厚さ5.1cm、重量640.0gを測る。

V N 5 F埋設土器 (第12図、写真図版7)

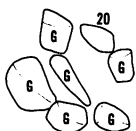
調査区北側館郭内のV N 5 Fグリットで検出される。林道の石敷きを重機で除去したあとII層上面において11(6号土器)と12(10号土器)が検出される。6号土器は口縁が欠けているが残り良好であり斜位になっている。10号土器は口縁と体部の一部のみ出土している。器種は6号土器が壺で10号土器は鉢形土器である。はっきりした掘り込みはみあたらないが、本来正立状態にあったと考えられる。また、10号土器は合わせ口土器として被されていたのではないかと思われる。その他、掘り込み面やその周辺に火力を用いた痕跡は見当たらない。また、土器内からの遺物は出土していない。

遺物 (第13図、写真図版12)

11(6号土器)は、頸部は欠けているが体部上半に最大径をもつ壺である。頸部直下に2本の沈線、その外側に破線状の沈線が巡る。全体にミガキが施され、一部に幅1cm程のハケメ風の痕跡がみられる。内面にはかなりの量の煤が付着している。底部には木葉痕がみられる。12(10号土器)は肩部が張り口縁が外反する。13(3号土器)や15(9号土器)と類似する器形を呈している。調整もそれらと同じである。



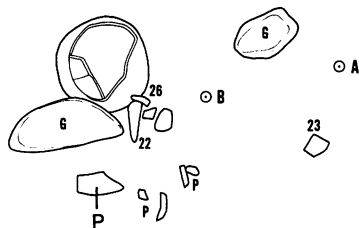
C'○



配石遺構

VN9A
VN10B

A'○
B'○



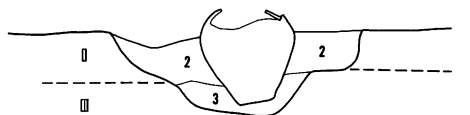
○C



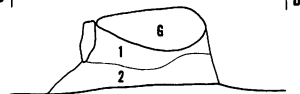
VN9B埋設土器



A | L=121.500m



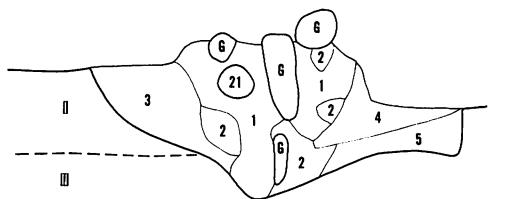
B | L=121.600m



A-A'、B-B'

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり。
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりややあり。
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりなし。黄褐色混入。

C | L=121.600m

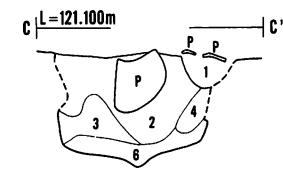
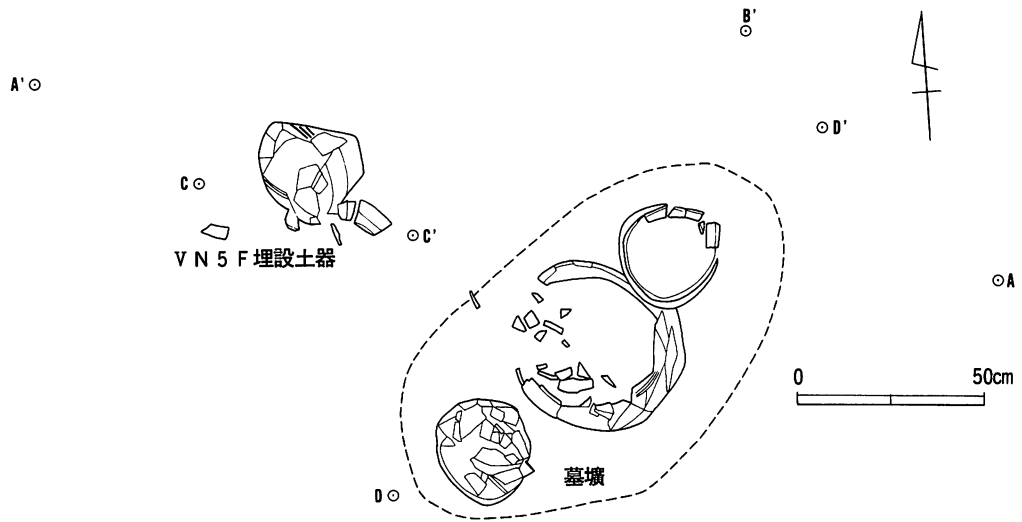


C-C'

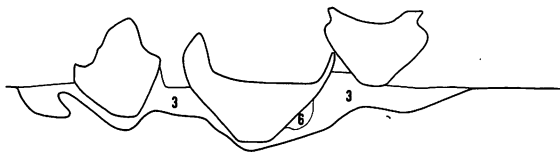
1. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりなし。植生根あり。
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト ブロック。
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりややあり。
4. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまりややあり。
5. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。粘性あり。

※ 20~26は遺物番号

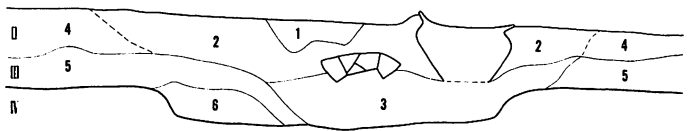
第11図 VN9B埋設土器・配石遺構



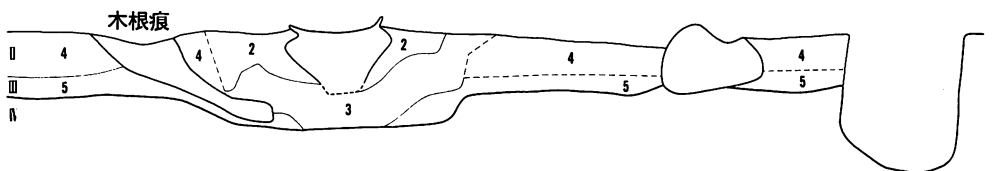
D | L=121.200m



B | L=121.200m



A | L=121.200m



墓壇

- | | | | | |
|----|---------|-----|--------|------------------|
| 1. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりあり。炭化物微量。 |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | しまりあり。 |
| 3. | 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 1、2よりしまりあり。 |
| 4. | 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | しまりあり。 |
| 5. | 10YR4/4 | 暗褐色 | シルト | しまりあり。黄褐色ブロックあり。 |
| 6. | 10YR5/6 | 黄褐色 | 粘土質シルト | 褐色土混じり。しまりあり。 |

第12図 VN5F埋設土器・墓壇

墓墳（第12図、写真図版8）

調査区北側、館郭内のV N 5 Fグリットで検出される。V N 5 F埋設土器と同様、林道の下部、II層上面において、鉢形土器13(3号土器)の口縁がほぼ完全に現れたことから検出される。当初住居跡を想定し、土層観察用ベルトを東西南北にかけて掘りさげたが、住居跡は検出されず、その後、隣り合って壺13、14、15(3号土器、5号土器、5号土器は合わせ口土器)が検出された。土器の口縁が出土した面では明確なプランは把握できなかった。その後、少しずつ掘り下げ土色の違いから墓墳を検出した。形状は長軸120cm、短軸70cmの楕円形をなす。掘り込み面はII層内では明確にはわからないが、III層、IV層ではわずかに土層の違いがみられる。深さは13(3号土器)の検出面から最大で60cmである。長軸方向は北東を示す。残存状況は3号土器はほぼ完形、14(4号土器)は肩部から上部が土器の内側へ崩れ落ちるようになっており口縁部は欠けてない。16(5号土器)は口縁部が押し潰された状態であるが、残存状態は良好である。5号土器内から剥片2点(17、18)が出土している。

遺物（第13～15図、写真図版12、13）

13(3号土器)は底部から外に開きながら立ち上がり、体部上半に最大径をもつ。肩部がくの字状に屈曲し、口縁が外反する。外面全体がミガキが施される。所々に黒斑がみられる。口縁は小波状を呈し、口唇に刻みが入る。また、内面に1本の沈線が施文される。内面調整は口縁はミガキ、体部はハケメ風の擦痕がみられる。底部は網代痕があり、外側からの穿孔が施される。14(4号土器)は口縁は欠けているが、体部上半に最大径をもち、本遺跡出土土器の中で最も大型の壺である。頸部から肩部にかけて3本沈線が3段に巡り、下2段の間を縦の沈線がつないでいる。縦沈線は6ないし8単位と推定される。全体ミガキが施され、所々に黒斑がみられる。底部は穿孔されている。16(5号土器)は体部上半に最大径をもち、頸部から口縁にかけてやや外反する壺である。頸部下部に3本の沈線が巡り、口縁には18個の小突起がつく。外面全体と口縁内部にミガキが施される。石器の剥片2片は粘板岩材質である。15(9号土器)は13(3号土器)に類似する器形を呈し、頸部に浅い1本の沈線をもつ鉢形土器である。口縁は小波状である。外面全体、口縁内部ミガキが施される。また、外面全体に煤の付着が著しい。

7号土器（第15図、写真図版13）

19(7号土器)については、IV S 1 JグリットII層の木根の間で土器片が折り重なるようにみつかった。埋設土器遺構として認定できなかったが、本来は埋設だったと考えられる。厳密に言えば遺構外の土器であるが、特別にここで扱うこととする。

体部に最大径をもつソロバン玉状の壺である。口縁は強く外反する。頸部から体部上半に3つの充填縄文帯があり、中部にはソロバン玉の稜線付近に楕円形の文様を囲むように《〇》が施文される。《〇》文様は6単位で構成される。また、この文様を上と下から囲むように連弧文帯が配置される。この連弧文帯は上下とも12単位である。さらに、底部付近にも充填縄文帯が

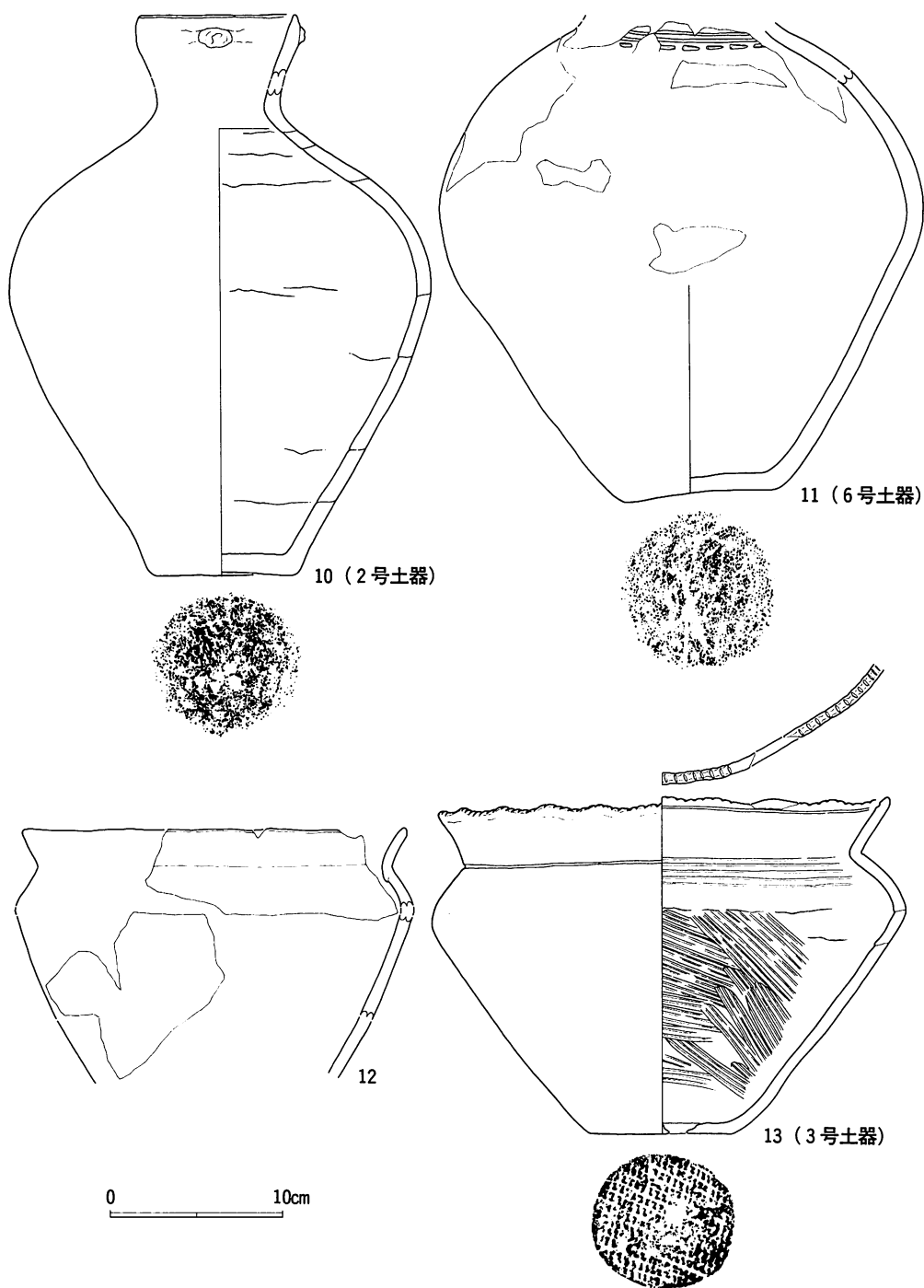
みられる。充填縄文帯には三角刺突文が施文される。ただし、下側の連弧文帯と底部付近には施文されない。口縁内部には一本沈線がみられる。充填縄文帯以外はミガキが施される。なお、ほぼ全面に赤色顔料が塗布されている。底部は完全に残っているわけではなく剝離している。

配石遺構（第 11 図、写真図版 7、14）

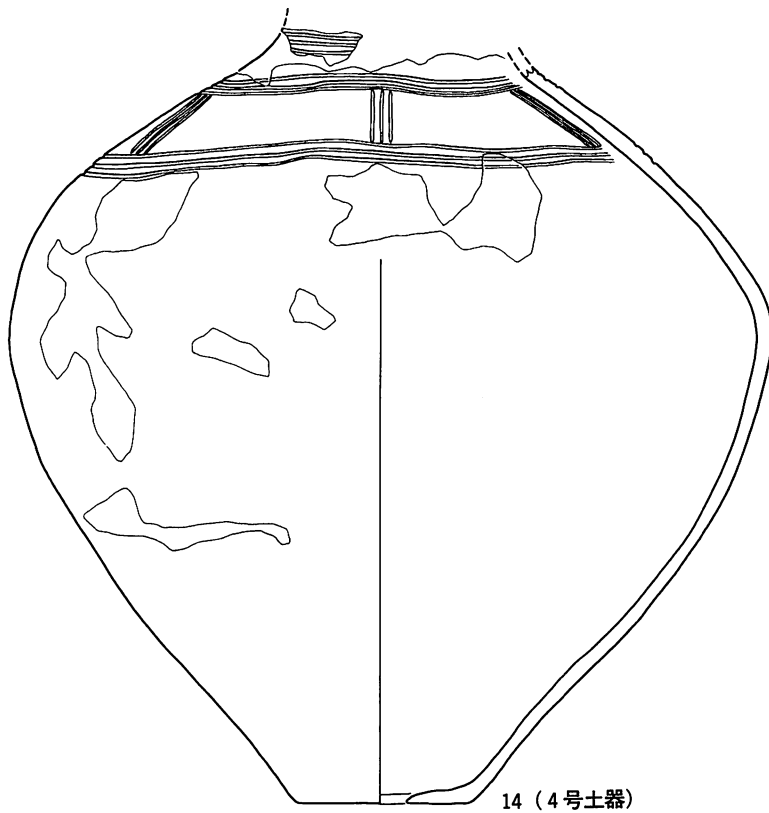
V N 9 A グリット南東部、V N 9 B 埋設土器の西約 1 m 付近で検出される。II 層上面で自然石と石核 20 が共伴していることから遺構と認定した。径 60 cm 程の円形に自然石と石核を配置している。その中心に大きめの自然石（径 20×20×5 cm）を立てている。構築方法は口径 60 cm 深さ 50 cm 程の穴を掘り下げ石を埋めていったものと思われる。埋置されている石の中には円形の敲石 21 が 1 個みられる。しかし、土器や骨片は見つからない。性格については V N 9 B 埋設土器との関連で墓標的なものと思われる。

土器観察表

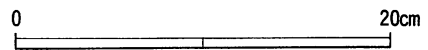
番号	器種	文 様 調 整	胎 土	色 調	器 高	口 径	胴 径	底 径
7	壺	LR 斜行口縁小波状、頸部隆帯波状平行沈線	細砂	7.5YR7/3	14.6	7.4	10.7	5
9	カメ	LR 単節横走		10YR7/2	残存(31.7)	30.2	33.5	—
10	壺	無文口縁に乳首状の突起		7.5YR6/4	推定(32.6)	推定(9.2)	24.4	8.2
11	壺	頸部下に 3 本の沈線最下部は波線状		10YR7/4	残存(27.8)	—	27.8	8.6
12	鉢型	ミガキ	細砂	10YR7/2	残存(11)	推定(22.4)	—	—
13	鉢型	無文頸部に細い沈線口唇に刻み目、口縁内部沈線		5YR6/8	19.6	26.2	27.4	8.3
14	壺	3 本沈線が 3 段に巡る、下 2 段に縦に沈線	細砂	7.5YR7/8~ 10YR7/3	残存(41.4)	—	40.6	9.2
15	鉢型	5 号土器の蓋、無文	細砂	7.5YR7/6	残存(11.5)	20	17.7	—
16	壺	無文頸下部に 3 本沈線、口縁にハチマキ状隆帯		10YR7/2	26.2	10.7	25.1	8.2
19	壺	沈線区画、磨消三角刺突、錨文変形	細砂	7.5YR7/4	20.9	9.9	21.7	6.3



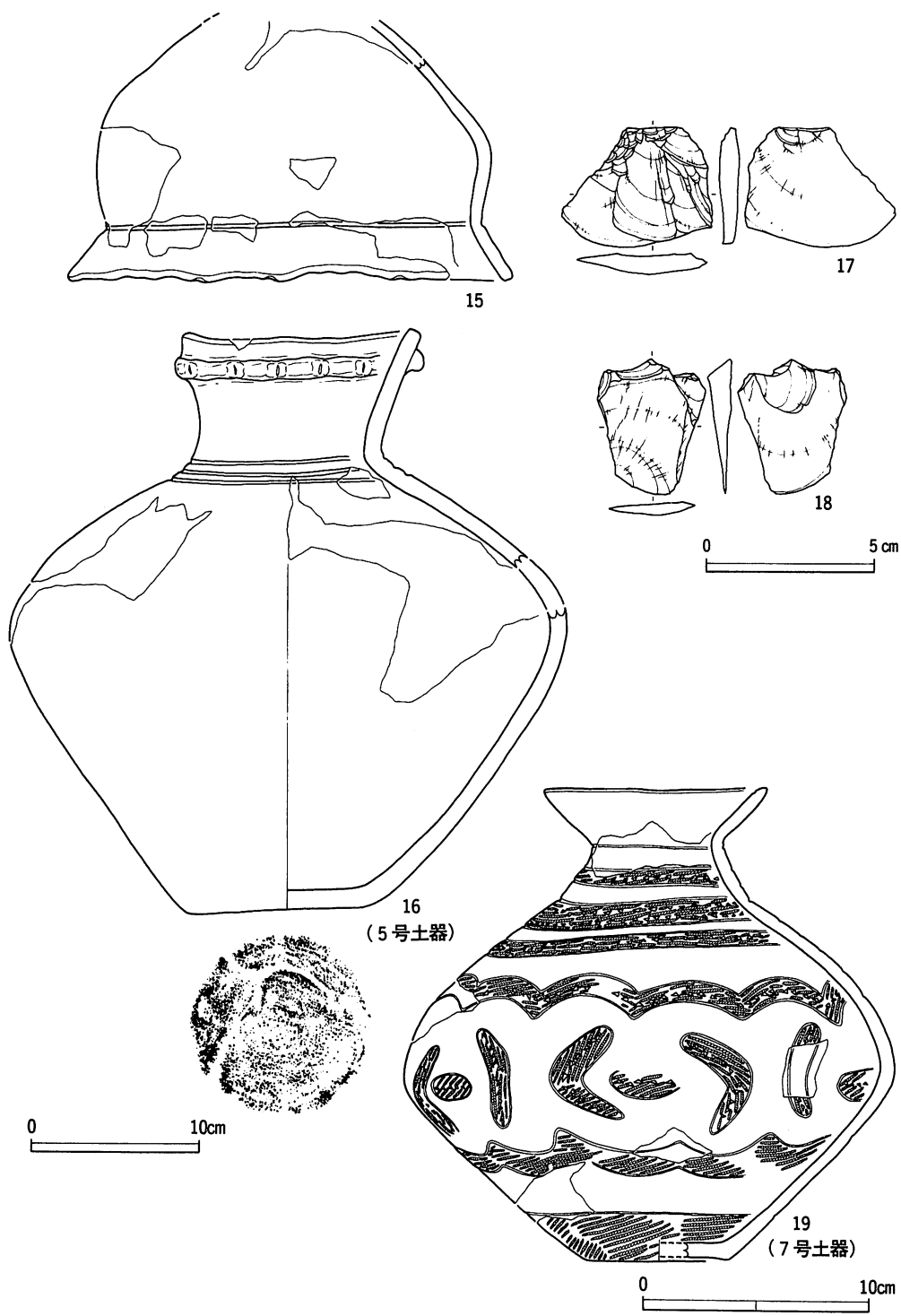
第13図 VN 9 B埋設土器・VN 5 F埋設土器・墓壙出土遺物 1



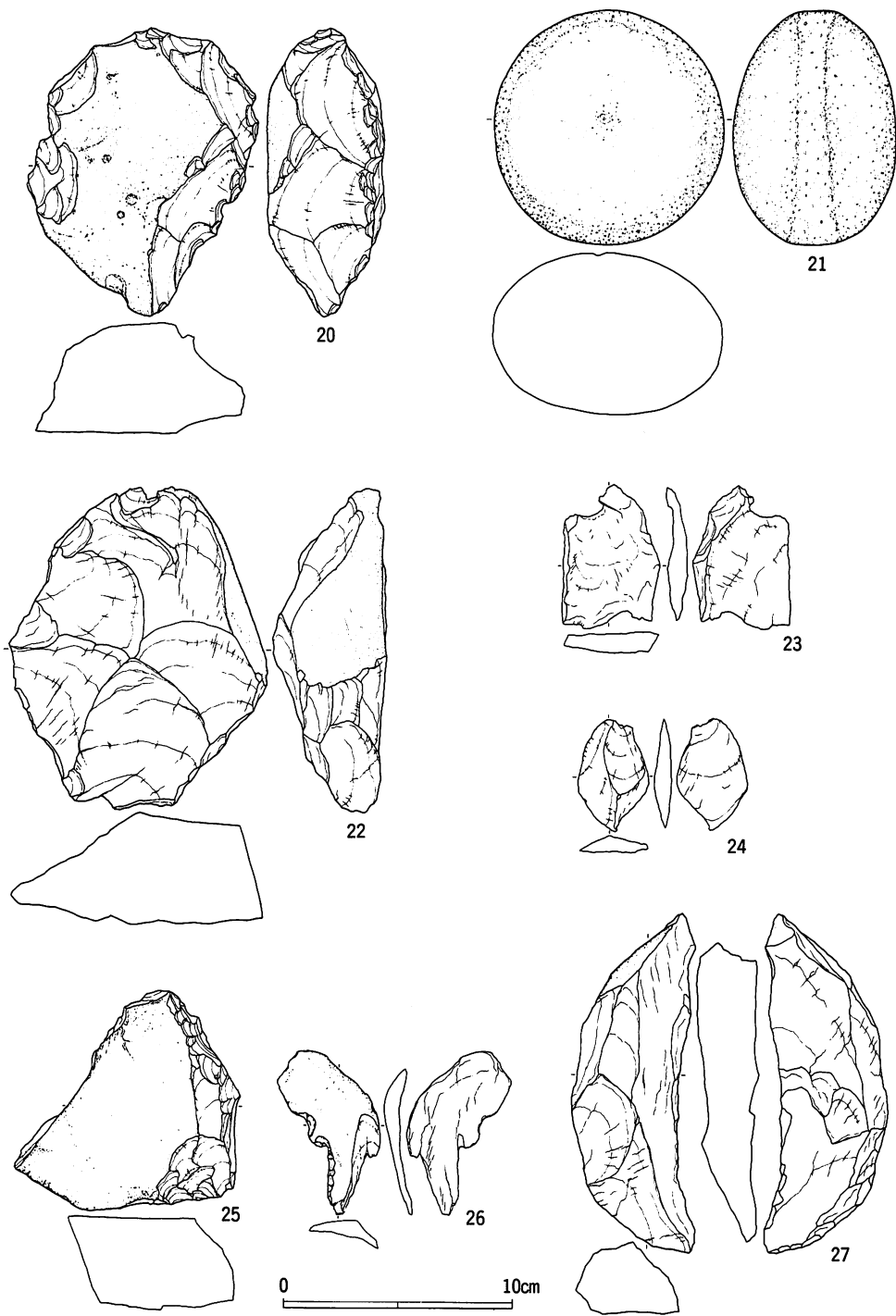
14 (4号土器)



第14図 墓壙出土遺物 2



第15图 墓壙出土遺物 3・7号土器



第16図 配石遺構・VN 9 B埋設土器関連出土遺物

〔3〕 平安時代の遺構と遺物

平安時代に属する遺構は竪穴住居跡1棟だけである。遺物は館郭内、堀跡から須恵器の坏破片や土師器の甕、坏の破片が若干出土している。

竪穴住居跡（第17図、写真図版9）

館郭内V N 5 Eグリット付近で、I層を除去後、II層上面において自然礫を含む黄褐色土が径2 m前後の円形に広がっていることから検出された。

〈形状、規模〉隅丸方形を呈し、規模は東西2.5 m×南北2.1 m、主軸方向は座北に対しN-30°-Eである。

〈埋土〉上部に黄褐色土（礫を多数含む）がのり、其の下部に黒褐色土、黒色土層、褐色土の順にレンズ状の堆積状況である。褐色土中に灰白色火山灰層厚8 cm前後の堆積がみられる。

〈壁の状況〉壁高は55 cm、外傾ぎみに立ち上がる。

〈床の状況〉ほぼ平坦でそれほど堅くはない。周溝や柱穴はない。

〈カマド〉北東壁のほぼ中央に位置する。袖部の痕跡が一部みられるが本体は破壊されているのかない。火床部に焼土厚さ5 cmほどみられるだけである。しかし、焼成はよくない。煙道部は長さ150、幅30 cmであり掘り込み式である。煙出し部は径30 cmで深さ50 cmを測る。

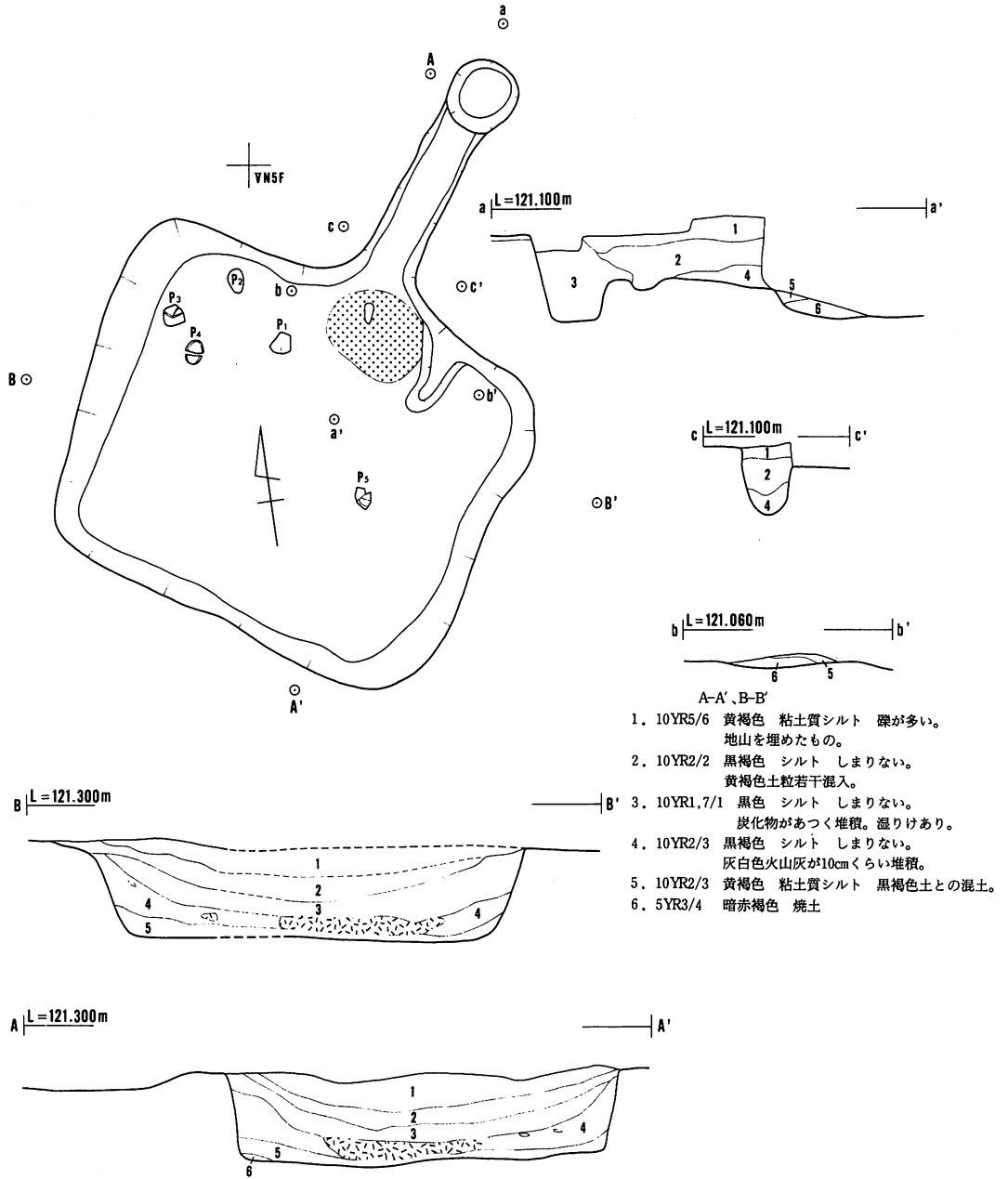
出土遺物（第18図、写真図版15）

坏が5点出土している。28は土師器の坏でロクロ使用成形である。他の坏に比べ口縁が直立ぎみである。29は内面黒色処理を施し、ロクロ使用、回転糸きり後、ヘラで再調整をしている。30は須恵器の坏でロクロ使用、切り離しは回転糸きりである。体部に墨書が見られる。（判読不明）31はロクロ不使用であり、底部はまるみをもっている。色調は橙色である。32は須恵器の坏でロクロ使用で底部は回転糸きりである。底部には「又」とみられる字が墨書される。甕は出土していない。床面から流れ込みであるが、わずかな調整が見られる剝片33、34の2点が出土している。

〔4〕 その他の遺構

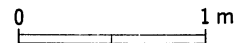
土坑1（第19図、写真図版10）

調査区南側、V S 2グリットII層上面において、炭化物を含む黒色土が楕円形に広がっていることから検出される。長軸1.30、短軸0.90 mの楕円形をなし、深さ13 cmを測る。掘り込みはIII層の上面までで、壁は緩やかに立ち上がる。埋土には厚さ5 cmの炭化物層を含む。遺物は出土していない。時期は不明である。

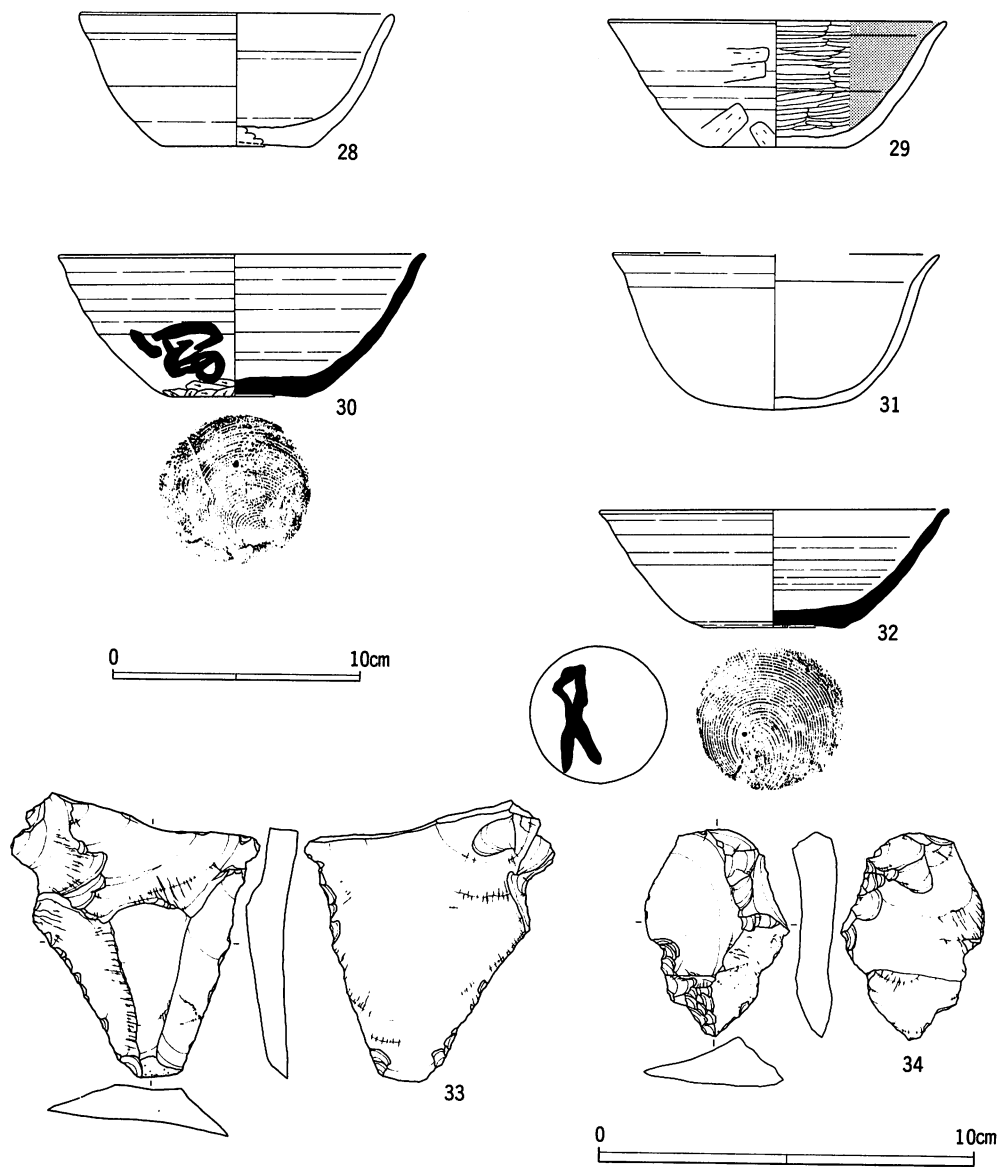


- A-A', B-B'
- 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 礫が多い。地山を埋めたもの。
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりない。黄褐色土粒若干混入。
 - 10YR1,7/1 黒色 シルト しまりない。炭化物があつく堆積。湿りけあり。
 - 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりない。灰白色火山灰が10cmくらい堆積。
 - 10YR2/3 黄褐色 粘土質シルト 黒褐色土との混土。
 - 5YR3/4 暗赤褐色 焼土

- a-a', b-b', c-c'
- 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり。
 - 10YR3/1 黒褐色 シルト しまりややあり。
 - 10YR4/3 におい黄褐色 シルト 黄褐色土が多い。(上部からの投げ込み。) しまりなし。
 - 10YR3/2 黒褐色 シルト 黄褐色土粒混入。しまりややあり。
 - 10YR4/4 褐色 シルト しまりなし。炭化物混入。
 - 10YR3/4 暗赤褐色 焼土 焼成不良。炭化物混入。



第17図 竪穴住居跡



第18図 竪穴住居跡出土遺物

土器観察表

番号	種類	器種	法量(推定値)			外面調整			内面調整			成形	切り離し	その他
			口径cm	底径cm	器高cm	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部			
28	土師器	坏	(14.2)	(6.3)	6.3	—	—	—	—	—	—	ロクロ	ヘラキリ	
29	土師器	坏	13.6	6	5	—	ケズリ	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	糸キリ	
30	須恵器	坏	14.8	5.6	5.7	—	—	—	—	—	—	非ロクロ	糸キリ	墨書
31	土師器	坏	12.8	6	5.4	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸キリ	
32	須恵器	坏	14.1	5.8	4.7	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸キリ	墨書

土坑 2 (第 19 図、写真図版 10)

調査区北側、V N 5 G グリット III 層で黒色土の広がりから検出される。長軸 0.90、短軸 0.70 m の楕円形を呈し、深さ 15 cm を測る。IV 層 (地山) を掘り込み、断面形は浅皿状をなし、壁は緩やかに立ち上がる。埋土上部には焼土粒をわずかに含み弥生土器片がみられる。時期は断定できないが、埋土の様子は館跡に伴う柱穴とは異なることや弥生土器が出土していることから弥生時代前後と推定される。

掘立柱建物跡 2 (第 19 図、写真図版 10)

V N 5 G グリットの III 層下部で検出される。

〈形態規模〉4 本柱の建物である。柱間は P 101 - P 102 - P 103 - P 104 - P 101 の順に 1.70、2.00、1.75、2.05 m を測る。桁方向 (南北) は N - 17° - E を示す。柱穴の開口部径は 20 cm、底部径 15 cm 前後、深さ 25 ~ 45 cm である。

〈時期、性格〉状況としては土坑 2 とセットと考えられる。館跡に伴う柱穴群とは検出面や埋土、掘り方の大きさ等の違いがあり、館跡の時代の遺構とは言いがたい。さらに、弥生土器片が土坑や柱穴から出土していることから、断定はできないが、弥生時代前後の遺構と考えられる。

焼土 (第 20 図)

V N 5 H グリットで検出され、I 層下部から II 層上部にかけてみられ、郭内唯一の焼土らしい焼土である。周辺からは弥生土器の破片が多く出土している。長軸 0.30、短軸 0.25 cm の楕円形を呈す。焼土の厚さは最大で 10 cm を測る。共伴する礫や土坑はみられない。

時期は弥生時代と推定される。

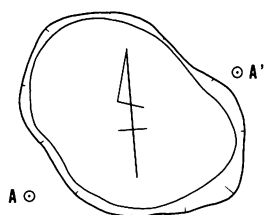
炭化物集中地点 (第 20 図)

V N 6 G グリットの II 層中部で検出される。弥生土器片がとくに多く出土したグリットであり、竪穴住居跡を想定して調査したが、それは認められない。底辺が 0.30 m ほどの三角形を呈し、炭化物を含む層の厚さは約 7 cm である。焼土粒はわずかに含むが赤褐色に変色した焼土はみられない。また、炉跡に使用したような礫などは見つかっていない。時期は弥生時代と推定される。

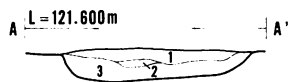
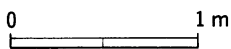
炭窯跡 (第 21 図、写真図版 10)

検出地点は調査区西側 III N 8 B グリット付近である。現況は畑地となっており耕作土を取り除いた後、III 層から検出されている。

〈形状規模等〉[本体] 長軸 4.30 m、短軸 3.70 m の卵形を呈し、深さ 47 cm を測る。窯床はほぼ平坦でありセメント状に堅い。床から 8 cm ほど赤褐色に焼けている。窯口は南にあり自然礫 (長さ 50 ~ 64 cm) を 2 個立てて構築しており、幅は 40 ~ 50 cm である。煙突は北側にあり幅 50

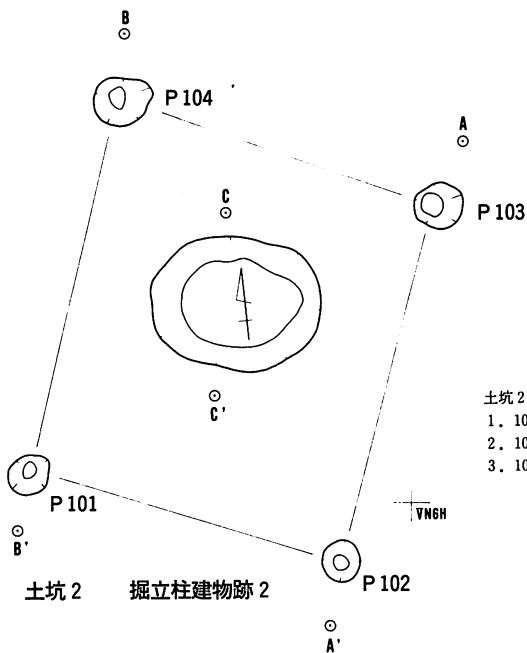


土坑1

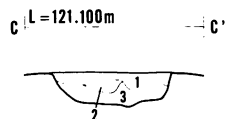


土坑1

- 1. 10YR1.7/1 黒色 シルト しまりあり。炭化物混入。
- 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりなし。
- 3. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまりあり。



土坑2 掘立柱建物跡2



土坑2

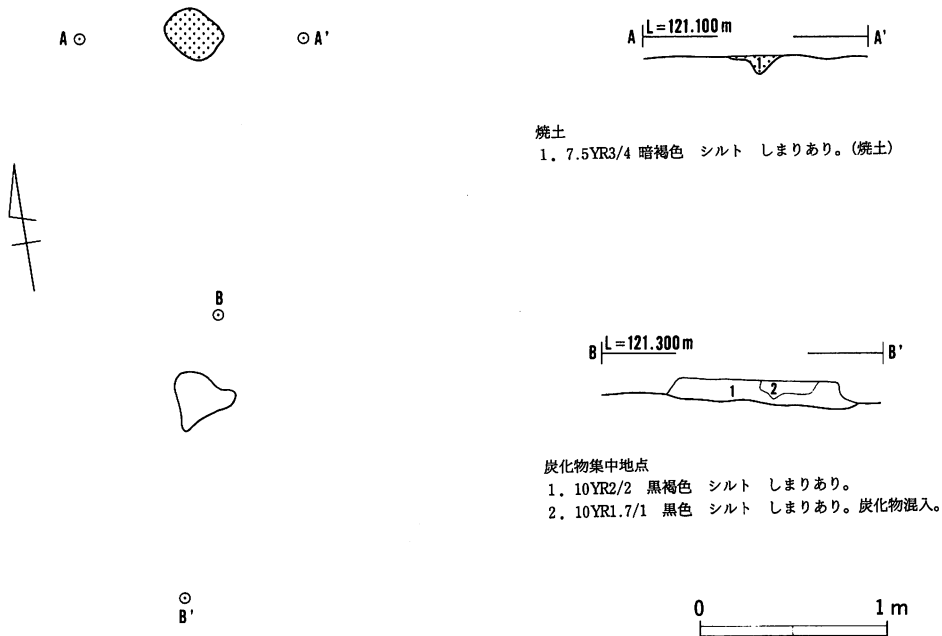
- 1. 10YR2/1 黒色 シルト しまりなし。焼土粒、炭化物若干。
- 2. 10YR3/3 黒褐色 シルト しまりなし。黄褐色土ブロックあり。
- 3. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまりなし。



掘立柱建物跡2

- 1. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりなし。
- 2. 10YR5/6と10YR2/3の混土

第19図 土坑1, 2・掘立柱建物跡2



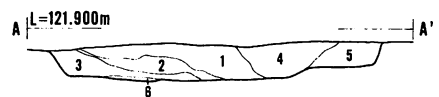
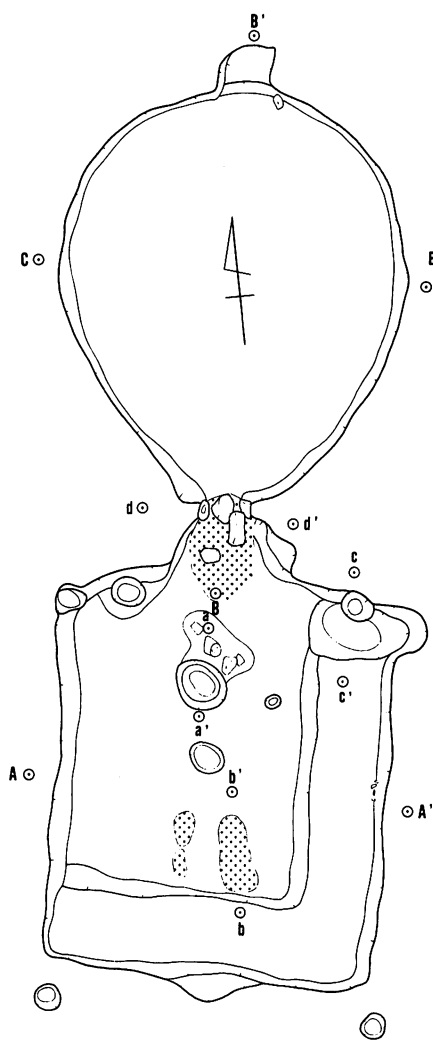
第20図 焼土・炭化物集中地点

cmで急角度に立ち上がる。埋土から鉢が落下したとみられる。

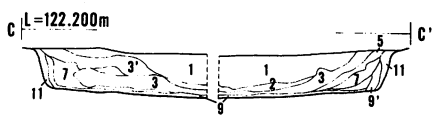
[作業場跡]本体の南に接続し、竪穴住居状の掘り込みをもつ形態である。短軸3.50、長軸4.50 mの方形を呈し、深さ40 cmを測る。コーナー近くに4本の柱穴をもつ。床面は2段に掘り込まれ、ベット状の高まりがみられる。床面全面に粉炭が散らばっている。窯口近くには円形の凹があり焼土や炭化材が広がっている。大正時代から昭和初期に使用されたものである。

溝跡 (第21図)

作業場跡の東1.20 mに位置し南北に走る。幅0.35、長さ8 m以上、深さ20 cm前後である。周辺に他の遺構がないことから炭窯跡に伴うものと思われる。

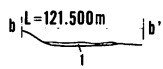


- A-A'
1. 10YR5/8 黄褐色 シルト 暗褐色土との混土。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
 3. 10YR5/8 黄褐色 堅くしまる。
 4. 10YR3/2 黒褐色 シルト 焼土粒若干。
 5. 10YR3/3 暗褐色 シルト 焼土若干。
 6. 7.5YR2/2 褐色 シルト 炭化材片、焼土多量含む。

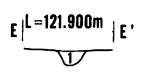
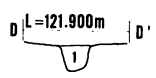
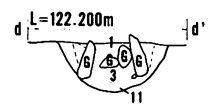
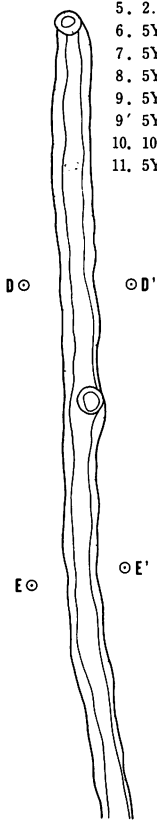
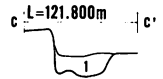


- B-B'、C-C'、d-d'
1. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまりあり。堅い黄褐色土ブロック混入。
 2. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりなし。
 3. 2.5YR5/6 明赤褐色 焼土焼成顯著。(はのち落下)
 4. 1と3の混土
 5. 2.5YR3/4 暗褐色 焼土
 6. 5Y5/2 オリーブ灰焼土混入。
 7. 5Y4/1 灰焼成をうけ還元状態もろい。
 8. 5Y5/2 オリーブ灰焼成を受け石質化。
 9. 5Y2/1 黒色 炭化物層約1cm。
 - 9' 5Y2/1 黒色 強いセメント状態。
 10. 10YR5/6 黄褐色 シルト しまりあり。焼土粒混じり。
 11. 5YR3/4 暗赤褐色 地山が焼成変化。

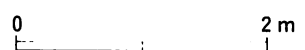
- a-a'
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 炭化材片、焼土多量。
- b-b'
1. 5YR5/8 明赤褐色焼土



- c-c'
1. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト 焼土、炭化材片多量。



- D-D'、E-E'
1. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト 褐色土混入。



第21図 炭窯跡・溝跡

〔5〕 遺構外の出土遺物

遺構外の遺物量は次のとおりである。土器はコンテナ（30×42×29 cm）3箱、石器70点余、フレイクはコンテナ1箱である。また、土製品1点、刀子1点、鉄滓2点が出土している。

(1) 土器・土製品・金属類

出土遺物の大部分は弥生土器である。その他、縄文土器、土師器、須恵器、が若干みられる。細片が多く接合、復元が困難であったが、弥生土器片については個体判別できるかぎり掲載するようにした。

I 群土器（第22図35～45、写真図版16）

縄文時代の中期から晩期前葉の土器群を一括した。35～40は中期の土器とみられる。41～43は晩期前葉の土器である。44は無文の底部である。45は底部の足とみられ突起状のもの。

II 群土器（第22図～第32図、写真図版16～24）

縄文晩期末葉から弥生期に属する土器：器形により細分した。

A 壺形土器（46～126）

46～70は口縁部である。46～57は外反する口縁をもつ無文の土器である。47、48、52、54は同一個体とみられる。内外面磨きが施される。49は外面に煤が多量に付着している。56は口縁端部がやや外反し、他に比べ調整が雑である。58は体部上半に単節斜縄文が施文され、内面に煤の付着がみられる。59～70は1本あるいは数本の平行沈線が施文されるものである。63、65、67は内面にも沈線が施される。65は82、88と同一個体であり、色調は橙色、丁寧な磨きが施される。60～63は内面に磨きがみられる。61、62は赤色顔料が塗布される。66は平行沈線間に鋸歯状文が施文される。70は口縁端部に沈線があり、細かい刻みが施される。

71～109までは頸部ないし体部上半部の土器である。74、76は同一個体でための1本の沈線、80、81も同一個体であるが8本の沈線が施される。87、91、92、94、95、は同一個体であり赤色顔料が塗布される。また、平行沈線と弧状沈線、さらに、充填縄文が施される。88は平行、弧状沈線、充填縄文が施される。101、102、103、104、105は三角刺突文が施される。（101と104は同一個体）106は変形工字文に細かい刺突が施される。107、108は重菱形文が施文、赤色顔料が塗布される。109は斜行縄文がみられる。

110～126は体部下半ないし底部の土器である。93、99、111は同一個体である。111、112、114、119は弧状沈線、充填縄文が施文される。115、116、117は矩形の沈線が施されるものである。118は半截竹管による沈線が施される。121は斜行縄文である。122と123は同一個体で、図上復元したものである。外面は磨きが施され橙色の色調を帯びる。体部最大幅推定23cmである。124は斜行縄文が施され赤色顔料が塗布される。また、内面が磨かれている。125は斜行縄文がみられ、最下部は丁寧に磨かれている。底部径は5cmを測る。

B 浅鉢形土器 (127~169)

127~133 は変形工字文が施される土器である。127、128、129、130 は同一個体とみられる。135~144、146 は口縁に平行沈線が施される。147~150 は連弧文、151 は山形沈線が施文される。152 は捺糸文が縦走し、口唇部に捺糸文が押圧される。153 は沈線間に刻みが入る。154~159 は体部破片であり、154~158 は上部に平行沈線が施される。156 は上部に太い沈線があり、磨きが施され、内外面に煤が付着している。色調は黒である。160~169 は底部破片である。160 と前述の 130 は接合できなかったが同一個体と思われる。164 は連弧文、充填縄文が施される。165 は斜行ないし縦走縄文施文である。166、167 も同一個体であり、丸底風の器形を呈す。磨きが丁寧である。168 は最下部に連弧文、その上部に斜行縄文がみられる。169 は平行沈線間に三角刺突文が施される。底部からしだいに外反する器形を呈すると思われる。

C 台付鉢の台 (170~173)

170 は縄文が横走し、内面は磨かれている。171、172 は沈線が施文される。172 は浅鉢の体部破片の可能性もある。173 は内外面磨きが施され、底部径は 5.6 cm である。

D 蓋形土器 (174~176)

174 は平行、弧状沈線、充填縄文がみられる。175 は平行する沈線の外側に 2 個の穿孔がみられる。穿孔は 2 個一対になり紐を通すためのものとみられる。176 は無文で磨かれている。上部の径は 3.7 cm を測る。

E 甕形土器 (177~246)

甕形土器では口縁から底部まで接合復元できた個体は一点もなかった。口縁部から体部にかけて実測可能程度に接合、復元ができたものは 177~181 の 5 点である。また、底部や体部で実測できたものは 182~192 の 11 点のみである。

177 は口縁部に 1 本の沈線があり、口唇は押圧され小波状を呈す。体部上半は弱く内弯し口縁がやや外反する。縄文は縦走する。体部最大幅推定 25.2 cm を測る。178 は口縁部と体部の境に 1 本に沈線があり、口唇にも沈線が施される。体部上半は内弯しながら口縁に続く。口縁は直立する。縄文は斜行ないし横走する。体部最大幅推定 28 cm を測る。179 は口縁は 177 に比べうねりの大きい小波状を呈する。体部上半から弱く内弯し口縁に至る。口縁はやや外反する。縄文は斜行する。180 は口唇は他に比べ小刻みに押圧される。182、184~192 は底部である。底部径は大きい順に列挙すると次のとおりである。186 : 11.2 cm、185 : 10 cm、187 : 推定 9.1 cm、184 : 推定 8.6 cm、191 : 8.4 cm、188 : 推定 8.0 cm、182 : 7.2 cm、189 : 6.5 cm、192 : 6.5 cm、190 : 5.8 cm。底部が磨かれているものは 184、192 である。磨きとまではいかないまでも削りがみられるものは 191 である。その他は網代痕である。193~242 は口縁、体部、底部の拓本である。193 は口縁に変形工字文が施文、口唇に沈線がみられる。一見、浅鉢形に見受けられるが、口徑

30 cmぐらいと推定される。202 はB形突起状の小波状をもつ口縁で胎土の色調は黒色である。煤の付着がみられる。210 は181 と同一個体とみられ、縄文施文後、ヨコナデを施している。212～223 (217 を除く) は底部破片であり、網代痕がみられる。217 は磨かれている。226 は口縁に捺糸文が横走し、やや外反する器形である。227 と228 は同一個体であり228 が227 の下にくるものである。口縁では捺糸文が斜行し、体部で縦走する。口縁はつよく外反する。229 は半截竹管による連弧文沈線が施文される。230、231、232、234 はそれぞれ数本の沈線が施文される。235～242 はいずれも斜行、横走縄文がみられる。243 は木葉痕をもつ、245 は磨かれている底部である。245 は壺の底部の可能性もある。

弥生期の土器について：住居跡は検出されなかったが、V N 区を主として弥生期の土器が出土している。壺、甕、浅鉢、蓋がみられる。壺では平行沈線や弧状沈線が施文され、丁寧なミガキが施されているものが多い。浅鉢は変形工字文、平行沈線、弧状沈線施文がみられる。蓋は3点あり186 は穿孔があり注目される。甕は口縁部が直立するものが大部分であるが、いくぶん外反するものもみられる。そして、斜行、横走縄文が施文される。一部に226、227 のように捺糸文施文もみられる。概して、前半、中期の時期の遺物が多く、後期のもはわずかである。

川群土器 (第32図、写真図版24)

平安時代の土器を一括した。弥生土器ほど量はないが若干の須恵器が出土している。

247、248、251 は須恵器の甕の口縁である。254 は須恵器の長頸瓶の頸部で頸部径8.4 cmを測る。256 は表面に黒い釉が塗布される。253、255、257、258、259 は坏の底部破片であり、ロク口成形、切り離しは回転糸切りである。

土製品 (第32図、写真図版24)

260 の1点である。半分欠失している。径4.6 cm、厚さ0.5 cmを測る。全体にミガキが施され、中央に穿孔がみられる。紡錘車と思われる。

金属類 (第32図、写真図版24)

261 は刀子で長さ7.4 cm、身幅0.7 cmである。262、263 は鉄滓であり、重さはそれぞれ63.2 g、79.7 gである。

(2) 石器・石製品類

石器、石製品類は67点出土している。内訳は剥片石器(石鏃、不定形石器)53点、礫石器(石斧、凹石、磨石、敲石、石皿)10点、砥石2点である。また、石製品は石棒2点である。剥片は1011点出土している。それらのうち多くは館郭内から出土であり、V N 5 G 区103点、V N 6 H 区102点、V N 6 H 区61点、V N 5 I 区60点などとなっている。剥片でもわずかに使用痕跡がみられるもの10点と石核1点を掲載した。全体的傾向として定形的なものは少な

く、不定形な剥片に一部の調整がみられるものが多い。71 ページに石器一覧表を掲載しているので参照されたい。

石鏃 (第 33 図、264～276、写真図版 25)

13 点のうち 6 点 (266、270、271、272、273、276) が破損している。264～269 は凸基有茎鏃である。長さ 2.5～2.9 cm と小型のものである。265 は基部にアスファルトの付着がみられる。274 は石槍の可能性もある。

不定形石器 (第 33～36 図 277～316、写真図版 25～28)

剥片の側縁や一部に調整を加えて刃部をつくりだしているものを一括した。

277～284 は側縁や縁辺に細部調整がみられ、削器や搔器類と思われる。285 は剥片を利用し石鋏状に加工している。用途については不明である。石質は珪質細粒凝灰岩である。286～291 は側縁に抉入がみられるものである。292～316 は側縁や一部に押圧剥離痕がみられる一群である。ていねいな調整はみられない。

剥片、石核 (第 36 図 317～327、写真図版 28)

324、325 は縦長剥片で石質は珪質細粒凝灰岩である。327 は多方面からの剥離面を有し、一部に自然面が残る。

石斧 (第 37 図 330～334、写真図版 28～29)

330～334 の 5 点である。332 は打製石斧であり一面の刃面が剥落している。他は磨製石斧でいずれも欠損している。

敲石・凹石・磨石類 (第 37～38 図 335～338、写真図版 29)

335 は礫の先端部に叩きによる剥離面と外周は緻密な敲打痕跡がみられる。336 は両面に 2 個ずつの凹みがある。337 は楕円球状の礫の縁辺に幅 2 cm ぐらいのはちまき状の敲打痕跡がみられる。338 は片面に擦り痕跡がみられる。

石皿 (第 38 図、写真図版 29)

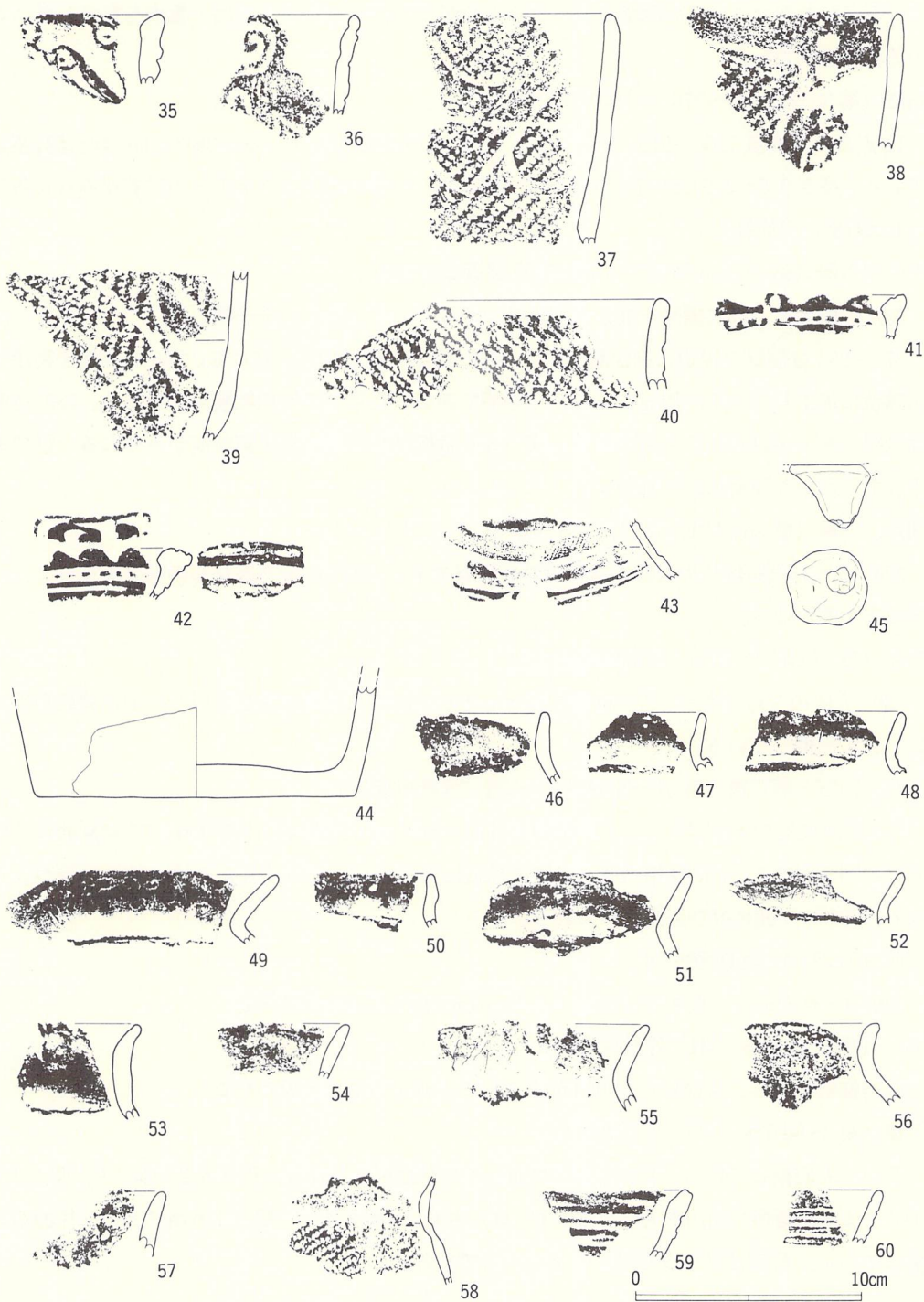
339 の一点である。大きさは径 21.6×19.6 cm、厚さ 7.1 cm である。

砥石 (第 38 図 340～341、写真図版 29)

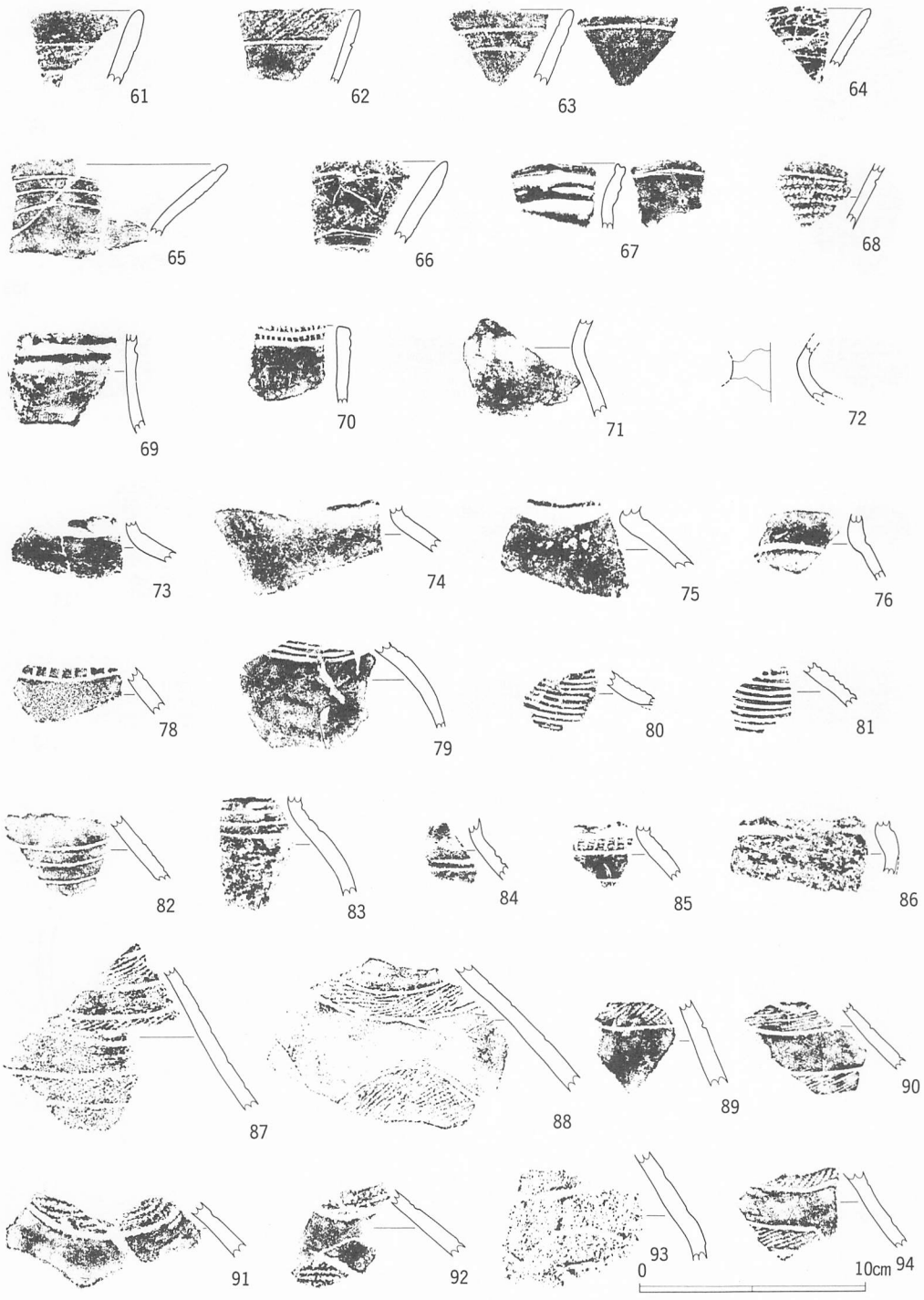
四角柱状を呈し、4 面に擦り痕跡がみられる。新しい遺物と思われる。

石棒 (第 36 図 328、329、写真図版 28)

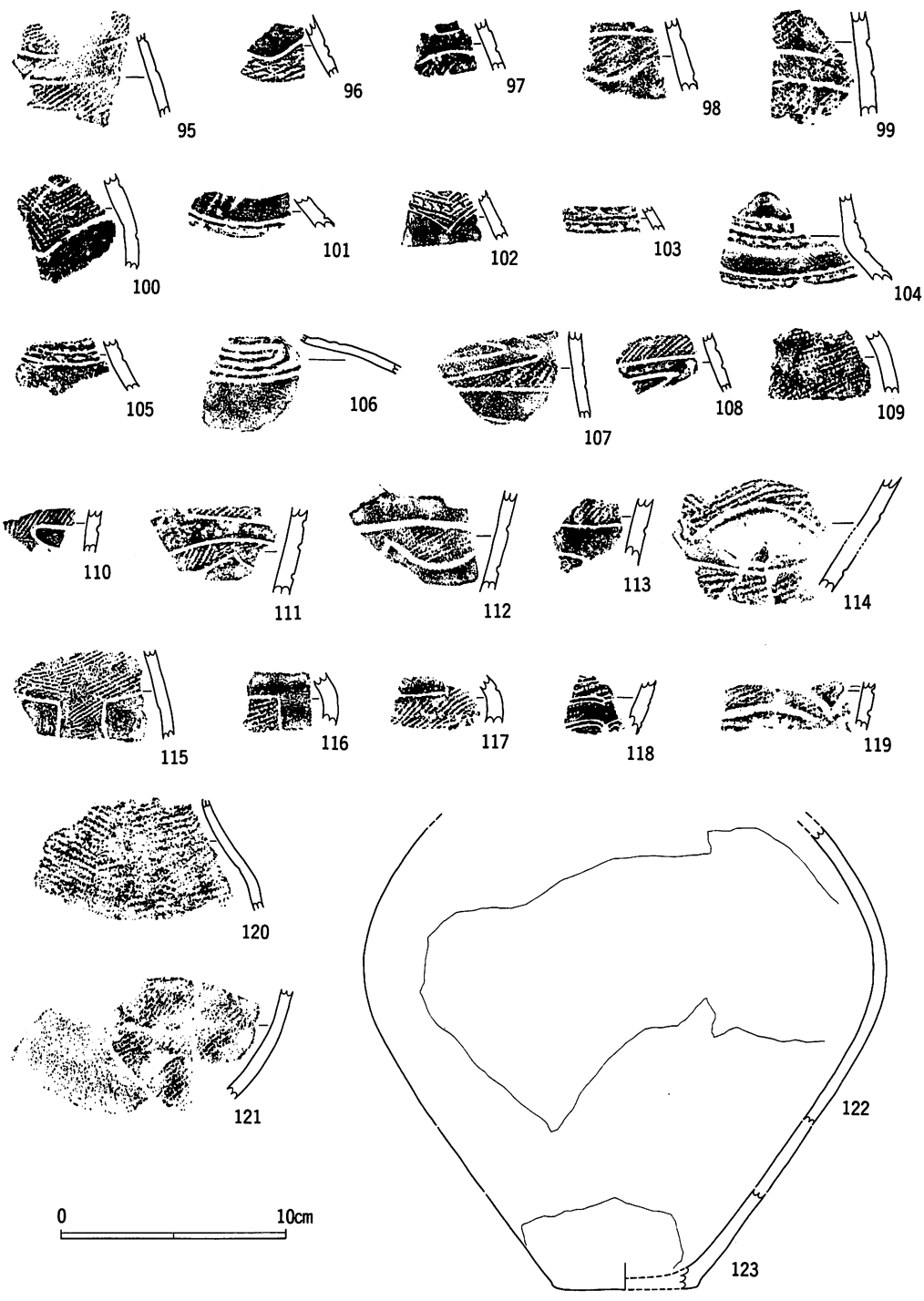
2 つとも破損している。327 は先端が加工され有頭がみられる。長さ 6.2、幅 2.9、厚さ 1.6 cm である。断面形は楕円形を呈する。329 は長さ 6.2、幅 2.4 cm、厚さ 1.6 cm である。片面が剥落している。石質はどちらもホルンフェルスである。



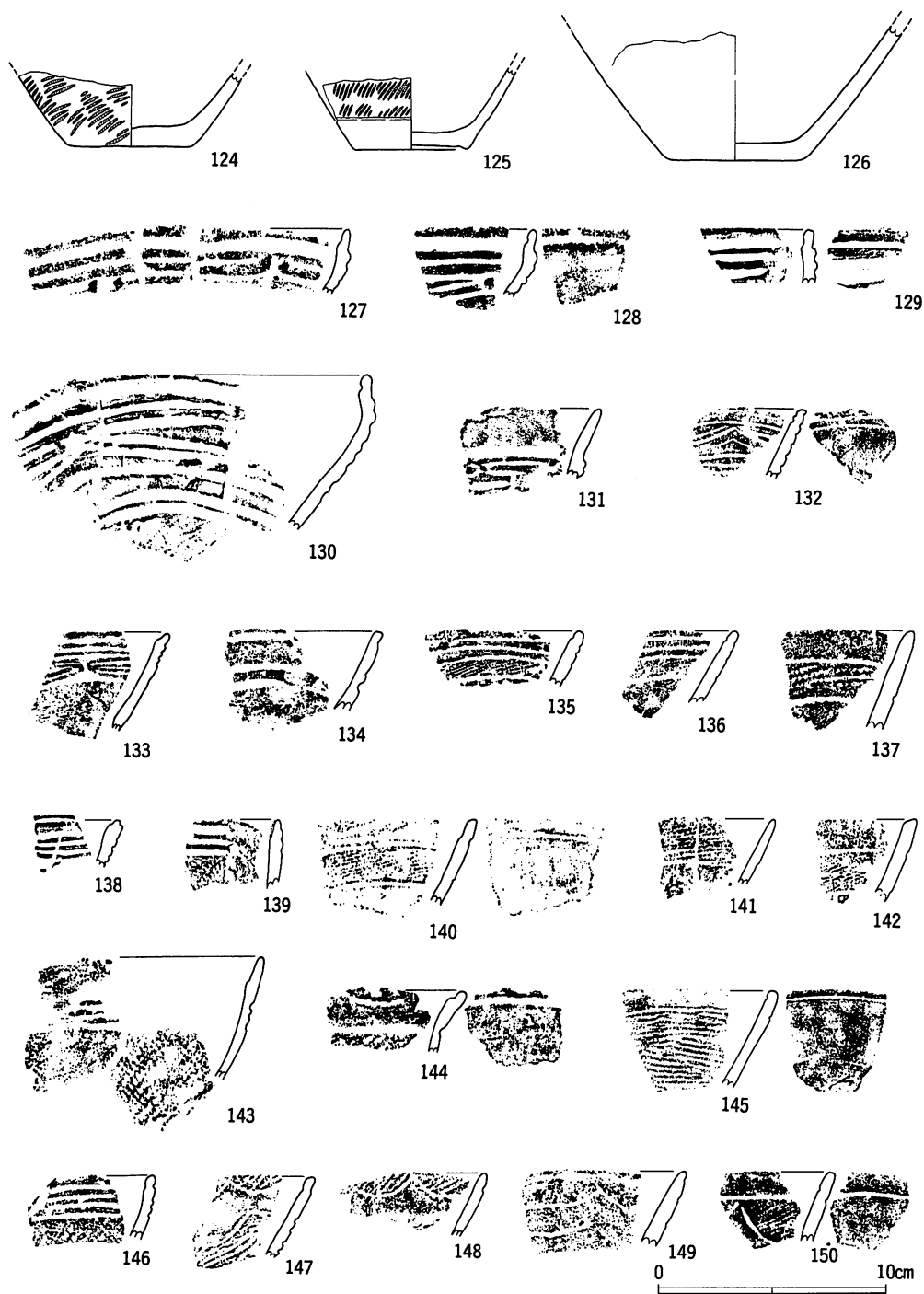
第22图 遺構外出土器 1



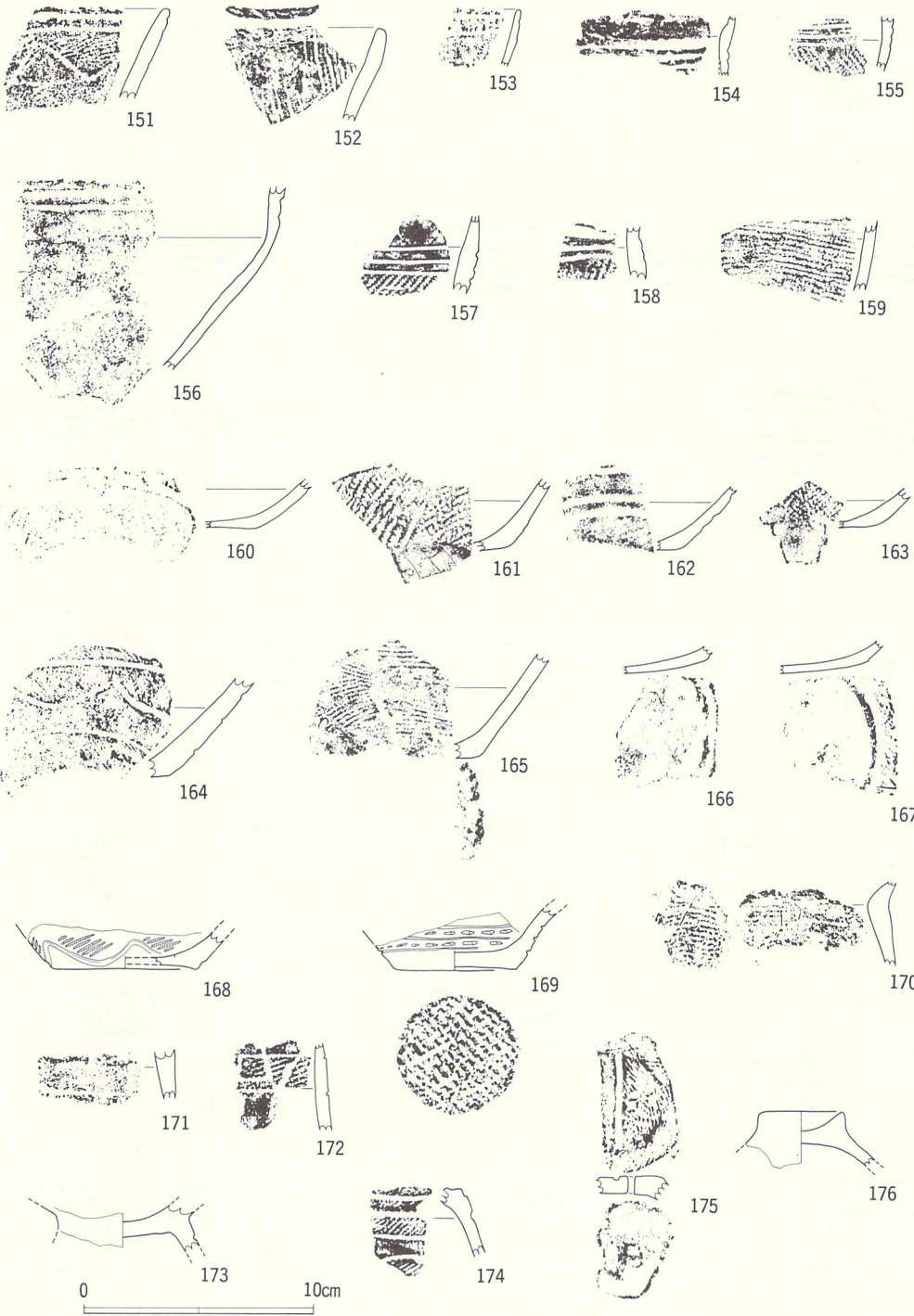
第23图 遺構外出土土器 2



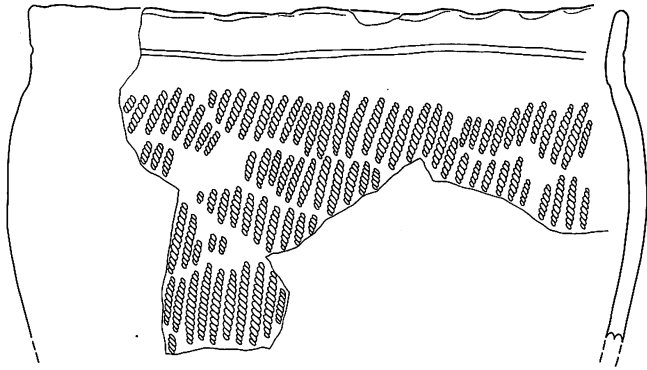
第24图 遺構外出土土器 3



第25図 遺構外出土土器 4



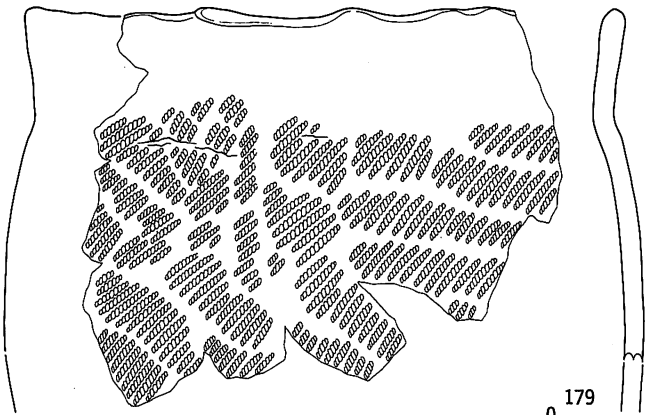
第26図 遺構外出土土器 5



177



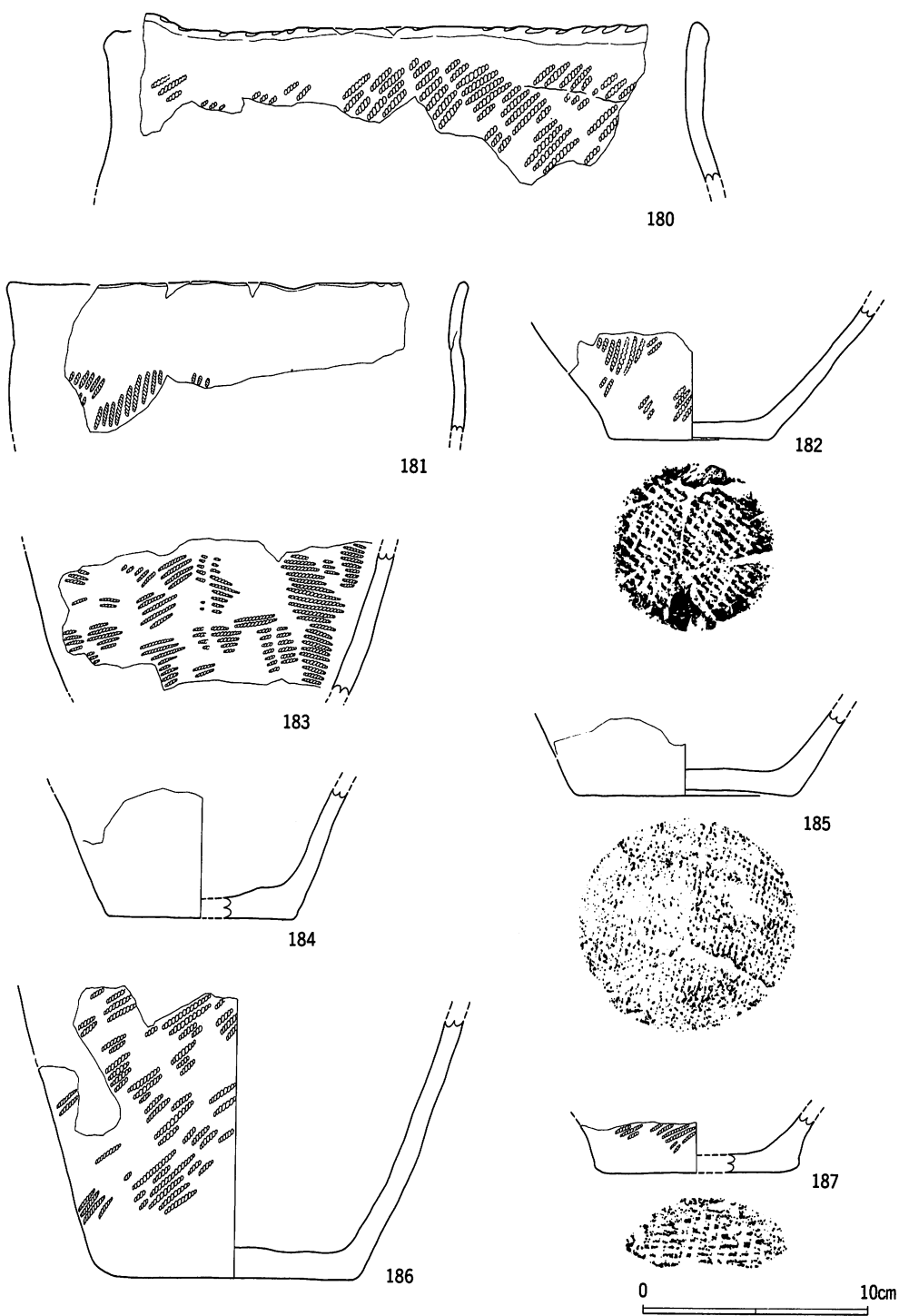
178



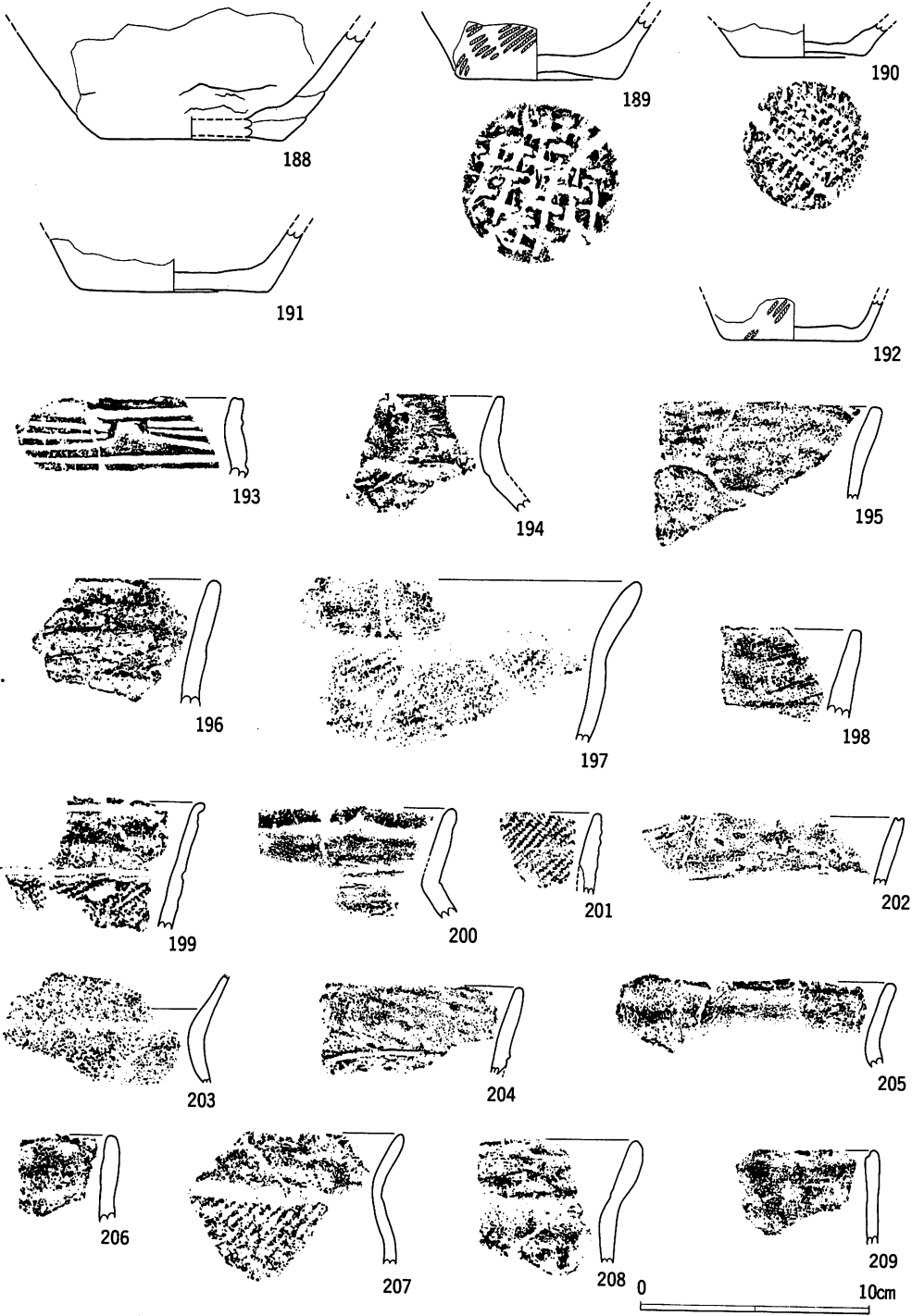
0 179

10cm

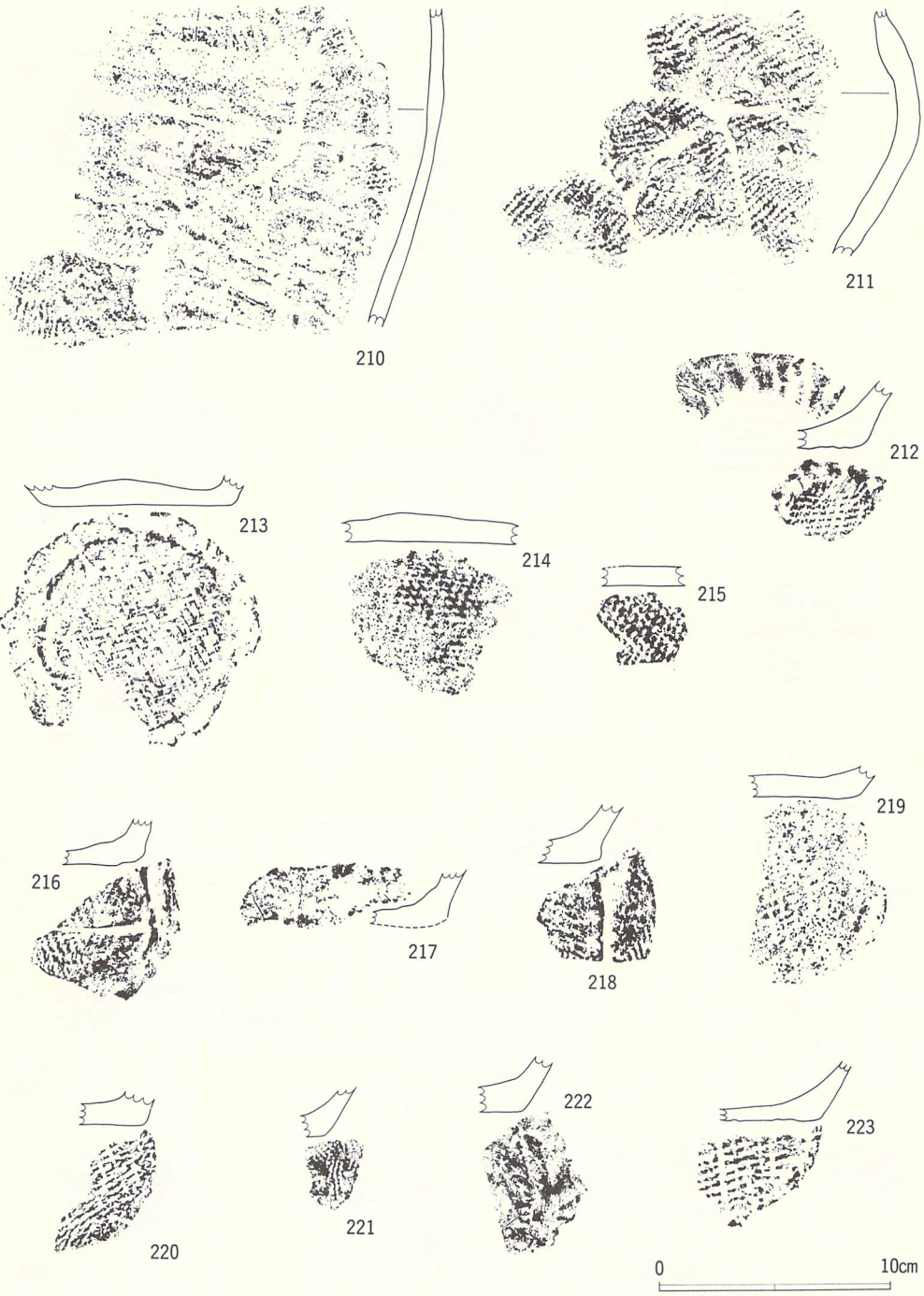
第27図 遺構外出土土器 6



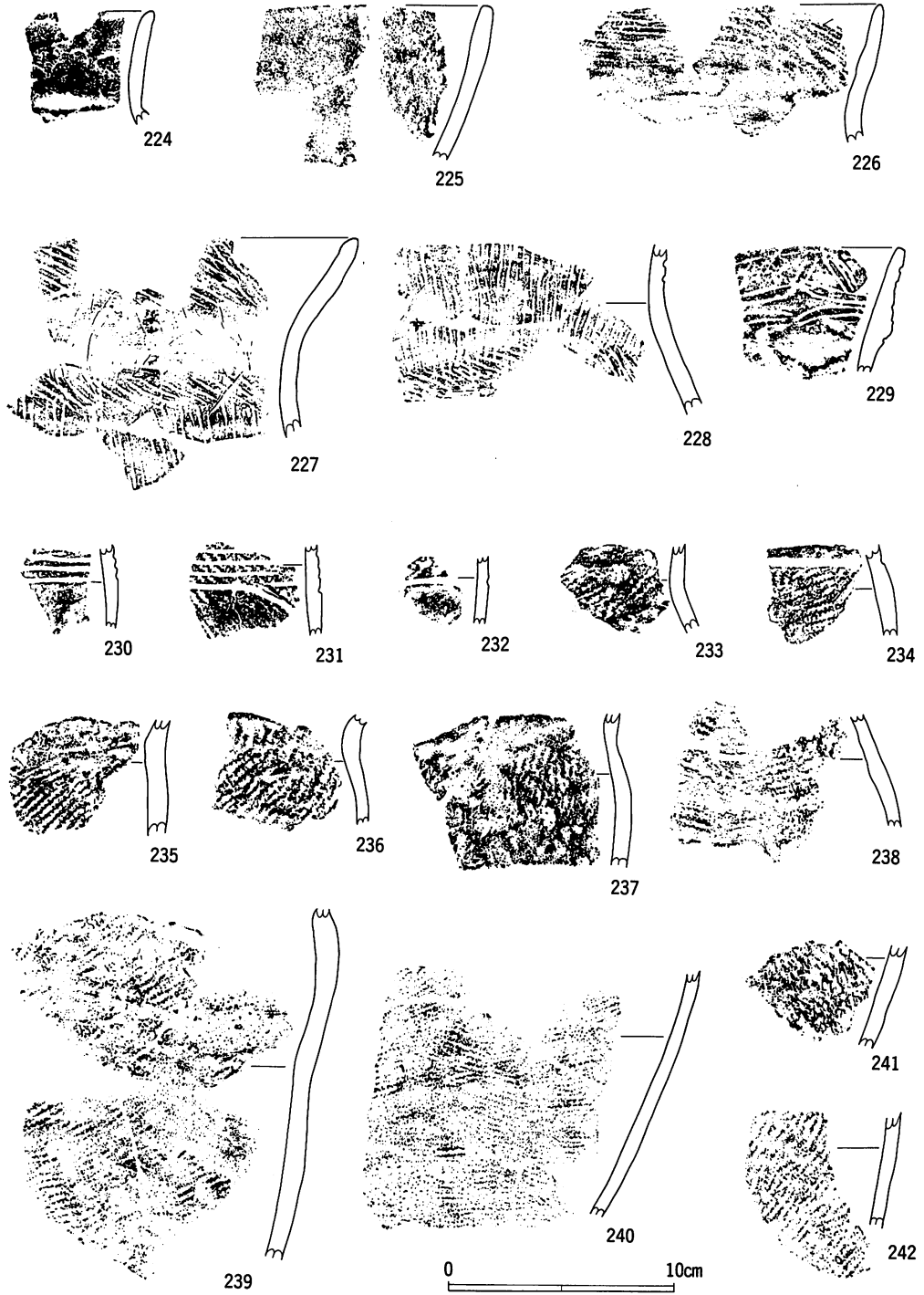
第28図 遺構外出土土器 7



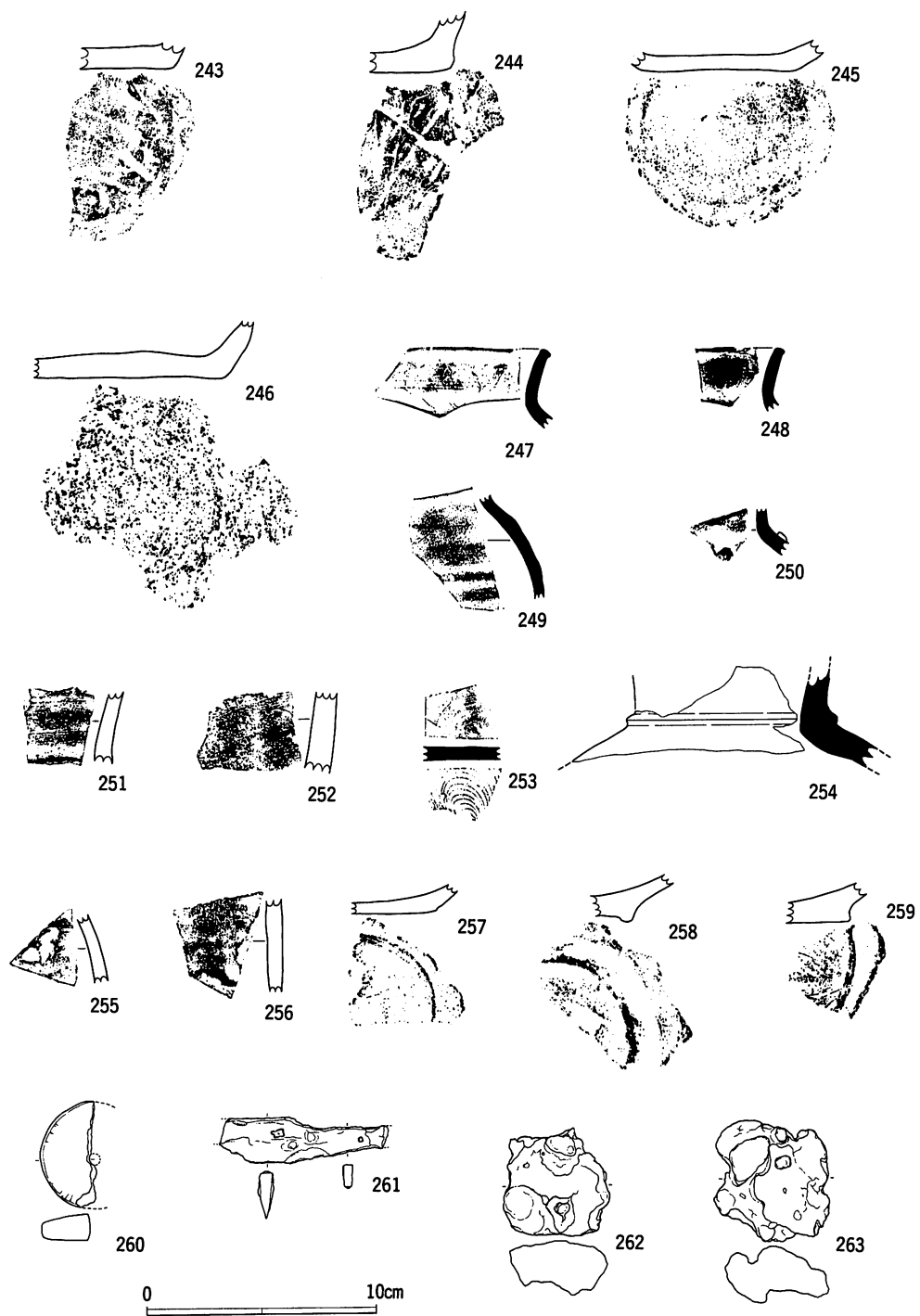
第29図 遺構外出土土器 8



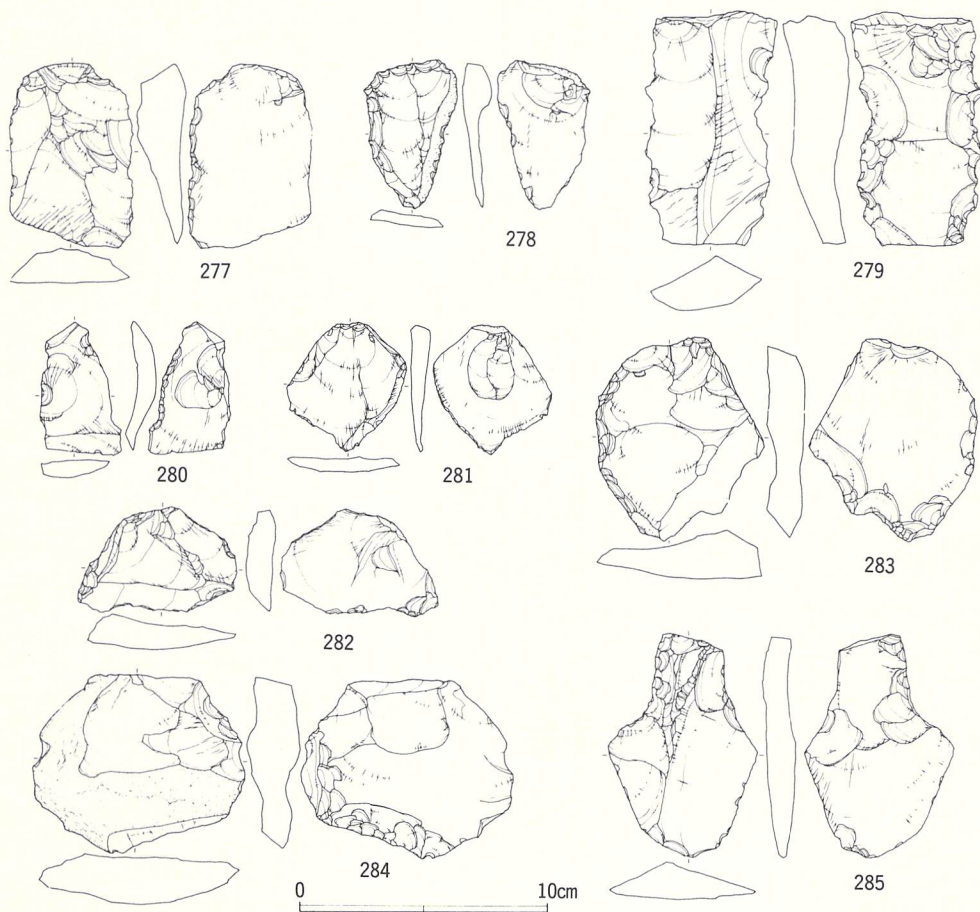
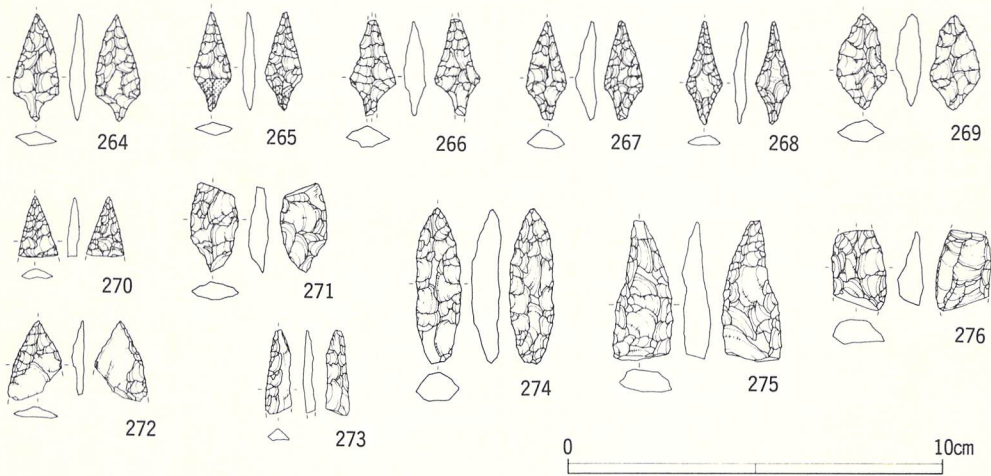
第30図 遺構外出土土器 9



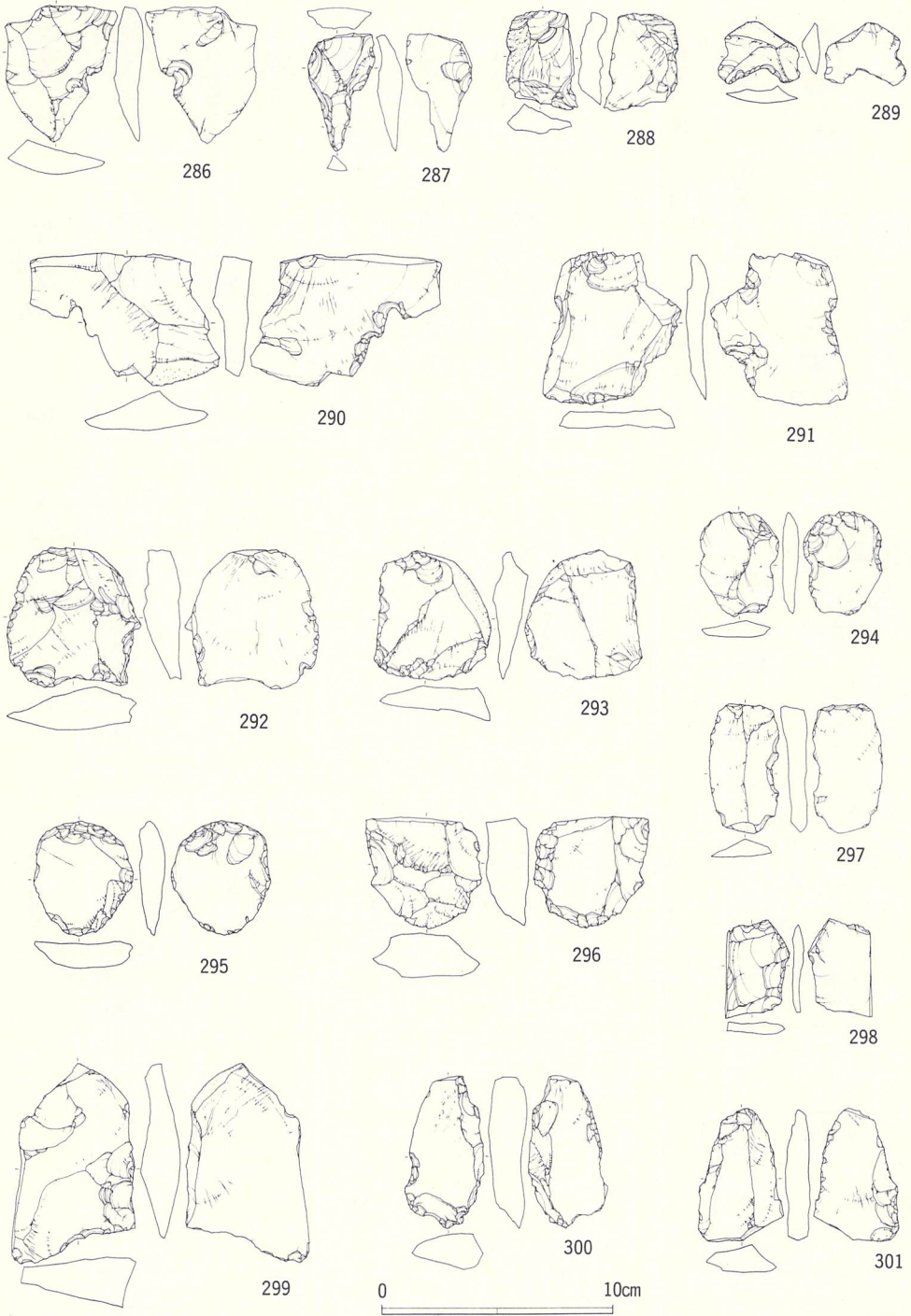
第31图 遺構外出土土器10



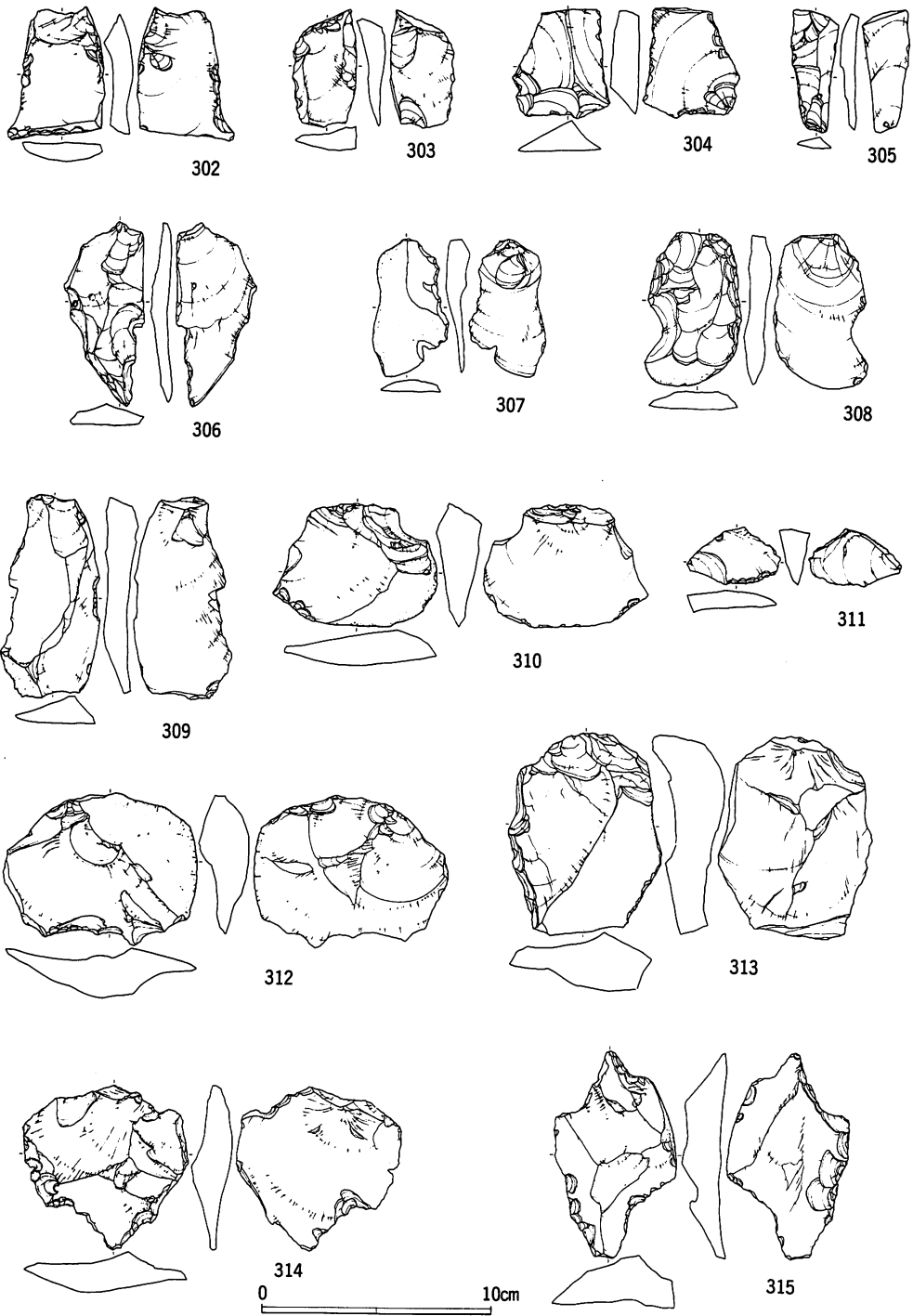
第32図 遺構外出土器11・土製品・金属類



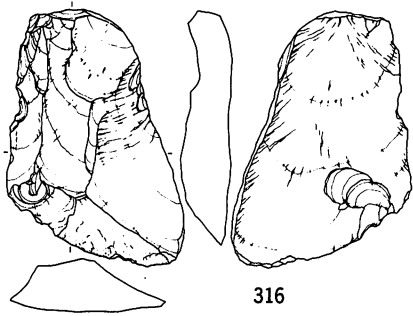
第33図 遺構外出土石器 1



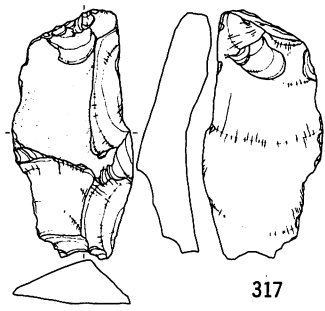
第34図 遺構外出土石器 2



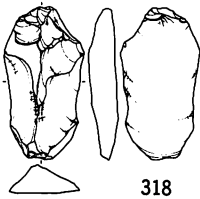
第35图 遺構外出土石器 3



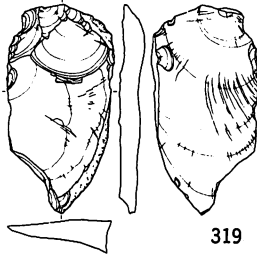
316



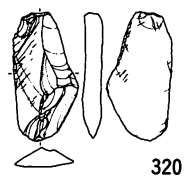
317



318



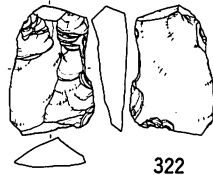
319



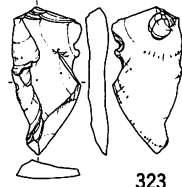
320



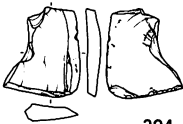
321



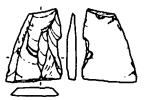
322



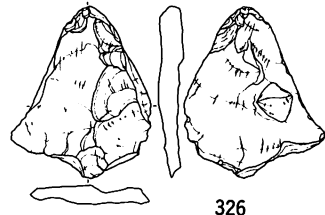
323



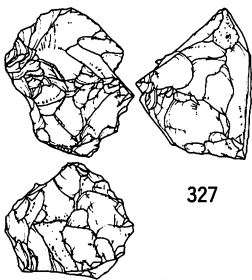
324



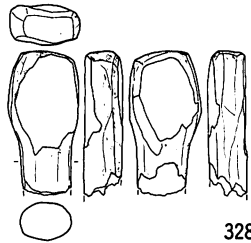
325



326



327



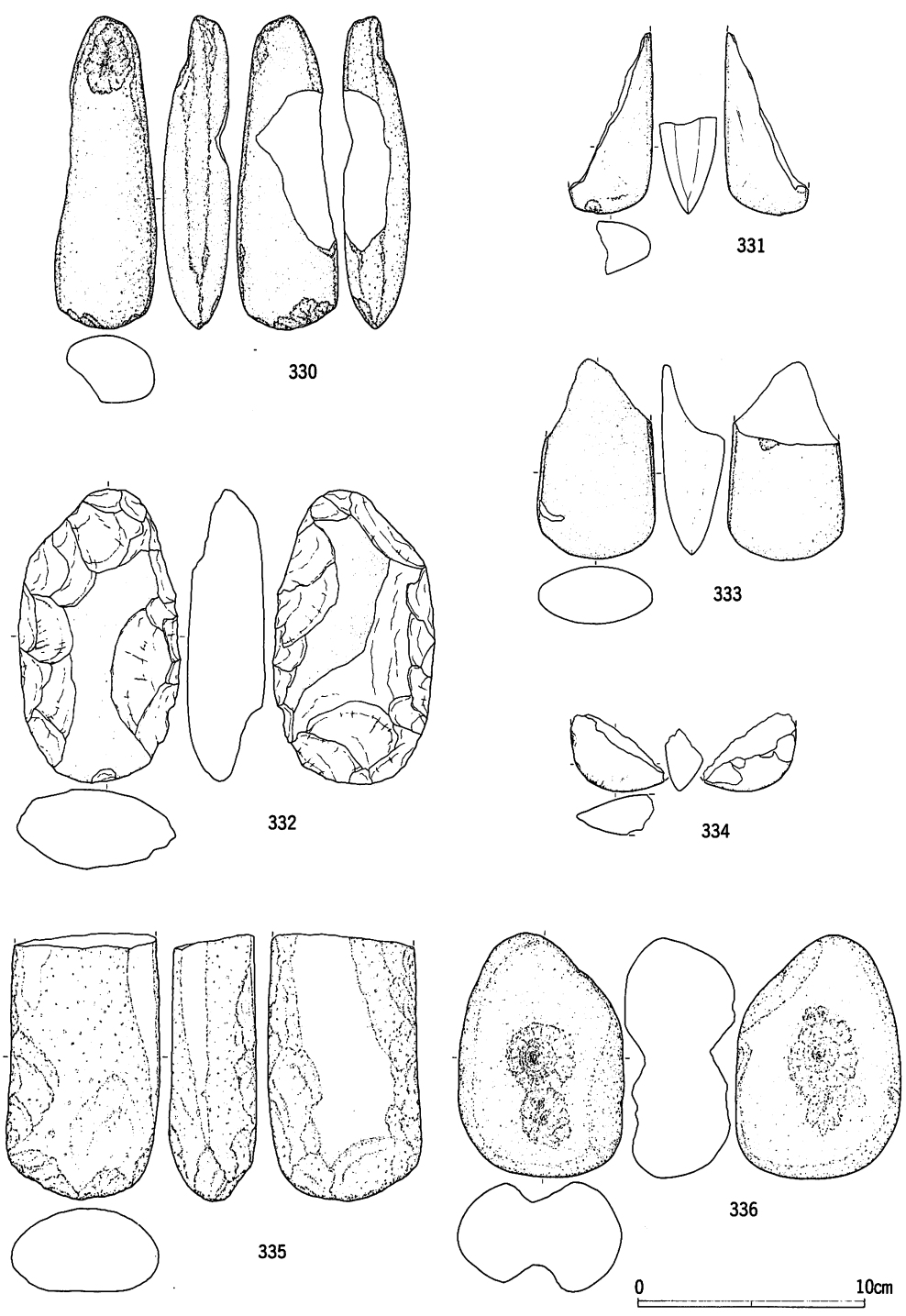
328



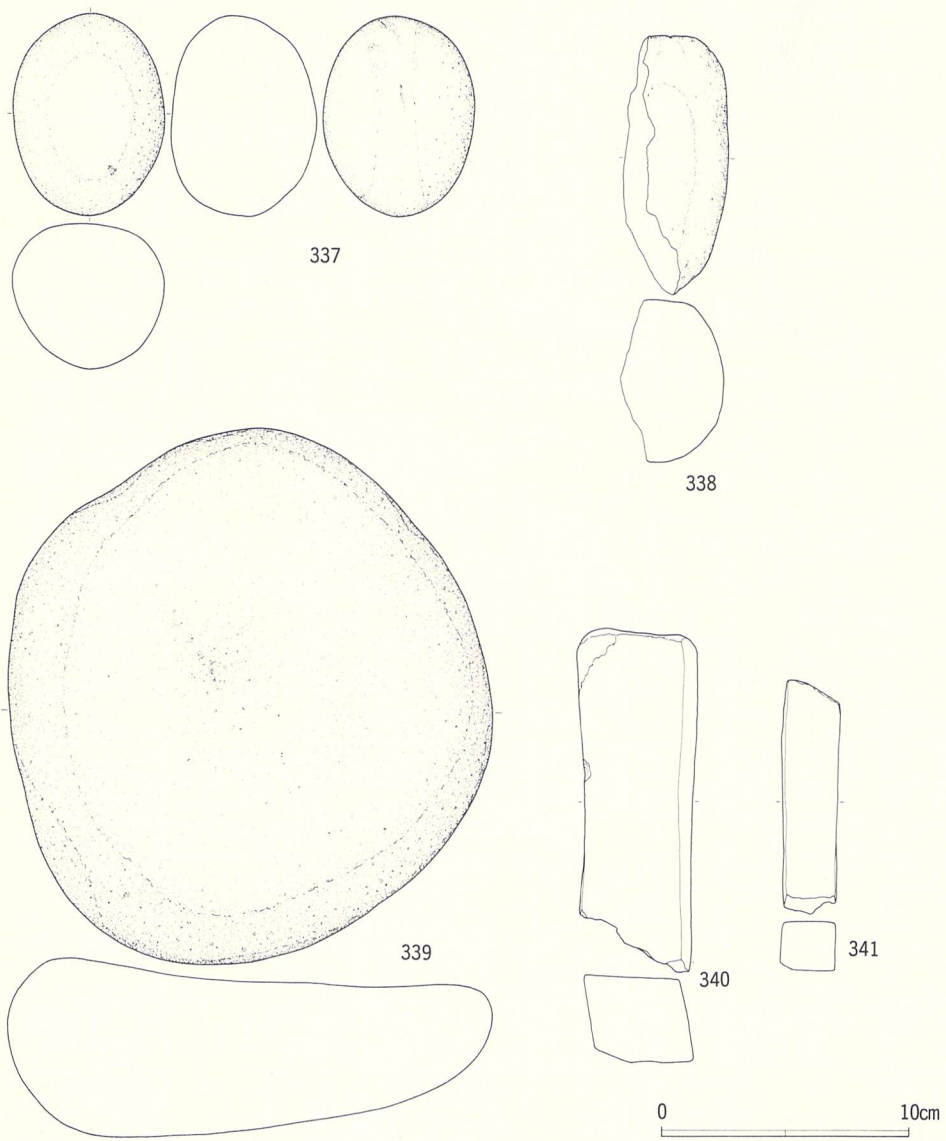
329

0 10cm

第36図 遺構外出土石器 4・石製品



第37图 遺構外出土石器 5



第38図 遺構外出土石器 6

第3表 兵庫館跡石器一覧表(1)

掲載番号	器種	グリット	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	産地
8	石斧状	1号土器		4.7	3.3	3.0	61.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
17	剝片	5号土器		3.5	4.5	0.6	8.85	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
18	剝片	5号土器		4.0	3.3	0.8	6.2	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
20	石核	V N9A(配石)	II	12.5	10.2	5.3	625.0	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
21	敲石	V N9A(配石)	II	10.2	10.0	7.1	895.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
22	石核	V N9B	II	14.0	11.3	5.1	640.0	砂質粘板岩	北上山地 古生界
23	剝片	2号土器共伴	II	6.2	4.2	0.9	22.1	砂質粘板岩	北上山地 古生界
24	剝片	V N9B	II	4.9	3.1	0.8	9.7	砂質粘板岩	北上山地 古生界
25	不定形	V N9A	II	9.5	9.9	4.1	460.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
26	剝片	2号土器共伴	II	7.1	4.5	0.7	18	砂質粘板岩	北上山地 古生界
27	不定形	V N9B	II	14.7	5.4	3.1	222.0	砂質粘板岩	北上山地 古生界
33	不定形	住居埋土	II	7.5	6.7	1.4	45.7	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
34	不定形	住居埋土	II	5.5	3.8	1.3	22.1	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
264	石鏃	V N 5 H	II	2.9	1.2	0.4	0.95	玻璃質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
265	石鏃	IV N10I	II	2.7	1.0	0.3	0.6	玻璃質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
266	石鏃	V N 4 G	II	(2.6)	1.2	0.6	0.95	玻璃質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
267	石鏃	V N5J	II	2.7	1.1	0.6	1.15	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
268	石鏃	V N5G	II	2.8	1.0	0.3	0.65	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
269	石鏃	V N5F	II	2.5	1.3	0.7	1.35	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
270	石鏃	V N4F	III	(1.6)	1.1	0.3	0.4	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
271	石鏃	V N4E	II	2.4	1.3	0.5	0.6	玻璃質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
272	石鏃	V N6H	土壘中	(2.2)	1.4	0.3	0.65	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
273	石鏃	V N5G	III	(2.3)	0.7	0.3	0.4	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
274	石鏃	V N 5 G	II	4.2	1.2	0.8	3.4	玻璃質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
275	石鏃	V N6G	土壘中	3.7	1.7	0.7	4.1	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
276	石鏃	V N6G	III	(2.1)	1.5	0.7	2.4	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
277	不定形(削器)	V N9F	II	7.4	5.0	2.0	64.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
278	不定形(削器)	V N9A	II	6.0	3.8	1.2	17.1	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
279	不定形(削器)	V N6F	I	9.5	5.3	2.7	117	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
280	不定形(削器)	V N5I	II	5.3	3.3	1.2	12.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
281	不定形(削器)	V N7I	II	5.2	4.8	0.8	13.9	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
282	不定形(削器)	V N9B	II	4.3	6.4	1.4	32	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
283	不定形(削器)	V N5G	II	8.2	6.8	2.0	98.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
284	不定形(削器)	V N6F	攪乱	7.3	8.6	2.2	136	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
285	不定形(石鏃状)	V N5G	II	8.1	6.0	1.5	64	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
286	不定形(抉入)	V N6H	土壘下	5.8	4.9	1.3	26.8	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
287	不定形(抉入)	V N5F	II	5.1	2.9	1.1	12	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
288	不定形(抉入)	V N5G	II	4.2	3.2	1.2	16.2	玉ずい	不詳
289	不定形(抉入)	V N4E	II上	2.7	3.5	0.8	5.35	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
290	不定形(抉入)	V N7H	II	5.7	8.2	1.7	56.2	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
291	不定形(抉入)	V N6J	II	6.6	6.0	0.9	42.8	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
292	不定形	V N5I	II	6.0	5.8	1.9	54.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
293	不定形	V N5D	II	5.6	5.1	1.5	39.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
294	不定形	堀埋土		4.6	3.4	0.7	12.5	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統

第4表 兵庫館跡石器一覧表(2)

掲載 番号	器 種	グリット	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石 質	産 地
295	不定形	V N9H	堀法面	4.9	4.3	1.1	26.5	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
296	不定形	堀埋土		4.8	5.0	1.9	54.7	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
297	不定形	V N5G	II	5.6	3.0	1.1	16.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
299	不定形	V N6I	II	8.6	5.4	2.2	82.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
300	不定形	V N6H	土塁下	6.6	3.5	1.7	40.4	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
301	不定形	堀埋土	II	5.8	3.7	1.2	24.5	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
302	不定形	IV S区	表探	5.8	4.3	1.3	22.4	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
303	不定形	V N9C	II	5.1	2.3	1.3	15.3	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
304	不定形	I N10I	II	4.8	4.2	1.3	22.3	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
305	不定形	V N4D	II	5.3	2.1	0.8	6.25	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
306	不定形	V N6H	III	8.0	3.6	0.9	21.7	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
307	不定形	V N4J	II上	6.0	3.3	1.1	14.4	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
308	不定形	V N5F	II	6.7	4.2	1.2	28.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
309	不定形	V N8C	II	8.9	4.3	1.4	41.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
310	不定形	V S1A	II	5.3	7.2	2.0	57.3	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
311	不定形	V N5F	II	2.5	4.1	1.3	9.3	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界
312	不定形	V N6G	土塁中	6.7	8.5	2.2	98.0	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
313	不定形	II N10J	II	8.8	6.7	3.2	145	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
314	不定形	V N5H	II	7.1	7.2	1.8	64.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
315	不定形	V N7H	II	9.0	5.4	2.3	76.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
316	不定形	V N5D	土塁中	10.3	7.2	2.1	144	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
317	剥片	V N5F	II	10.1	4.9	3.9	84.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
318	剥片	V N7H	II	6.1	3.2	1.2	22.5	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
319	剥片	V N5H	II	8.4	4.3	1.4	44.1	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
320	剥片	V N9E	II	5.2	2.7	0.8	11.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
321	剥片	V N9E	II	4.2	4.8	0.8	8.0	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
322	剥片	V N7H	II	5.2	3.4	1.4	21.4	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
323	剥片	V N9H	II	5.9	2.9	0.9	12.7	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
324	剥片	V N9E	II	3.7	3.1	0.7	7.2	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
325	剥片	V N10I	II	3.0	2.3	0.4	3.2	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
326	剥片	V N4D	II	6.9	5.7	1.0	29.4	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
327	石鏃	III SF3	II	6.0	5.3	4.7	121.0	珩質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
328	石棒	V N5F	II	(5.9)	2.9	1.6	41.1	ホルンフェルス	夏油川上流一仙人 古生界
329	石棒	V N6H	II	(6.2)	2.4	1.6	45.9	ホルンフェルス	夏油川上流一仙人 古生界
330	磨製石斧	V N7F	II	13.7	4.5	3.0	238	ホルンフェルス	夏油川上流一仙人 古生界
331	磨製石斧	V N5E	II	(8.0)	3.7	2.5	52.3	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
332	石斧	V N6H	II	12.9	7.1	3.5	388	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
333	磨製石斧	V N4D	III	(8.7)	5.2	2.8	132	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
334	磨製石斧	II S1H	II	(3.4)	(4.1)	1.8	18.1	ホルンフェルス	仙人一夏油川上流
335	敲石	V N6H	II	(11.7)	6.8	3.9	484	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
336	凹石(両面)	V N6H	II	10.7	7.3	4.9	520.0	デイサイト質凝灰岩	本畑一山口 新第三系中新統
337	敲石	III N10E	II	8.1	6.1	5.9	400.0	両輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
338	磨石	III N10F	II	(10.5)	(4.2)	6.5	380	両輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
339	石皿	III N10E	II	21.6	19.6	7.1	4200	変質輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
340	砥石	V S1A	II上	(9.4)	2.3	2.0	74	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
341	砥石	V N9B	II	(13.8)	4.9	3.6	384.0	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統

4 まとめ

〔1〕 館跡について

検出された遺構は堀跡1条、柵列2条、柱穴列2条、門跡2基、掘立柱建物跡1棟、土橋1箇所、溝状遺構1条である。各遺構については遺構編で記述したとおりである。要約しまとめとする。

遺構にみられる時期差

遺構配置（第4図遺構配置図）、断面観察（第8図）により、土塁3B、柱穴列2、柵列1、2に新旧関係が認められることから、次の4時期が考えられる。

第1期：門跡単独。やや平行四辺形ぎみになるが薬医門（建て替え）の存在期。

第2期：柱穴列1・2の構築期。柱穴列1と2が同時期に構築され、2列平行して存在していた形態か、あるいは1本柱穴列として構築し、老朽化したため造り替えを行ったものかは、遺構の切り合いもなく不明である。いずれにしろ土塁3Bより下部で検出されていることから、土塁3B構築期より古い時期の遺構といえる。この場合、P12、P15とP11、P42が門として機能していたものと考えられる。

第3期：柵列1の構築期。P3から西へ走行するものと、P1から東へ走行するものが構築される。この柵列の底部痕跡は杭を打ちこんだというより、厚い板状の資材を埋めたようにみられる。この際幾分土盛りをしている。

第4期：柵列2の構築。第3期と同様にP4から西に走行するものとP2から東に走行する溝がセットとなり構築される。この場合も柵列を補強するために土盛りが行こなわれている。結果的に土塁状を呈する形になったと推定される。

堀跡と橋施設

堀を造成した時期は不明である。しかし、P44、P43は木橋を支える橋脚のような遺構とみることができる。このP44、P43は堀を埋めていた上部の土砂を取り除いた時点で検出されている。よって堀造成後、架け橋を渡した時期があったと考えられ、これらの柱穴は門跡に並ぶことから、門跡の存続期にかかわる古い時期に造られてたものと考えられる。その後の橋施設は単に堀を埋め、土橋としたものと考えられる。

土塁について

土塁1、2、4は郭の外側に構築されているのが特徴的である。規模はそれほど大きくはないが、背後(台地南側)から郭内部が直視できず、目隠しの機能をもつものと考えられる。土塁1を造る際に掘られた溝は、掘り込み面に段差があり、少なくとも2時期にわたり掘られていることや断面から、数時期の造成が推定される。

以上のように、遺構を検討した結果、堀跡、土塁、柵列、柱穴列等は防御施設であり、館と

して機能していたことは確実である。しかし、構築年代は陶器等の遺物が出土していないことから不明である。『奥羽永慶軍記』、『奥南盛風記』等の文献にみられる兵庫館は岩崎一揆の際、岩崎城を攻撃する南部軍の陣場としている。遺構が少なくとも4時期あることから、陣場として一時的に構築されただけでなく、岩崎一揆以前から館として存在していたと推察される。館の存続期や館主などは不明と言わざるおえない。兵庫館跡を含め和賀川右岸に立地する多くの館跡の性格を知るには岩崎城、観音館（下煤孫館）、林崎館（上煤孫館）といった複郭型の大型城館との関わりが重要である。さらに、中世の政治動向や、農耕地、集落等の広がり等、歴史地理的観点を含めて多角的な視点から考察する必要がある。

〔2〕 弥生時代の遺構と遺物

埋設土器が3基、墓壇1基、配石1基が検出されている。墓壇、埋設土器等について若干の考察をする。

①埋設土器・墓壇

下の表のように、遺構にかかわって9個の土器がみつまっている。さらに遺構としては捉られなかったが7号土器も元来埋設土器と推定される。7号土器も含め、合計10個の土器がほぼ完形で出土している。いずれも弥生時代の土器である。墓壇には4個体の土器（3号、4号、5号、9号土器）がそれぞれ接近して埋設されている。これらの土器と一緒に埋められたものか、個別に埋めたものかは、精査や断面観察からは判断はできなかった。

遺構名	土器	器種	埋納遺物等	備考
V N10B埋設土器	1号土器	甕	8号土器・石斧(破片)1点	
V N 9 B埋設土器	2号土器	壺	なし	自然礫、石核配置
V N 5 F埋設土器	6号土器	壺	鉢形土器が蓋	
墓壇	3号土器 4号土器 5号土器	鉢形土器 壺 壺	なし なし 9号土器が蓋、剥片2点	底部穿孔 底部穿孔遠賀川系土器

墓壇・埋設土器の時期について

墓壇

4号土器は遠賀川系土器であることから弥生時代前半と考えられる。しかし、3号土器や5号土器の類例は本県のみならず東北各県でもなかなかみだせなく、検討する必要がある。

V N 10 B埋設土器

埋納されている8号土器の器形、文様から中期とみられる。体部上半の平行沈線や山形沈線

施文は秋田県宇津ノ台遺跡の甕に類似する。

V N 9 B 埋設土器

2号土器は無紋で全体に丁寧なミガキが施される。体部上半に最大径をもつ。器形は湯舟沢JK-1 竪穴住居出土の壺に類似する。ただし、口縁部に突起がつく例はみあたらない。弥生前半期と推定される。

V N 5 F 埋設土器

6号土器は頸部に平行沈線がみられるほかは文様はみられない。ミガキが施される。体部中程に最大径をもつ。県内での類例がみあたらない。したがって今後の類例の増加をまちたい。

7号土器：連弧文や《〇》の文様は谷起島遺跡、宮城県では柘形冢式期の遺跡にみられる。いわゆる錨文の延長線上にくるものと思われる。よって、器形、文様から中期に属するものとみられる。

②遠賀川系土器について

4号土器は大型の壺で遠賀川系土器と呼ばれるものであり、北上川流域において初めて確認されたものである。この遠賀川系土器は東日本各地で類例が報告されている。従来、岩手県内では北部の馬淵川水系と新井田川流域ではやくから確認されている。近年、過去に行われた発掘調査遺跡で出土した遺物の見直しが行われ、遠賀川系土器として認定されるものも出てきている。現在、岩手県内で確認されている遠賀川系の壺が出土している遺跡は、次の通りである。

①金田一川遺跡・合口壺棺（二戸市）、②君成田IV遺跡・J 5 8 埋設土器（軽米町）③君成田下野場遺跡・包含層破片（軽米町）、④大日向II遺跡・弥生遺物集中区（軽米町）⑤駒板遺跡・IV 2 4 J 焼土遺構（軽米町）、⑥中屋敷遺跡・包含層破片（北上市和賀町）⑦上反町遺跡・包含層破片（北上市和賀町）本遺跡を含めて8遺跡にのぼる。なお、甕関連でみると多少増えると思われる。このように県内北部だけでなく、最近の秋田横断自動車道建設に伴う発掘調査において、北上川支流の和賀川流域で確認されている。

大きさは実測図でみるかぎり金田一川遺跡のものが最大であり、次に4号土器である。県外の一例をみると、秋田県地蔵田B遺跡出土の遠賀川系土器は一般に規模が大きい。例えば10号土器棺の場合、口径25.5cm、器高48.6cm、胴部最大径48.3cmを測る。また、製作技法では、遠賀川系土器の特徴と言える口縁部の強い外反、列点文施文、ハケメ状調整、沈線が観察される。それらと比較すると4号土器は沈線も細く、列点文もみられなく、ハケメ状調整もはっきりとしない。幾分貧弱という感は否めない。

なお、大日向II遺跡のそれは現在整理中のため実測図はでていない。しかし、実見したところ4号土器より大きく調整も丁寧で沈線も太くしっかりとしている。

③埋納遺物の土器について

埋納遺物を伴う土器についてみると1号土器と5号土器がある。1号土器は体部下半が欠失している。破片断面の観察や埋設の状況から、既に使用済みの甕を埋めたと見られる。中からは8号土器と石斧破片が出ている。8号土器は小形の壺で赤色顔料が塗布されている。また、5号土器からは剝片2点が出土している。これらのように埋納遺物を伴う類例(県内)は常盤広町遺跡(水沢市)・アメリカ式石鏃7点、金田一川遺跡(二戸市)・骨の集積、大淵遺跡(二戸市)・石片、蓋形土器、梅ノ木台地II遺跡(北上市)・礫がある。大淵、梅ノ木台地II遺跡のそれは埋納というより埋設土器の蓋あるいは重しというように把握できるものである。

④底部穿孔土器について

本遺跡の底部穿孔の土器は、3号土器、4号土器の2点である。いずれも焼成後の穿孔であり明らかに意図的とみられる。底部穿孔例そのものは珍しくなく、縄文中期あたりからみられ弥生以後にもみられる。秋田県地蔵田遺跡では多数の底部穿孔の土器が出土しているが、県内の弥生土器では例が少ない。本県の類例をあげてみる。常盤広町遺跡・壺第1号、甕第1号、大淵遺跡・D41埋設土器甕、谷起島遺跡(一関市)・甕、梅ノ木台地II・埋設土器甕、都合本遺跡も含めて5遺跡7個体の土器が数えられる。

〔3〕 遺構外の遺物

住居跡は検出されなかったがV N区を主として弥生土器が出土している。壺、甕、浅鉢、蓋がみられる。壺では平行沈線や弧状沈線施文で丁寧なミガキが施されているものが多い。浅鉢は変形工字文、平行沈線、弧状沈線施文がみられる。蓋は3点あり175は穿孔があり注目される。甕は口縁部が直立するものを主体としているが、いくぶん外反するものもみられ、斜行、横走縄文施文である。概して、前半、中期の時期の遺物が多く、226、227のような撚糸文施文の後期のものはわずかである。

また、石器類が67点、剝片多数が出土している。剝片石器でも石鏃や石匙等の定形的なものは少なく、剝片の一部に調整を施したものが多い。縄文土器も出土しているが、弥生土器と共存することから、おおかたは弥生時代のものと推定される。

〔4〕 平安時代の遺構

V N 5 Eグリットにおいて竪穴住居跡跡が検出されている。小型であるが掘り込みは深い。坏5点が出土。ロクロ使用4点、不使用1点である。このうち須恵器の坏2点に墨書がみられる。出土遺物の様相や床面を覆うように灰白色火山灰(十和田a降下火山灰?)がみられることから9世紀末から10世紀初頭の遺構とみられる。

〔5〕 本遺跡の性格

骨片等は確認されていないものの、類例から土器棺と推定される遺構が発見された弥生時代は、墓域として機能していた可能性が高い。居住域については、台地の縁辺に7棟の住居跡が見つかった本遺跡から東方約3.6kmに位置する上鬼柳I遺跡の例からすると、本遺跡の北側調査区外の台地突端に集落が予想される。さらに、平安時代には居住域、中世には館として機能しており、弥生時代から中世の長期間にわたり、人々が活用した場所ということが言える。

引用・参考文献（敬称略、順不同）

佐藤二郎（1982）：「和賀川流域の地形について」。『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XVII』，岩手県教育委員会。

本堂寿一他（1983）：『蛭川館一発掘調査報告書一』，岩手県和賀町教育委員会。

佐々木政蔵（1989）：『和賀町和賀川南地区古絵図帳和賀町文化財調査報告書2 2集』和賀町教育委員会。

鈴木貞行・中川重紀（1991）：『月館跡・八幡館跡発掘調査報告書』，岩手埋文センター第149集。

司東真雄（1977）：「和賀の名ごり」。『和賀町史』，和賀町。

司東真雄他（1976）：『北上市史第3巻近世(1)』，北上市史刊行会。

昆野靖他（1979）：「柳田館跡」。『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IV』，岩手県教育委員会。

昆野靖他（1981）：「大瀬川B、C遺跡」。『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VIII』，岩手県教育委員会。

吉田努他（1981）：「梅ノ木遺跡」。『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告IX』，岩手県教育委員会。

高橋与衛門（1988）：『笹間館跡発掘調査報告書』，岩手埋文センター第124集。

石井進・萩原三雄（1991）：『中世の城と考古学』，新人物往来社。

村越潔他（1991）：『砂沢遺跡発掘調査報告書一本文編』，弘前市教育委員会。

菅原俊行・安田忠一他（1986）『地藏田B遺跡』，秋田市教育委員会。

須藤隆（1990）：「東北地方における弥生文化」。『考古学古代史論放』，伊東信雄先生追悼論文集刊行会。

伊藤信雄（1973）：「水沢の弥生文化」。水沢市史1。

遠藤輝夫（1978）：「狐禅寺草ヶ沢遺跡」。『一関市史』。

佐藤嘉広（1989）：「東北地方北部における弥生文化受容期の様相一北上川流域の土器群の分析を中心に一」。『岩手県立博物館研究報告』，第7号。

佐藤嘉広 (1992) : 「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」, 『東北文化論のための先史学歴史学論集』, 加藤稔先生還暦記念会。

小田野哲憲他 (1982) : 『岩手の土器』, 岩手県立博物館。

小田野哲憲 (1987) : 「岩手県における弥生時代の墓制」, 『第9回三県シンポジウム東日本の弥生墓制—再葬墓と方形周溝墓』, 北武蔵古代研究会。

小田野哲憲他 (1985) : 「岩手県東山町熊穴洞穴遺跡発掘調査報告書」, 『岩手県立博物館調査研究報告書』, 第1冊, 岩手県立博物館。

小田野哲憲 (1987) : 「岩手の弥生式土器編年試論」, 『岩手県立博物館研究報告書』, 第5号, 岩手県立博物館。

小田野哲憲 (1991) : 『上村貝塚発掘調査報告書』, 岩手埋文センター第158集。

工藤武 (1982) : 『第4次谷起島遺跡発掘調査概報』, 一関市教育委員会。

亀沢磐 (1954) : 「福岡町の金田一川遺跡」, 『岩手史学研究』, 29号。

伊藤陽夫 (1965) : 「長坂下遺跡出土の合口土器について」, 『岩手史学研究』, 47号。

遠藤勝博他 (1983) : 『君成田IV遺跡発掘調査報告書』, 岩手埋文センター第62集。

遠藤勝博・高橋義助 (1981) : 『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』, 岩手埋文センター第23集。

工藤利幸他 (1986) : 『馬場野II遺跡発掘調査報告書』, 岩手埋文センター第99集。

桐生正一他 (1986) : 『湯舟沢遺跡』, 岩手県滝沢村教育委員会・岩手埋文センター。

岩手埋文センター (1991) : 『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』, 岩手埋文センター第178集。

相原康二 (1979) : 「大渡野遺跡」, 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II』, 岩手県教育委員会。

近藤宗光他 (1986) : 『駒板遺跡発掘調査報告書』, 岩手埋文センター第98集。

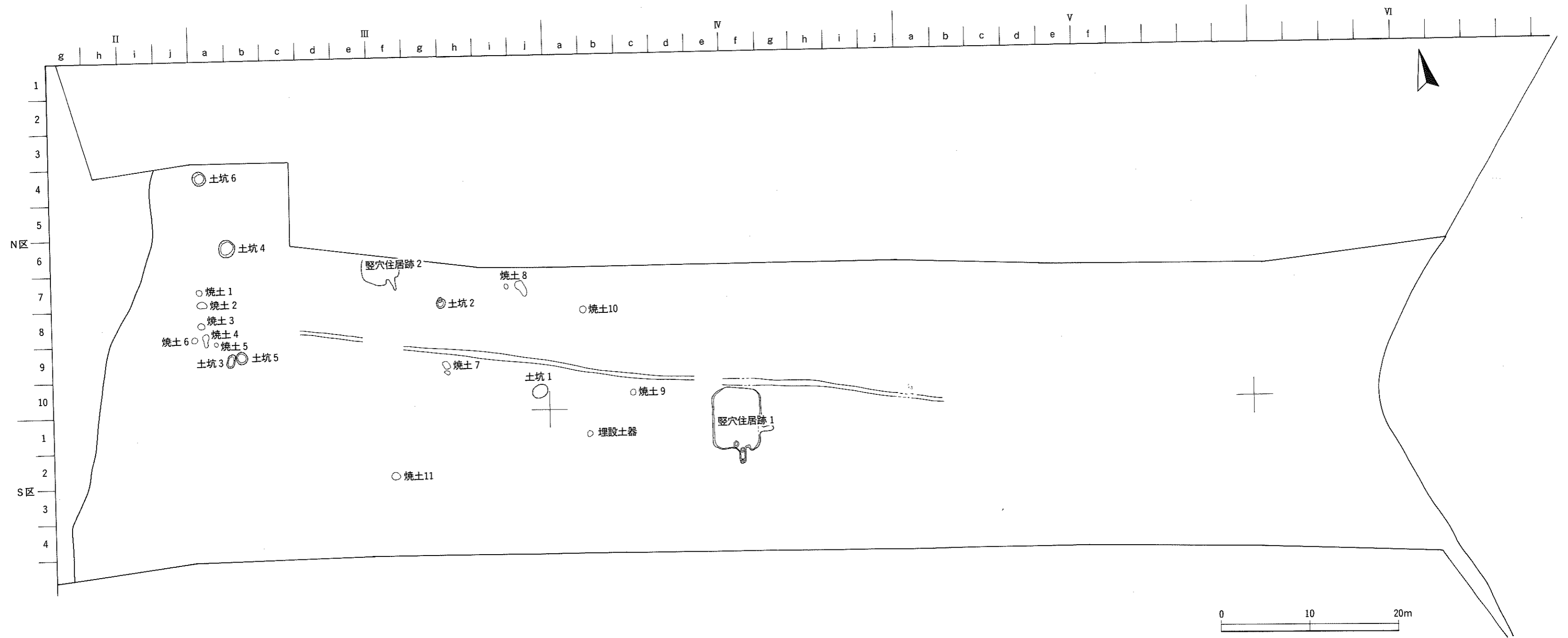
杉山洋 (1991) : 「今様の鏡」と「古鉢の鏡」, MUSEUM, No.481, 東京国立博物館美術誌, 4月号。

※(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは岩手埋文センターと略記した。

※胎土分析に関わり共同提出した中屋敷遺跡の土器は『法量野・中屋敷遺跡』(1993) 岩手埋文センター第182集に収録されている。

V ^{うめのきだいち}梅ノ木台地II遺跡

所在地 北上市和賀町岩崎 20 地割 24-1 ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成3年7月15日～11月8日
調査対象面積 3,890 m²
発掘調査面積 3,890 m²
遺跡番号・略号 ME 64-2112・UM II-91
調査担当者 川村 均・藤村 隆
協力機関 北上市教育委員会



第1图 梅ノ木台地II遺跡遺構配置图

1 検出された遺構と遺物

調査の概要

検出された遺構は、埋設土器 1 基、竪穴住居跡 2 棟、焼土遺構 11 基、土坑 6 基、溝跡 1 条である。遺構外も含め出土した土器類の総量は遺物収納大コンテナで 3 箱である。内訳は縄文土器若干、弥生前期、中期、後期の土器、土師器、須恵器などである。とくに、弥生土器は天王山式に併行する土器片が広範囲にわたりみられた。土師器、須恵器は住居跡を中心にその周囲から少量、また、遺構外ではあるが、7 世紀代と思われる段のある坏破片、頸部に段のある甕破片が数点出土している。土製の紡錘車（撚糸文施文）が 1 点出土している。石器、剥片類はコンテナ 1 箱出土し、内訳は石鏃、石斧、石棒、敲石、不定形石器、凹石、砥石など 72 点、また、黒曜石のラウンドスクレーパー 3 点、黒曜石剥片（チップも含み）が 177 点である。

〔1〕 竪穴住居跡 1（第 2 図、写真図版 33～34）

検出地点は本遺跡ほぼ中央部の南側、IV N 10 E～IV S 2 F 付近である。調査開始時点で周辺の地形より窪んでおり、焼けた礫が付近一帯に散在していることから、住居跡を想定し、掘り下げた。その結果、方形状に黒色土が広がり、土師器片が出土したことから遺構と確認した。

なお、精査の結果、床面にわずかながら段差が認められ拡張住居跡と判断した。

〈形状、規模〉 隅丸方形をなし、南北 7.0 m、東西 5.35 m の規模を有する。拡張以前の規模は南北 5.50 m、東西 4.10 m である。

〈埋土〉 4 層に大別される。1 層は表土、2 層は水分を多く含む黒色土、3 層は黒褐色土で炭化物や灰白色火山灰が混入し、土師器等の遺物がみられる。4 層は地山黄褐色土のブロックである。

〈壁、床〉 壁高 20～30 cm で外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦で、部分的に薄い焼土がみられる。南壁側は柔らかくうすい貼床を施したと思われる。拡張以前の壁のラインは、若干の掘り込みがあり、一周り小規模である。東壁北側には長さ 30 cm、幅 5 cm の炭化材が検出されている。樹種鑑定の結果は赤松となっている。

〈柱穴〉 全部で 8 個検出されている。支柱穴は pp 1～pp 4 であり、配置は四角形を呈する。これらの柱穴間の長さは pp 1－pp 2 が 2.00 m、pp 2－pp 4 が 3.60 m、pp 4－pp 3 は 1.90 m、pp 3－pp 1 が 3.20 m である。他は深さも一様でなく、規則性がみられない。

〈土坑〉 3 基検出されている。P 1 は南カマドの西袖部脇にあり、長軸 75 cm、短軸 55 cm の楕円形状をなし、深さ 35 cm である。埋土には炭化物、焼土粒、土師器破片が混在している。P 2 と P 3 は東壁側にあり、ともに不整な楕円形状を呈している。P 2 は長軸 85 cm、短軸 55 cm、75 cm、深さ 18 cm、P 3 は長軸 135 cm、短軸 115 cm、深さ 40 cm を測る。P 3 の上部や埋土には、焼土が堆積しており、かたくしまる。拡張以前に利用されたものと思われる。

〈カマド〉東壁側と南壁側の2カ所で検出される。東カマドは煙りだし部だけが遺存しており、本体部はない。南カマドは南壁のやや東よりに構築されている。残存状況はよくない。袖部にわずかに偏平な礫が残る程度である。煙道部は掘り込み式であり、長軸方向はS-5°-Eを示す。焚き口部から煙りだし部までの総長は2.60 m、袖部の幅は60 cm、燃焼部は径50 cm前後と推定される。

遺物（第3図～6図、写真図版40～41）

出土状況

遺物量は少ないが床面やカマド周辺、カマドの埋土、住居内の土坑から出土している。土坑P3からは土師器の破片が多く出土している。東カマドの遺物は煙出し部からがほとんどである。

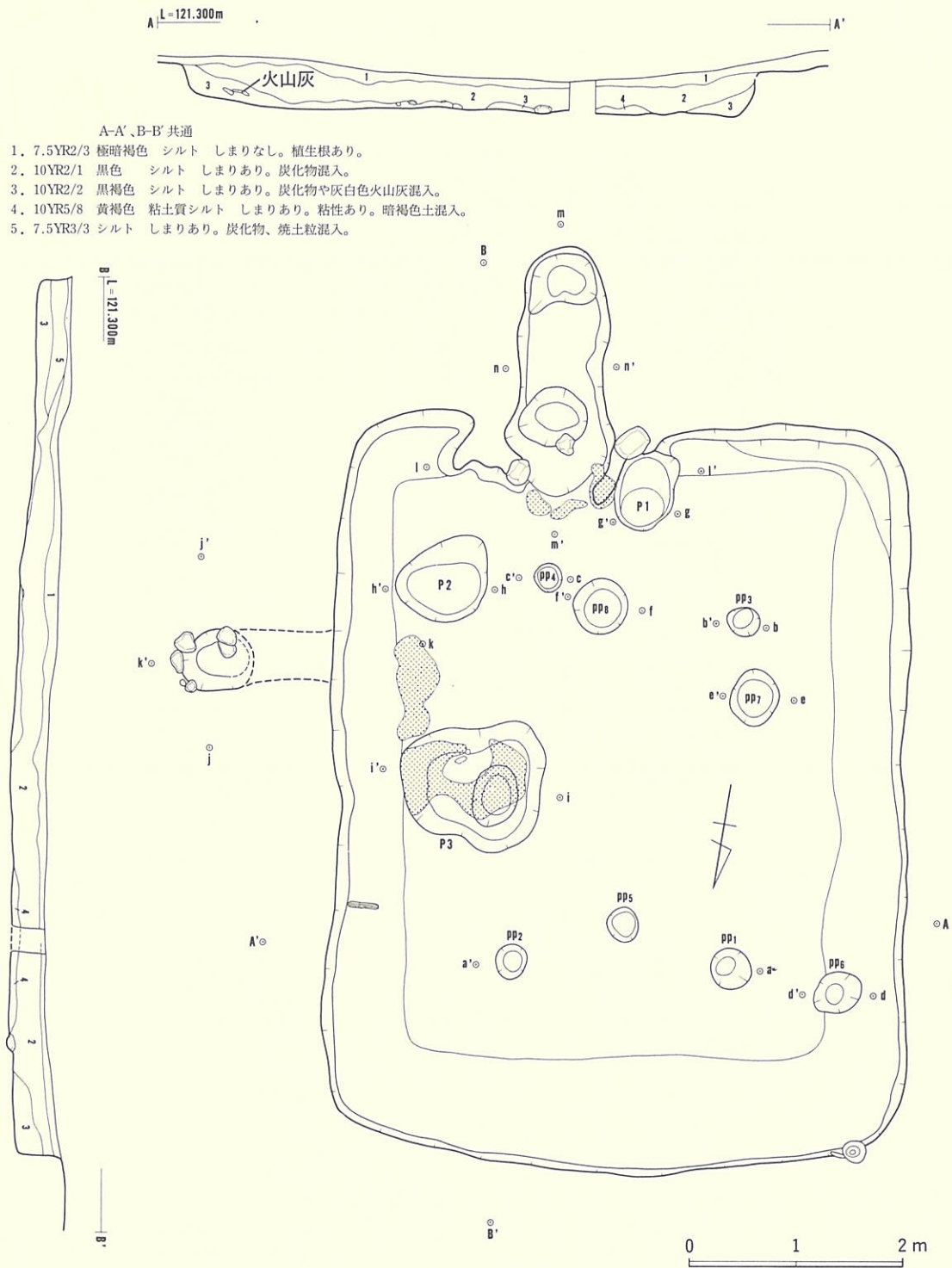
坏18点、甕7点の出土である。

坏はほとんどがロクロ使用成形で、底部切り離し技法は5、14、18は底部が見当たらずにわからないが、他は回転糸きり無調整である。2は底径が6.2 cm、口径15 cm、器高5.5 cmを測り、底部が小さいわりに口径が開く器形を呈する。13、14、15は内面黒色処理が施されている。13は内面黒色処理された高台付き坏で、内面にミガキがみられる。15も内面にミガキがみられ、底部は手持ちヘラケズリの再調整が施される。

19～22は口径20 cm以上の大型の甕であり、24は中型、21は小型である。19は体部外面上部に、また、20は体部外面下部にヘラケズリ調整される。20、22の器形は長胴形であり口縁は強く外反し受け口となる。21は土坑P2の埋土より出土したものである。2次火力をうけておりカマドの支脚に使用されたものと思われる。25は厚手づくりの甕で、2次火力をうけ器面の剝落が著しい。須恵器の甕類の出土は2個体のみである。26、27両方とも壺のような器形にもみえるが甕としておく。どちらもロクロ成形である。26は体部最大径推定25.3 cmである。27は体部破片である。外面に自然釉がみられる。

遺構の時期

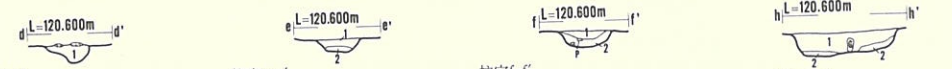
埋土に灰白色火山灰が検出されていることや出土遺物から平安時代とみられる。



- A-A', B-B' 共通
- 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト しまりなし。植生根あり。
 - 10YR2/1 黒色 シルト しまりあり。炭化物混入。
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり。炭化物や灰白色火山灰混入。
 - 10YR5/8 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。粘性あり。暗褐色土混入。
 - 7.5YR3/3 シルト しまりあり。炭化物、焼土粒混入。



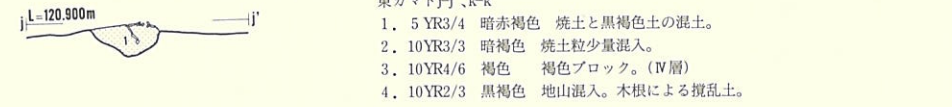
- 柱穴a-a', b-b', c-c' 共通
- 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりある。
 - 10YR3/3 暗褐色 シルト 堅くしまる。黄褐色土粒(地山)を含む。



- 柱穴d-d'
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物粒、焼土粒少量混入。
- 柱穴e-e'
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 焼土粒微量混入。
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山・ブロック含む。焼土粒少量混入。
- 柱穴f-f'
- 10YR2/1 黒褐色 シルト 焼土粒少量含む。
 - 10YR3/2 黒褐色 シルト 焼土粒少量混入。地山ブロック含む。



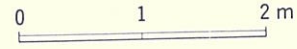
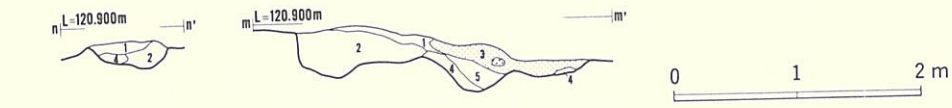
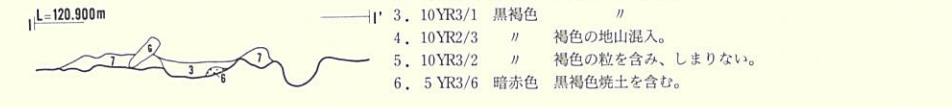
- 土坑2h-h'
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物若干混入。
 - 10YR4/4 褐色 シルト 焼土塊混入。
- 土坑3i-i'
- 10YR2/1 黒色 シルト 炭化物多く含む。
 - 10YR3/3 黒褐色 シルト 堅くしまる。褐色のブロック少量混入。
 - 5YR4/4 にぶい赤褐色 シルト 褐色土混入。炭化物、明赤色の焼土粒を少量含む。
 - 10YR2/3 黒褐色 シルト 地山。堅くしまる。ブロック少量混入。
 - 10YR5/6 黄褐色 粘土質 堅くしまる。4層と類似。
- 土坑1g-g'
- 10YR3/1 黒褐色 シルト しまりある。
 - 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりある。炭化物を含む。
 - 5YR4/6 赤褐色 焼土 炭化物若干混入。
 - 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりない。
 - 10YR3/4 暗褐色 シルト
 - 10YR4/6 褐色 粘土質シルト。



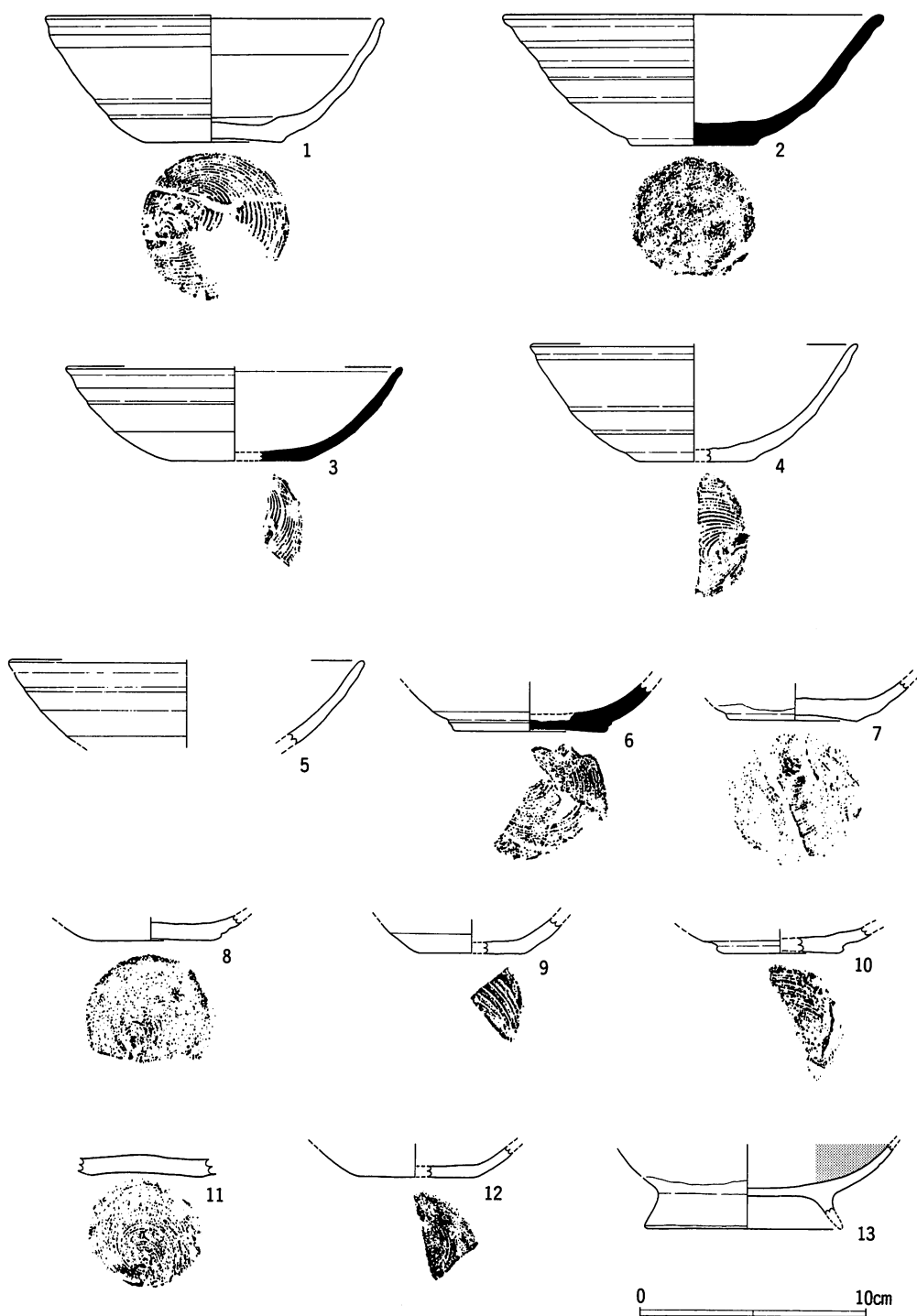
- 東カマドj-j', k-k'
- 5YR3/4 暗赤褐色 焼土と黒褐色土の混土。
 - 10YR3/3 暗褐色 焼土粒少量混入。
 - 10YR4/6 褐色 褐色ブロック。(IV層)
 - 10YR2/3 黒褐色 地山混入。木根による攪乱土。



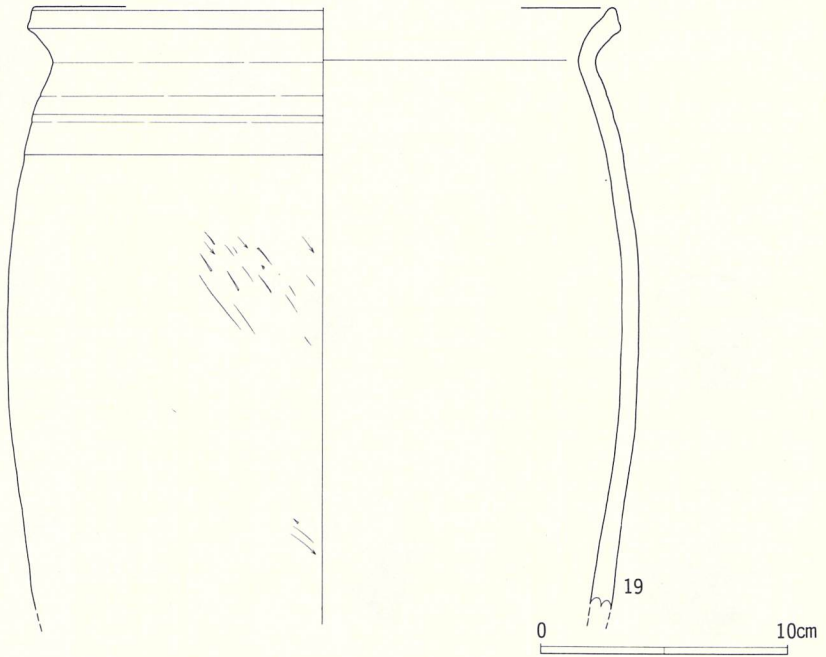
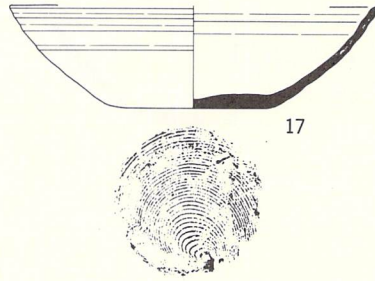
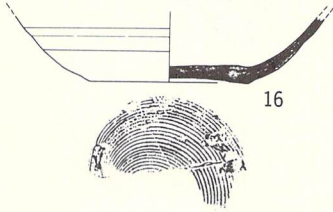
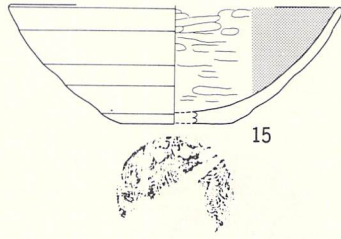
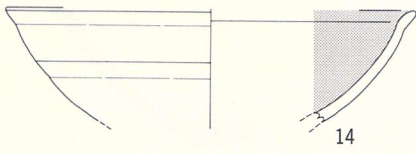
- 1-1', m-m', n-n' 共通
- 10YR3/3 暗褐色 褐色の粘土をブロック状に含む。炭化物・焼土少量含む。
 - 10YR2/2 黒褐色 炭化物・焼土を含む。
 - 10YR3/1 黒褐色 //
 - 10YR2/3 // 褐色の地山混入。
 - 10YR3/2 // 褐色の粒を含み、しまりない。
 - 5YR3/6 暗赤色 黒褐色焼土を含む。



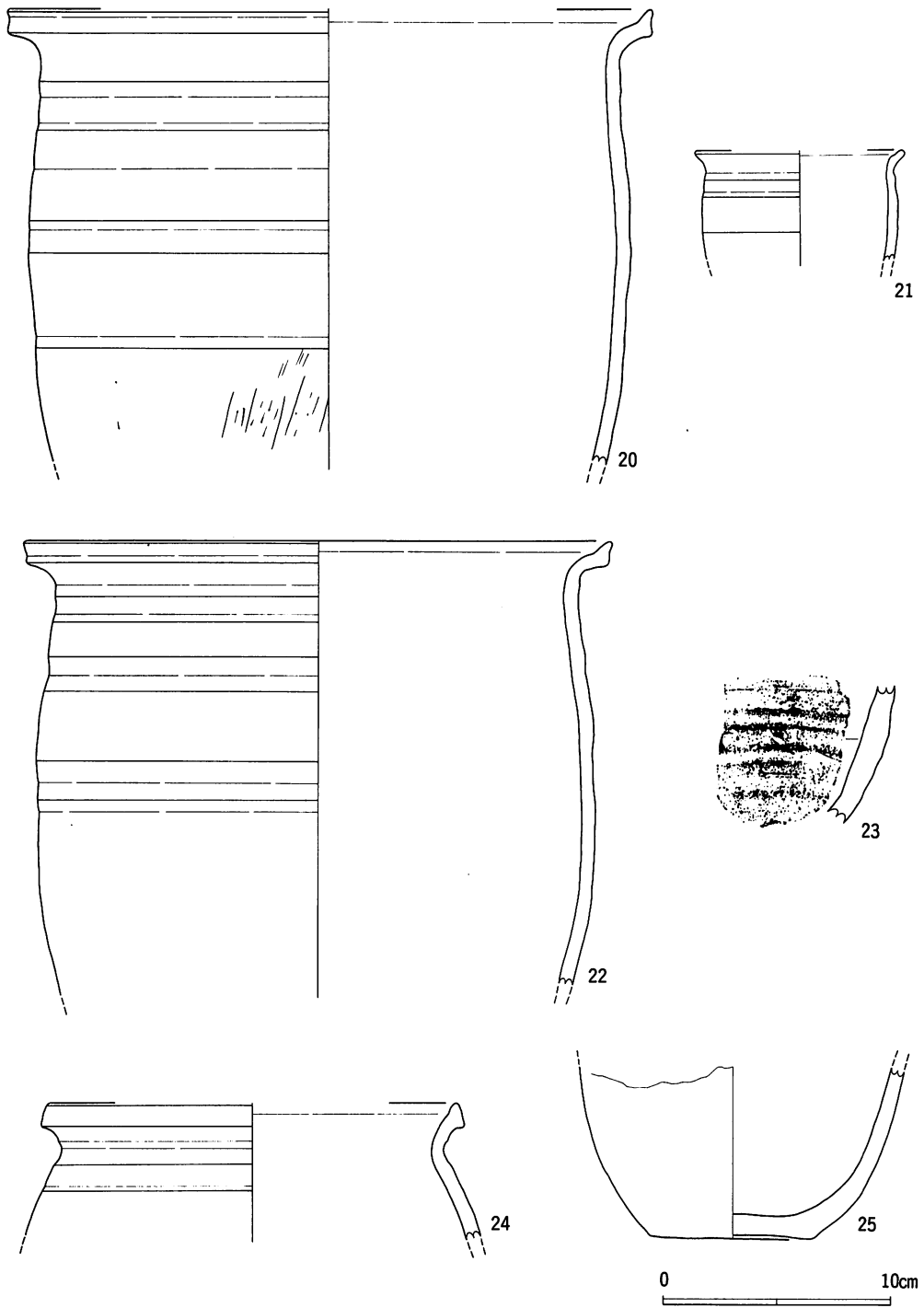
第2図 竪穴住居跡1



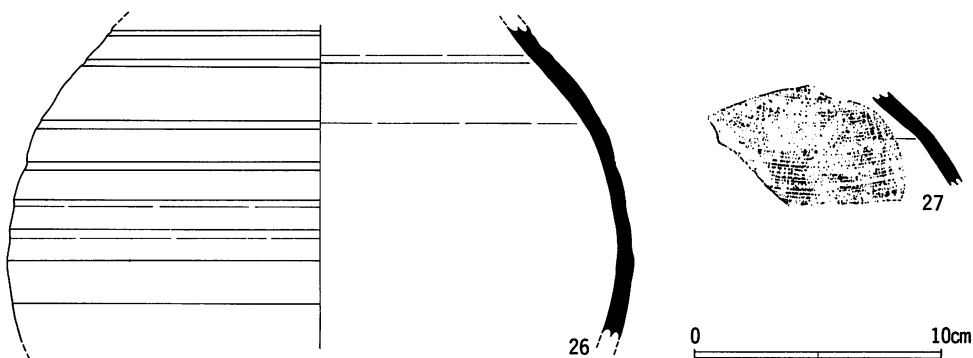
第3図 竪穴住居跡1 出土遺物1



第4図 豎穴住居跡1 出土遺物2



第5図 豎穴住居跡1 出土遺物3



第6図 竪穴住居跡1 出土遺物4

土器観察表

番号	種類	器種	法量(推定値)			外面調整			内面調整			成形	切り離し	その他
			口径cm	底径cm	器高cm	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部			
1	土師器	坏	15	6.2	5.5	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
2	須恵器	坏	17	5.8	5.7	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
3	須恵器	坏	(14.8)	(5.8)	4.2	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
4	土師器	坏	(14.4)	(5.4)	5.2	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
5	土師器	坏	(15.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
6	須恵器	坏	—	(6.8)	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
7	土師器	坏	—	5.8	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
8	土師器	坏	—	5.8	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
9	土師器	坏	—	(5.0)	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
10	土師器	坏	—	(5.6)	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
11	土師器	坏	—	5	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
12	土師器	坏	—	(5.2)	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
13	土師器	台付坏	—	(8.7)	—	—	—	—	—	—	ミガキ	非ロクロ	—	内黒
14	土師器	坏	(16.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内黒
15	土師器	坏	(13.5)	(4.6)	4.8	—	—	再調整	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	糸きり	内黒
16	須恵器	坏	—	(6.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
17	須恵器	坏	(14.8)	6	4.2	—	—	—	—	—	—	—	—	
18	須恵器	坏	(12.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
19	土師器	甗	(23.6)	—	—	—	ケズリ	—	—	—	—	ロクロ	—	
20	土師器	甗	(28.4)	—	—	—	ケズリ	—	—	—	—	ロクロ	—	
21	土師器	甗	(9.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	カマド支脚
22	土師器	甗	25.8	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	
23	土師器	甗	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	
24	土師器	甗	(18.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	
25	土師器	甗	—	7.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2次火力
26	須恵器	甗	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	
27	須恵器	甗	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	自然釉

竪穴住居跡 2 (第 7 図、写真図版 35)

検出地点は調査区西側の北部 III N 7 f グリット付近である。II 層上部で焼土と焼けた礫がみられたこと、柔らかい黒色土が近くに広がっていたことから検出した。

〈形状、規模〉北側半分は調査区外のため全体はわからない。検出された規模は南壁 4.0 m、東壁 0.8 m、西壁 2.0 m、壁高 0.40 m を測り、形状は隅丸形状と推定される。

〈埋土〉 3 層に大別される。2 の黒褐色土中に灰白色の火山灰がブロック状に混入する。土師器の破片が少量この層に含まれる。

〈壁床〉壁高は西壁で 30 cm を測り、緩やかに立ち上がる。床面は凹凸があり平坦ではない。木根攪乱が激しい。南壁側には周溝状の溝がみられるが、木根痕の可能性もある。

〈柱穴土坑〉認められない。

〈カマド〉 東南の隅にあり、本体、煙道部にわたり礫で構築されている。燃焼部から煙道部までの長さは 1.70 m、長軸方向は S-15°-E である。燃焼部および煙道部の幅は 40~20 cm を測る。焼土は径 40×30 cm に広がり、厚さ最大 7 cm である。燃焼部周辺の礫はかなり火力を受け赤褐色に変色している。

遺物 (第 8 図、写真図版 42)

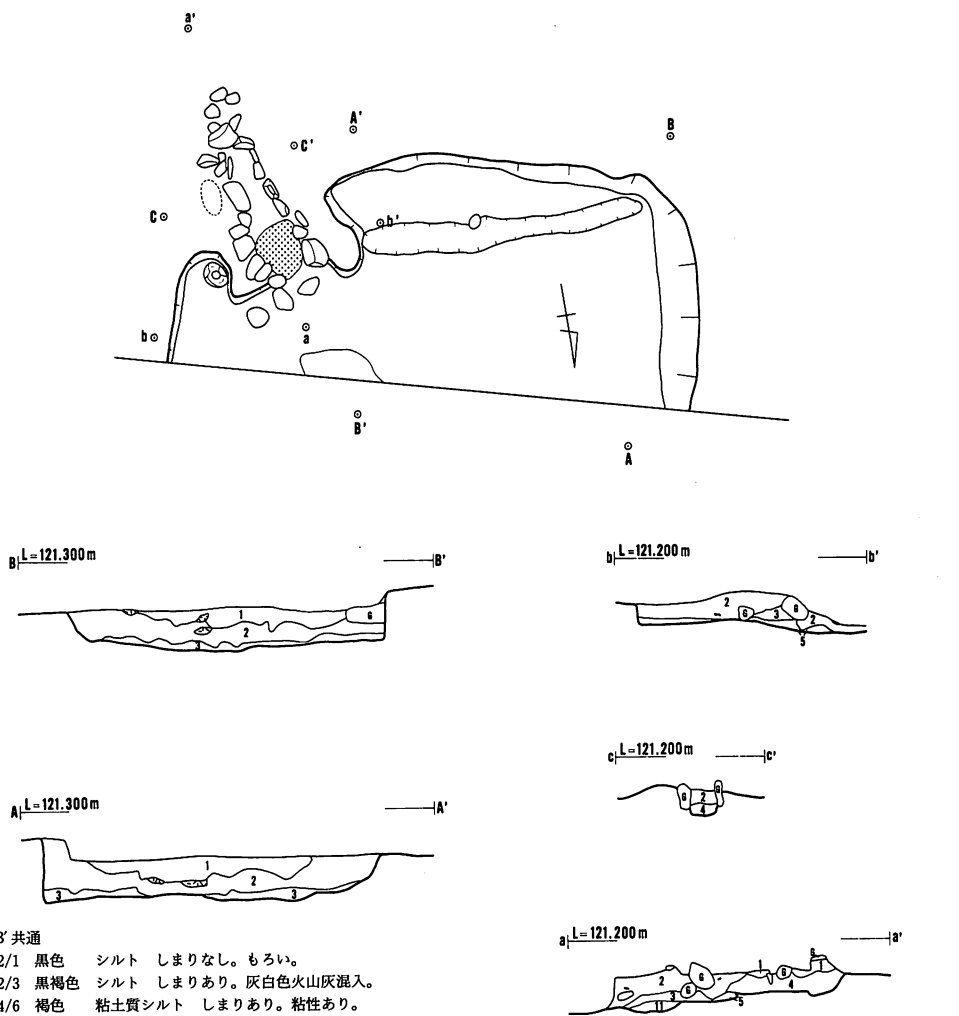
出土状況

遺物は少量であるが遺存状態が良い。埋土の I、II 層中、カマドおよび煙道部とその周辺から坏や甕の破片が出土している。

28 は住居の東隅で器を伏せた状態でみつきり、ほぼ、復元できた。土師器の鉢でロクロ使用成形で内面が黒色処理されミガキが施される。底部の切り離しは回転糸きりである。底径 7.2、口径 18.5、器高 8.2 cm を測る。底部には墨書がみられるが、判読不明である。29~32 は須恵器の坏でいずれもロクロ成形であり、29、31、32 は底部の切り離しは回転糸きりであり、無調整である。(30 は底部が欠損しているため不明) 31 には外面に「永」とみられる墨書が施される。甕は 33 の 1 点のみである。ロクロ成形であるが、器面は風化が著しく調整はわからない。器形は体部からほぼ直立して立ち上がり、口縁は外反する。口唇部は「く」の字状に角張り上方に挽き出され受け口となる。口径は推定 23.6 cm である。

遺構の時期

埋土に 10 世紀初頭の灰白色火山灰がみられることや遺物の様相から平安時代とみられる。



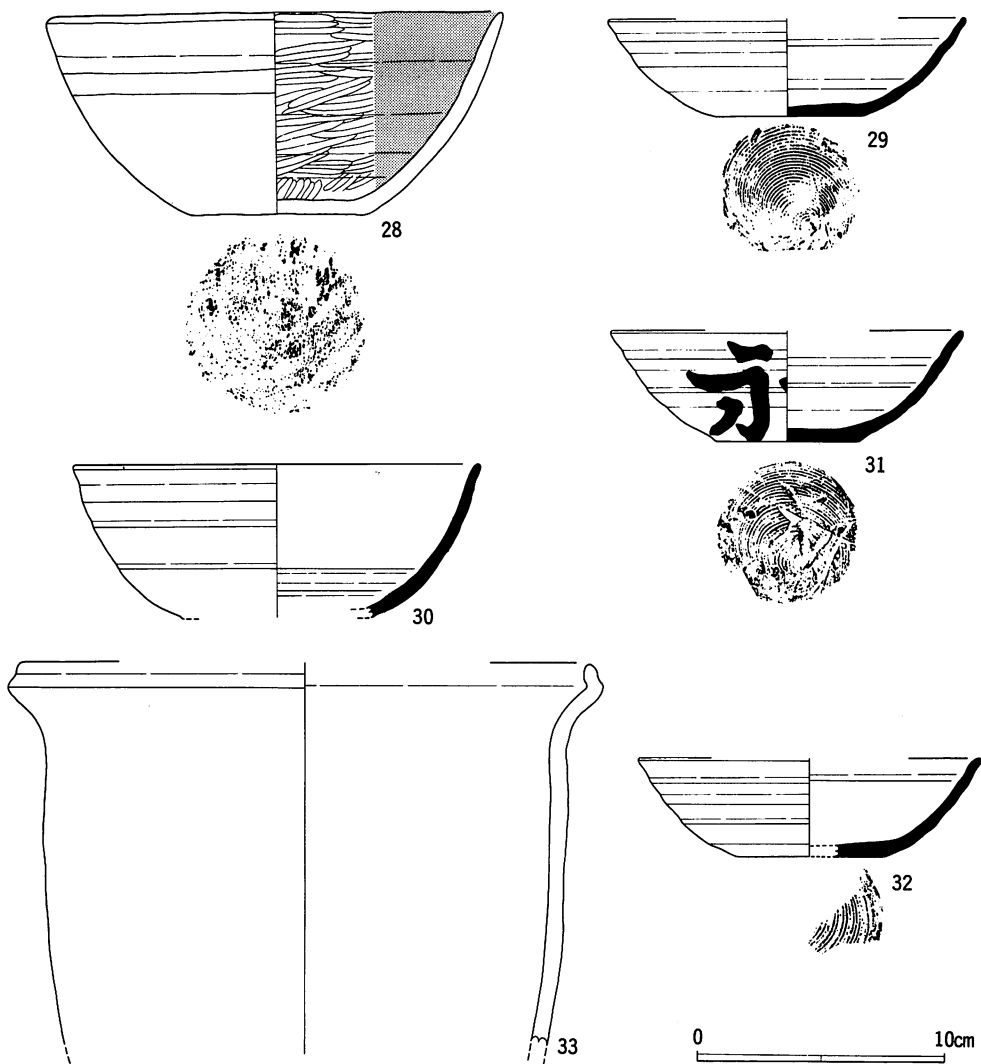
A-A'、B-B' 共通

1. 10YR2/1 黒色 シルト しまりなし。もろい。
2. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりあり。灰白色火山灰混入。
3. 10YR4/6 褐色 粘土質シルト しまりあり。粘性あり。

a-a' b-b' c-c'

1. 5YR3/3 暗赤褐色 焼土 しまりある。
2. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト しまり若干含む。しまりない。
3. 5YR2/4 極暗赤褐色 シルト 焼土粒混入。炭化物少量含む。しまりない。
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりある。焼土粒・黄褐色土粒若干混入。
5. 10YR4/4 褐色 粘土質シルト しまりある。
11. 5YR4/6 赤褐色 焼土 しまりある。上部に炭化物1mm含む。しまりない。

第7図 竪穴住居跡2



第8図 竪穴住居跡2 出土遺物

土器観察表

番号	種類	器種	法量(推定値)			外面調整			内面調整			成形	切り離し	その他
			口径cm	底径cm	器高cm	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部			
28	土師器	坏	18.5	7.2	8.2	—	—	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ロクロ	糸きり	墨書(不明)
29	須恵器	坏	14.5	5.8	3.9	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
30	須恵器	坏	(16.3)	—	(6.2)	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	
31	須恵器	坏	(14.2)	5.8	4.5	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	墨書(永)
32	須恵器	坏	(13.9)	(3.0)	4	—	—	—	—	—	—	ロクロ	糸きり	
33	土師器	甕	(23.6)	—	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ		

〔2〕 埋設土器 (第9図、写真図版36)

土坑1の南東、IV S 1 bグリットII層中で口縁がみつきり検出される。器種は甕でほぼ完形である。径53 cm、深さ40 cm程の穴を掘り込んで正立に埋置している。なお、地山を20 cm程掘り込んでいる。口縁部は南側から圧力を受け南側一部が体部から遊離している。周辺に火力を用いた痕跡は見当たらない。土器内上部から自然礫が1個出土している。重し、ないしは、蓋としてののはたらきをしたものと思われる。骨片や石器等は見当たらない。

遺物 (第10図、写真図版42)

器形は底部からしだいに立ち上がり、体部上半に最大径をもつ。肩部から緩やかに内湾しながら口縁部に至る。口縁はやや長めで外反する。口唇には浅い沈線がみられる。また、口縁下部にも浅い沈線が一本施文される。体部にはLR縄文が横走あるいは斜行する。外面には多量の煤が付着し、内面にもわずかであるが下部に付着している。底部は穿孔(焼成後)されている。

遺構の時期：弥生時代と思われる

〔3〕 土坑 (第11図、写真図版37~38)

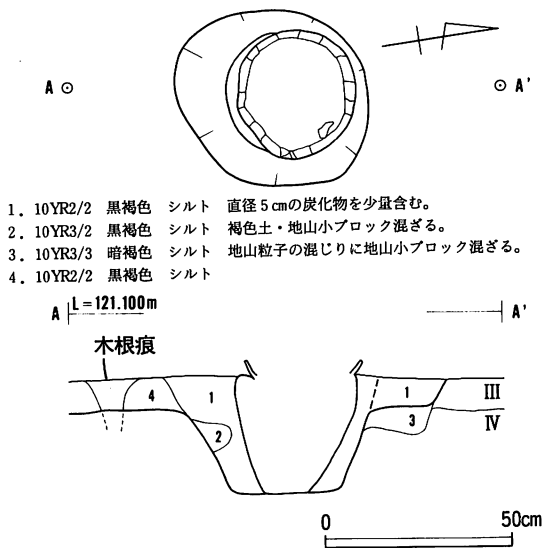
全体で6基検出されている。調査区中央部より西側でII層および3層で検出されている。いずれも、平面形は楕円形状を呈するものである。

土坑1

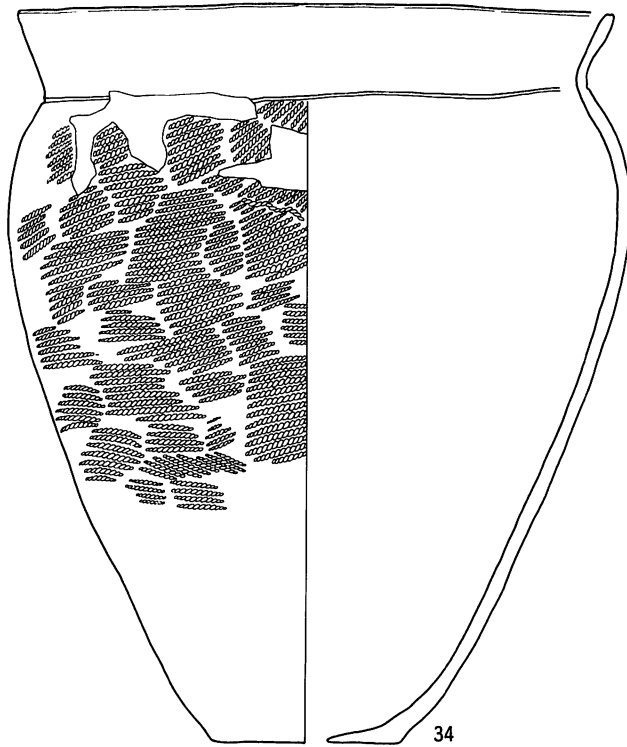
III N 10 jグリットに位置する。検出面はII層中部で、灰白色火山灰が円形に広がっていることから確認した。平面形は楕円形である。長軸200 cm、単軸150 cmの規模で、深さ最大で24 cmを測る。断面形は浅皿状である。埋土は4層に細分される。上部より弥生土器片が出土しているが流れ込みとみられる。遺構の時期は平安時代と推察される。

土坑2 (第12図)

竪穴住居跡2の南東のIII N 7 gグリットに位置する。検出面はII層である。上部には灰白色火山灰が広がっていることから検出された。平面形は断面形を呈し、長軸125 cm、単軸100 cm、深さ38 cm



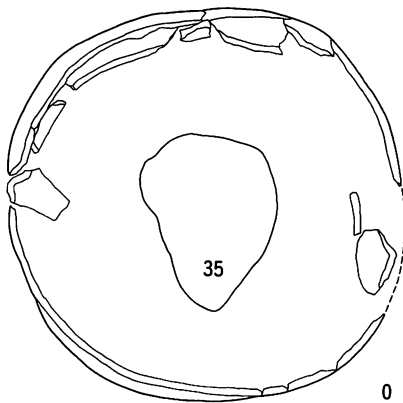
第9図 埋設土器



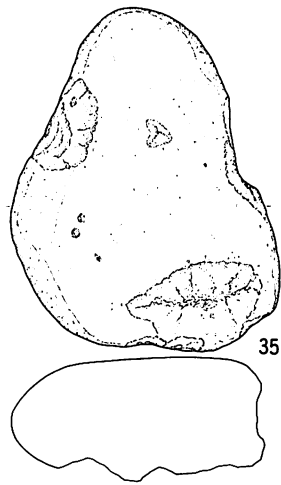
34



0 5 cm



35



35

0 10cm

第10図 埋設土器等実測図

を測る。南側が深く、北側が浅い2段の掘り込みになっている。埋土は2つに細分される。出土遺物は須恵器の坏(36)1点である。ロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切りである。遺構の時期は出土遺物から平安時代である。

土坑3 (第13図)

調査区西側、III N 9 aグリットに位置する。周辺には焼土群がある。検出面はII層で暗褐色土が長方形に広がることから検出された。平面形は長楕円形で、長軸145 cm、単軸70 cm、深さ18 cmを測る。底部は平坦で、壁はやや直立ぎみに立ち上がる。埋土は4層に細分される。上部は焼土混じりの暗褐色土や褐色土で、下部は地山の褐色土である。出土遺物は剥片1点(37)である。遺構の時期は断定はできないが弥生時代前後と推察される。

土坑4

調査区西側、III N 6 aグリットに位置する。II層上部で黒褐色土が広がることから検出された。平面形は楕円形で、長軸200 cm、単軸180 cm、深さ20 cmを測る。断面形は浅皿状である。埋土は2層に細分される。遺物は出土していない。遺構の時期は特定できないが、おそらく、あたらしいものと推察される。

土坑5

調査区西側で土坑3に近接し、III N 9 bグリットに位置する。I層下部で暗褐色土に黄褐色土が混じり、斑状になっていることから検出された。平面形は不整楕円形で、長軸130 cm、単軸125 cm、深さ60 cmを測る。断面形はU字状である。埋土は5層に細分されるが、主に黒褐色土と黄褐色土の互層となっている。遺物は出土していない。遺構の時期は特定できないが、様相から新しいものと推察される。

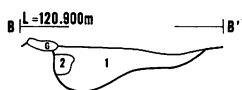
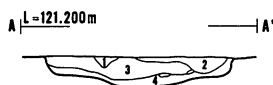
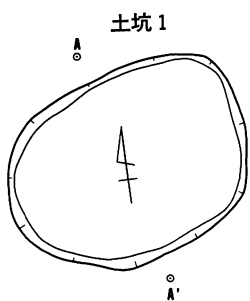
土坑6

調査区西側北部のIII N 4 aグリットに位置する。II層下部で黒色土が円形に広がることから検出された。平面形は楕円形で長軸150 cm、単軸135 cm、深さ38 cmを測る。楕円形は鉢状を呈す。壁は直立ぎみに立ち上がる。埋土は3層に細分される。中央部には杭状の黒色土がみられる。他の土坑に比べしまりがある。遺物は出土していない。遺構の時期は特定できないが様相から弥生時代以前のものと思われる。

[4] 焼土遺構 (第14~15図、写真図版39)

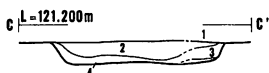
調査区中央部ないし西側で11基検出された。検出面はほとんどII層であり、検出面からは弥生土器片や土師器片が出土している。いずれも現地性の焼土とみられる。また、焼土1~6や焼土8周辺からは黒曜石の剥片が出土し、何らかの関連性があるものと思われる。黒曜石の分布については後の項でのべることとする。

焼土1



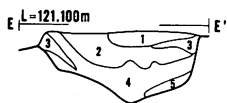
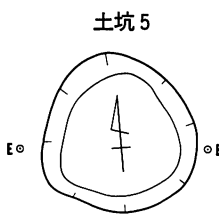
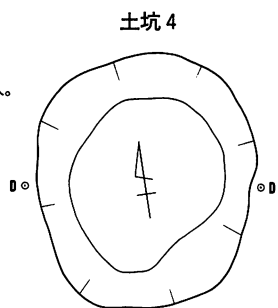
- 土坑 1
1. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまりなし。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりなし。
 3. 10YR2/3 極暗褐色 シルト しまりあり。
 4. 10YR5/8 黄褐色 粘土質シルト しまりあり。

- 土坑 2
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性あり。
 2. 10YR4/6 褐色 シルト 地山ブロックあり。



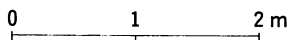
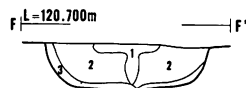
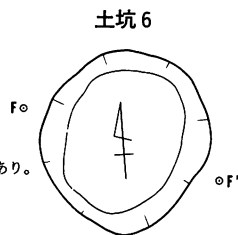
- 土坑 3
1. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまりなし。
 2. 7.5YR4/3 褐色 シルト しまりあり。
 3. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりあり。
 4. 7.5YR4/4 褐色 シルト しまりあり。暗褐色土混入。

- 土坑 4
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりなし。
 2. 10YR6/6 明黄褐色 粘土質シルト しまりなし。

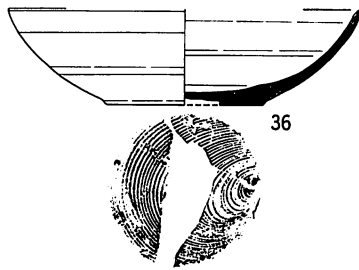


- 土坑 5
1. 10YR3/4 暗褐色 シルト 黄褐色土ブロックあり。しまりあり。
 2. 10YR5/6 黄褐色 粘性あり 暗褐色土混じり。
 3. 10YR3/2 褐色 粘土質シルト しまりなし。
 4. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり。
 5. 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト しまりなし。

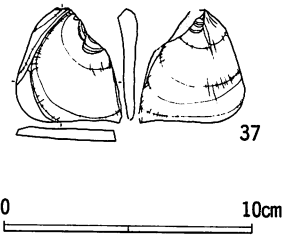
- 土坑 6
1. 10YR1.7/1 黒色 シルト しまりあり。
 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり。
 3. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりあり。地山ブロックあり。



第11図 土坑



第12図 土坑2 出土遺物



第13図 土坑3 出土遺物

調査区西側III N 7 a グリットに位置する。焼土2、焼土3が隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸70 cm、単軸65 cm、厚さ最大15 cmを測る。上面より底部が四角の土師器(163)が出土している。その他、弥生土器片が出土している。黒褐色土中で検出し、掘り込み等のプランがないかどうか慎重に精査したが、それは認められなかった。

焼土2

焼土1同様III N 7 a グリットに位置する。焼土3が隣接する。平面形は楕円形を呈し、長軸100 cm、単軸75 cm、厚さ最大15 cmを測る。掘り込み等のプランは認められない。

焼土3

焼土2の南1.5 mにありIII N 8 a グリットに位置する。平面形は円形状を呈し、径70 cm程、厚さ最大5 cmを測る。掘り込み等のプランは認められない。周辺からは土師器(遺構外編参照140、141)と弥生土器破片が多数出土。140、141は奈良時代以前の時期のものと推察される。

焼土4

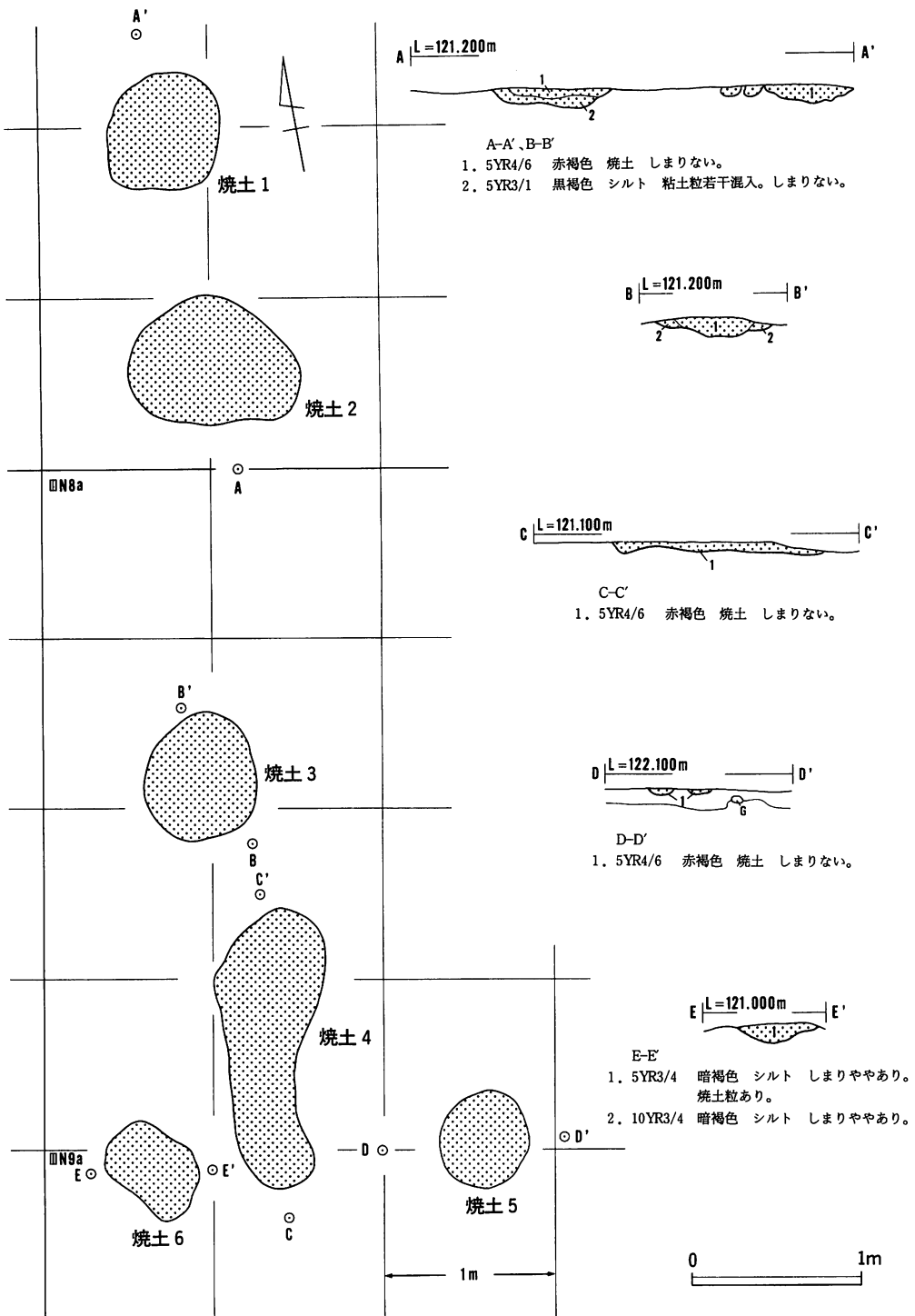
焼土3の南50 cmにあり、III N 8 a グリットに位置する。平面形は足跡状を呈し、長軸105 cm、単軸35 cm、厚さ最大5 cmを測る。

焼土5

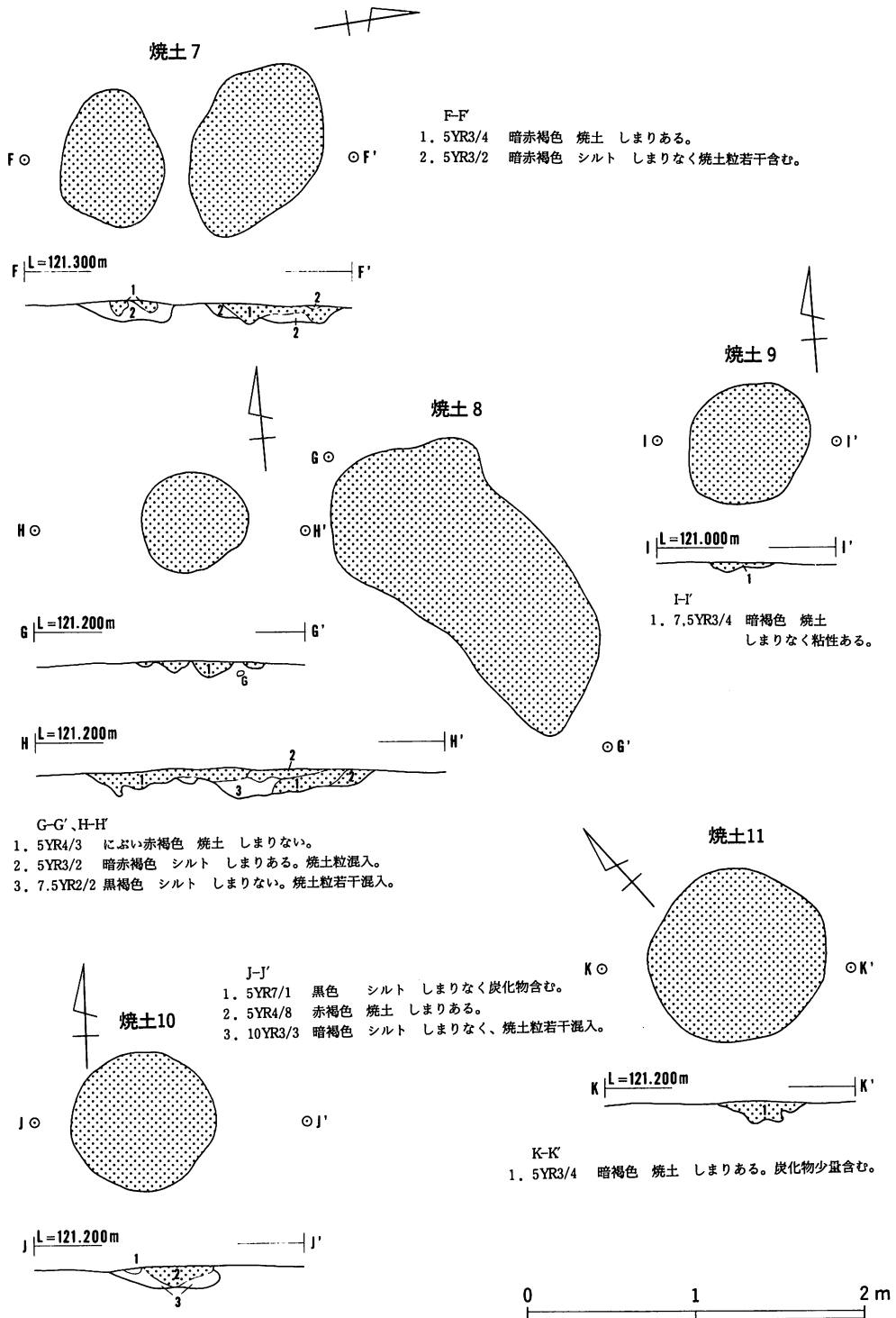
焼土4の西1 mにありIII N 8 a グリットに位置する。平面形は径50 cmの円形を呈し、厚さ4 cm程である。

焼土6

焼土4に近接し、III N 8 a グリットに位置する。平面形は不整形を呈し、長軸60 cm、単軸50 cm、厚さ最大13 cmを測る。検出作業開始時点では弥生土器破片が集中していた。遺物を取り除いた下部からは焼土が確認された。焼成は弱い。住居跡の地床炉を想定し、周辺の精査を進行したが、壁や柱穴等住居跡と認定するような遺構は確認できなかった。



第14図 焼土 1 ~ 6(1)



第15図 焼土 7～11(2)

遺物（第16図、写真図版43）

3個体の弥生土器が出土している。38は高坏の坏部である。脚部ないし口縁はみつかっていない。土器表面は橙色を呈し、坏内部は丁寧なミガキが施される。底部径は5.8cmと小ぶりである。39、40は甕である。39は口縁部が短く直立する。体部には斜行または横走縄文が施文される。40は完全に接合できなかつたため、図上復元したものである。39より一回り大きい甕である。器形は底部から緩やかに立ち上がり体部上半に最大径をもち、内弯しながら口縁に至る。口唇には縄文が押圧される。体部には斜行縄文が施文される。

焼土7

土坑2の南7mの所にあり、III N 9 hグリットに位置する。2カ所にわたり広がるが1遺構として処理した。北側の平面形は不整形を呈し、長軸110cm、単軸70cm、厚さ10cmを測る。南側の平面形は楕円形を呈し、長軸80cm、単軸60cm、厚さ10cmを測る。遺物は周辺から弥生土器破片が数点出土している。

焼土8

竅穴住居跡2の東10mの所にあり、III N 7 i~III N 7 jグリットに位置する。2カ所にわたり広がるが1遺構として処理した。東側の平面形は径60cmの円形を呈し、厚さ最大10cmを測る。西側の平面形は不整形を呈し、長軸140cm、単軸80cm、厚さ最大20cmを測る。検出面から土師器の甕破片や弥生土器破片が若干出土している。

焼土9

調査区中央部IV N 10 cグリットに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸70cm、単軸65cm、厚さ最大7cmを測る。この焼土を中心として、半径10m程の円内域に弥生土器破片（捺糸文施文の天王山式併行の土器）が多数出土している。火力を受けた礫はみられなかった。精査の結果掘り込みや柱穴等はみられなかった。

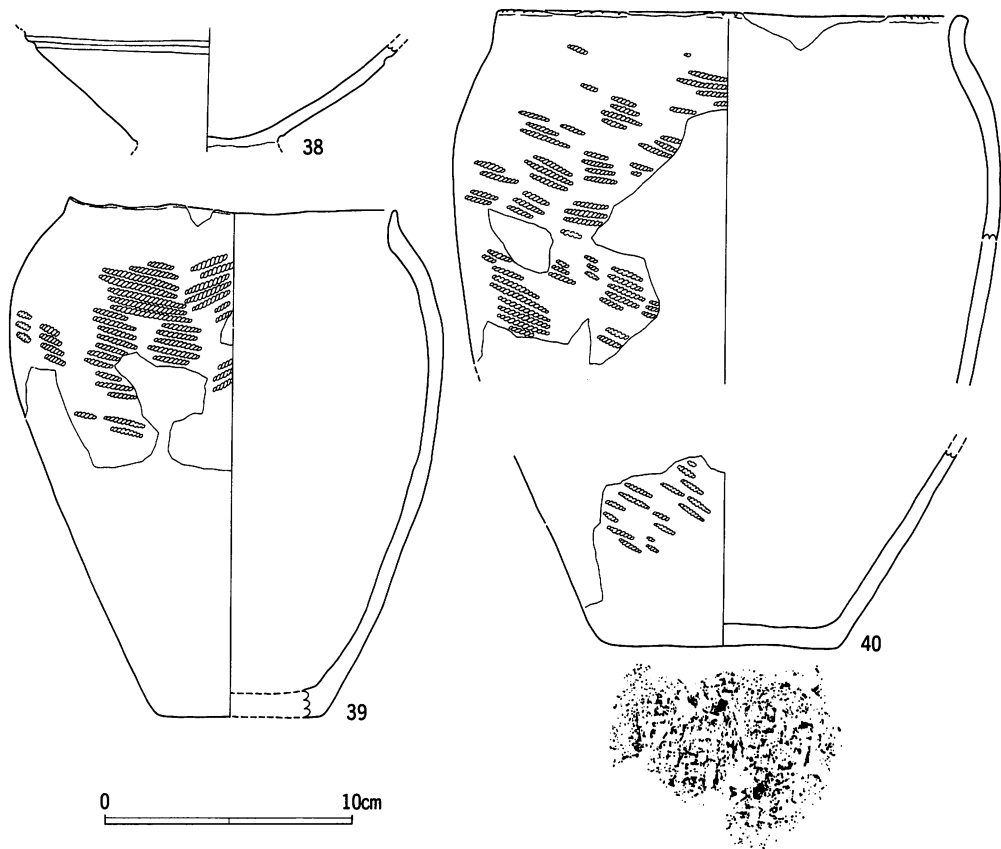
焼土10

調査区中央北部、IV N 8 aグリットに位置する。平面形は径80cmの円形を呈し、厚さ12cmを測る。まわりに自然礫が集中していたが人為的なものではない。天王山式併行の土器片が数点出土している。

焼土11

調査区南西部III S 2 fグリットに位置する。風倒木痕の脇に形成されている。平面形は径105cmの円形を呈し、厚さ12cmを測る。検出面からは縄文土器、弥生土器破片が出土している。

遺構の時期は断定はできないが、状況から、概ね11が縄文時代、6・7・9・10が弥生時代、

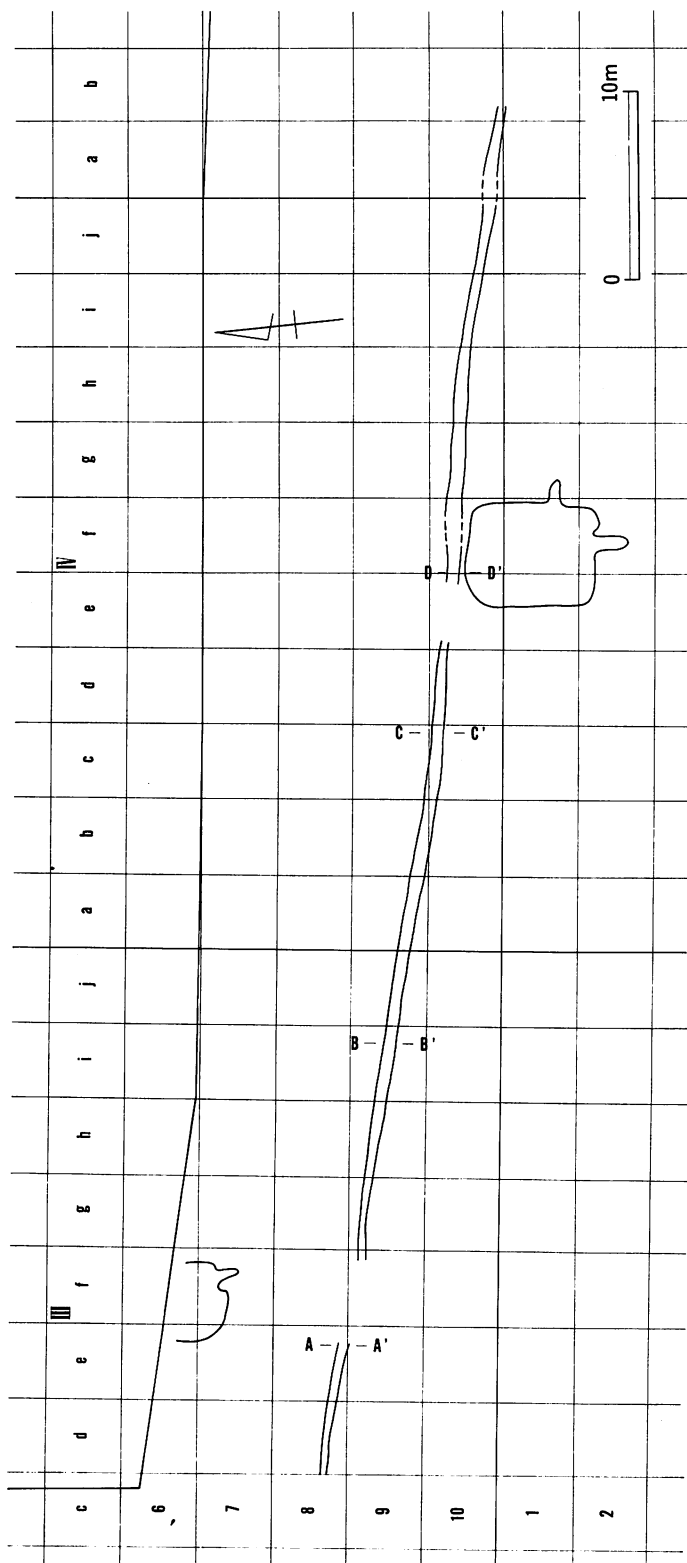


第16図 焼土6 出土遺物

1～5は奈良時代前後、8が平安時代以前頃とみられる。

〔5〕 溝跡 (第17図)

調査区ほぼ中央を西から東に走行する。長さ約80m、幅30～40cm、深さ30cmを測る。断面形はU字状である。II層上面において検出されたが、地山までは掘り込まれていない。調査区の東と西で消滅しているが、おそらく東の沢と西の沢を結んでいたものとみられる。埋土は黒褐色土や暗褐色土主体で、下部で黄褐色土が混じる。埋土にわずかに弥生土器破片が入るが流れ込みとみられる。水路とした痕跡は認められない。地境溝と思われるが時期の特定はできない。



D | L=121.200m | D'



1. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト しまり良く粘性ない。
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりない。褐色シルト土50%混入。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり良く粘性ない。
4. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまり良く粘性ある。

C | L=121.200m | C'



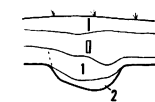
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり良く粘性ある。
2. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト しまり良く 粘性ない。

B | L=121.200m | B'



1. 10YR2/2 黒褐色 シルト しまり良く粘性ある。
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまり良く粘性ない。炭化物微量含む。
3. 10YR5/8 黄褐色 シルト しまり良く粘性ある。暗褐色土10%混入。

A | L=122.600m | A'



1. 10YR2/3 黒褐色 シルト しまり良く粘性ない。褐色土混入。
2. 10YR4/4 褐色 シルト しまり良く粘性ある。黒褐色土50%混入。

0 1m

第17図 溝跡

2 遺構外の出土遺物

〔1〕 土器・土製品

遺構外からは、縄文、弥生土器、土師器、須恵器等の破片数、合計 2646 点が出土している。概算であるが縄文土器（中期から晩期後葉）31%、縄文晩期末葉から弥生土器 44%、土師器・須恵器 25%の百分比である。出土量は調査区西側Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ区が多く、東側Ⅴ、Ⅵ区からは少量である。弥生土器等は破片数が多いが、全体の器形が推定できるような接合復元があまりできなかつた。しかし、口縁等からみて個体の違うもの、同じ個体でも口縁と体部に特徴がよくでているものなどできるだけ掲載した。

縄文土器（中期から晩期後葉）を第Ⅰ群土器、縄文晩期末葉から弥生土器を第Ⅱ群土器、土師器・須恵器を第Ⅲ群土器として分類した。

第Ⅰ群土器（第 18、19 図、41～57、写真図版 44）

41 は縄文中期の深鉢で、山形口縁をもち、竹管刺突文や半截竹管による平行沈線文が施文される。43、46、47、48 は同一個体であり、中期末葉の深鉢とみられる。山形口縁で口縁にそって隆帯をもち、体部には単軸絡条体回転による施文がみられる。49 と 50 も同一個体で晩期の深鉢である。厚手の口縁で口唇部は押圧される。体部は斜行縄文が施文される。51、52 は浅鉢、53 は台付き鉢であり、羊歯状文が施文され、いずれも、大洞 B-C 期に比定される。54～57 は底部で、胎土から縄文土器とみられるが、時期は特定できない。

第Ⅱ群土器（第 19～22 図、写真図版 45～47）

時期別に縄文晩期末葉から弥生前期を A 類、弥生中期を B 類、弥生後期 C 類に細分した。

A 類 浅鉢・高坏類（58～73）

58～67 は浅鉢の口縁部である。58 は山形口縁であり、他は平口縁である。59～61 は平行沈線が施文される。62 は口唇が押圧される。63～65 は変形工字文が施文される。66 は無文、67 は縄文施文である。68～73 は台付き浅鉢ないし高坏の脚部である。71 は小型、72 は大型の脚部であり変形工字文が施文される。72 の底部径は 11.5、71 は 5.1 cm を測る。

A 類 甕（74～89）

74～79 は口縁部破片であり、口縁ないし口縁直下に斜行縄文が施文される。80～82 は体部破片であり、80 は捺糸文が、81 は縄文が横走する。83～89 は底部破片であり、83、85 は捺糸文が横走し、86～89 は縄文が斜行する。

B 類（90～91）

2 点だけである。壺の体部破片で、平行沈線や充填縄文がみられる。

C 類 甕（92～139）

92～113 は口縁部の破片であり、文様をから 6 つタイプに分けられる。92、93、113 は口縁部

の無文のもの、94～103は捺糸文が縦走するもの、104～108は捺糸文が横走または斜行するものである。109は4本の沈線が施文されるであり、110、111は同一個体で肥厚する口縁に捺糸文が斜行するものである。112は連弧文が施文されるものである。

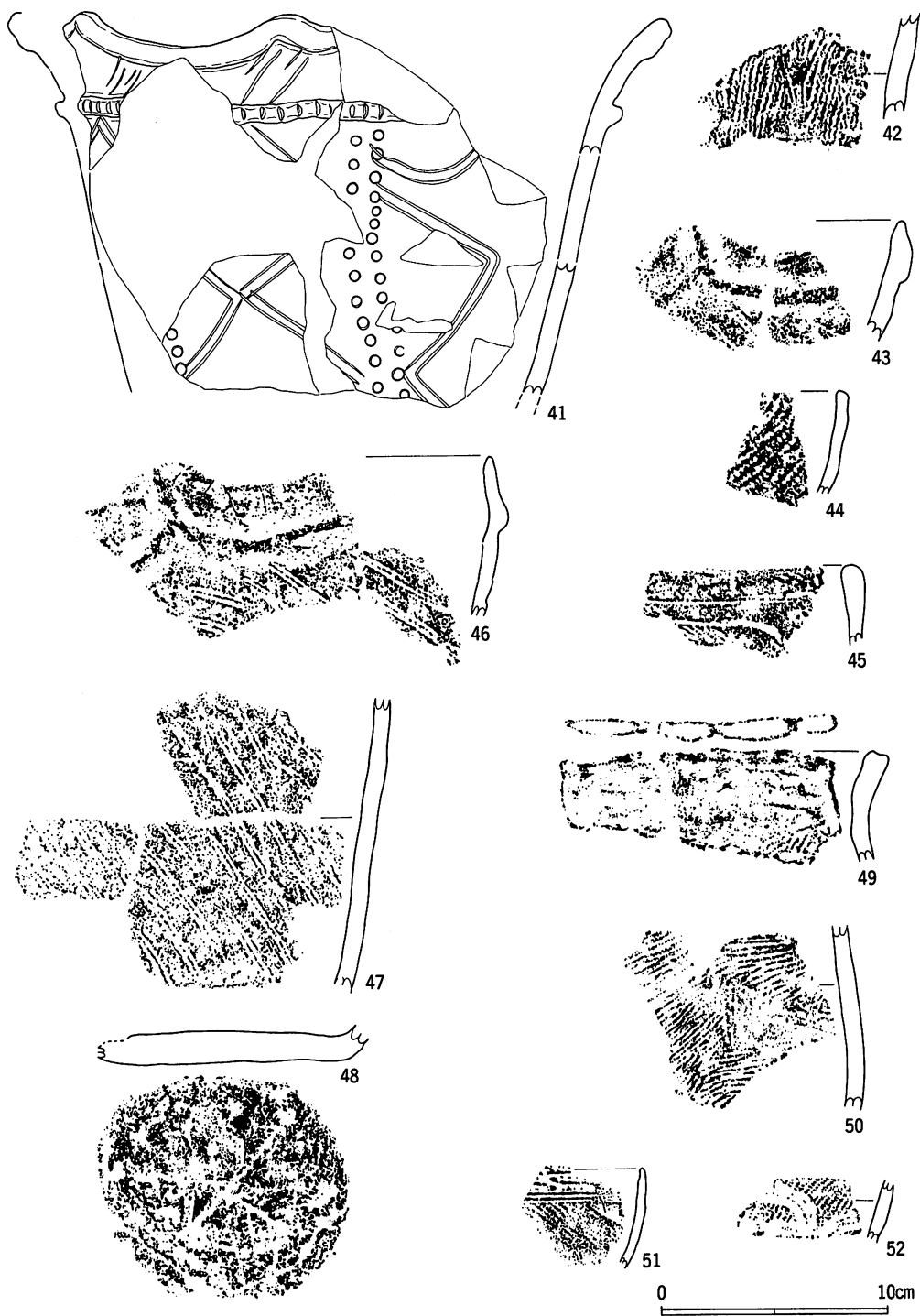
115～116(同一個体)は口縁直下の破片であり、弧状沈線が施文される。117～130は体部破片である。そのなかで、120～130は捺糸文が縦走するものである。138、139は同一個体であるが、口縁と体部の接合ができなかったものである。口縁から体部下部までは無文、下部から底部にかけて捺糸文が縦走する。左右対称ではなくいびつな器形を呈する。

第Ⅲ群(第22～24図、140～180、写真図版47～48)

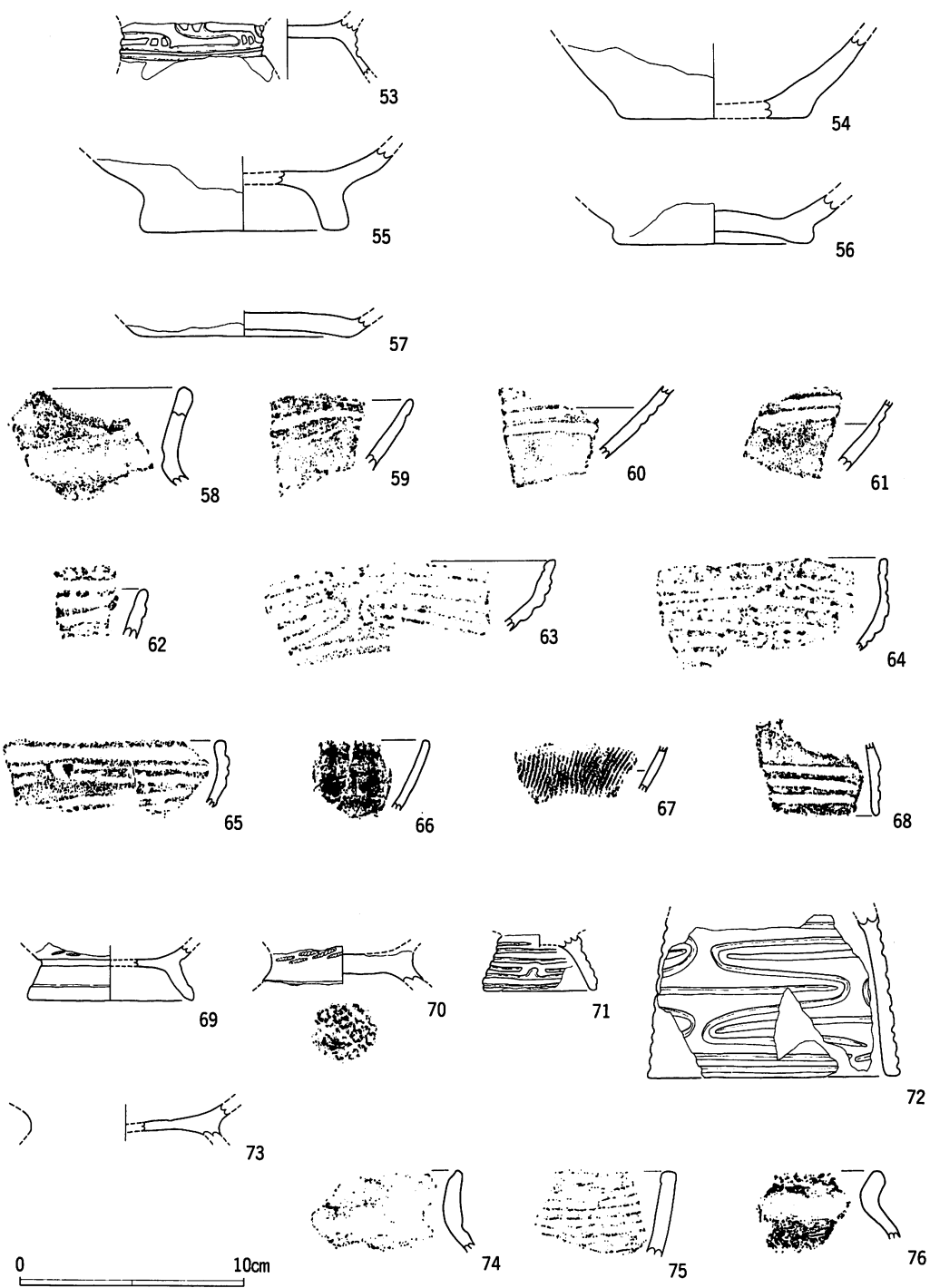
140と141、142と143は同一個体で、器種は壺とみられる。外面にミガキが施される。142、143は球状の器形になるとみられる。145～147は同一個体である。144と145は段のある坏で内面黒色処理される。148は坏の破片で口縁が肥厚する。153と154、155と156は同一個体であり、ともに、頸部に段のある甕である。また、157は坏というより鉢型の器形を呈し、口縁が肥厚し、外面がミガかれている。160～162は小型の甕で外面にミガキが施される。内面に単位は不明であるがハケメの痕跡がみられる。3個体ともに体部上半は欠失している。163は摩滅が著しく調整はわからない。底部は四角形を呈する。143、144、148、149、150、154、156、157、160～162は古墳時代から奈良時代前後の土器群と推察される。164～172は平安時代の土師器の甕である。173～175は須恵器の坏でロクロ成形、切り離しは回転糸きりである。176は土師器の坏で内面黒色処理される。177は須恵器の甕の口縁、179～180は須恵器坏の底部である

土製品(第24図、写真図版48)

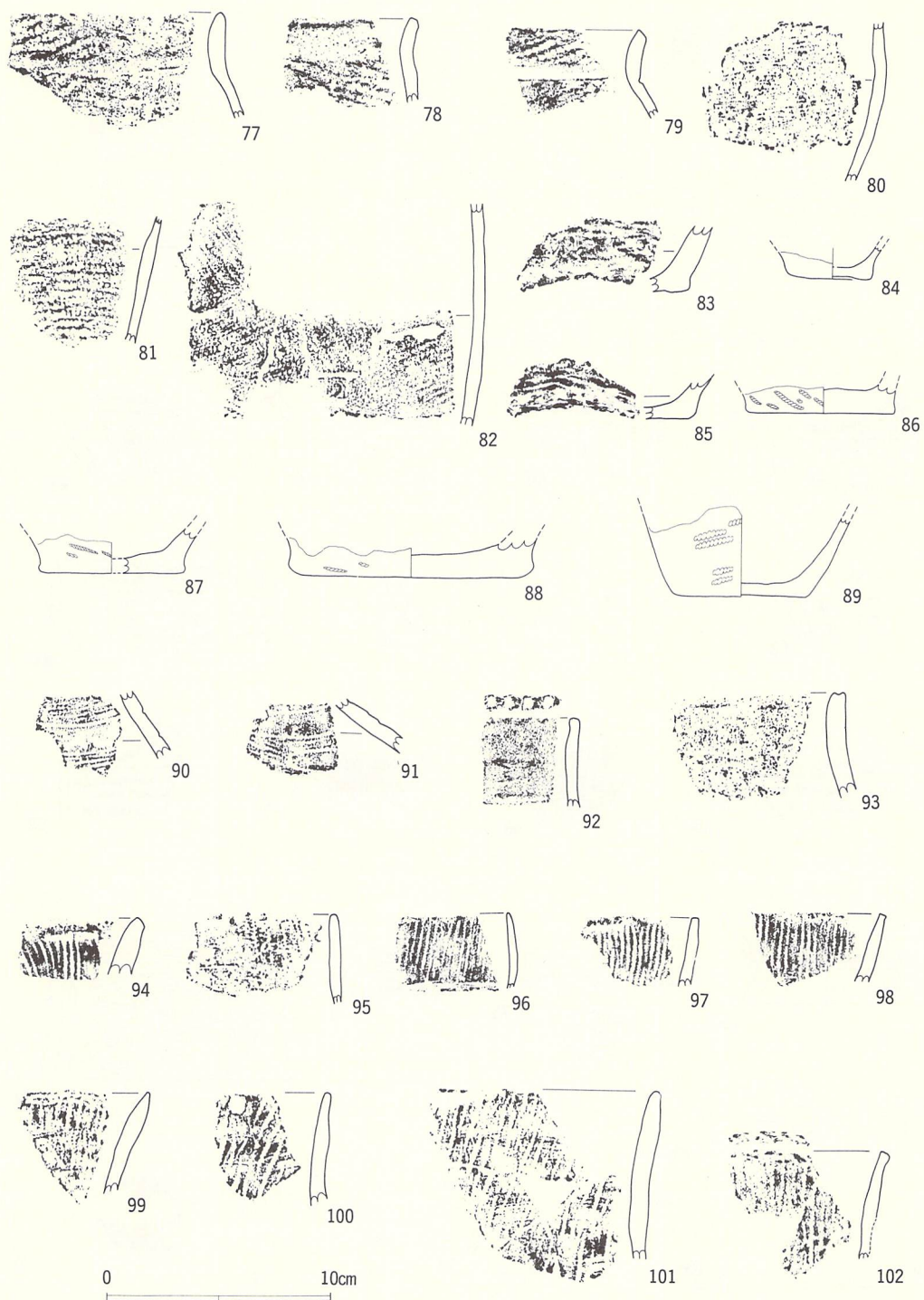
181の1点だけである。焼土9の西約5mの地点(Ⅱ層)から出土している。半分欠失しているが、紡錘車とみられ、径6.0、厚さ1.5cmを測る。中央部に穿孔がみられ、両面にわたり沈線、刺突文、捺糸文が施文される。また、円周部に沈線が施される。全体的に丁寧な調整である。



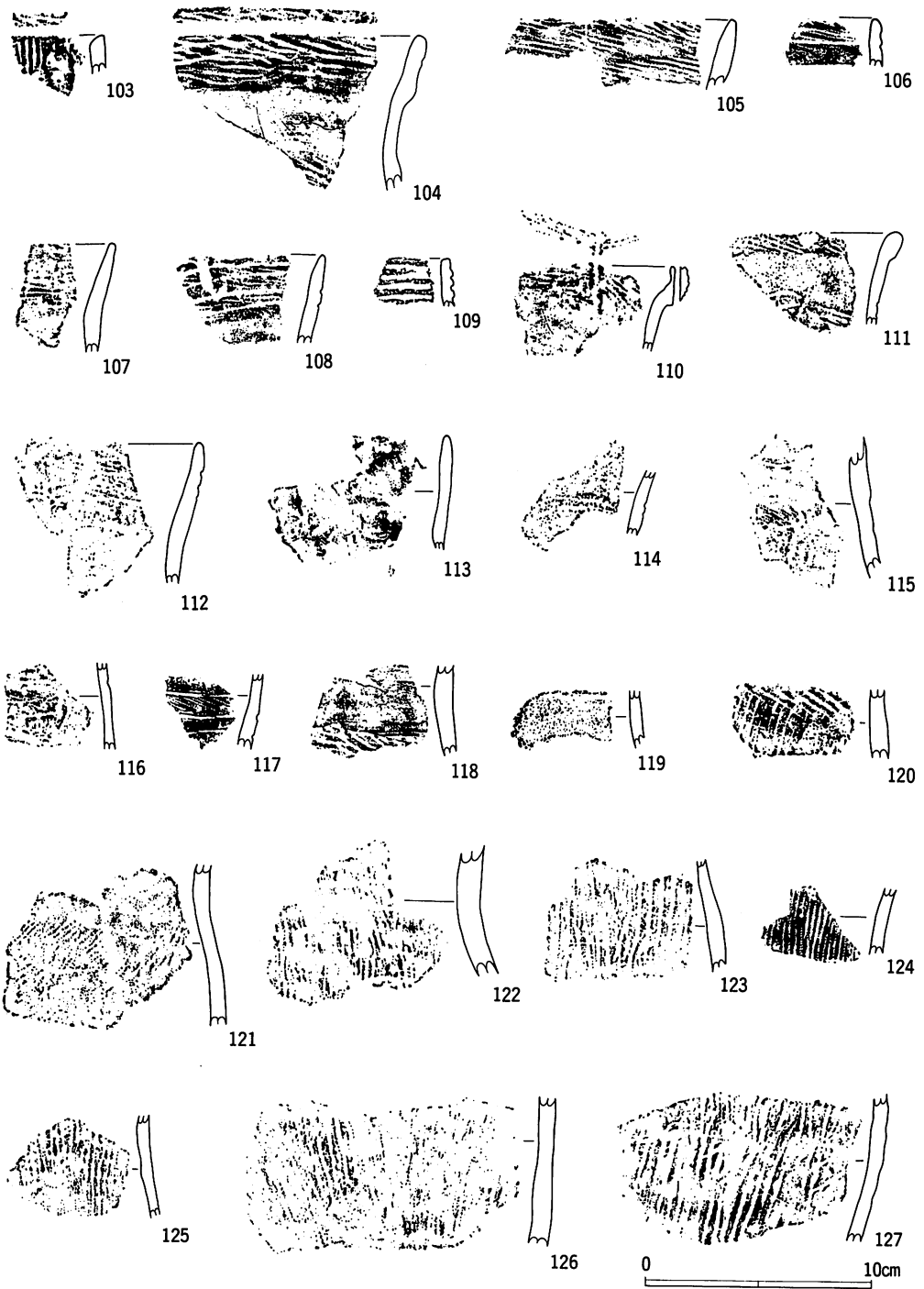
第18图 遺構外出土土器 1



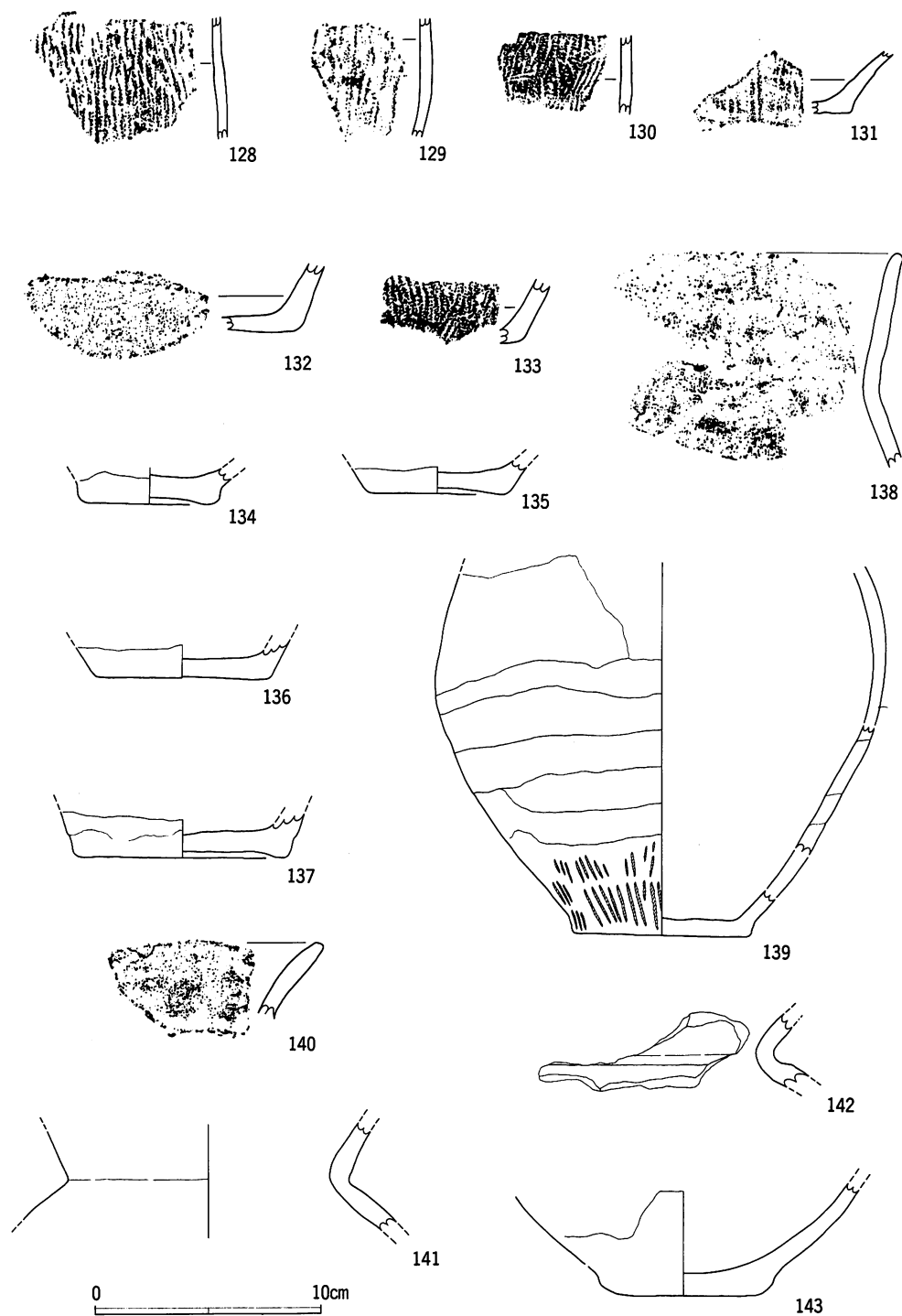
第19図 遺構外出土土器 2



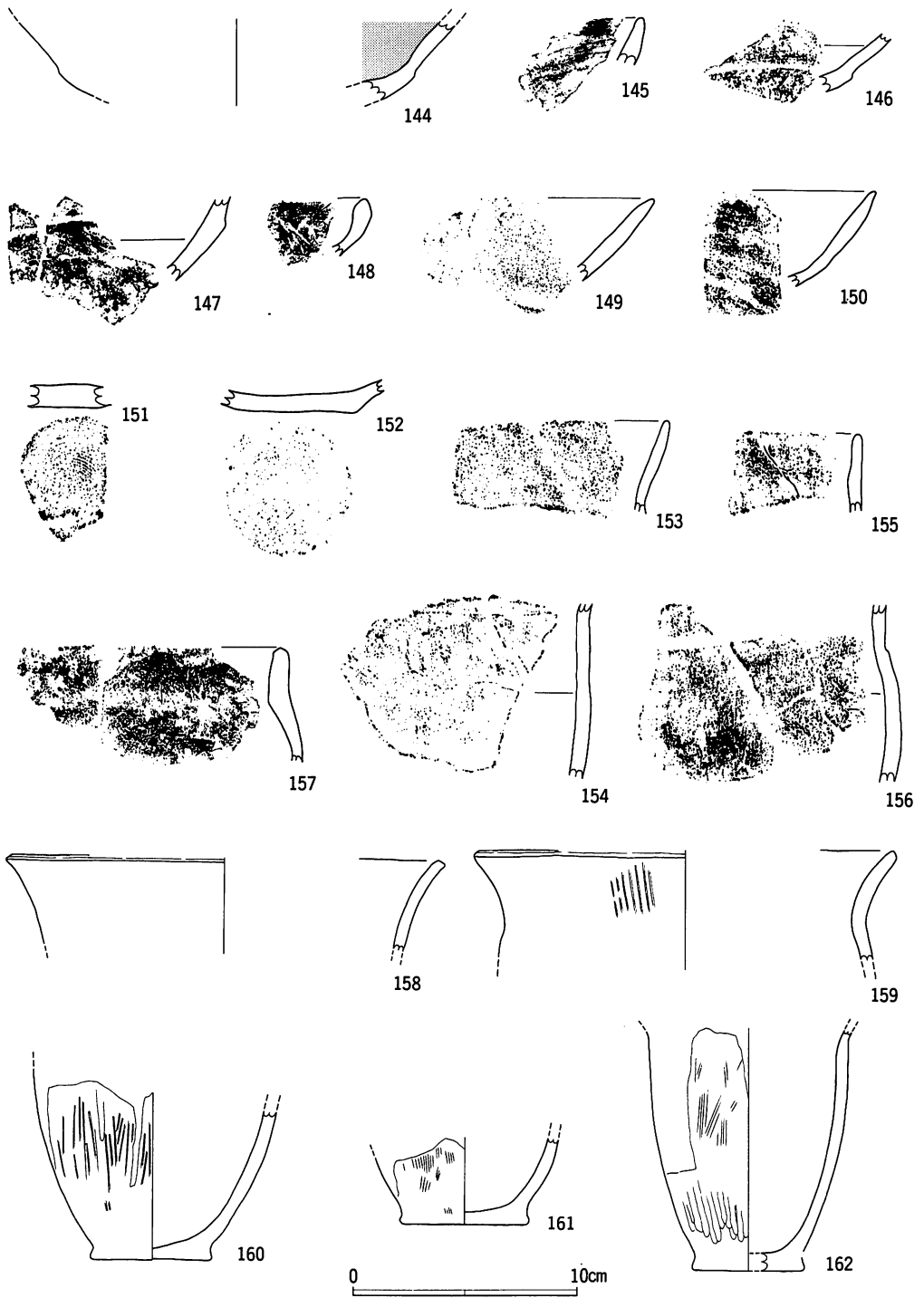
第20図 遺構外出土土器 3



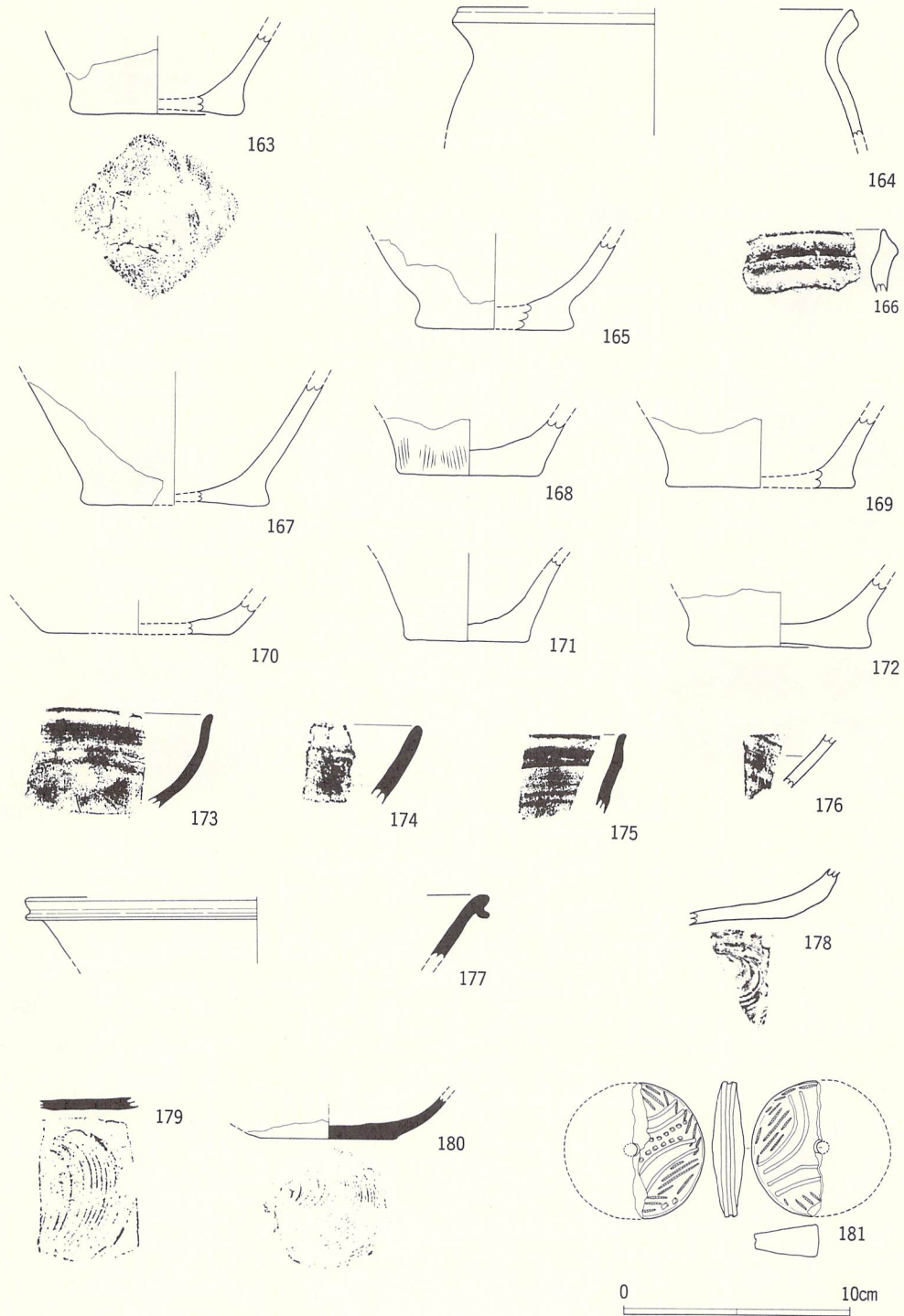
第21图 遺構外出土土器 4



第22图 遺構外出土器 5



第23图 遺構外出土器6



第24図 遺構外出土土器7・土製品

〔2〕 石器・石製品類・金属類（第26～33図、写真図版49～54）

ここで扱う石器、石製品類には黒曜石は含まない。次ぎの項で黒曜石は取り上げる。

石器類は剥片石器と石核、剥片、礫石器、石製品が出土している。石器、石製品総数は72点、剥片総数は338点で、特にIII N区からの出土が多い。器種別にみると石鏃9点、不定形石器（剥片の片面や縁辺に剝離痕をもつもの、削器、搔器類を含む）18点、石斧5点、石鋏3点、石皿3点、磨石8点、敲石7点、凹石10点、砥石4点、石匙2点、石篋1点、石棒1点、石製品1点（器種用途不明）となっている。金属類は1点のみである。器種別の番号は下記の通りである。石器類の詳細については石器一覧表（125ページ）を参照されたい。

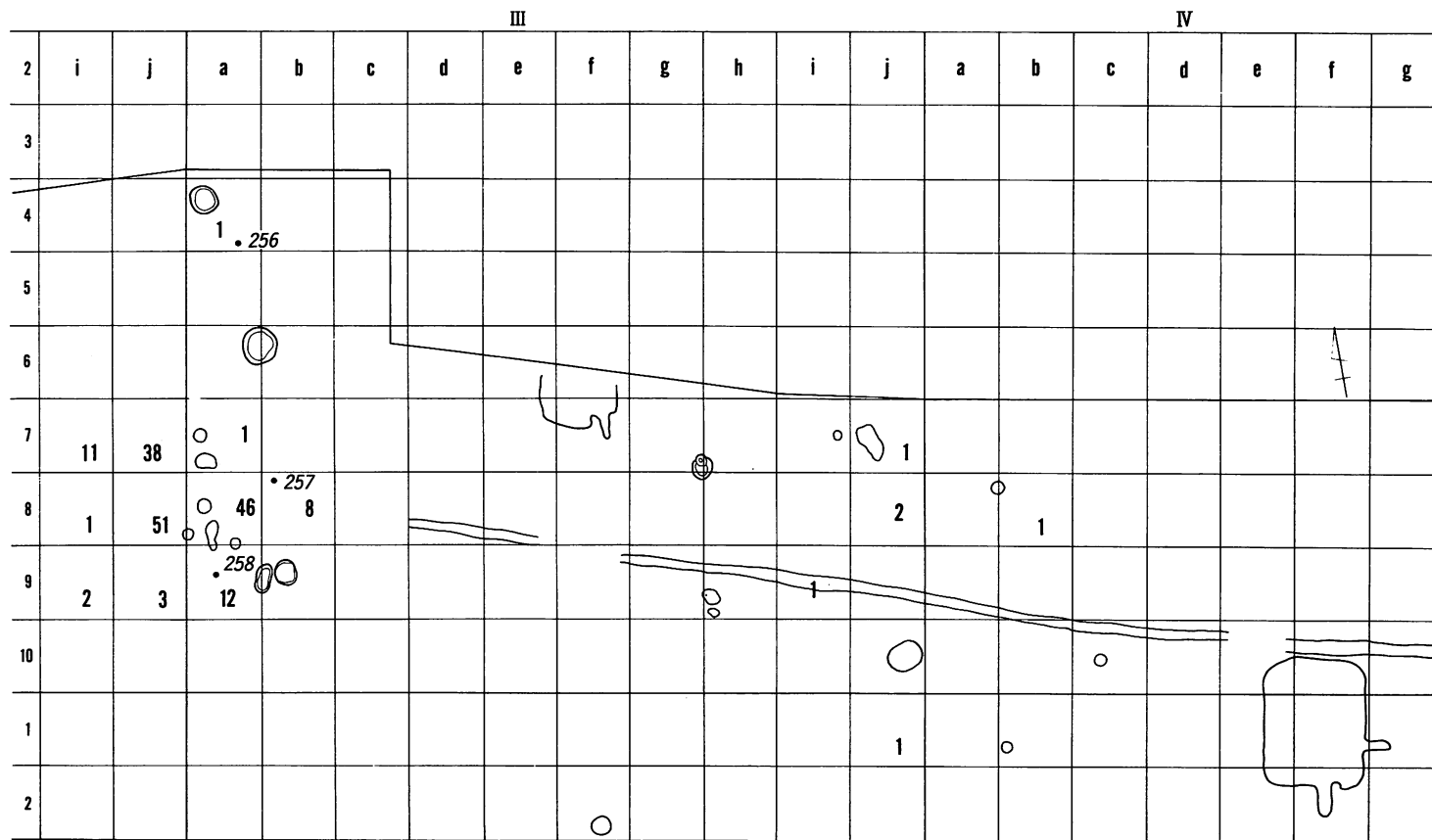
石鏃（182～190）	石皿（221～223）
石匙（192～193）	磨石（224～231）
石篋（194）	敲石（232～237、240）
不定形石器（195～211）	凹石（241～248）
石核（212）	砥石（249、251～253）
石斧（213～217）	石棒（250）
石鋏（218～220）	石製品（254）

金属類は255の1点のみ出土している。重さ4.6g、径1.1cmの球状呈す鉛玉である。梅ノ木遺跡や岩崎城西遺跡でも同様のものが出土している。

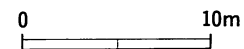
〔3〕 黒曜石（第34～35図、写真図版55）

本遺跡の西側II N、III N区を中心に出土している。とくに焼土1～3周辺が多い。最大径3cm以上の黒曜石剥片は出土地点を図面上にプロットした。大きな木根の中から取り上げたチップ類はグリット別に一括して袋詰めにした。グリット別の出土分布図を第25図に示している。実測し掲載したものは180点中22点である。全体の12.2%であるが、他はほとんどチップ類でありここでは割愛する。出土した黒曜石のうち石器とみられるものは256、257、258の3点のみである。器種はラウンドスクレーパーであり、いずれも急角度の縁部調整を施している。258は拇指状ラウンドスクレーパーと言ってよいだろう。他は母岩を打ち欠いた剥片である。自然面をのこすものは259、260、262、265、267、272、273、274、275、277の10点である。法量については石器一覧表を参照されたい。

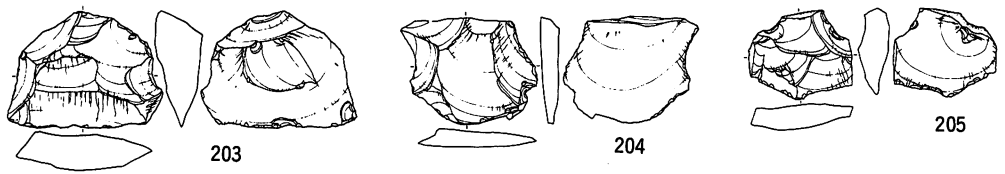
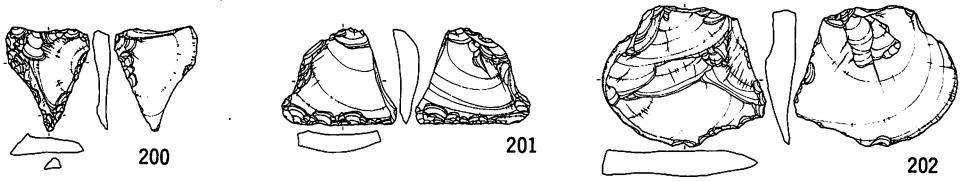
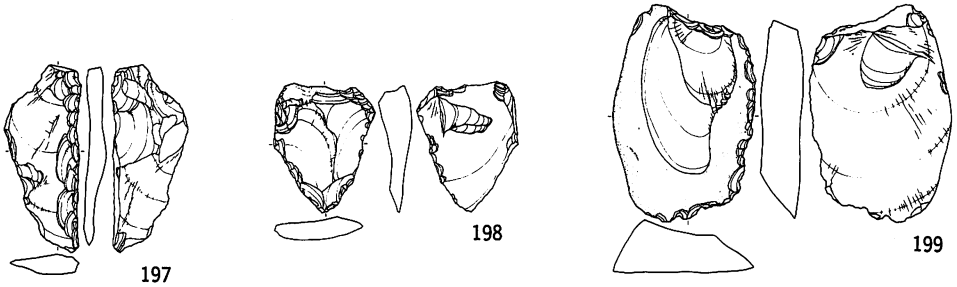
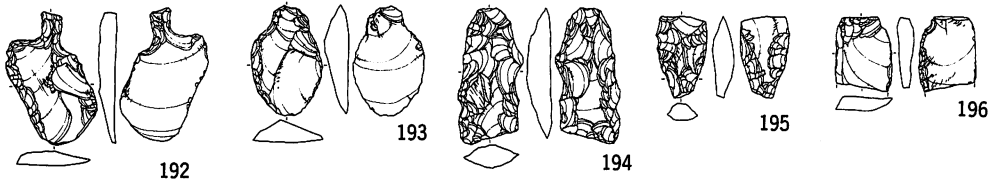
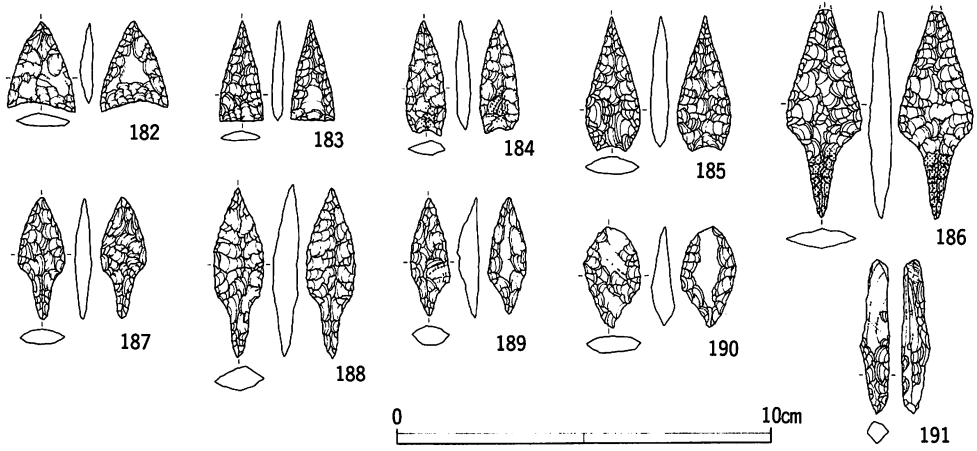
なお、黒曜石石材産地分析の結果、256（試料番号28107）、257（同28108）、258（同28109）は湯倉産（宮城県）の可能性が高いことが報告されている。1点だけ湯倉産以外のものがあるが、分析にださなかったものを含め大部分は256、257、258と同質とみられる。分析に提出した試料のうち実測図が掲載されているものは上記の3点のみである。



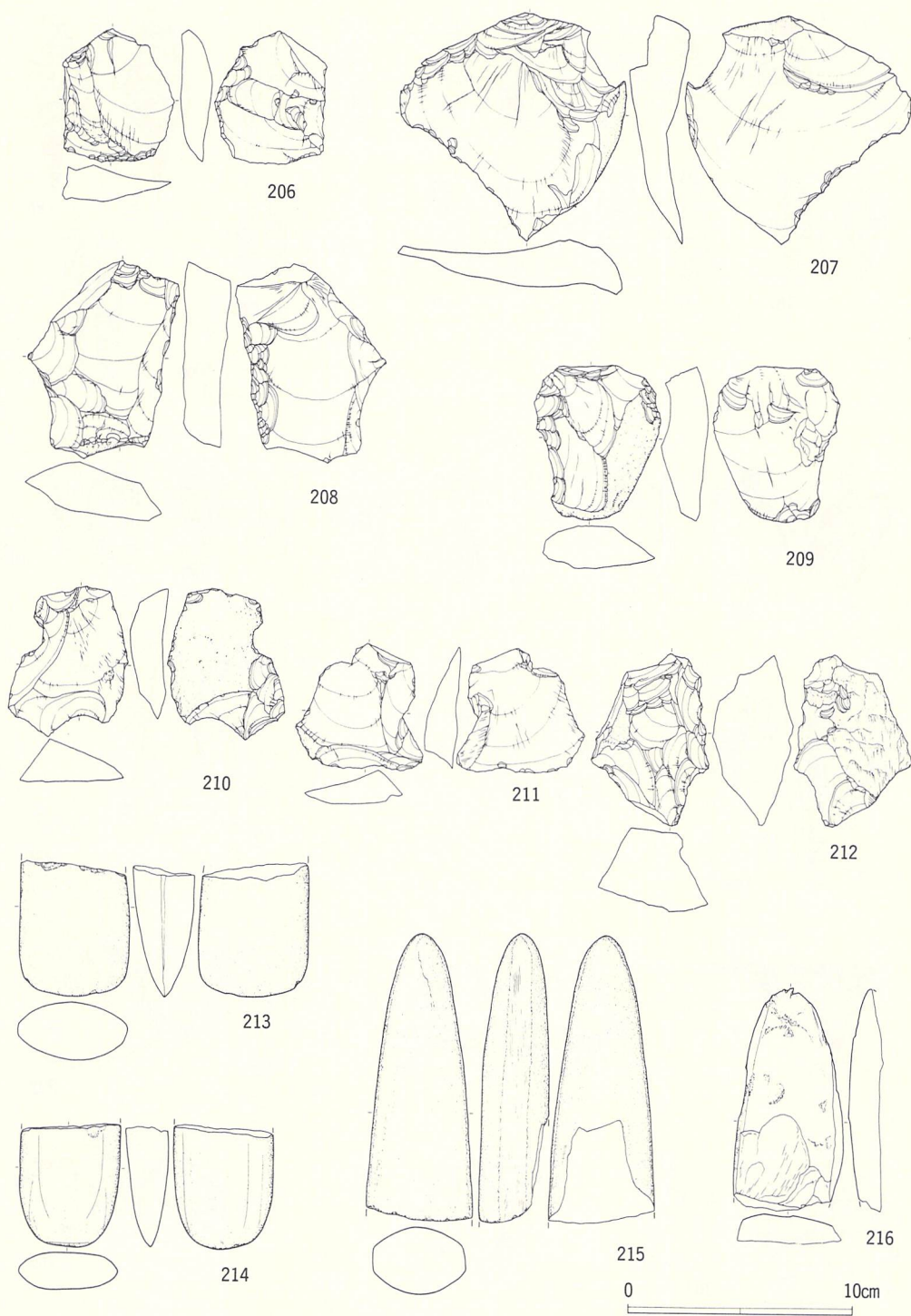
※斜体字は遺物番号



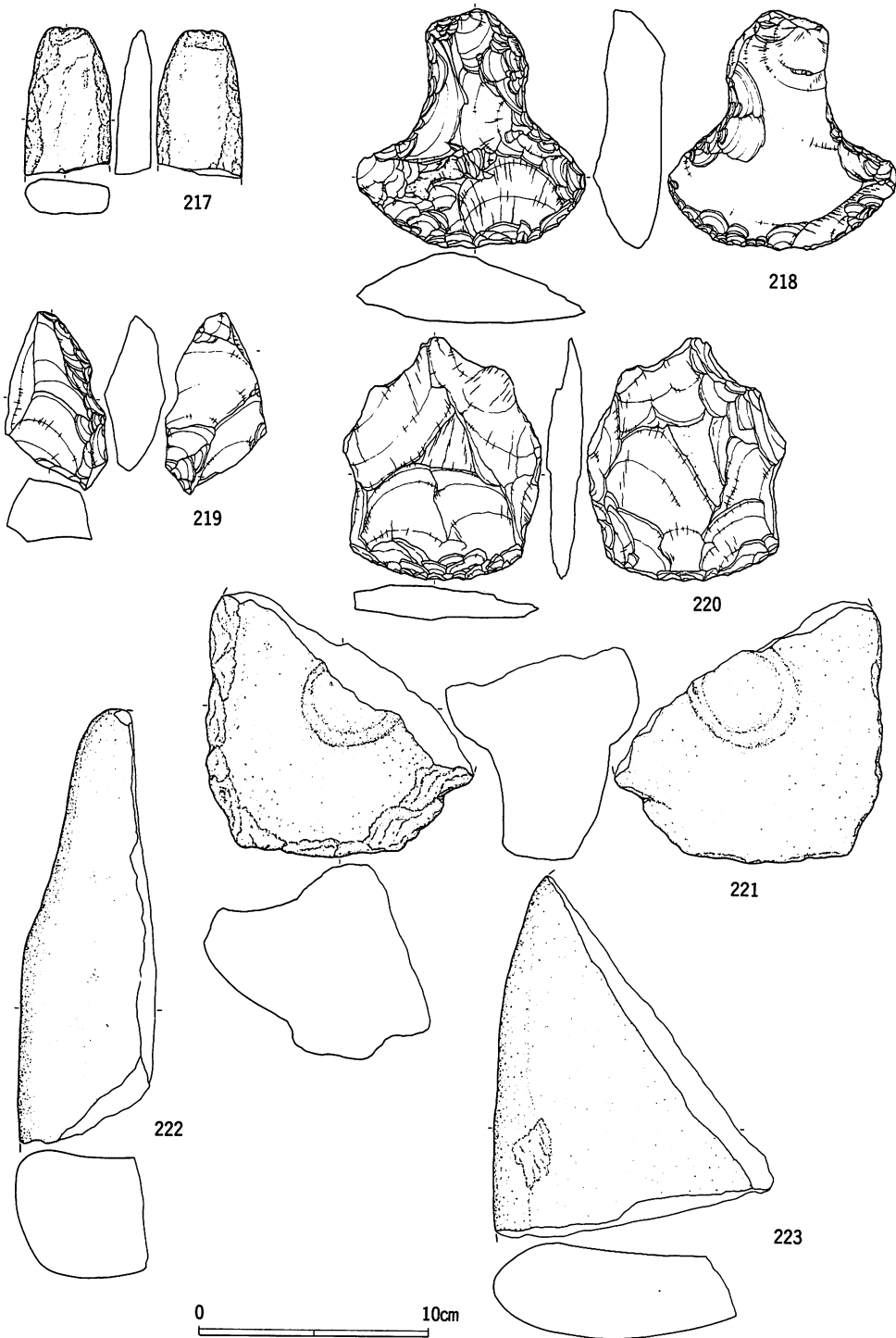
第25図 黒曜石出土分布図



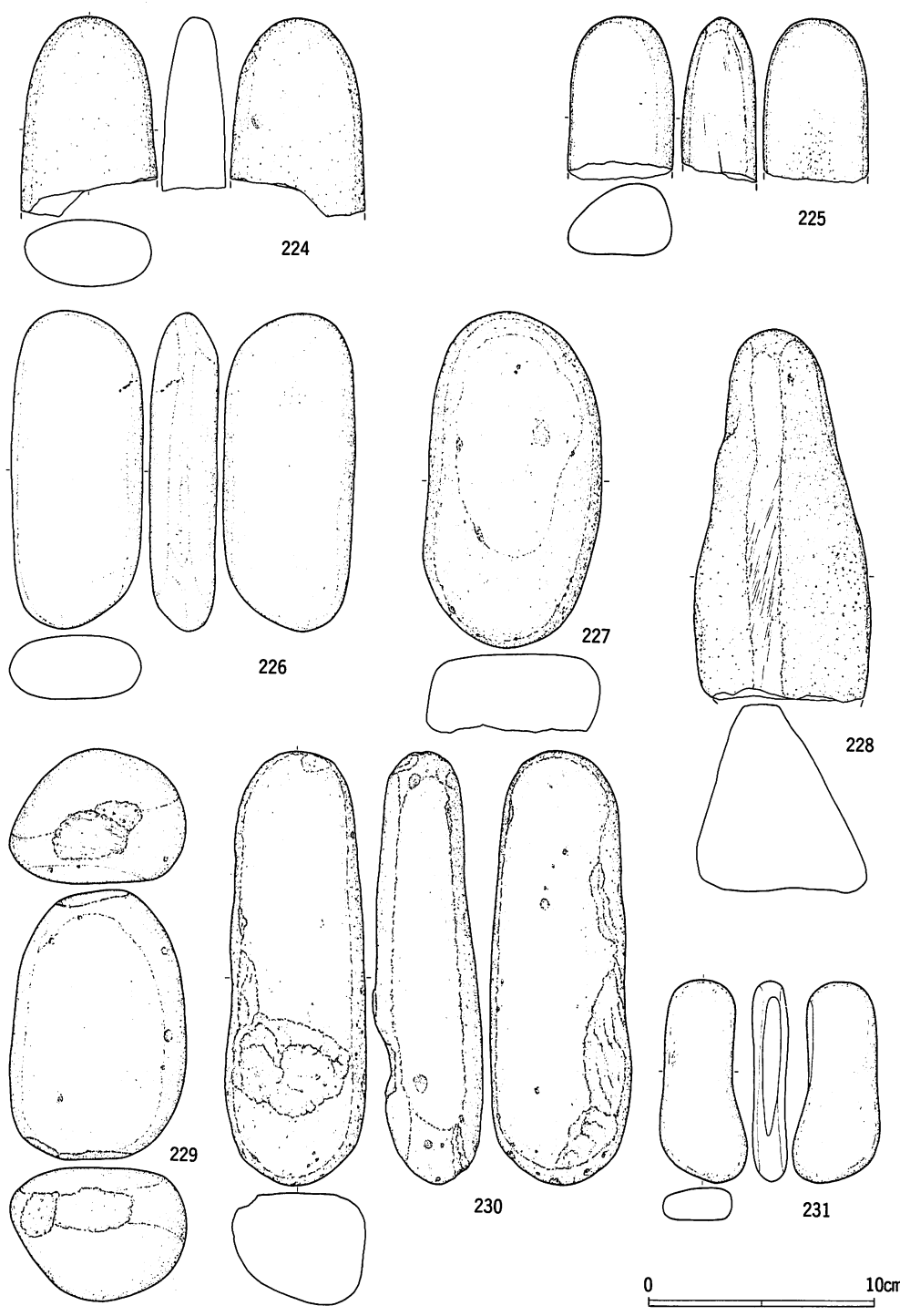
第26图 遺構外出土石器 1



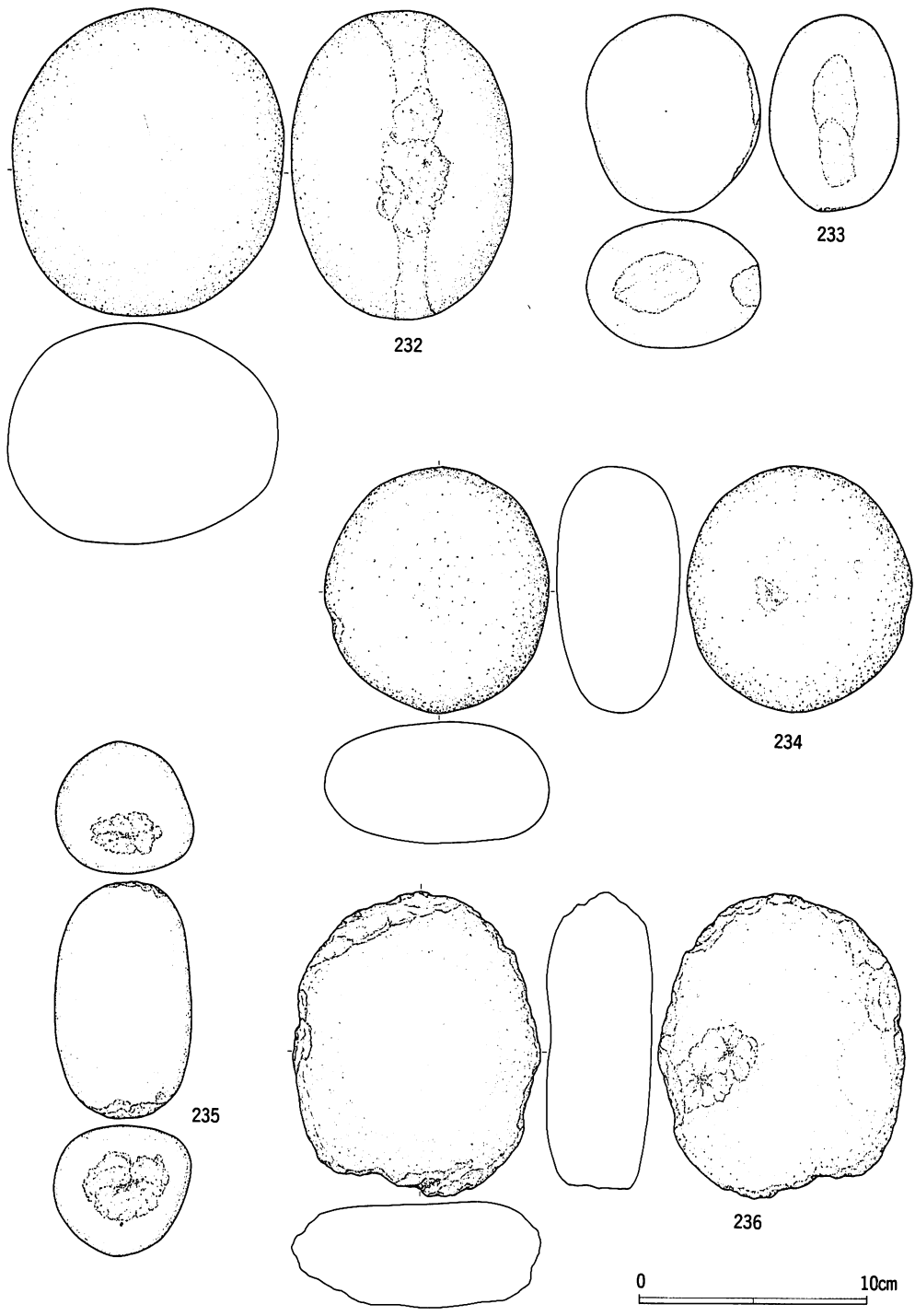
第27図 遺構外出土石器 2



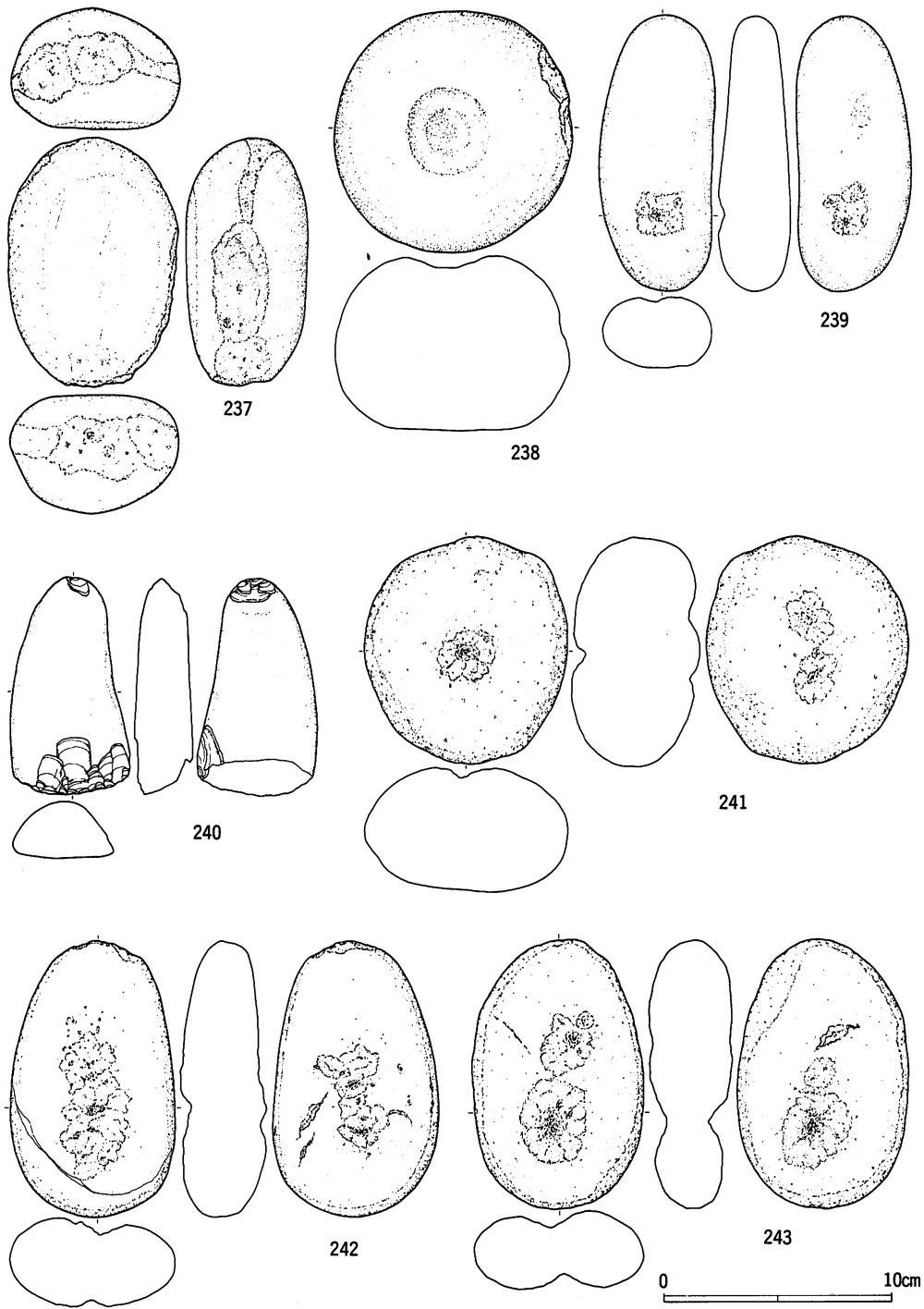
第28図 遺構外出土石器 3



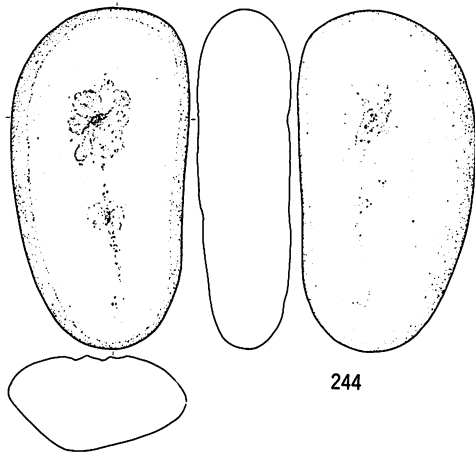
第29図 遺構外出土石器 4



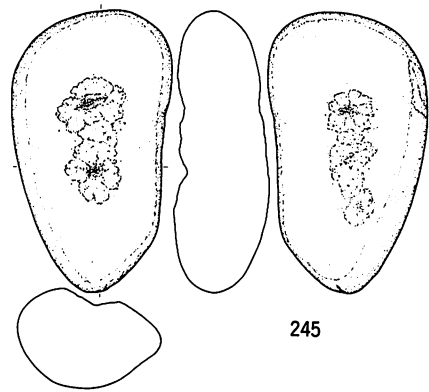
第30図 遺構外出土石器 5



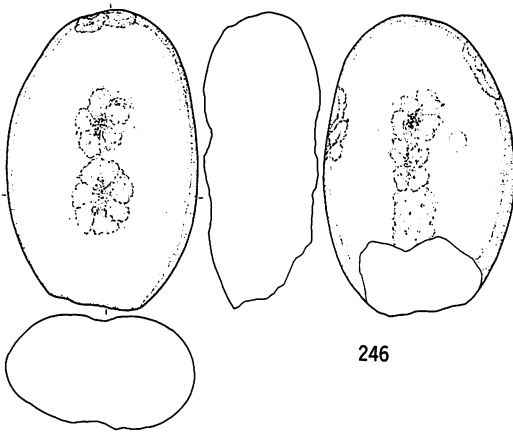
第31図 遺構外出土石器 6



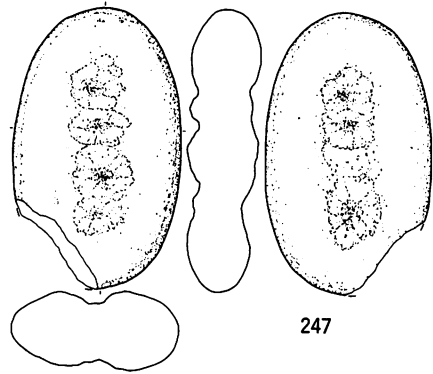
244



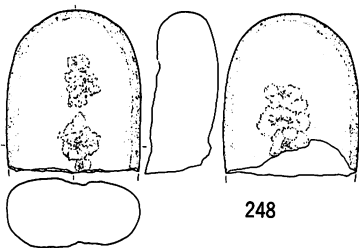
245



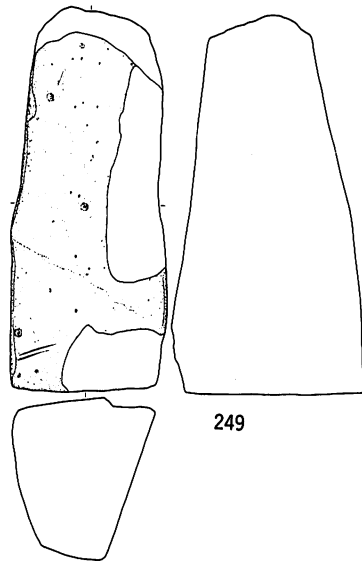
246



247



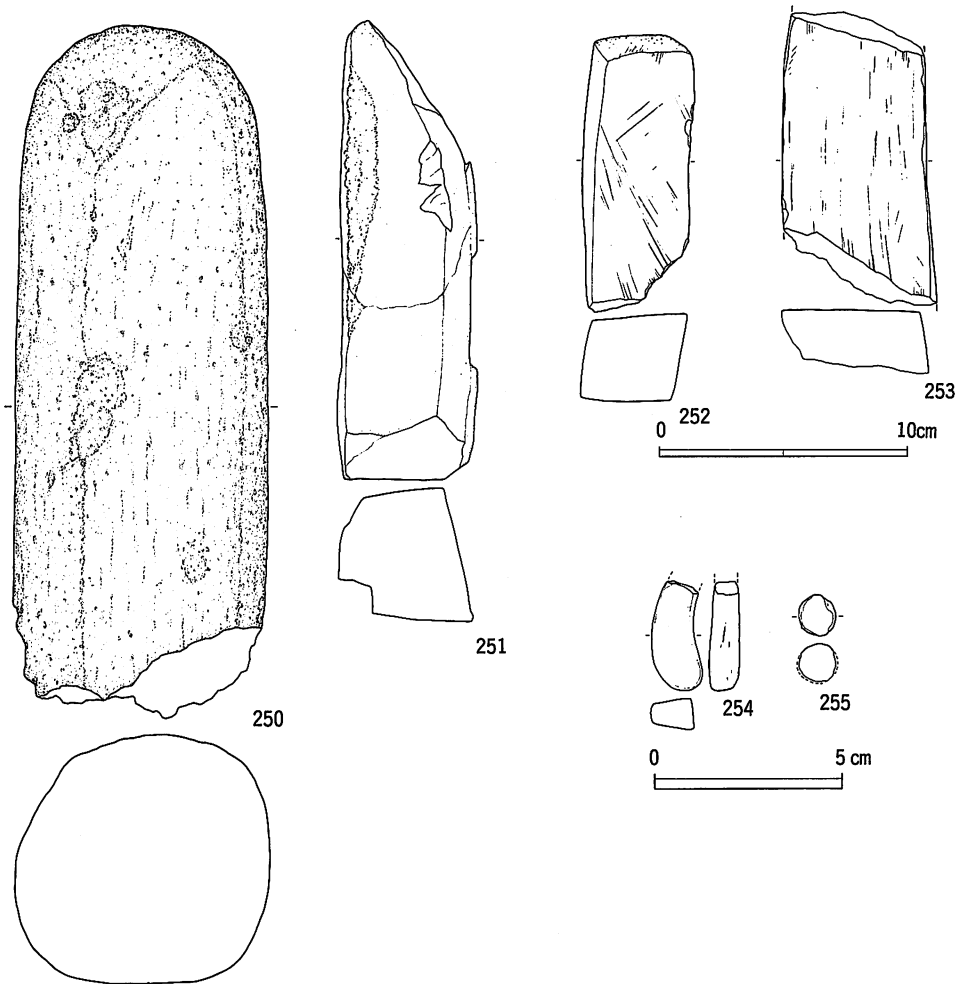
248



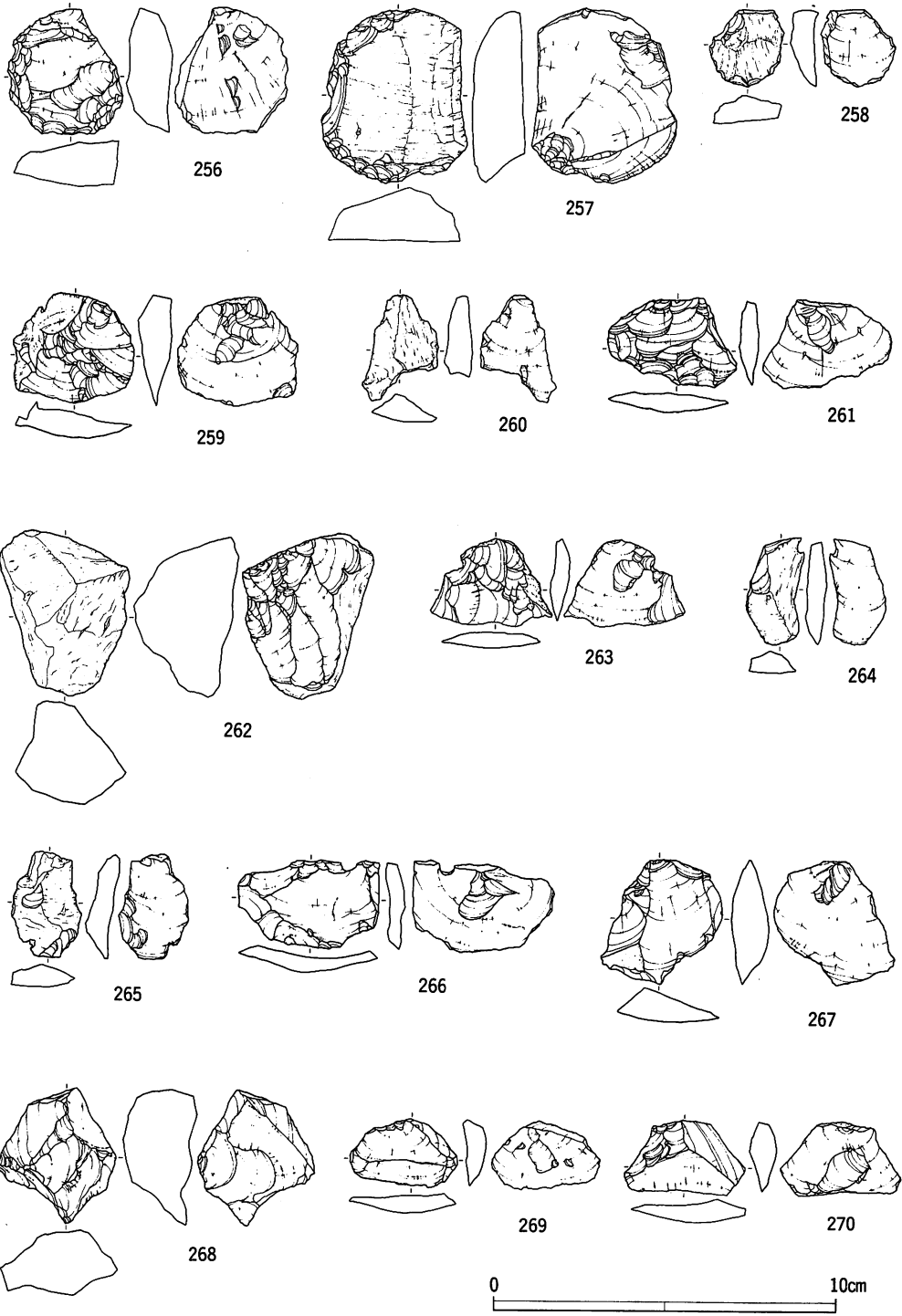
249



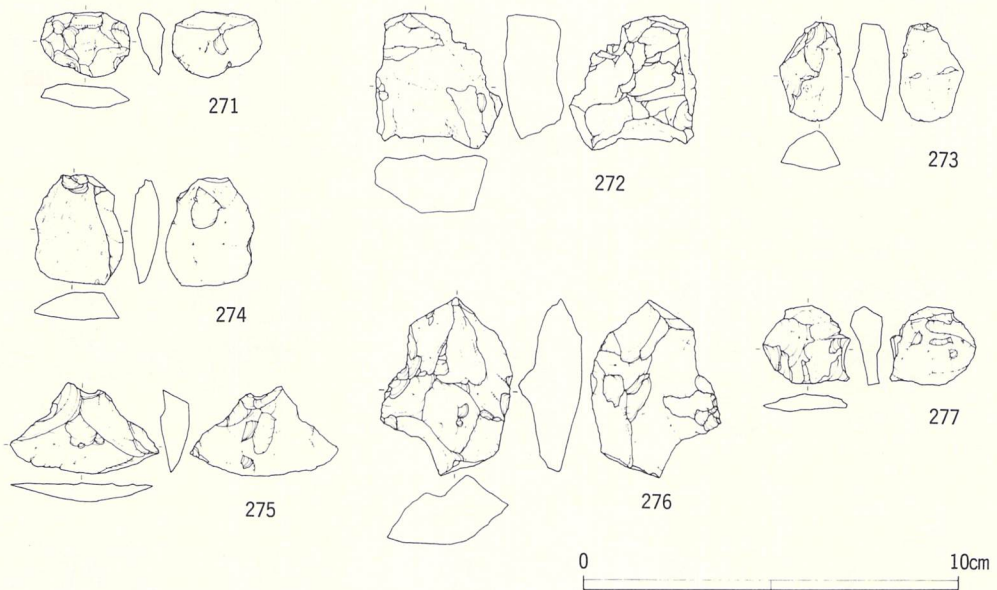
第32図 遺構外出土石器 7



第33図 遺構外出土石器 8・石製品・金属類



第34图 黑曜石 1



第35図 黒曜石 2

第5表 梅ノ木台地II遺跡 石器一覧表(1)

番号	グリット	層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	産地
182	III N10f	III	石鏃	2.4	1.8	0.4	1.1	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
183	II N5j	II	石鏃	2.7	1.2	0.3	0.8	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
184	III N9i	II下	石鏃	3.1	1.1	0.4	1.3	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
185	III S2j	II	石鏃	3.6	1.5	0.5	1.9	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
186	III N7i	II	石鏃	(5.5)	2.0	0.6	4.2	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
187	II N7a	II	石鏃	3.3	1.3	0.4	1.2	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
188	III S1e	II	石鏃	4.5	1.3	0.7	2.7	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
189	III N9a	II	石鏃	3.1	5.1	0.6	1.6	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
190	III N9a	II	石鏃	2.7	1.5	0.6	2.0	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
191	IV S2d	II上	不定形	4.1	0.7	0.6	1.8	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
192	IV S2j	II	石匙	5.4	3.7	0.8	11.1	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
193	V S2d	I	石匙状	4.5	2.9	1.0	11.1	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
194	III S1f	II	石筥	5.5	2.6	1.0	13.3	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
195	IV N10b	II	不定形	3.3	2.1	0.9	5.9	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
196	IV N9d	II	不定形(削搔器)	3.1	2.3	0.7	5.8	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
197	III N4b	II	不定形(削搔器)	7.6	3.1	0.9	14.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
198	III N4a	II	不定形(削搔器)	5.3	5.7	1.3	23.7	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
199	III N4c	II	不定形(削搔器)	8.7	5.8	2.1	110	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
200	IV N10b	II	不定形(削搔器)	4.2	3.4	0.9	8.1	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
201	III N5c	II	不定形(削搔器)	3.9	4.7	1.0	15.4	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
202	III N9a	II	不定形(削搔器)	5.6	6.6	1.2	43.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
203	IV S1c	II	不定形(削搔器)	5.3	6.3	2.1	41.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
204	III N6c	II	不定形(削搔器)	4.3	5.5	0.8	20.7	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
205	III N5c	II	不定形(削搔器)	3.6	4.2	1.3	16.4	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
206	IV N10f	II	不定形(削搔器)	5.9	5.0	1.6	49.7	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
207	III N9a	II	不定形	10.1	10.1	2.6	175	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
208	III N9i	III	不定形	8.8	6.8	2.2	135	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
209	IV S1b	II	不定形	6.9	5.6	2.1	80.0	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
210	III S1j	II	不定形	6.7	5.3	1.9	50.8	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
211	III N9j	II	不定形	5.5	5.7	1.5	38.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
212	III N8g	II	石核	7.6	5.2	3.7	120	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
213	III N4a	II下	磨製石斧	6.0	4.9	2.7	115	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
214	III N10e	II	磨製石斧	(5.5)	4.5	1.9	75.0	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
215	III N5j	II	磨製石斧	12.8	4.7	3.0	260	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
216	III N5a	II	磨製石斧	(9.9)	4.9	1.5	90.0	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
217	III N8g	II	石斧状	(6.4)	3.7	1.5	53.5	粘板岩	夏油川上流一仙人 古生界
218	V S2f	II下	石鏃	10.5	10.0	3.1	230	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統
219	III N7j	II	石鏃	8.0	4.5	2.8	85.0	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
220	IV N8e	II	石鏃	10.6	8.6	1.5	150	赤色凝灰岩	北上山地(東磐井) 古生界(沢内川)・胆沢川上流
221	V S1b	II	石皿	11.5	11.7	8.4	660	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
222	III S2j	II	石皿	(18.9)	(5.8)	5.6	830	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
223	II N5i	II	石皿	15.8	12.2	4.3	930	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
224	III N10e	II	磨石	8.8	6.0	3.0	200	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
225	III N8a	II	磨石	(7.2)	4.7	3.3	160	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
226	III N9a	II	磨石	14.0	5.8	3.0	380	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
227	IV S1j	II	磨石	14.8	7.9	3.5	580	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
228	IV N10f	II	磨石	(16.5)	7.8	8.3	1340	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
229	II N6j	II	磨石	12.0	7.8	5.9	865	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
230	III N8f	II	磨石	19.2	6.2	4.9	790	デイサイト	奥羽山地東縁(本畑一羽山) 新第三系中新統

第6表 梅ノ木台地II遺跡 石器一覽表(2)

番号	グリット	層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	産地
231	IV S1c	II	磨石	9.0	3.9	1.6	80.0	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
232	III N10c	II	敲石	13.4	11.9	9.7	2170	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
233	III S2j	II	敲石	8.6	7.7	5.7	520	半花崗岩	夏油川—仙人 中生界
234	III N9a	II	磨石	10.8	9.9	5.4	800	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
235	IV S2a	II	敲石	10.3	6.0	5.8	480	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
236	III N9c	II	敲石	13.4	10.9	4.7	1020	花崗閃綠岩	夏油川—仙人 中生界
237	II N9I	II	磨石+敲石	10.8	7.4	5.3	650	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
238	IV S1b	II	凹石(片面)	10.5	10.4	7.6	1170	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
239	III N9a	II	凹石(両面)	12.0	5.1	3.1	230	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
240	IV N10c		敲石	9.5	5.3	2.5	155	粘板岩	夏油川上流—仙人 古生界
241	III N9j	II	凹石(両面)	9.9	8.9	5.6	610	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
242	IV S1c	II	凹石(両面)	12.0	7.2	3.9	410	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
243	IV N10d	II	凹石(両面)	11.7	7.5	3.6	370	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
244	IV S2b	II	凹石(両面)	13.8	7.2	3.8	570	花崗閃綠岩	夏油川—仙人 中生界
245	IV N9d	II	凹石(両面)	11.3	6.5	4.0	350	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
246	IV N7a	II	凹石(両面)	12.1	7.6	4.7	550	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
247	III N7I	II	凹石(両面)	11.4	6.8	3.3	295	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
248	IV S1c	II	凹石(両面)	6.6	5.4	2.9	145	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
249	III N9j	II	砥石	15.5	6.4	7.9	1010	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
250	IV S2j		石棒	28.0	10.4	10.0	4500	デイスaito	奥羽山地東縁(本畑—羽山) 新第三系中新統
251	II N10j	II	砥石	18.5	5.7	5.4	600	両輝石安山岩	本畑付近 新第三系鮮新統
252	III N10e	II	砥石	11.2	4.5	3.6	260	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
253	V S1d	II下	砥石	(11.9)	6.2	2.6	220	流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統
254	IV S2d	II上	石製品	(3.0)	1.4	0.8	3.1	綠色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
256	III N4a	II	円形搔器	3.6	3.3	1.4	18.5	黒曜石	不詳 ※付編参照
257	III N8b N	II	円形搔器	5.1	4.2	1.6	42.6	黒曜石	不詳 ※ //
258	III N9a	II上	円形搔器	2.3	2.2	0.8	4.6	黒曜石	不詳 ※ //
259	III N8a	II下	剝片	3.2	3.5	1.0	8.3	黒曜石	産地・時代不詳
260	III N8j N		剝片	3.1	2.2	0.9	3.9	黒曜石	産地・時代不詳
261	II N9i N		剝片	2.6	3.8	0.6	4.6	黒曜石	産地・時代不詳
262	IV S1a	II上	剝片	4.9	3.8	3.0	44.2	黒曜石	産地・時代不詳
263	II N4i N		剝片	2.6	3.6	0.6	3.5	黒曜石	産地・時代不詳
264	II N8j N		剝片	3.1	1.7	0.7	3.1	黒曜石	産地・時代不詳
265	II N8j N		剝片	3.1	2.1	1.0	4.5	黒曜石	産地・時代不詳
266	II N8j	II	剝片	2.6	4.1	0.7	6.0	黒曜石	産地・時代不詳
267	II N8j N		剝片	3.6	3.5	1.0	11.0	黒曜石	産地・時代不詳
268	II N8i N		剝片	4.0	3.4	2.2	20.5	黒曜石	産地・時代不詳
269	II N7j N		剝片	2.0	3.2	0.7	3.1	黒曜石	産地・時代不詳
270	II N7j N		剝片	2.1	3.5	0.8	4.4	黒曜石	産地・時代不詳
271	II N8j	II下	剝片	1.8	2.4	1.8	2.6	黒曜石	産地・時代不詳
272	II N7j		剝片	3.6	3.4	1.6	18.3	黒曜石	産地・時代不詳
273	II N7j	II	剝片	2.7	1.7	1.0	4.0	黒曜石	産地・時代不詳
274	II N8j N		剝片	2.9	2.4	0.7	5.8	黒曜石	産地・時代不詳
275	II N7j N		剝片	2.4	4.0	0.8	4.0	黒曜石	産地・時代不詳
276	II N7j	II	剝片	4.7	3.5	1.8	21.6	黒曜石	産地・時代不詳
277	II N9i N		剝片	2.1	2.3	0.9	2.8	黒曜石	産地・時代不詳

3 まとめ

〔1〕 遺構

竪穴住居跡、埋設土器、焼土遺構について簡単にまとめてみたい。

竪穴住居跡

平安時代の竪穴住居跡が調査区中央部に1棟、西北に1棟合わせて2棟が検出された。平面形は、住居跡1が隅丸長方形(7.0×5.35 m)、住居跡2は全容は不明だが、1辺4 mほどの隅丸方形と推定される。2棟とも黒褐色土面から掘り込まれ、黄褐色土面を床面としている。住居跡1はやや大型の住居跡に属する。カマドの向きは住居跡1が東カマドから南カマドに作り替えているものの、南向きという共通点がある。ただし、住居跡2は壁面隅にあり、壁面に対して直交しない。カマドおよび煙道部に河川礫を多数使用している点は、本遺跡と近い距離にある八幡館跡、本郷遺跡、八幡野II遺跡等で確認されている住居跡と共通する。遺構の時期は出土遺物の様相、埋土に灰白色火山灰が観察されることを考慮すると9世紀末から10世紀前半代と推定される。

埋設土器

調査区中央部で1基だけの検出である。弥生土器の完形の甕が正立に埋置されている。底部穿孔(焼成後)で土器内部から扁平な礫が出ている。蓋ないし重しとしてのものと思われる。骨、埋納物は出土していない。土器の時期は前期～中期と推定され、炉跡のような痕跡はなく、埋葬施設(土器棺)と考えられる。兵庫館跡でも3基の埋設土器が確認されていることから、兵庫館跡を含めた範囲が弥生時代の墓域であった可能性が高い。

焼土遺構と黒曜石の分布

調査区西側を中心として中央部にわたり11基が検出されている。黒褐色土層中で検出され、層厚は15～5 cmを測る。焼土1～5の周辺ないし検出上部からは土師器片が出土している。例えば163はIII N 7 a、140、141はIII N 8 a、156はII N 8 j、160はII N 9 jグリットからの出土である。これら土器は7世紀代前半のものともみられる。また、黒曜石の分布(第25図参照)もこの焼土1～5周辺に多くみられ、黒曜石のラウンドスクレイパー3点と剝片、チップ合わせて180点が出土している。黒曜石製遺物は秋田県寒川II遺跡等にみられるように、北海道続縄文期の遺構に関わって伴出することが報告されている。最近調査が行われた滝沢村仁沢瀬II遺跡や北上市岩崎台地遺跡においても出土が確認されている。仁沢瀬II遺跡は続縄文後半期の土壙墓が数基確認されている。そのうち1基からは6世紀と推定される土師器の甕と坏が発見され、ピット周辺から黒曜石のラウンドスクレイパーが出土している。埋土に焼土を有する土壌もある。また、北上市岩崎台地遺跡においては7世紀代の古墳7基が検出され、土師器・鉄器等の副葬品に伴い、黒曜石のラウンドスクレイパー等の石製品が主体部及び周漥から出土している。土師器の中には四角形の底部をもつものが出土している。

このように本遺跡の場合も、黒曜石製遺物、7世紀前半の土師器、四角形の底部(163)をもつ土師器の出土等、両遺跡と類似性があり、焼土1～5や黒曜石の出土分布は北海道の続縄文文化との関わりをもつものと推定される。ただし、後北式土器は出土しておらず、この焼土周辺で検出された土坑類は、検出や埋土の様子から比較的新しい時期のものと推定され、土墳墓とするには根拠がない。

〔2〕 遺物

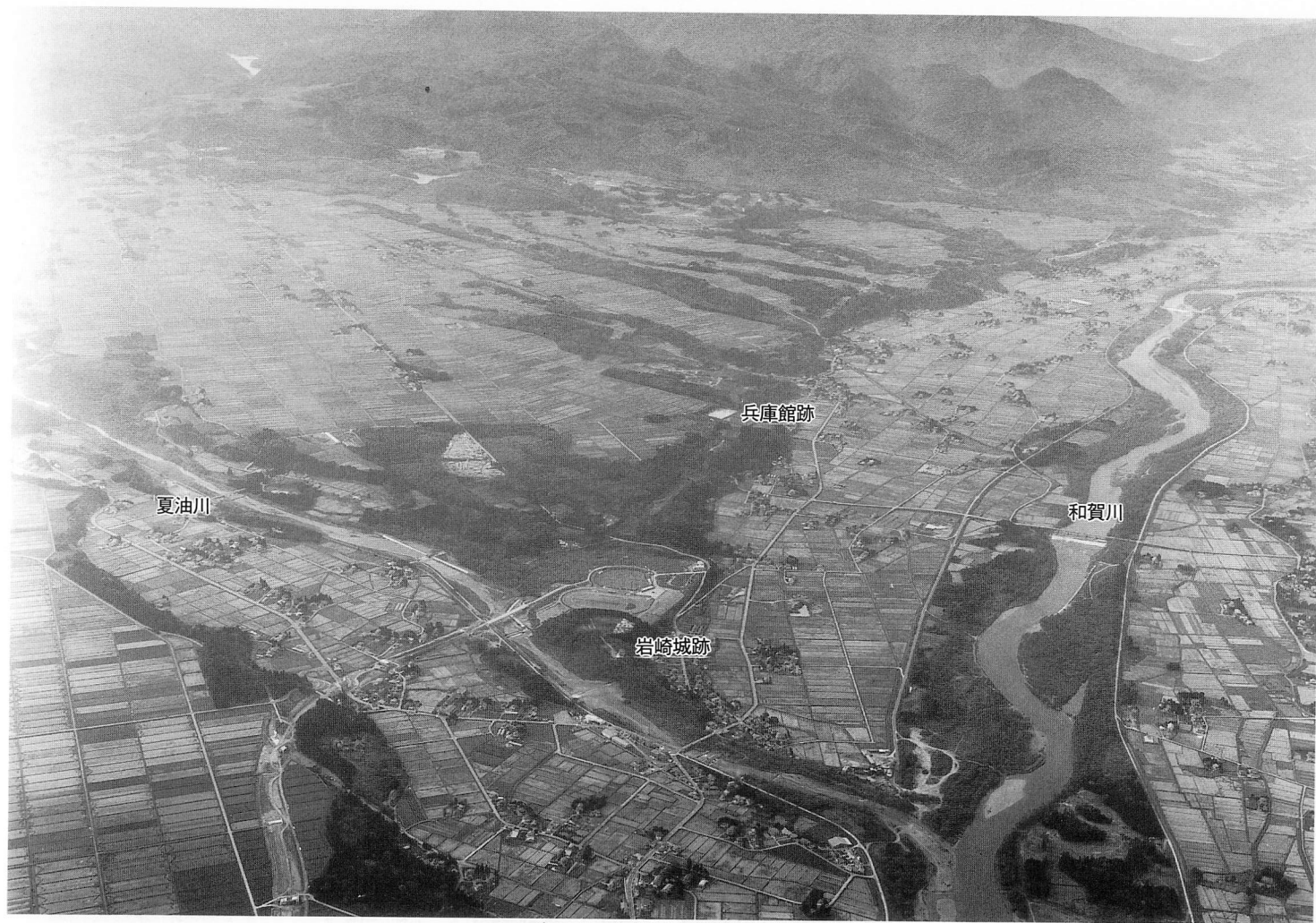
土器について簡単にまとめると次のようになる。縄文時代の中期から後期初頭の粗製の深鉢、晩期の大洞B-C期やC期の浅鉢や深鉢の破片が出土しているが少量である。多量に出土しているのは、遺構外の遺物で述べた第II群土器(晩期末葉から弥生)である。縄文晩期末葉から弥生前期の浅鉢・高坏、甕が少量、弥生中期は壺の破片が若干である。主体を占めるのは弥生後期天王山式に併行する甕である。捺糸文が口縁部や体部に横走または縦走するものが多い、一部は連弧文沈線をもつ。139は体部下半のみに捺糸文が施文されていて、いわゆる赤穴式に近い。須恵器、土師器の坏、甕は住居跡やその周辺に分布する。成形はロクロ使用がほとんどである。焼土遺構の部でも記述しているが、一部に住居跡の時期より古い遺物が若干あり、例えば141(壺)、143(壺)、144(段をもつ内黒坏)、156(頸部にだんをもつ甕)、160、161、162(外面にハケメ、ミガキが施される小型甕)などは奈良時代以前と推定される土器である。

参考・引用文献

- 小田野哲憲他(1982):『岩手の土器』。岩手県立博物館。
- 小田野哲憲(1987):「岩手の弥生式土器編年試論」。岩手県立博物館研究報告第5号。
- 小林克他(1988):『寒川II遺跡発掘調査報告書』。秋田県教育委員会。
- 佐藤信行(1976):「東北地方の後北式文化」。『東北考古学の諸問題』,東北史学会。
- 佐藤信行(1984):「宮城県内の北海道系遺物」。『宮城の研究1』,清文堂。
- 石附喜三男他(1977):『ウサクマイ遺跡-N地点発掘報告書-』。ウサクマイ遺跡調査団。
- 岩手埋文センター(1991):『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』。岩手埋文センター178集。
- 斎藤邦雄(1992):『本宿遺跡発掘調査報告書』。岩手埋文センター172集。
- 高橋与右衛門・高橋信雄(1991):「北海道の続縄文文化と東北」。『北からの視点-日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集』。
- 中村良一(1990):『岩崎城西遺跡発掘調査報告書』。岩手県埋文センター148集。
- 川村均(1991):『梅ノ木台地I遺跡発掘調査報告書』。岩手県埋文センター162集。
- 鈴木貞行・中川重紀(1991):『月館跡・八幡館跡発掘調査報告書』。岩手県埋文センター149集。
- 横山英介(1990):「擦文文化の形成と特質」。『考古学古代史論攷』,伊東信雄先生追悼論文集刊行会。

写真図版

- 兵庫館跡(1～29)
- 梅ノ木台地Ⅱ遺跡(30～55)



写真図版 1 遺跡遠景（東斜め上空から）

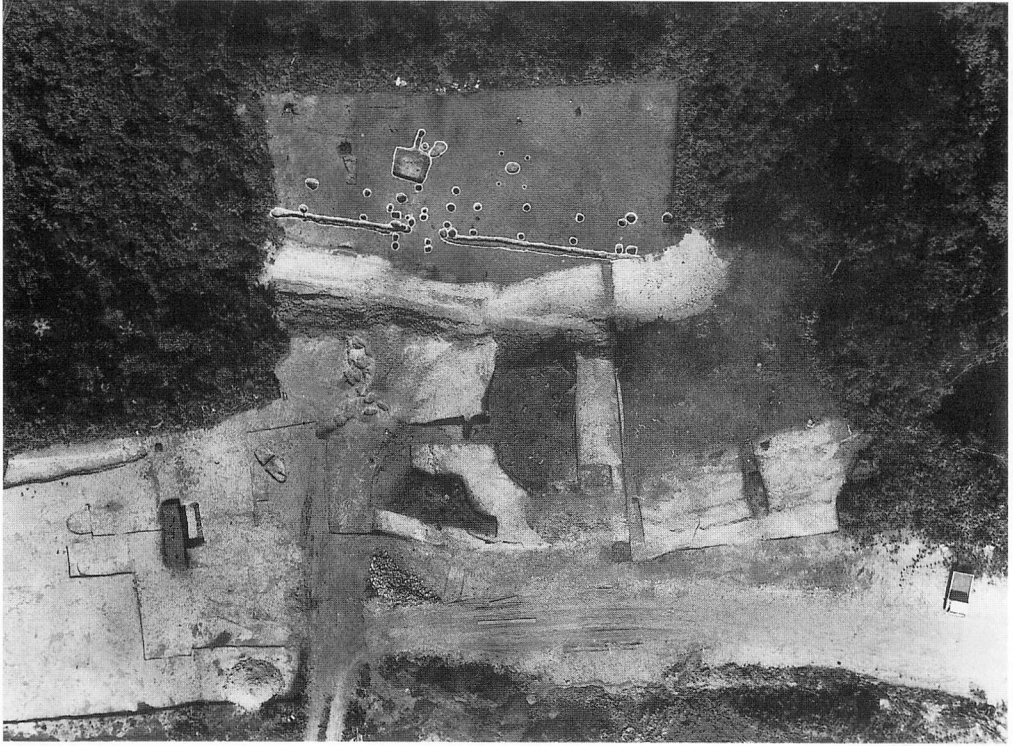


(北西から)

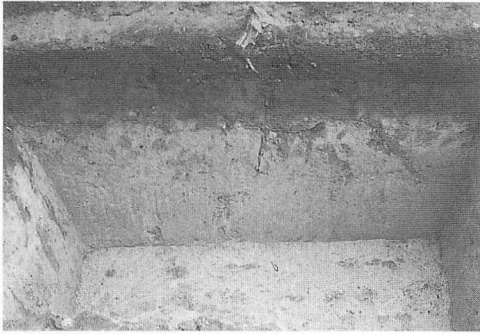


(上空から)

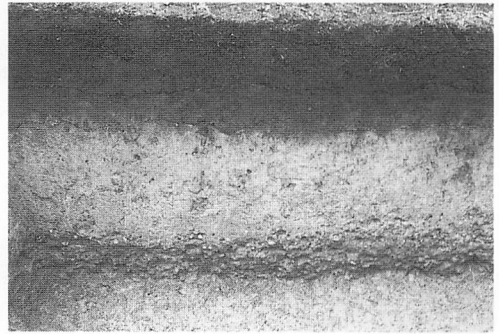
写真図版 2 遺跡現状近景



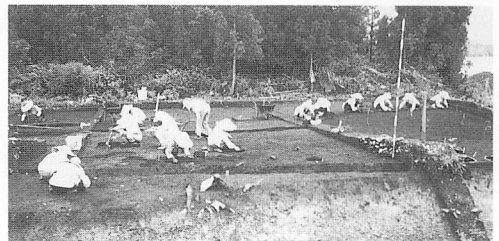
完掘状況（上空から）



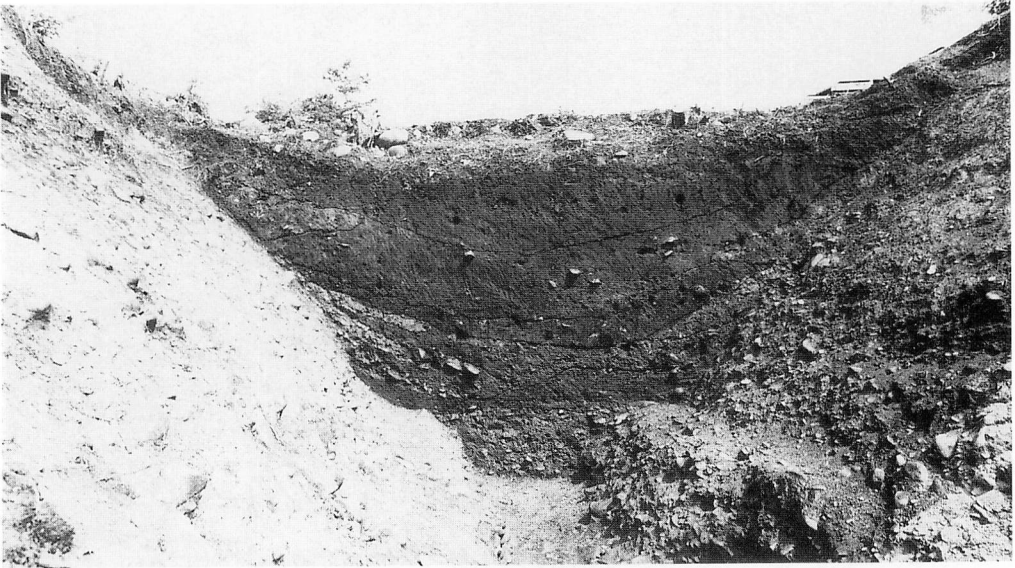
基本層序（ⅢN区）



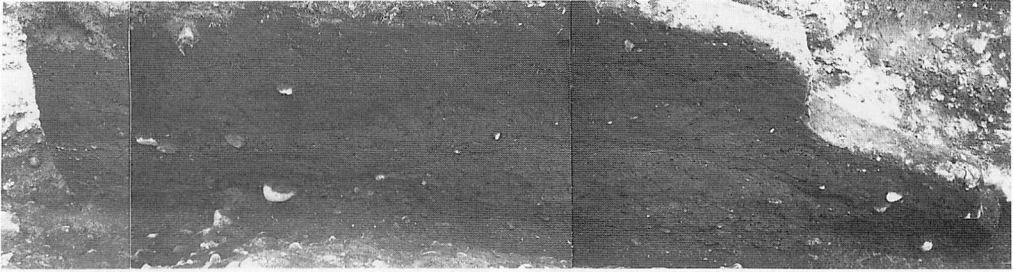
A地点



写真図版 3 完掘状況・基本層序



堀跡（南北断面）



土橋・堀跡（東西断面）



土塁 1（南から）

写真図版 4 堀跡断面・土塁(1)



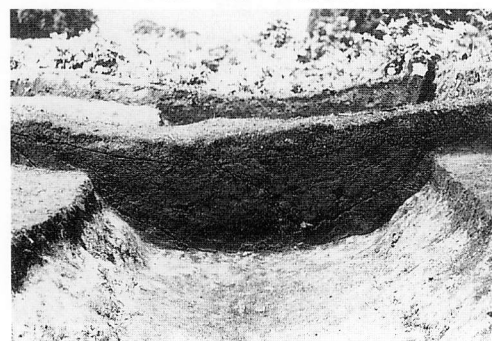
土壘 1 断面



土壘 2 に伴う溝完掘

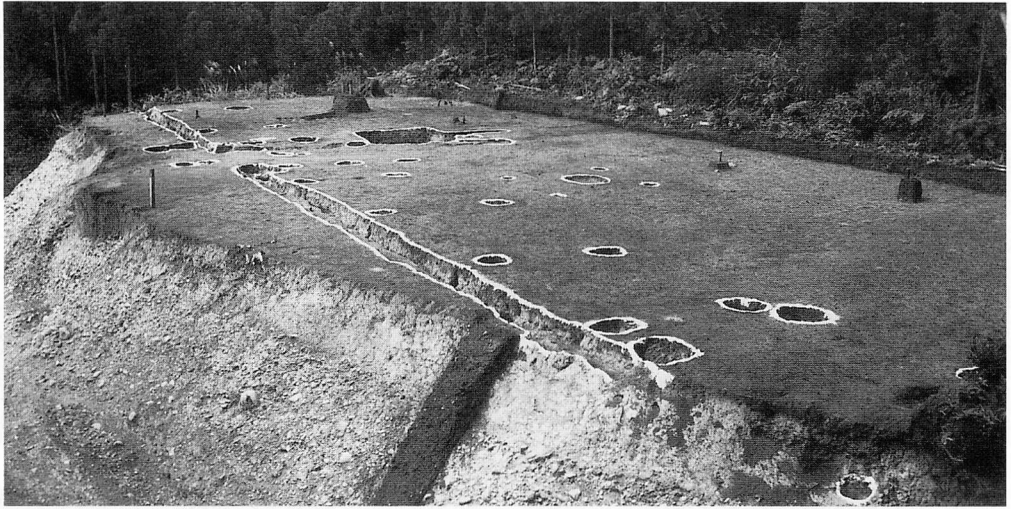


礫出土状況

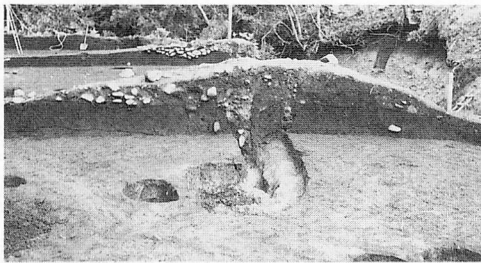


土壘 3 B

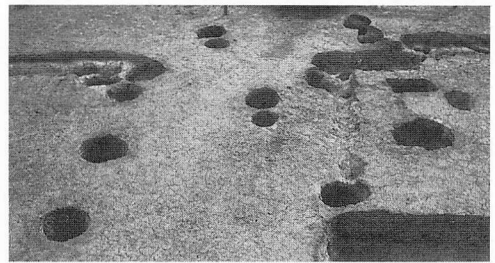
写真図版 5 土壘(2)



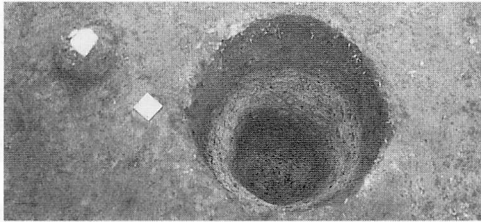
柵列 柱穴列



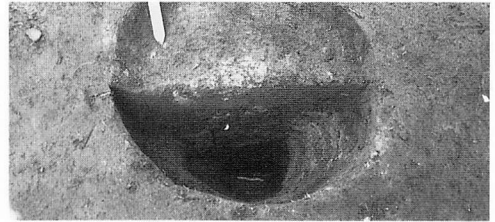
土塁 3 B 断面



門跡付近



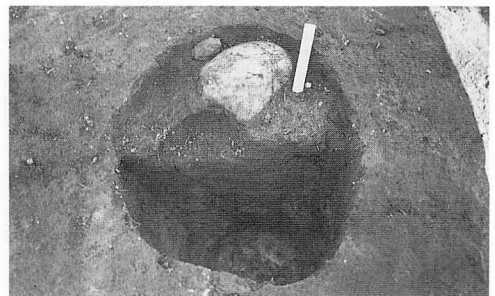
柱穴完掘



柱穴断面

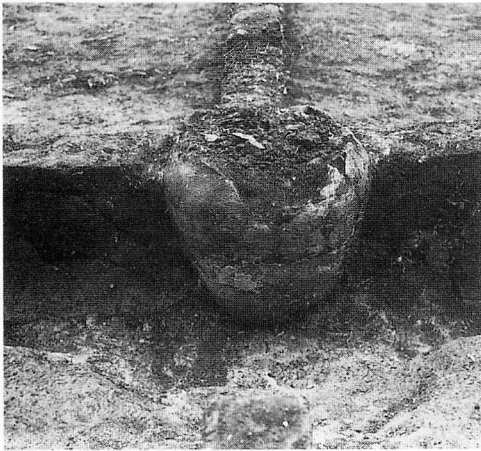


柱穴完掘



柱穴断面

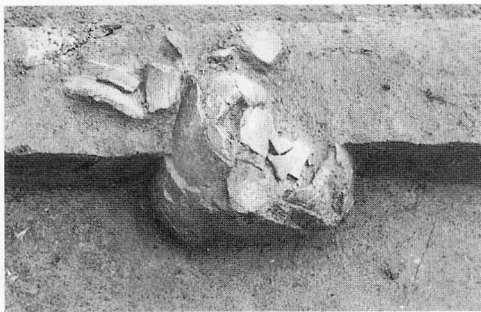
写真図版 6 柵列・柱穴列



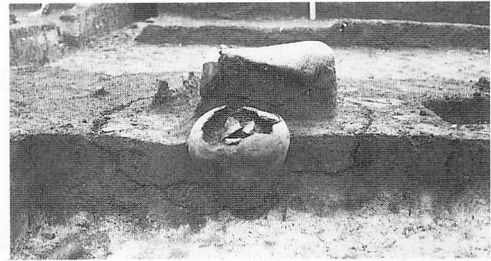
V N 10 B 埋設土器



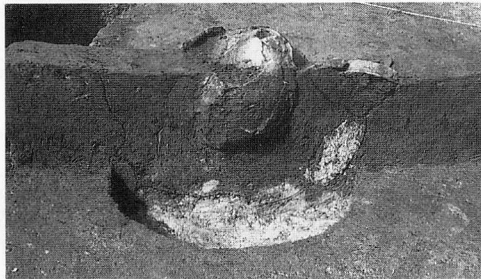
V N 9 B 埋設土器 (上から)



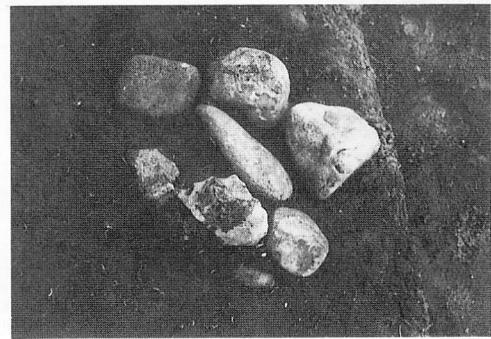
V N 5 F 埋設土器 (北から)



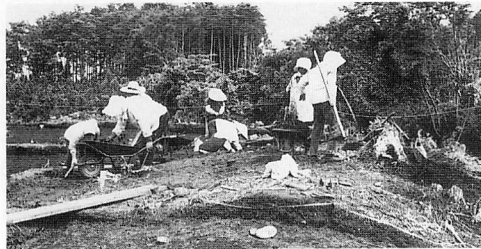
V N 9 B 埋設土器 (断面)



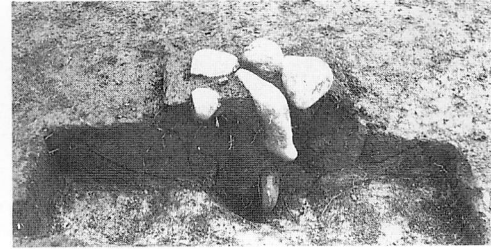
V N 5 F 埋設土器 (南から)



配石 (上から)



作業風景

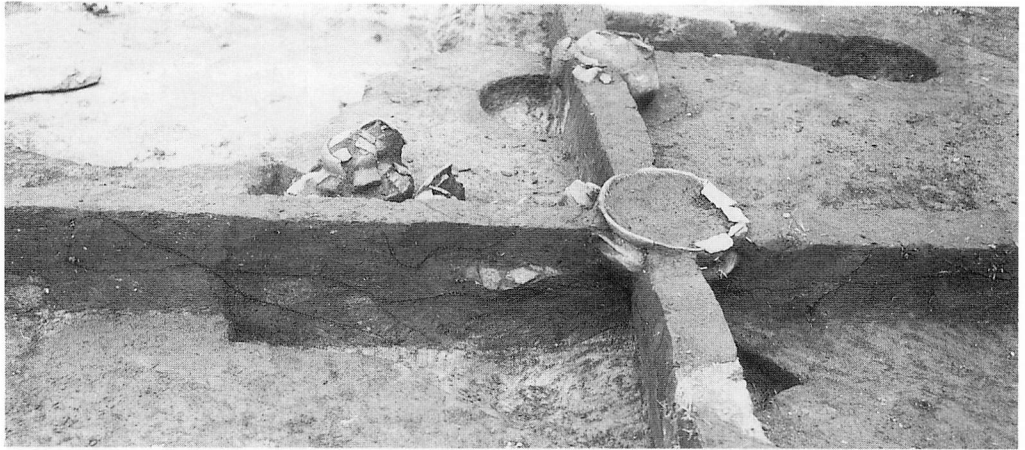


配石断面

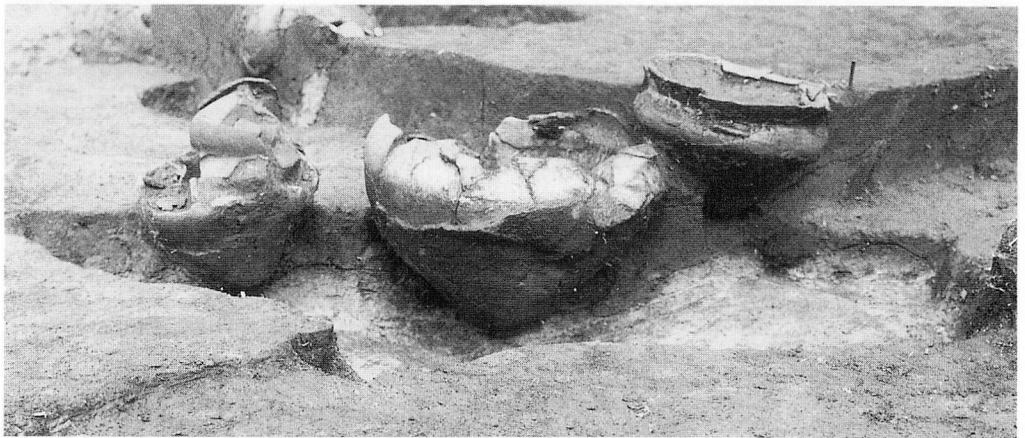
写真図版 7 埋設土器・配石遺構



検出状況

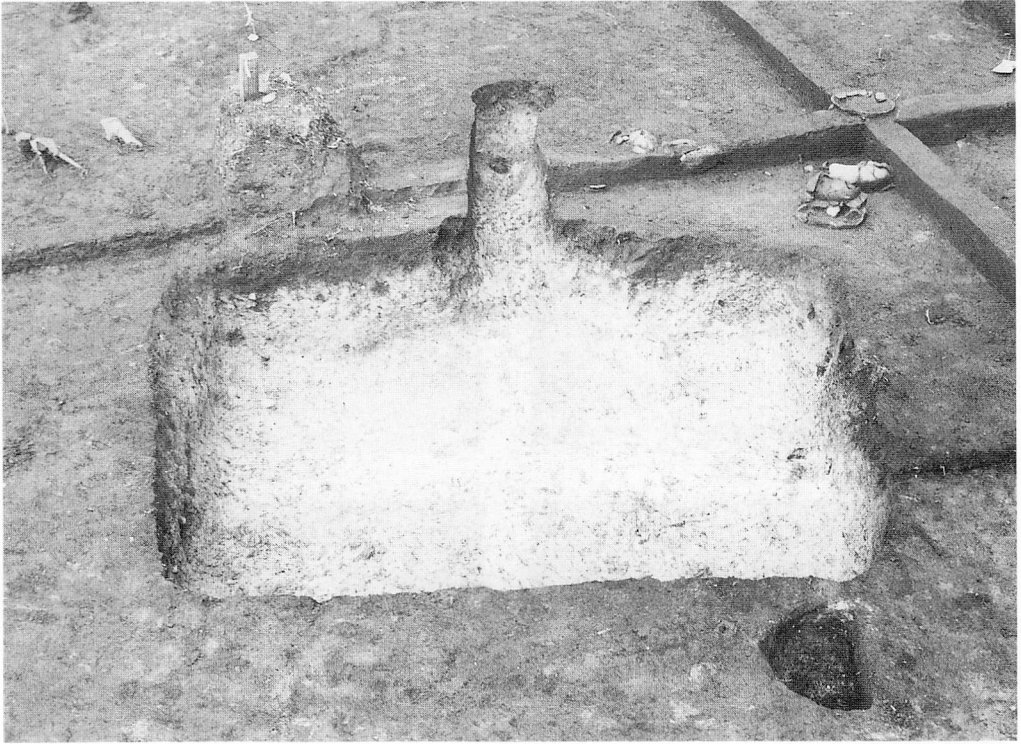


断面（東から）

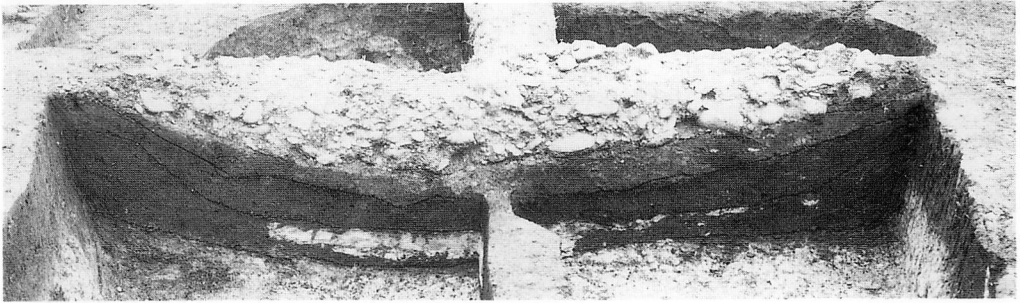


断面（南東から）

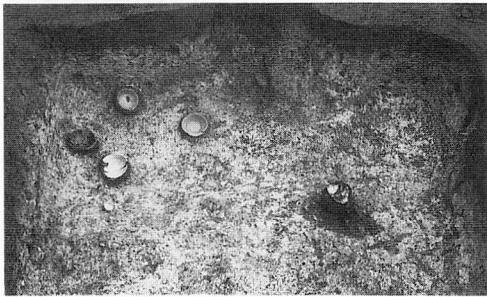
写真図版 8 墓壙



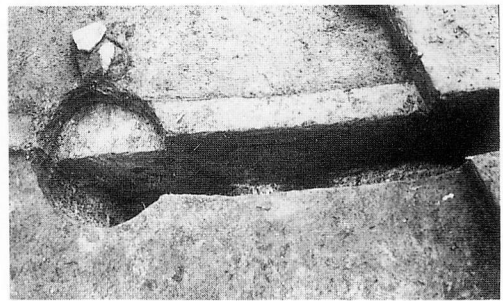
完掘



埋土断面



土器出土状況



煙道部断面

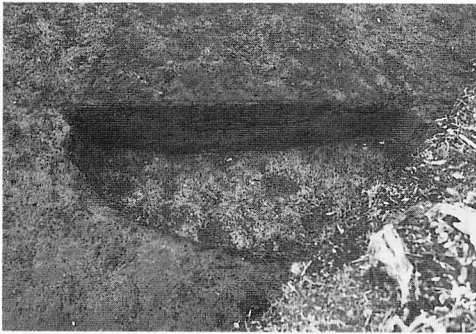
写真図版 9 竪穴住居跡



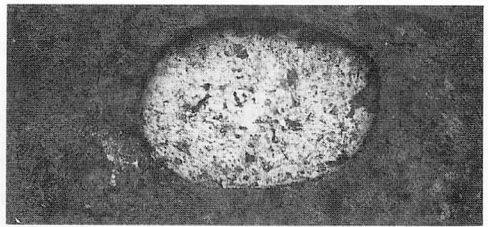
土坑 1 完掘



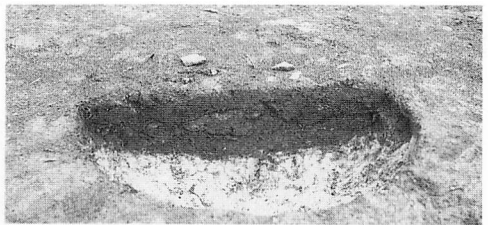
掘立柱建物跡 2



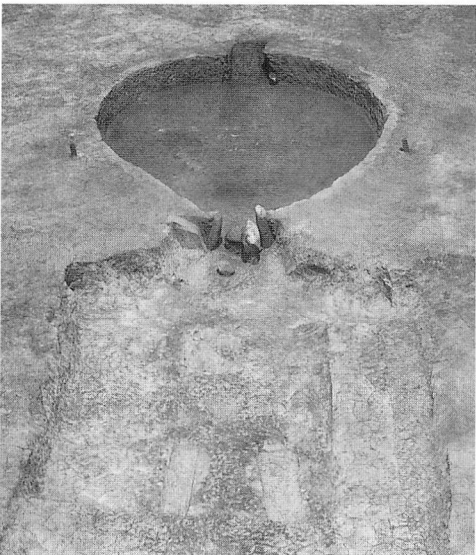
土坑 1 (埋土断面)



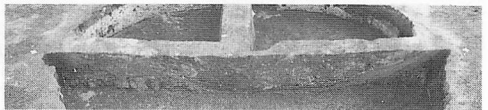
土坑 2 完掘



土坑 2 埋土断面



炭窯跡完掘

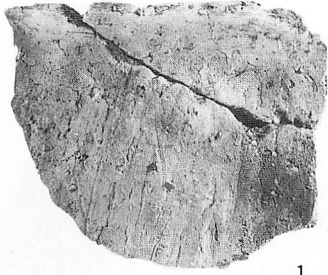


炭窯跡断面



炭窯 焚口埋土断面

写真図版10 土坑・炭窯跡



1



2



3



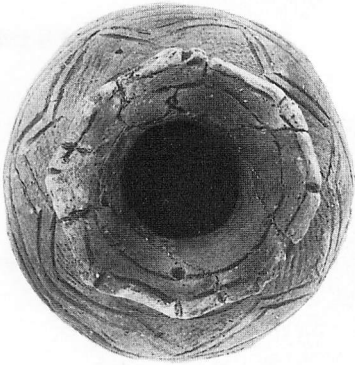
5



4



6



8



7

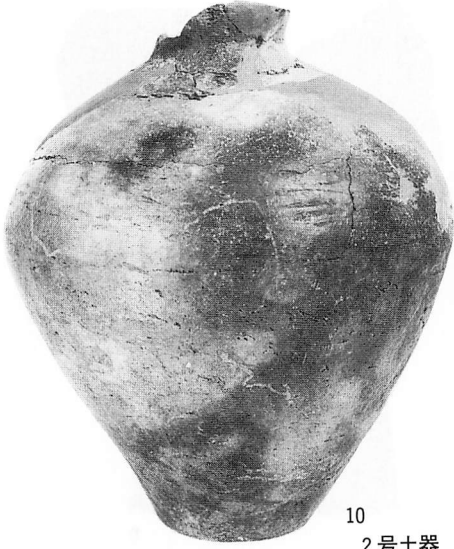
8号土器



9

1号土器

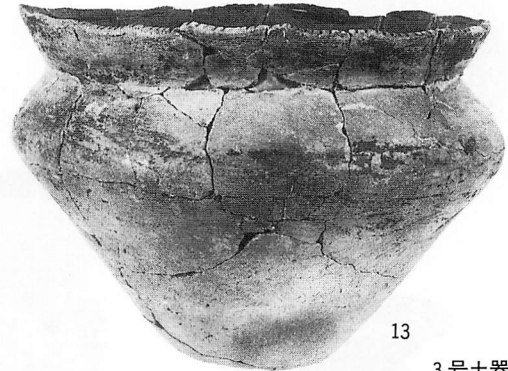
写真図版11 堀跡・V N10B埋設土器出土遺物



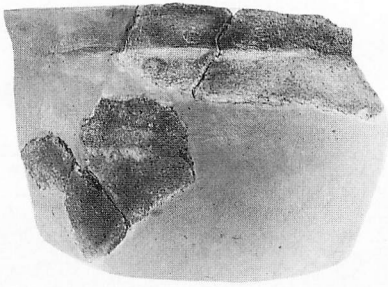
10
2号土器



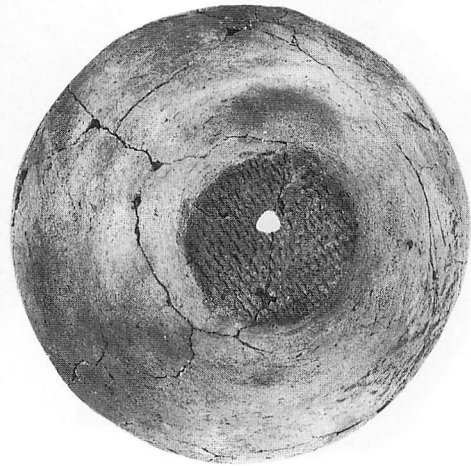
11
6号土器



13
3号土器



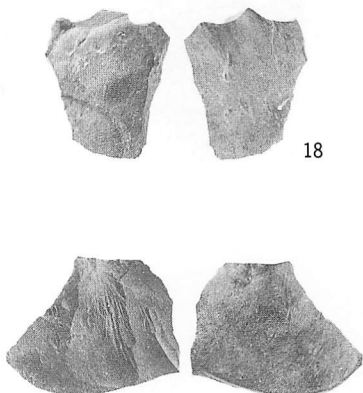
12



写真図版12 VN9B・VN5F埋設土器・墓壙出土遺物1

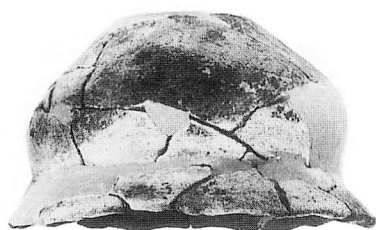


14
4号土器

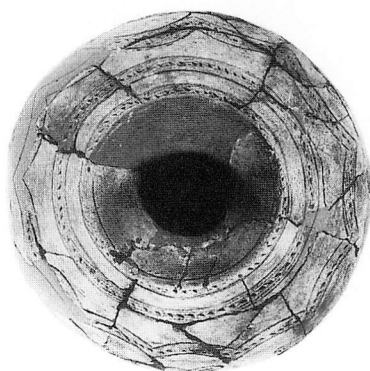


18

17



9号土器
15

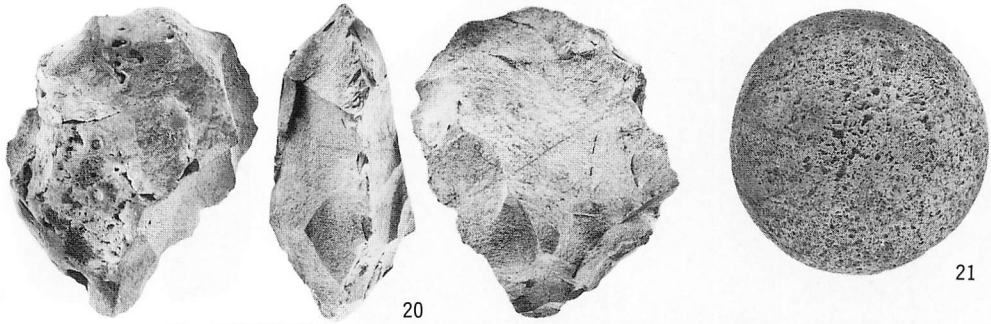


5号土器
16

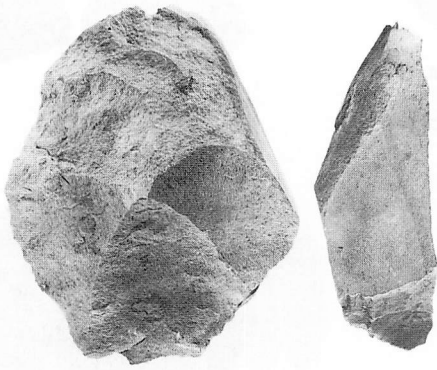


7号土器
19

写真図版13 墓壙出土遺物2・7号土器

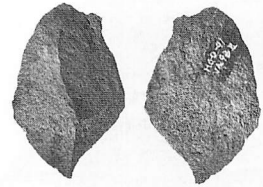


20・21は配石遺物

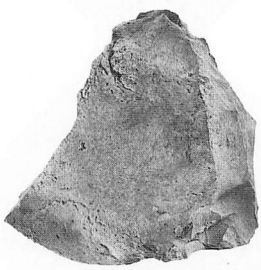


22

23



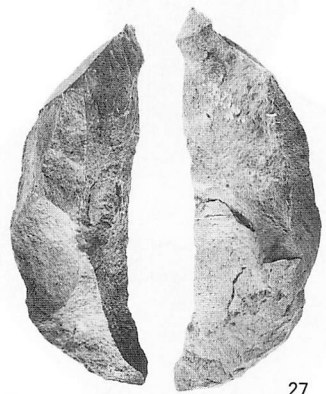
24



25



26



27

写真図版14 配石遺構・VN9B埋設土器関連遺物



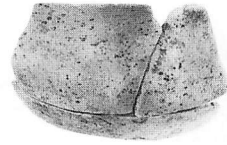
28



29



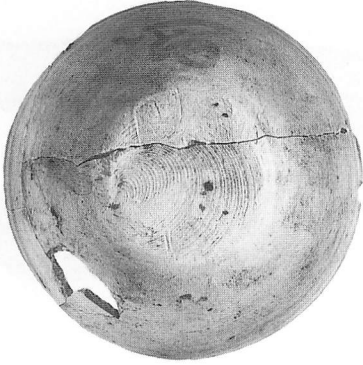
30



31



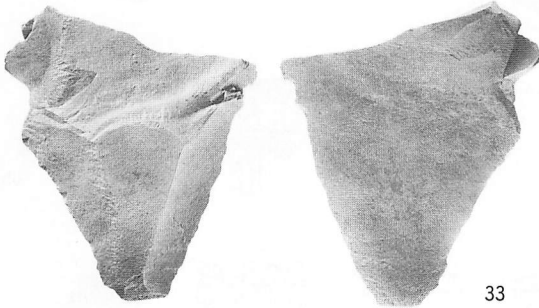
32



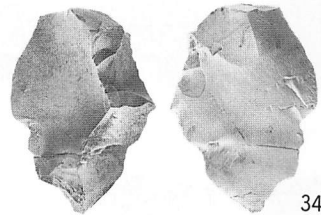
33



34

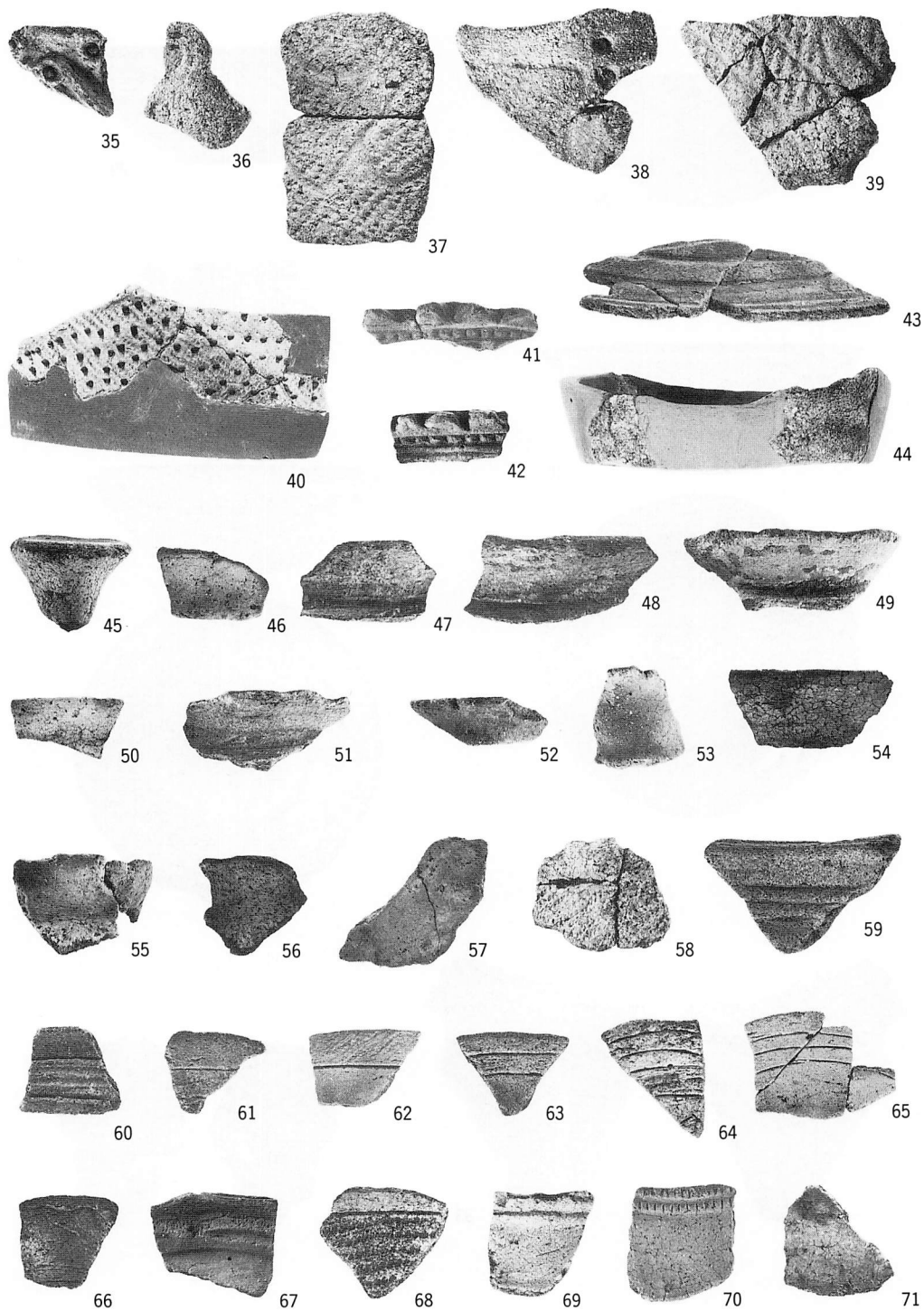


33

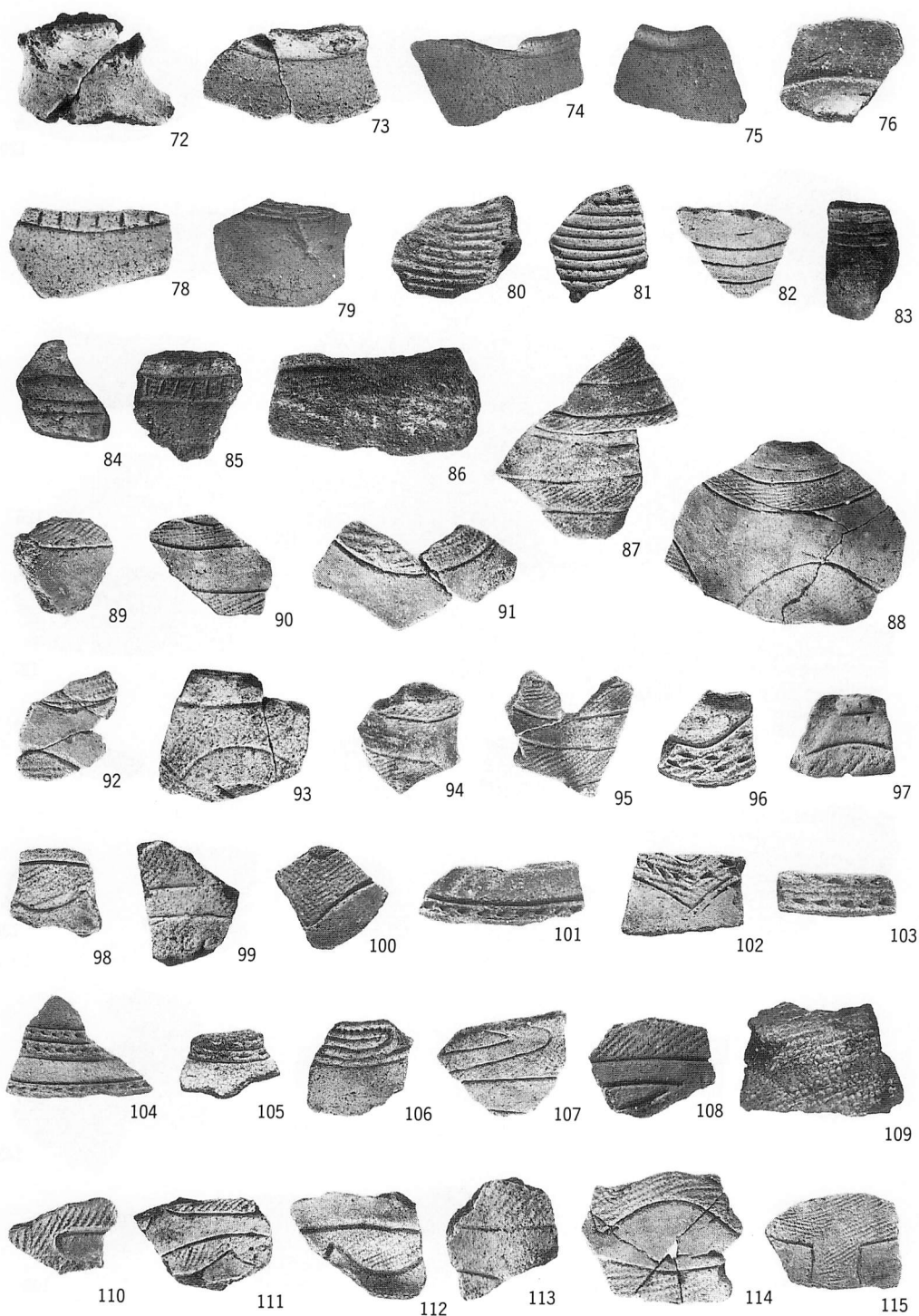


34

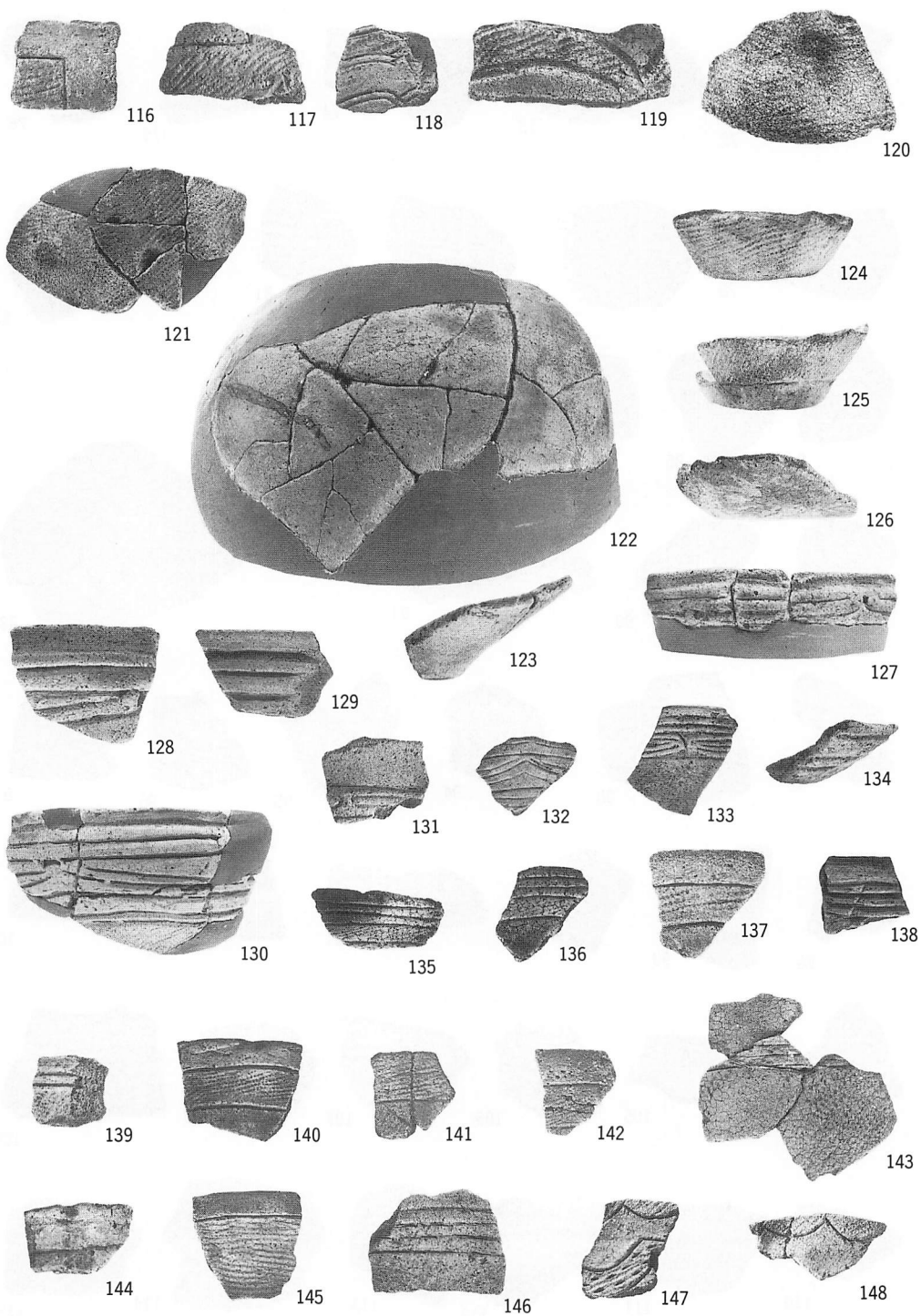
写真図版15 竪穴住居跡出土遺物



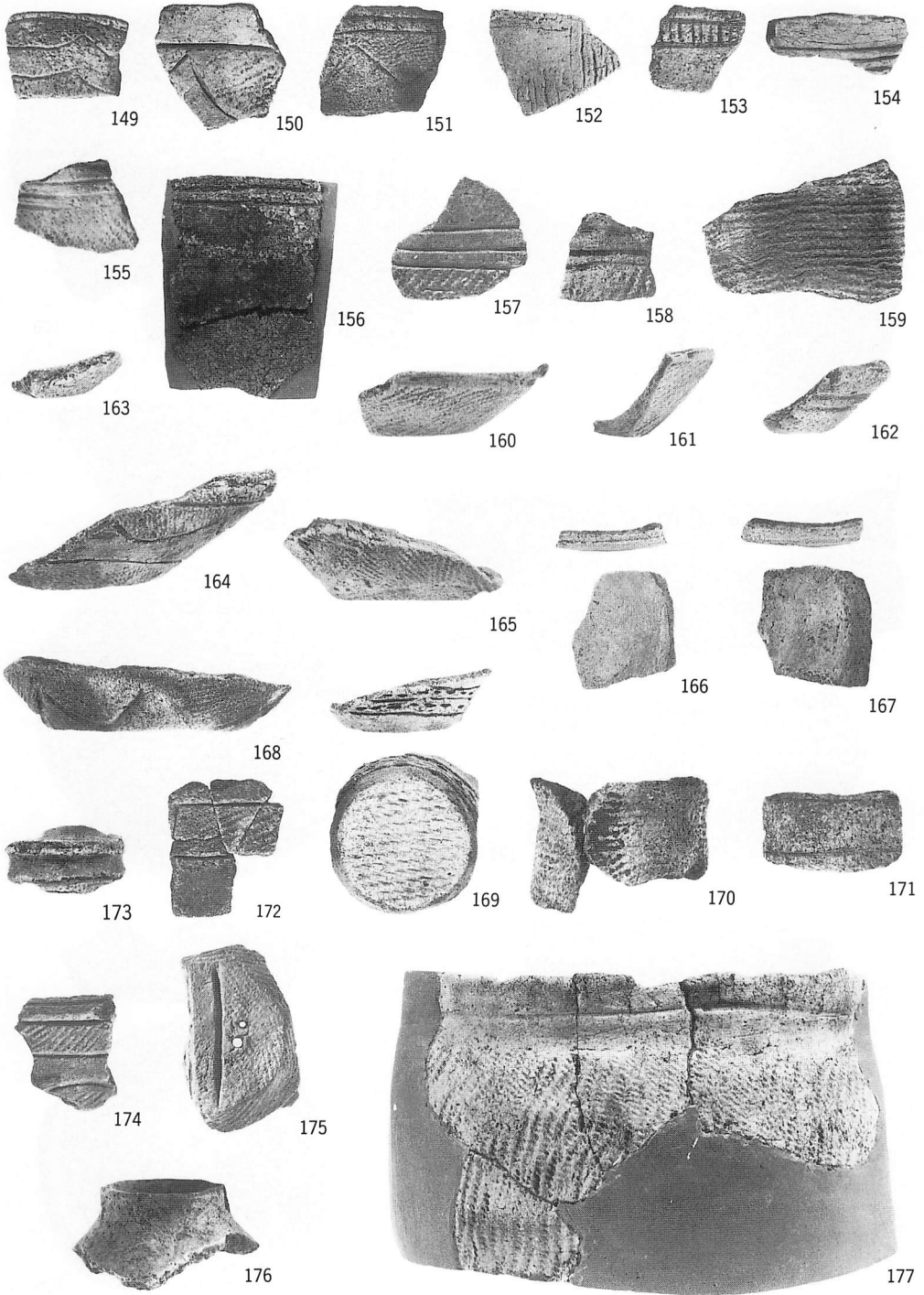
写真図版16 遺構外出土器 1



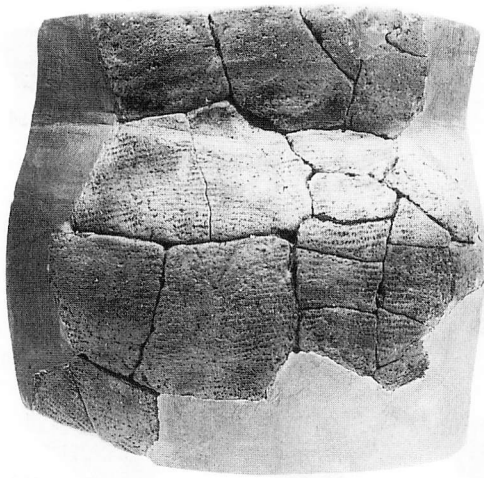
写真図版17 遺構外出土土器 2



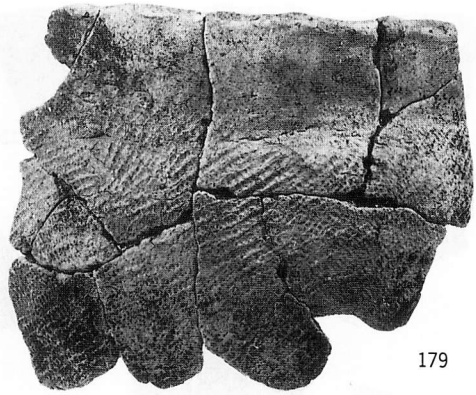
写真図版18 遺構外出土土器 3



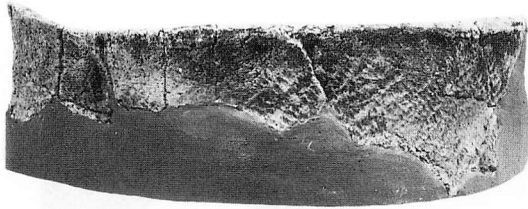
写真図版19 遺構外出土土器 4



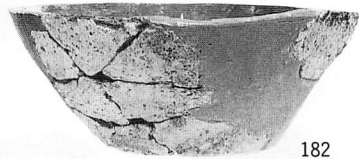
178



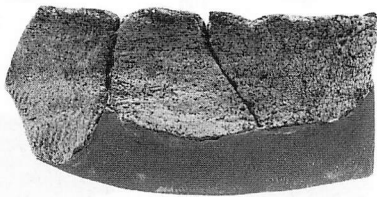
179



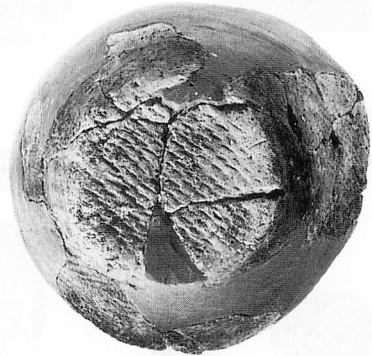
180



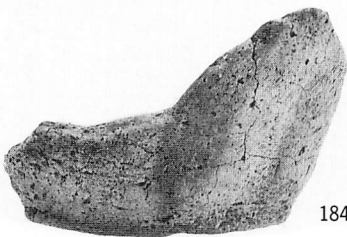
182



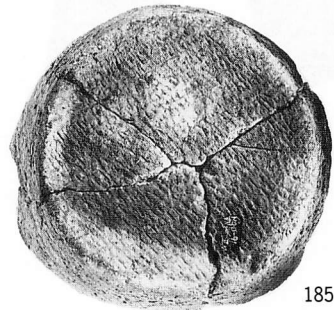
181



183

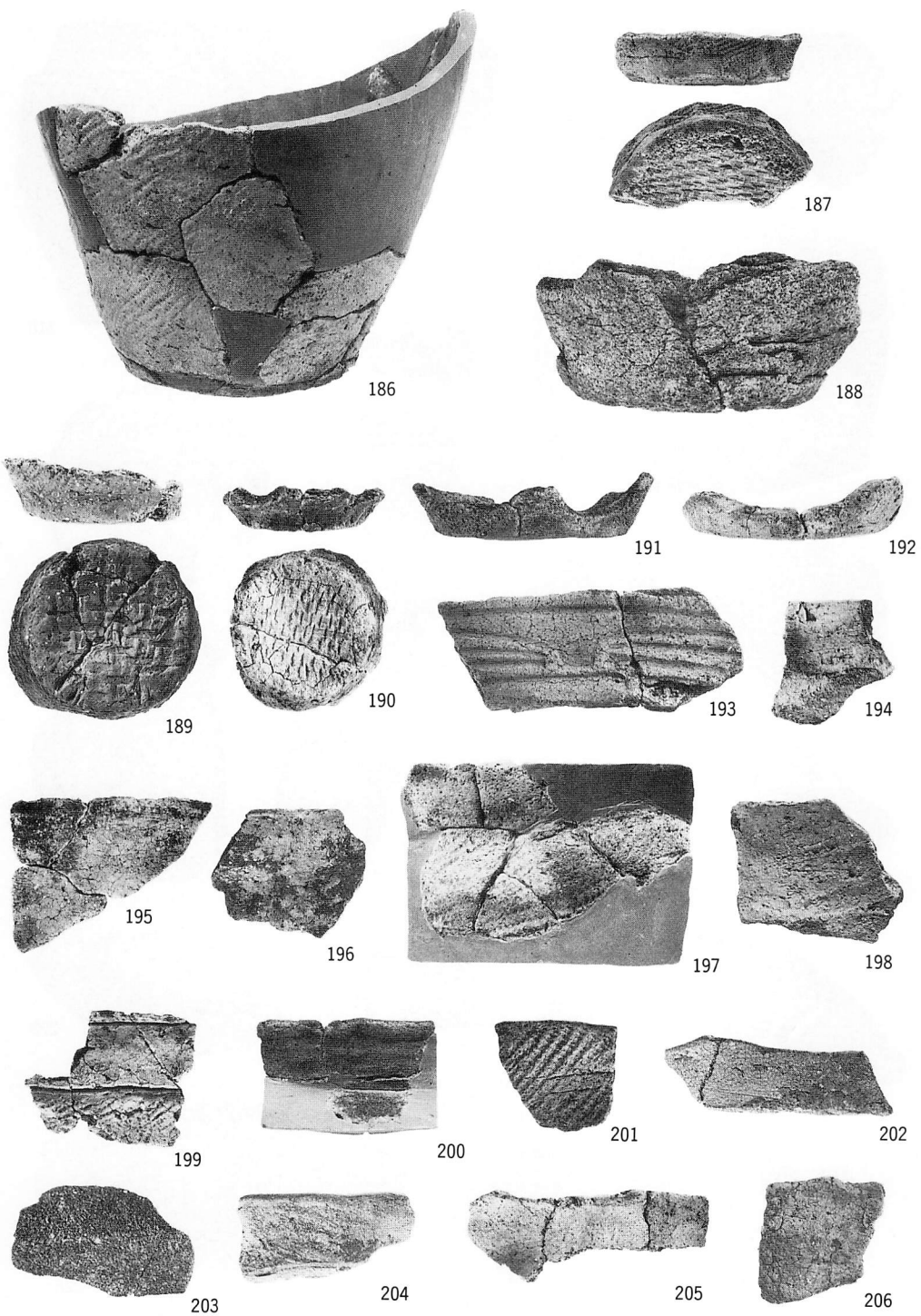


184

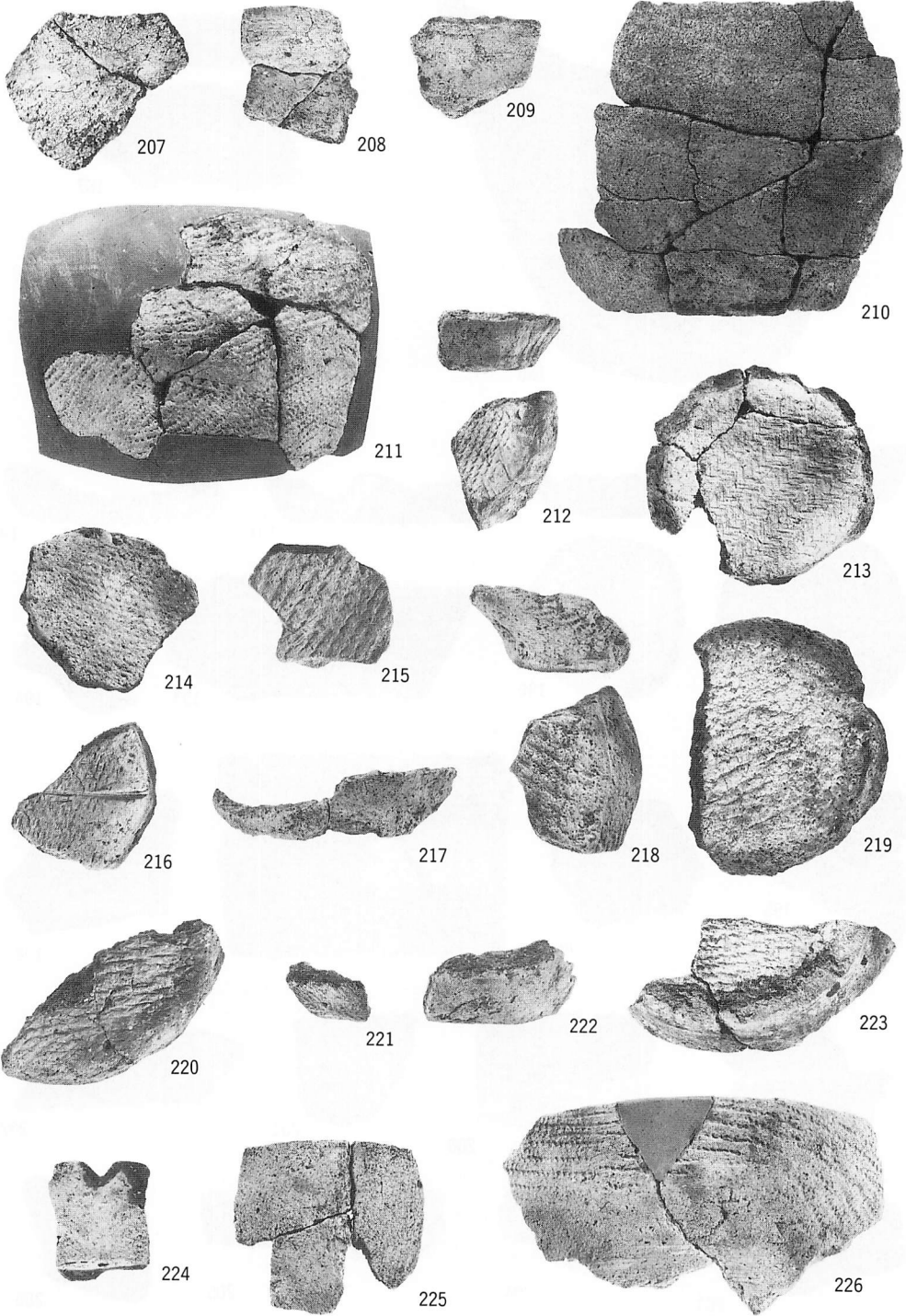


185

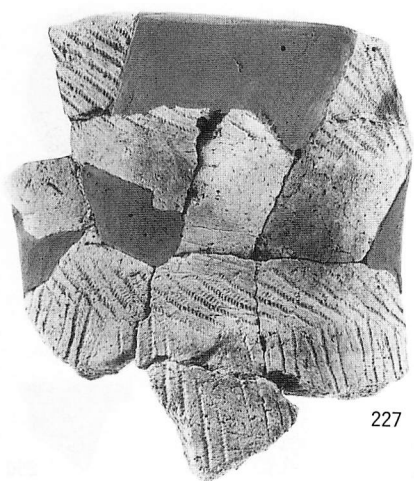
写真図版20 遺構外出土器 5



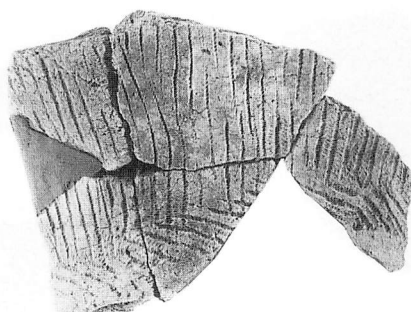
写真図版21 遺構外出土器6



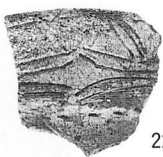
写真図版22 遺構外出土土器 7



227



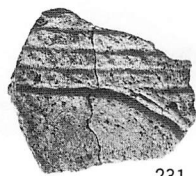
228



229



230



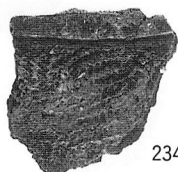
231



232



233



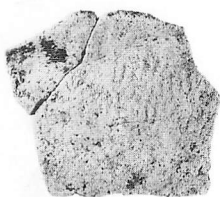
234



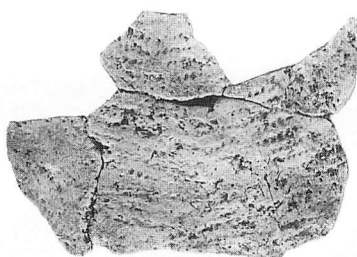
235



236



237



238



239



240

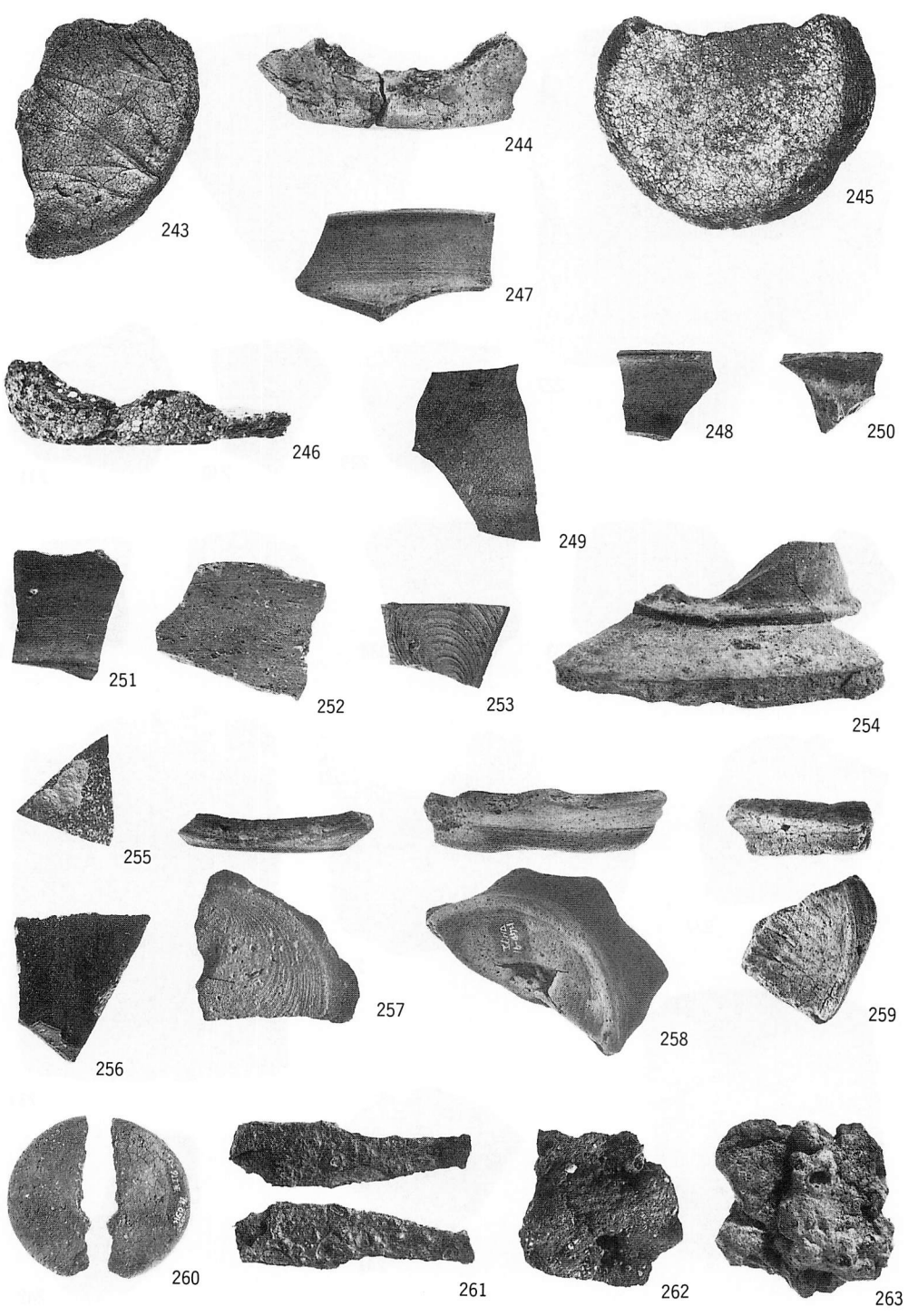


241

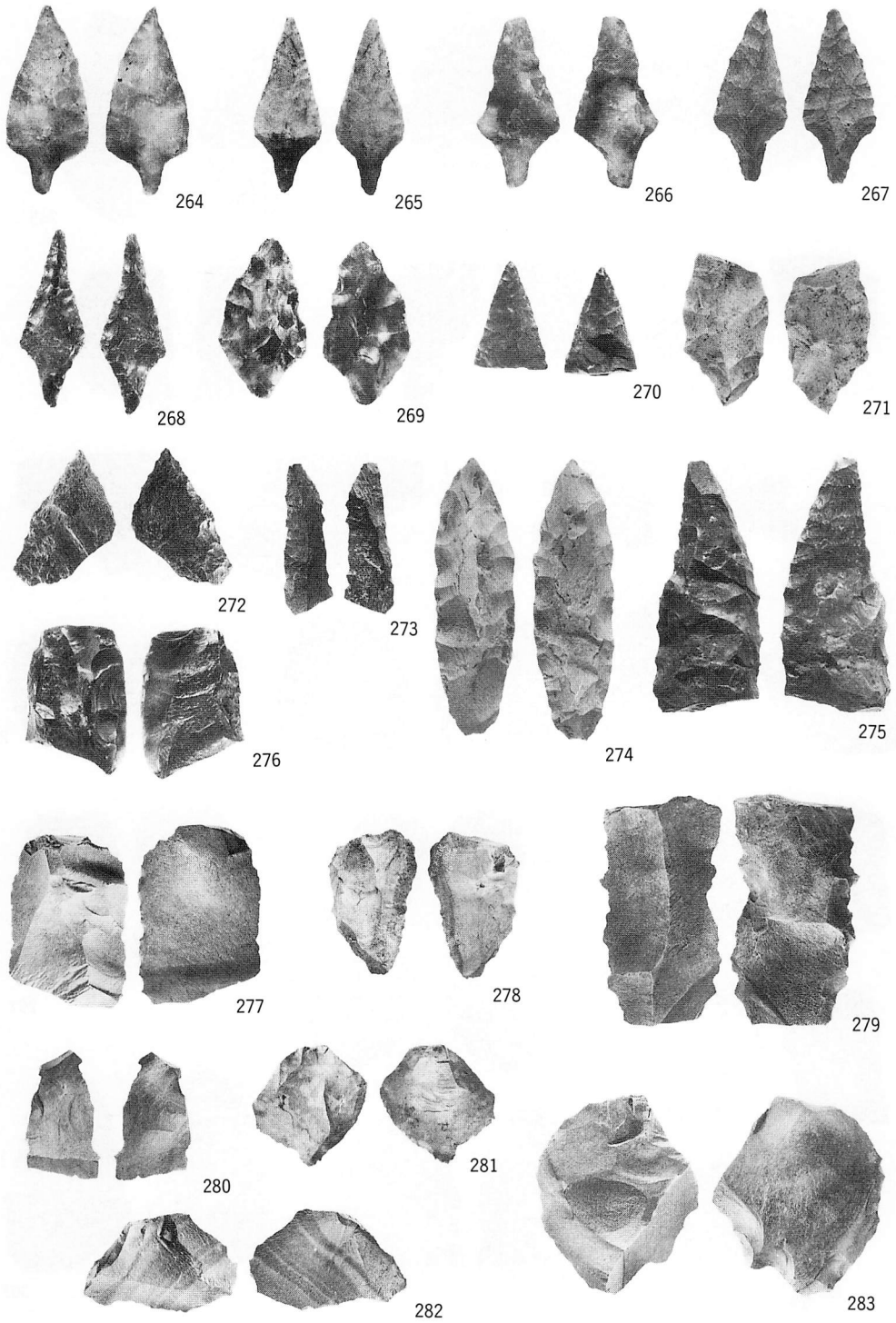


242

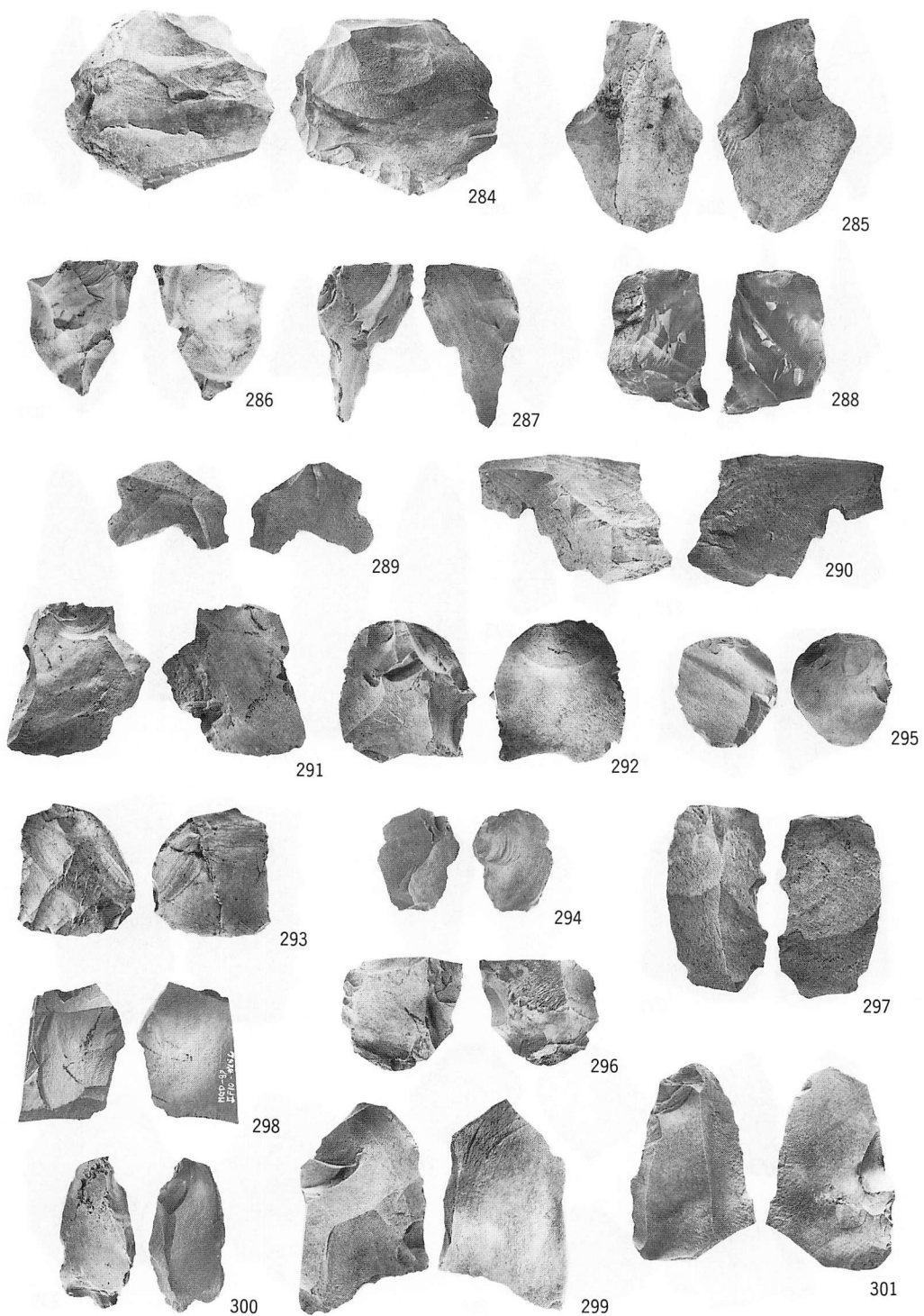
写真図版23 遺構外出土器8



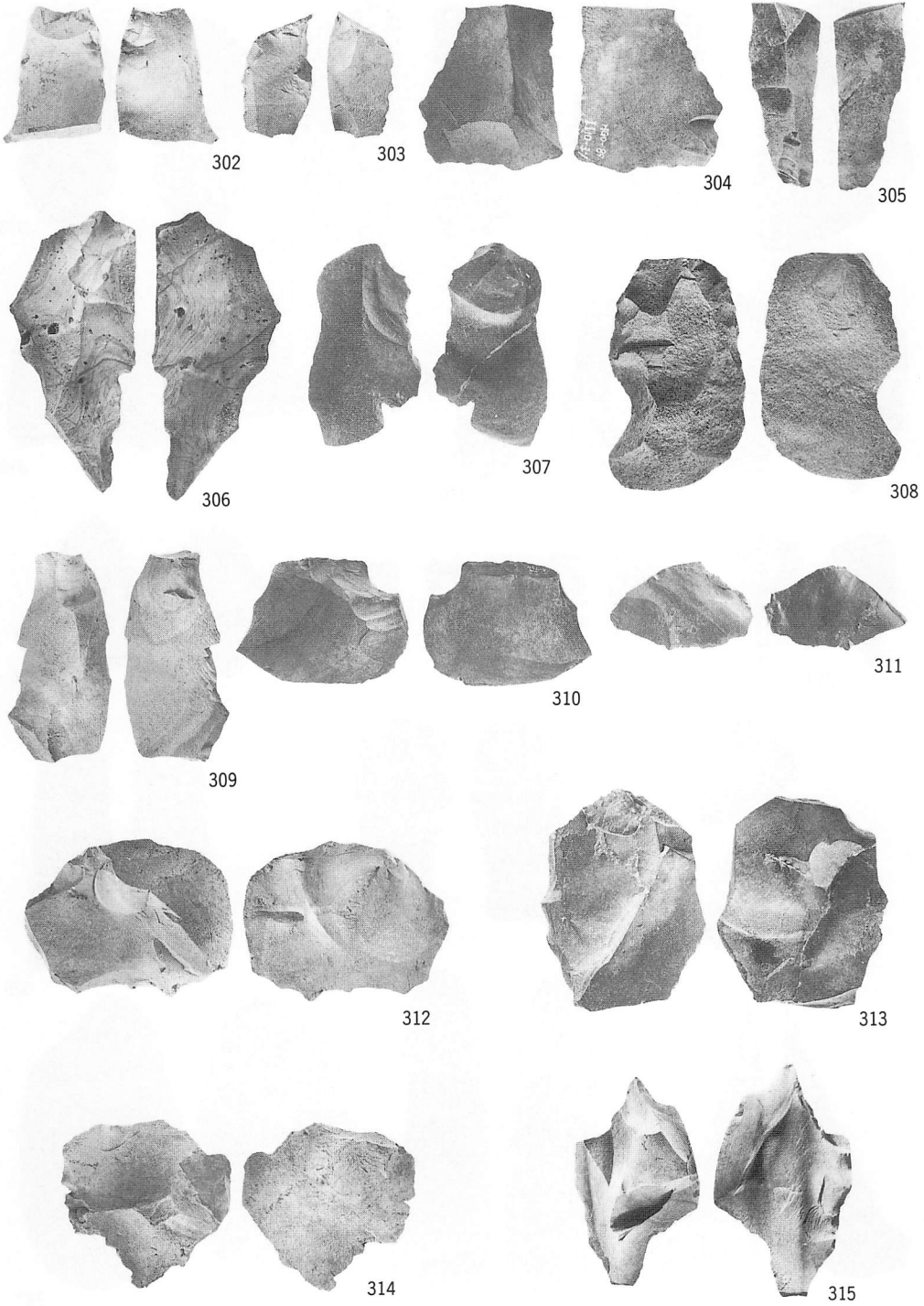
写真図版24 遺構外出土器9・金属類等



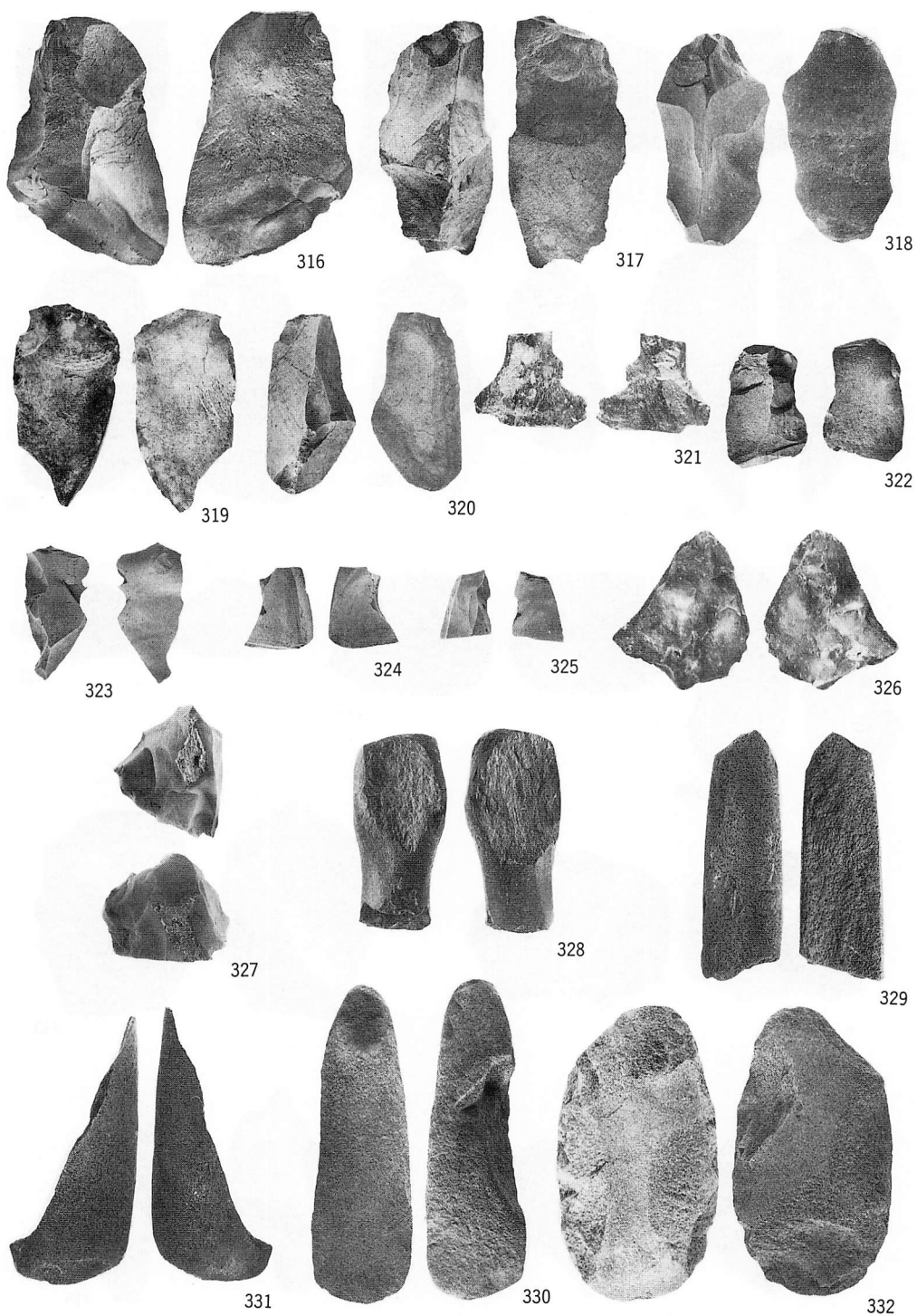
写真図版25 遺構外出土石器 1



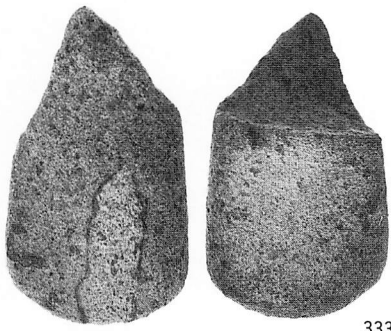
写真図版26 遺構外出土石器 2



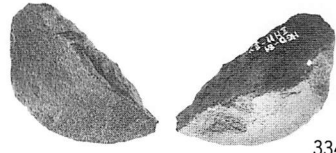
写真図版27 遺構外出土石器 3



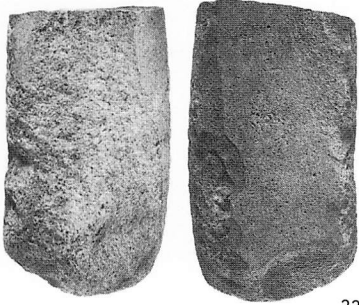
写真図版28 遺構外出土石器 4



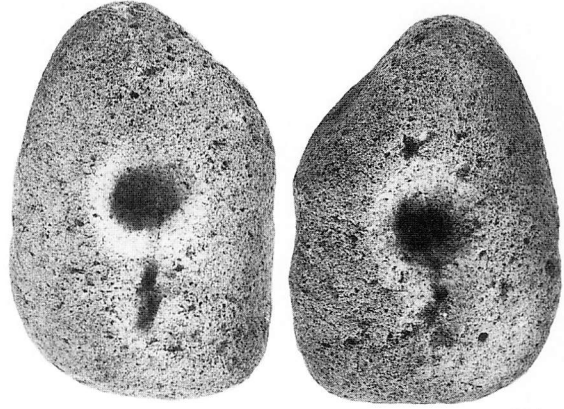
333



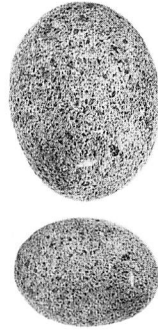
334



335



336



337



338



339



340



341

写真図版29 遺構外出土石器 5



写真図版30 梅ノ木台地II遺跡全景（上空から）



調査前遺跡遠景（西からの空中写真）



調査前近景（西側より）

写真図版31 遺跡現状

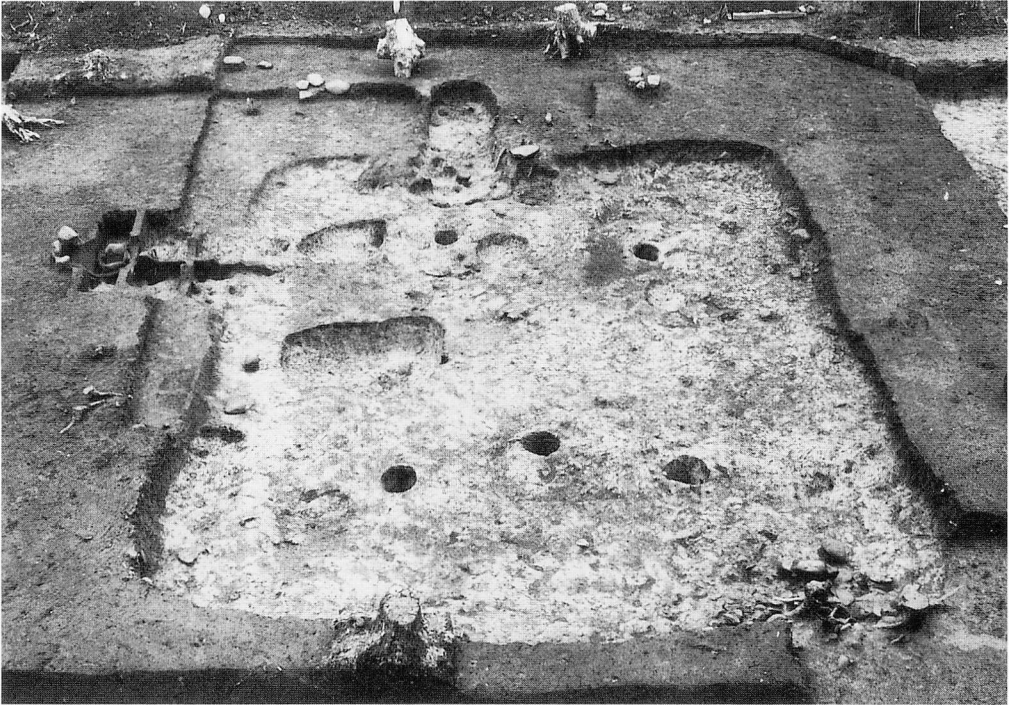


作業風景

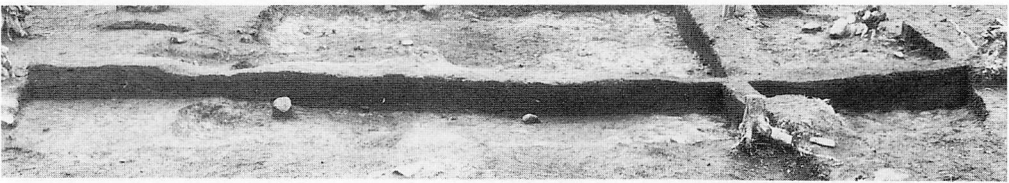


基本層序

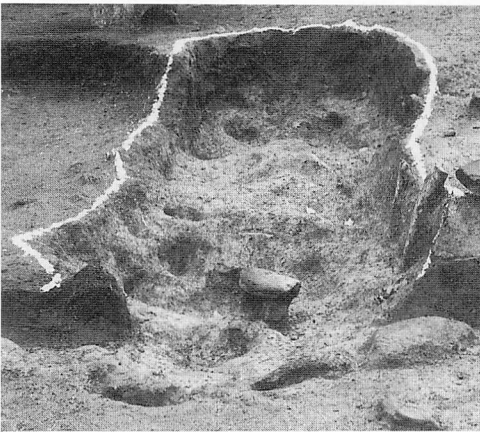
写真図版32 基本層序 (B地点)



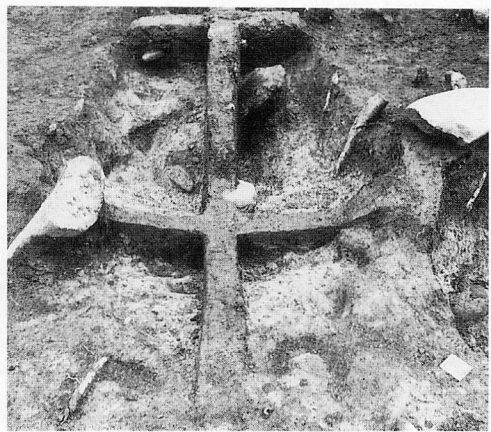
完掘全景



埋土断面

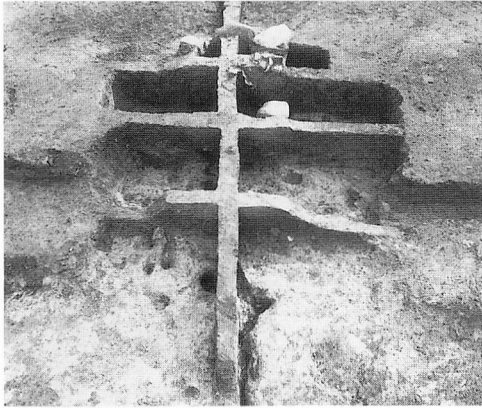


南カマド完掘



南カマド埋土断面

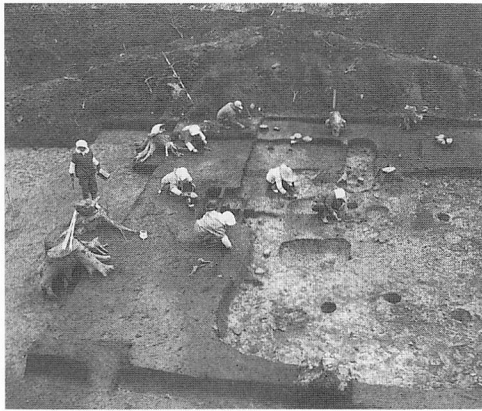
写真図版33 竪穴住居跡 1(1)



東カマド



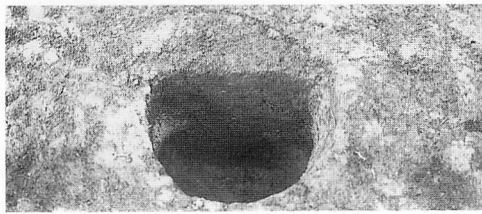
南カマド



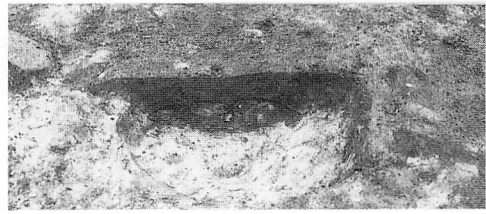
精査風景



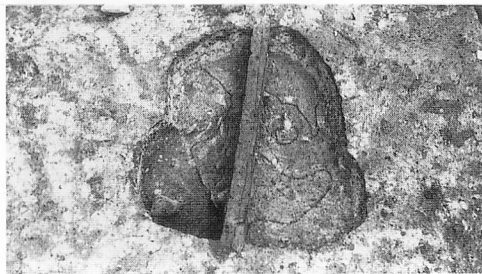
東カマド 煙り出し部



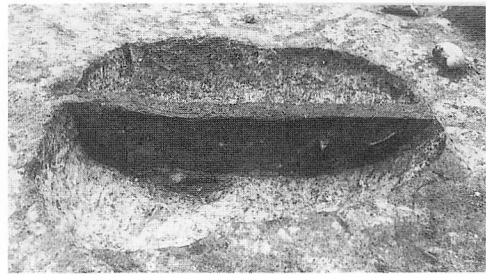
柱穴断面



土坑



土坑3 (上から)

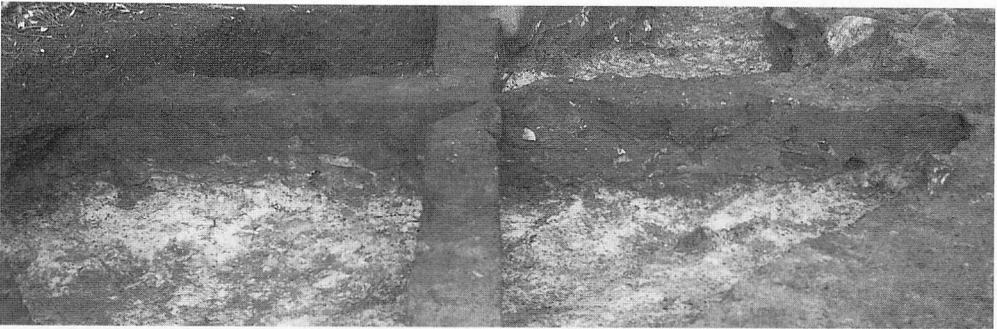


土坑3埋土断面

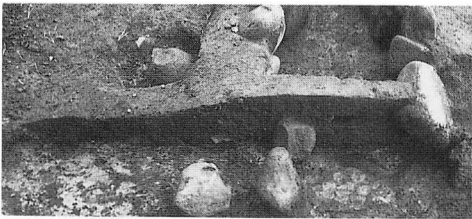
写真図版34 竪穴住居跡 1(2)



完掘状況



埋土断面



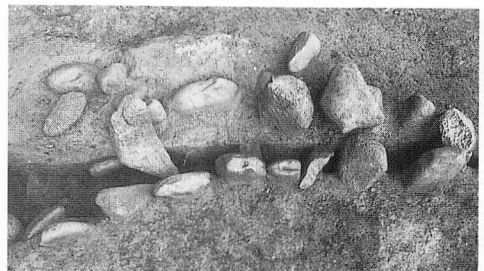
カマド埋土断面



土器出土状況

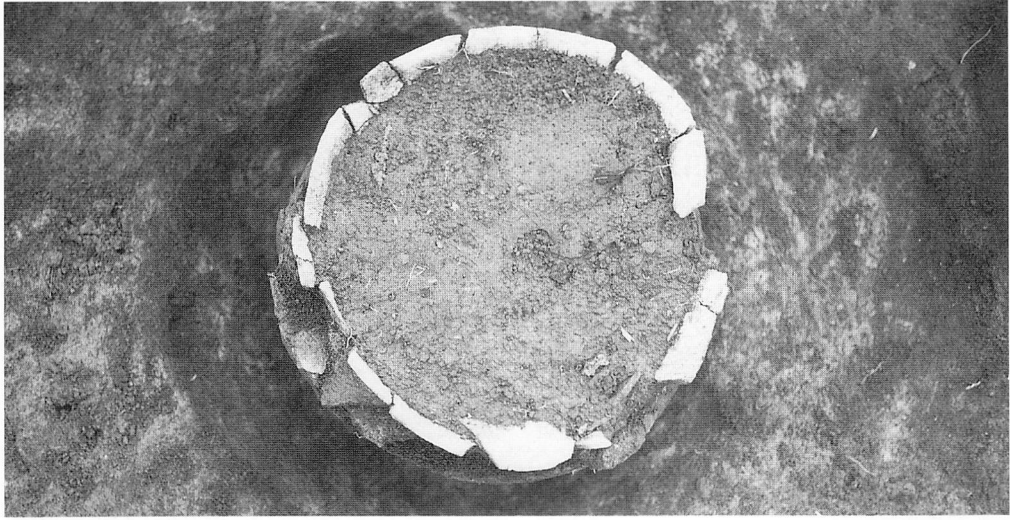


カマド煙道部

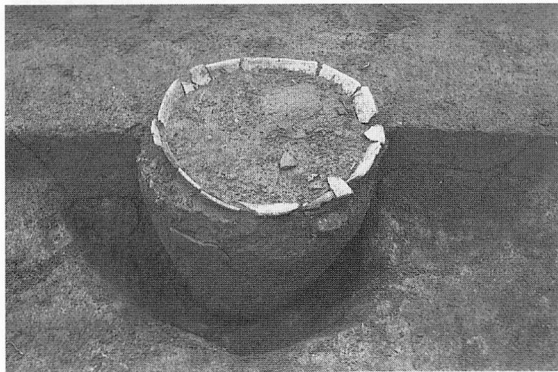


煙道部埋土断面

写真図版35 竪穴住居跡 2



検出（上から）



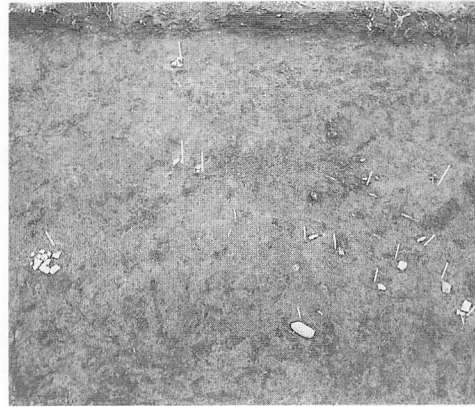
掘り込み断面



紡錘車出土状況

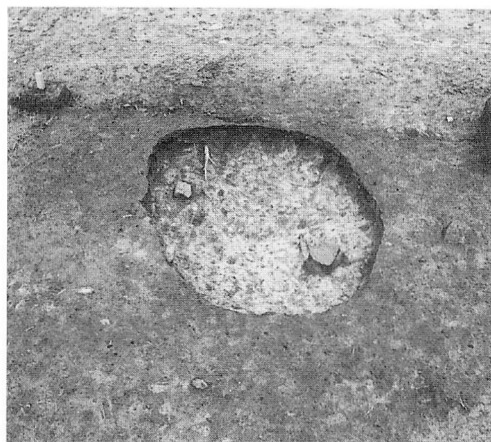


作業風景

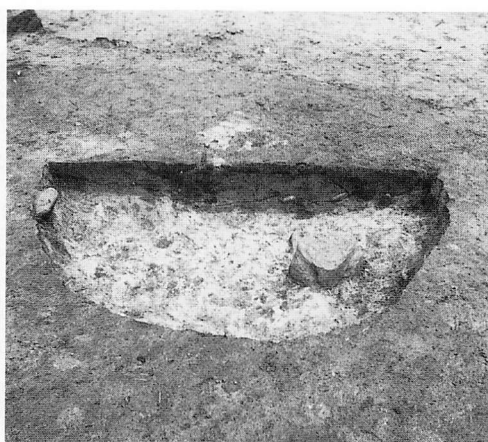


土器出土状況

写真図版36 埋設土器等



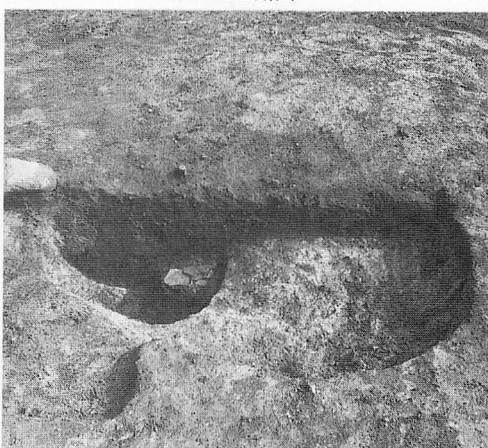
土坑 1 完掘



埋土断面



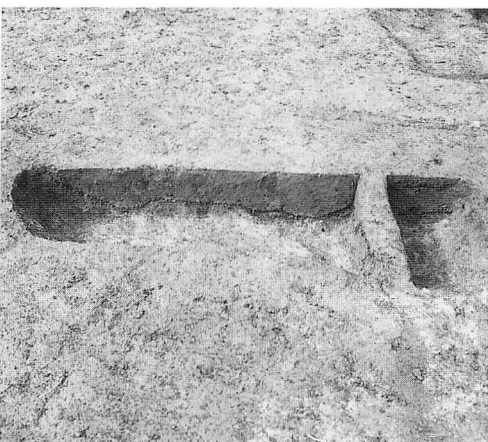
土坑 2 完掘



埋土断面



土坑 3 完掘

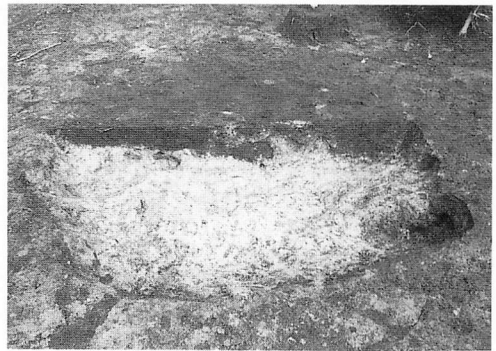


埋土断面

写真图版37 土坑(1)



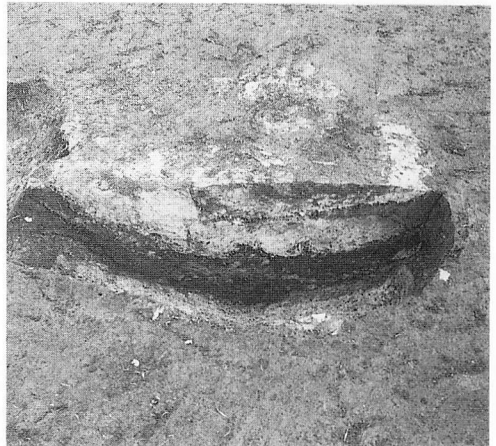
土坑 4 完掘



埋土断面



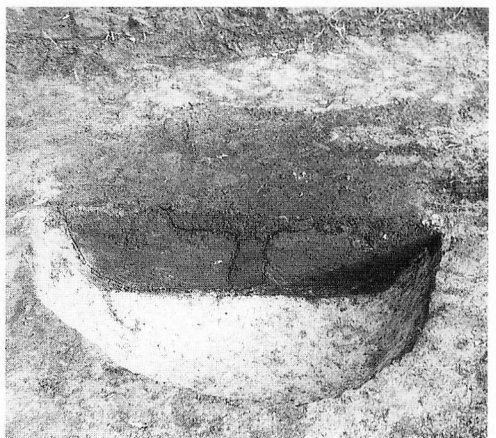
土坑 5 完掘



埋土断面

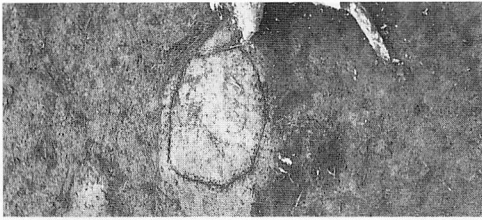


土坑 6 完掘

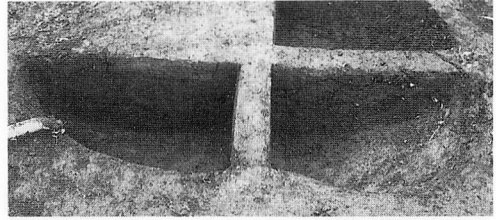


埋土断面

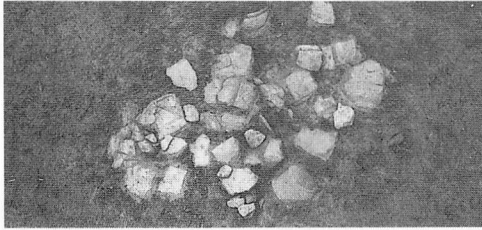
写真図版38 土坑(2)



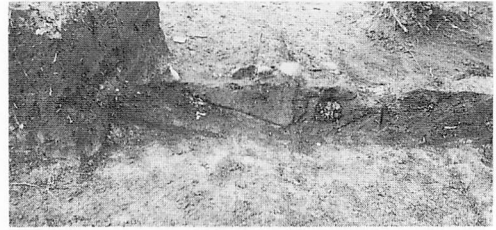
焼土 1 検出状況



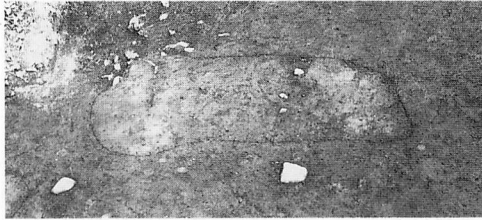
焼土 1 断面



焼土 6 検出状況



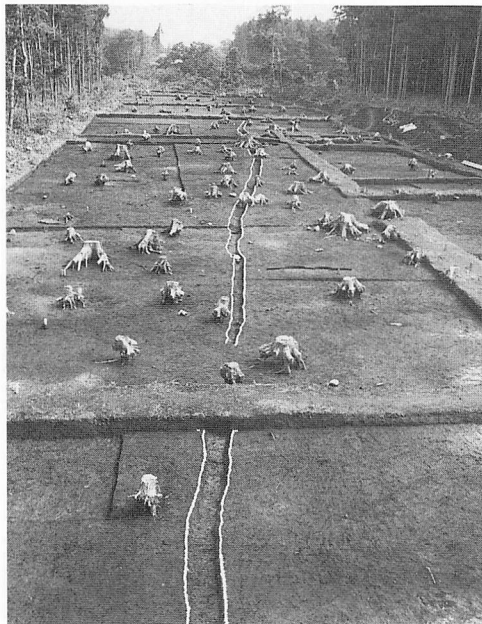
焼土 6 断面



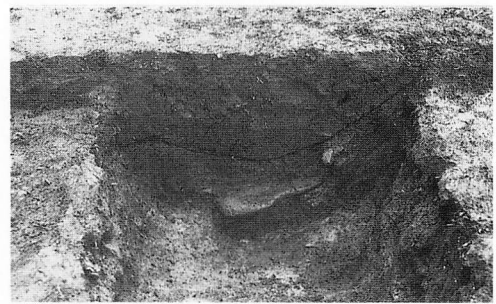
焼土 8 検出状況



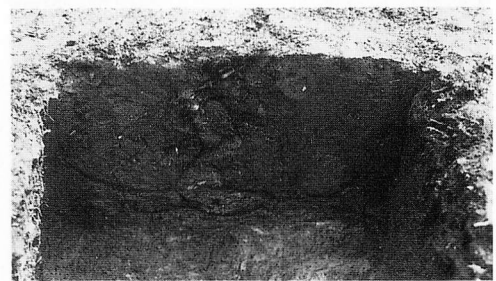
焼土 8 断面



溝跡完掘 (西から)

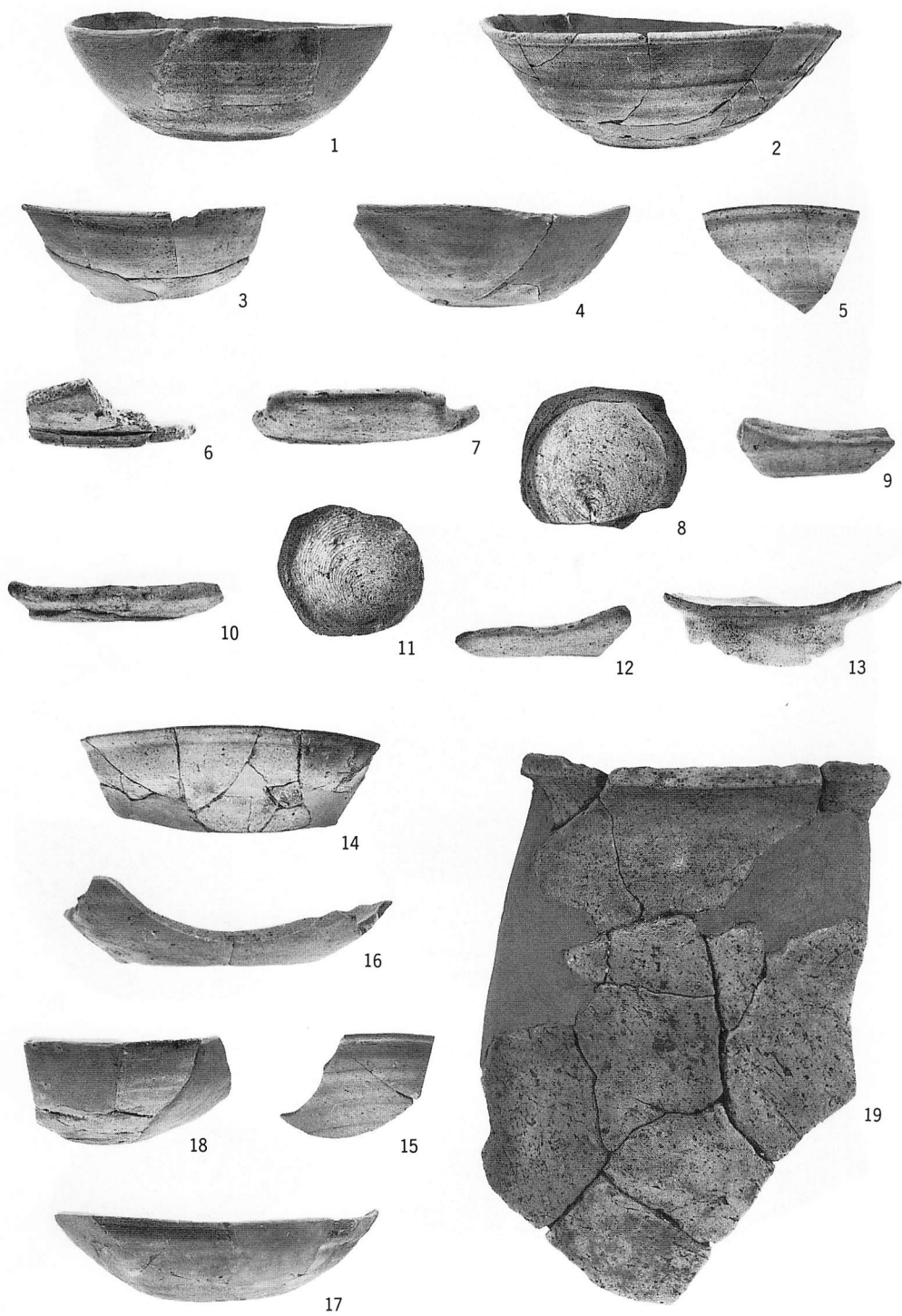


溝跡断面



溝跡断面

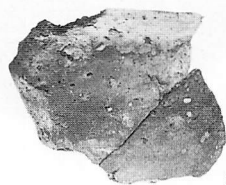
写真図版39 焼土・溝跡



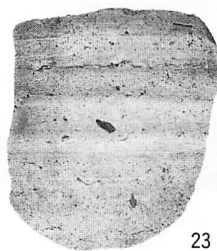
写真図版40 豎穴住居跡1、出土遺物1



20



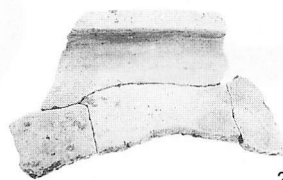
21



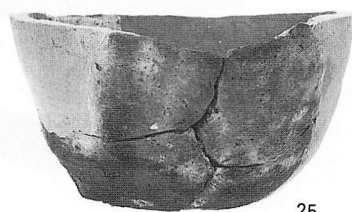
23



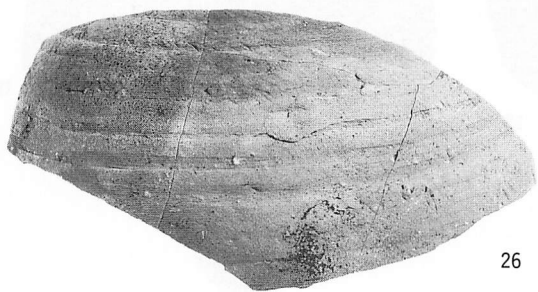
22



24



25

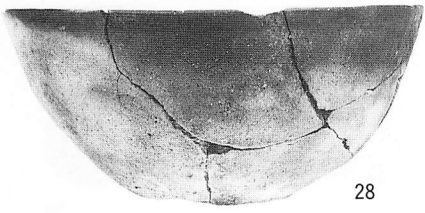


26

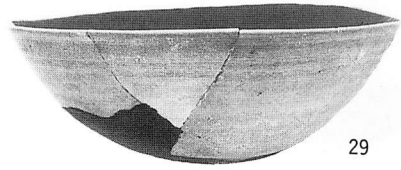


27

写真図版41 豎穴住居跡1、出土遺物2



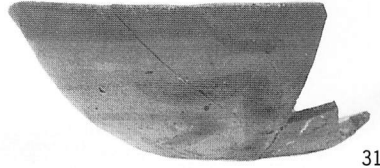
28



29



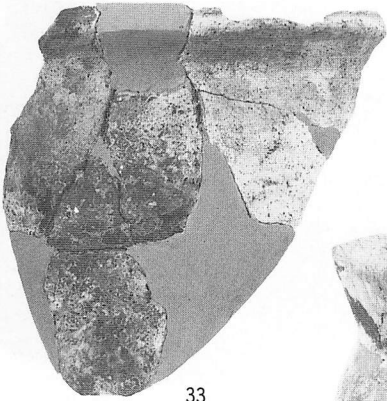
30



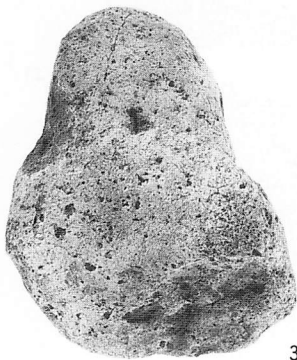
31



32



33



35



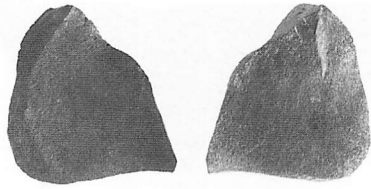
34

写真図版42 竪穴住居跡2出土遺物3・埋設土器



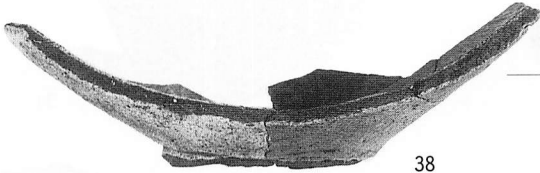
36

土坑 2

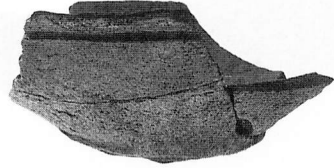


土坑 3

37

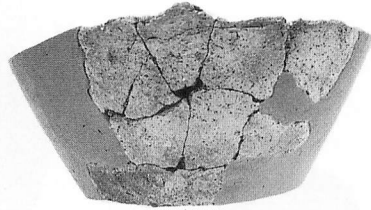
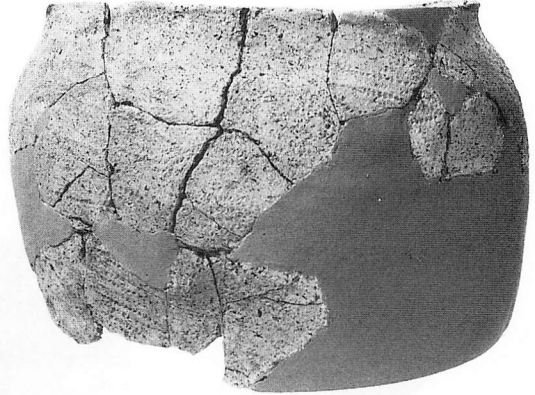


38

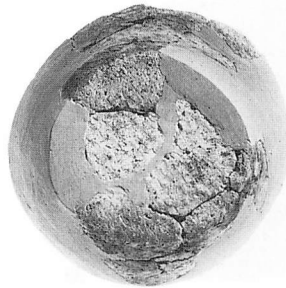


39

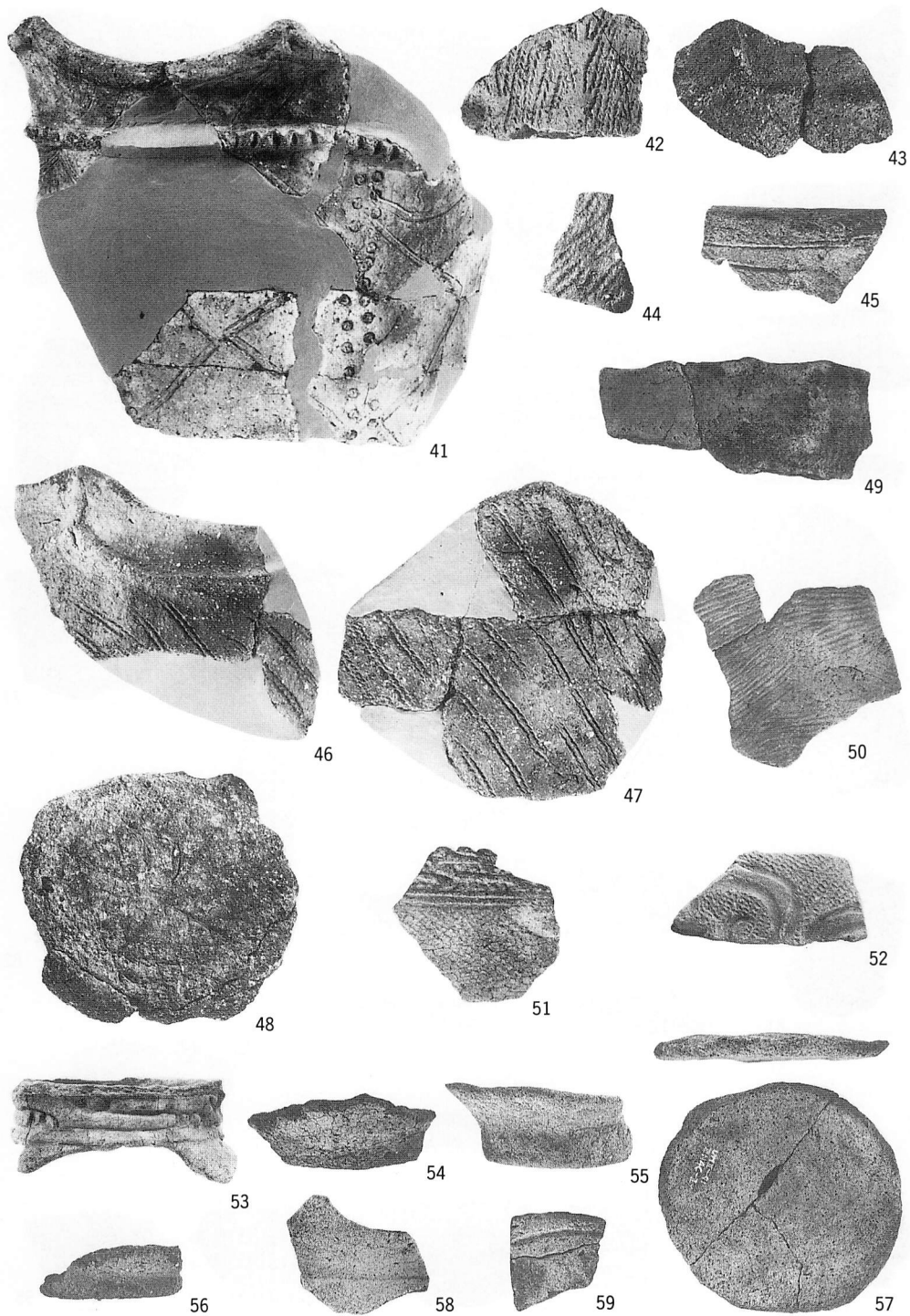
烧土 6



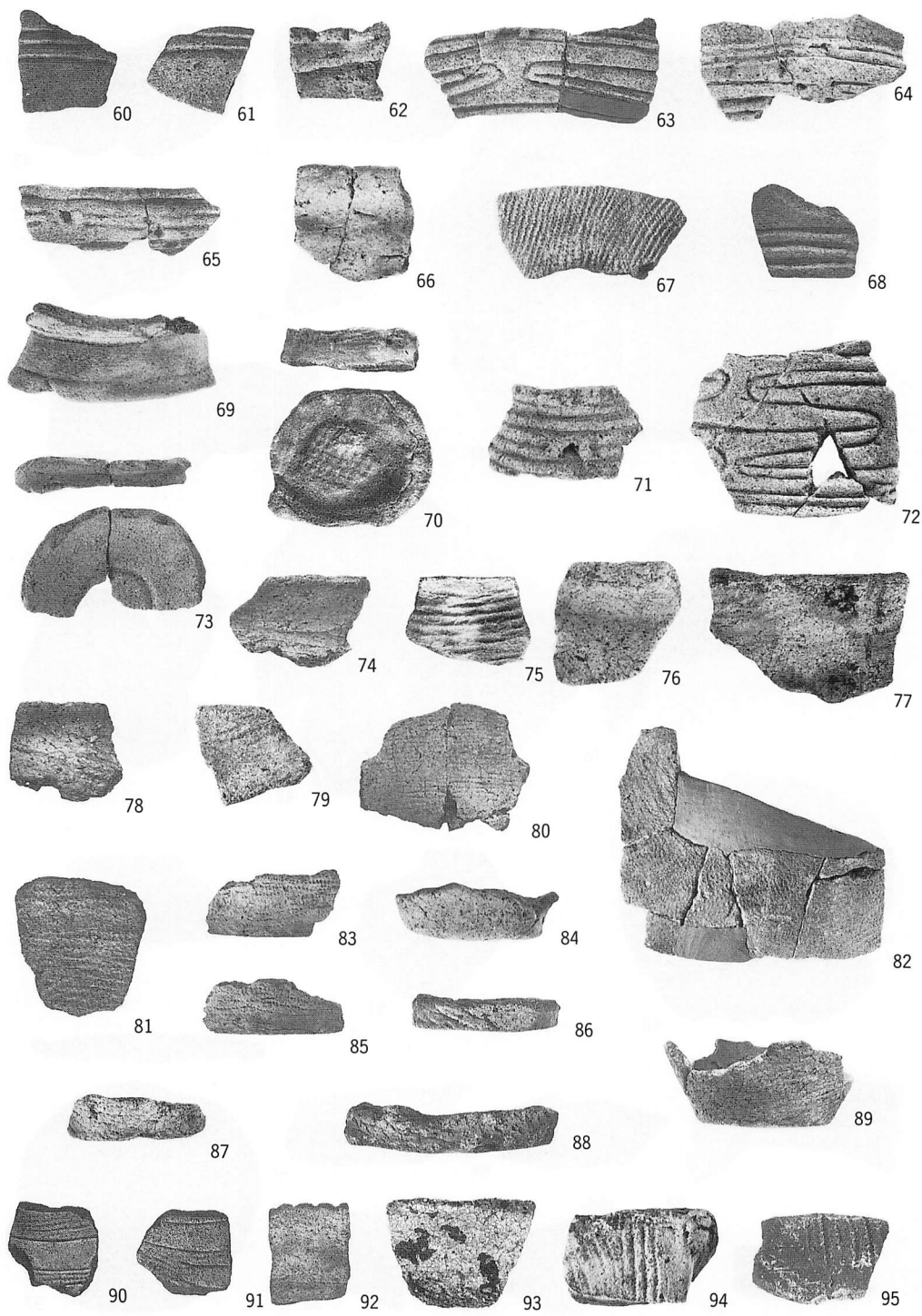
40



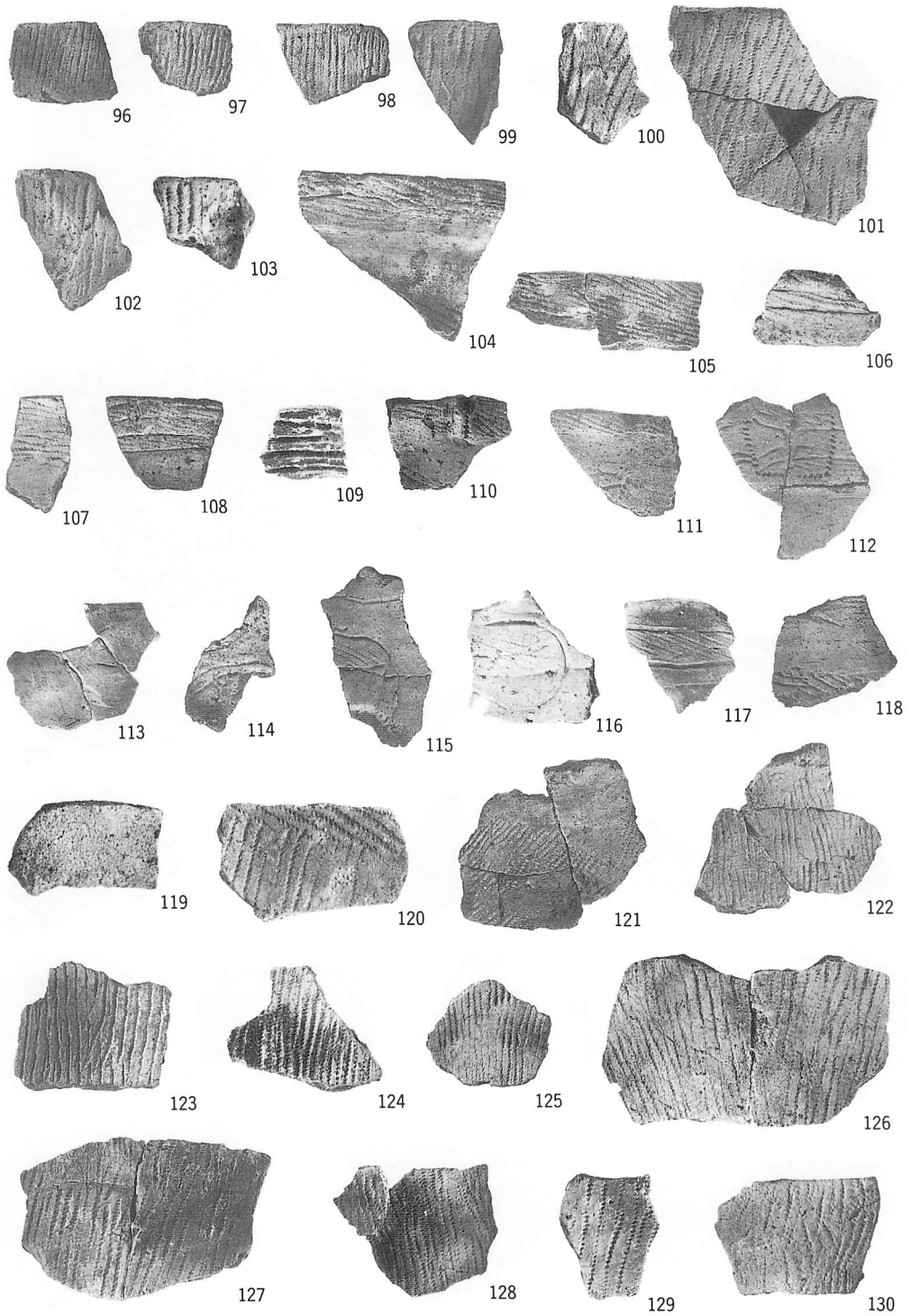
写真図版43 土坑 2、3・烧土 6 出土遺物



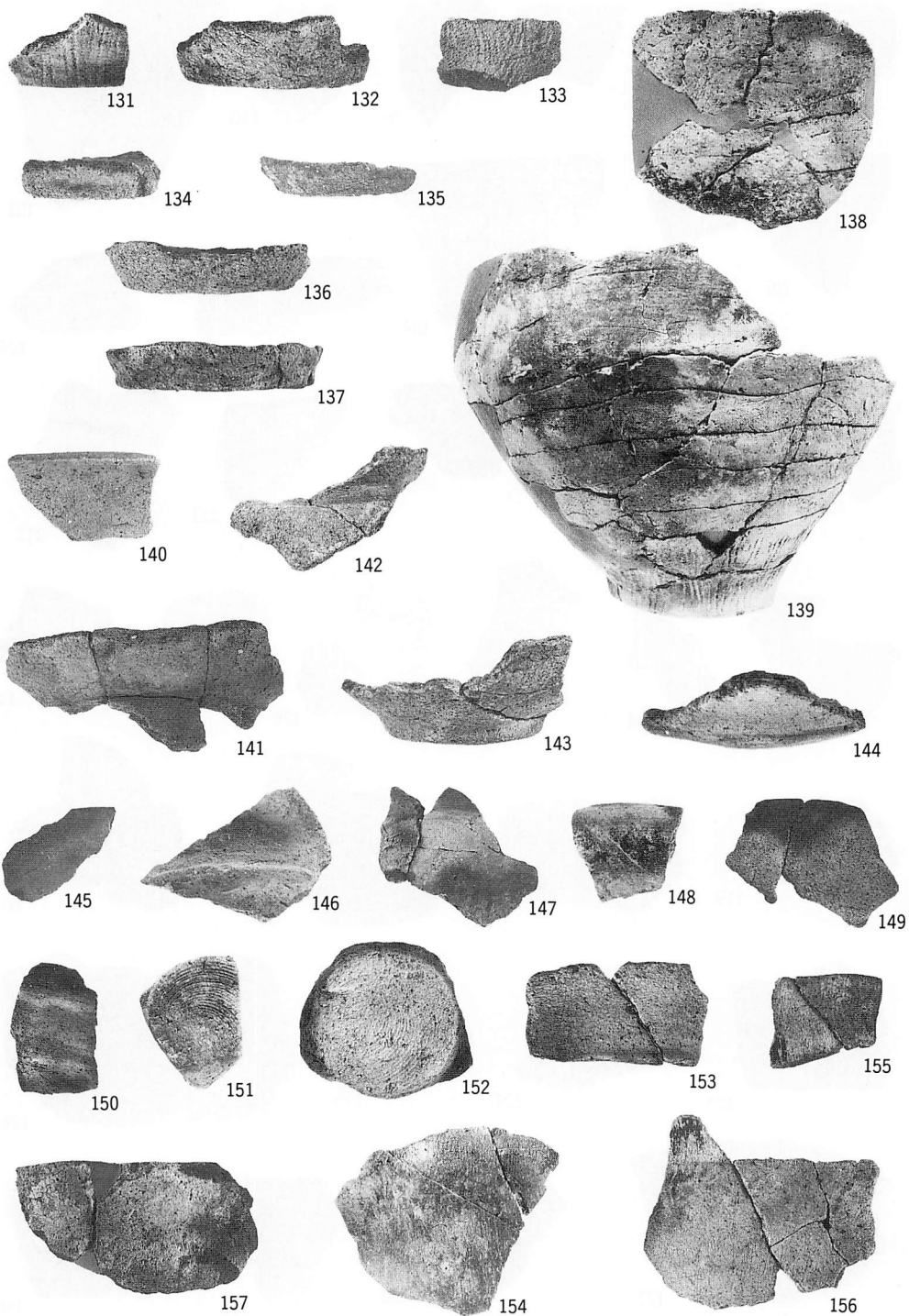
写真図版44 遺構外出土土器 1



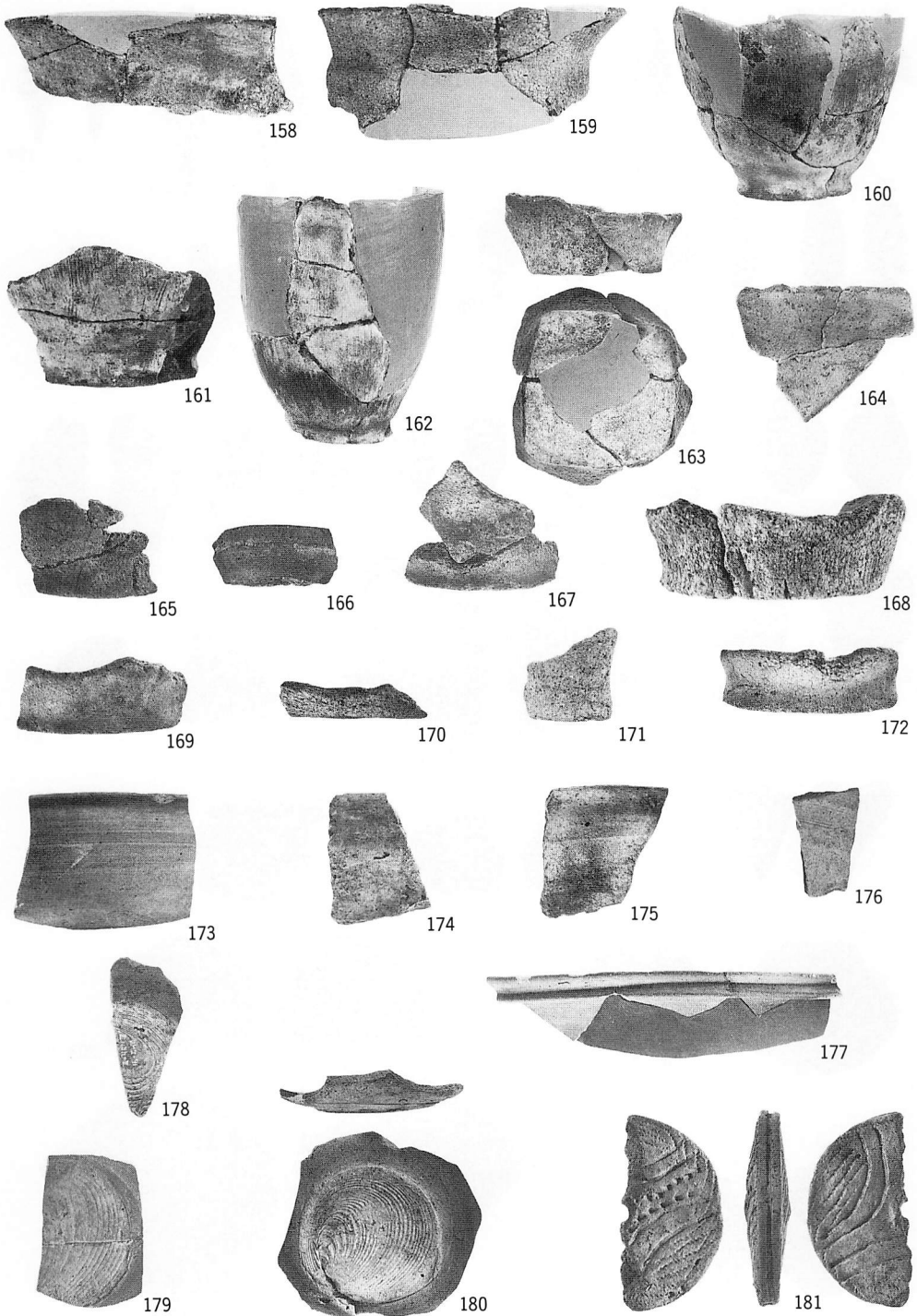
写真図版45 遺構外出土土器 2



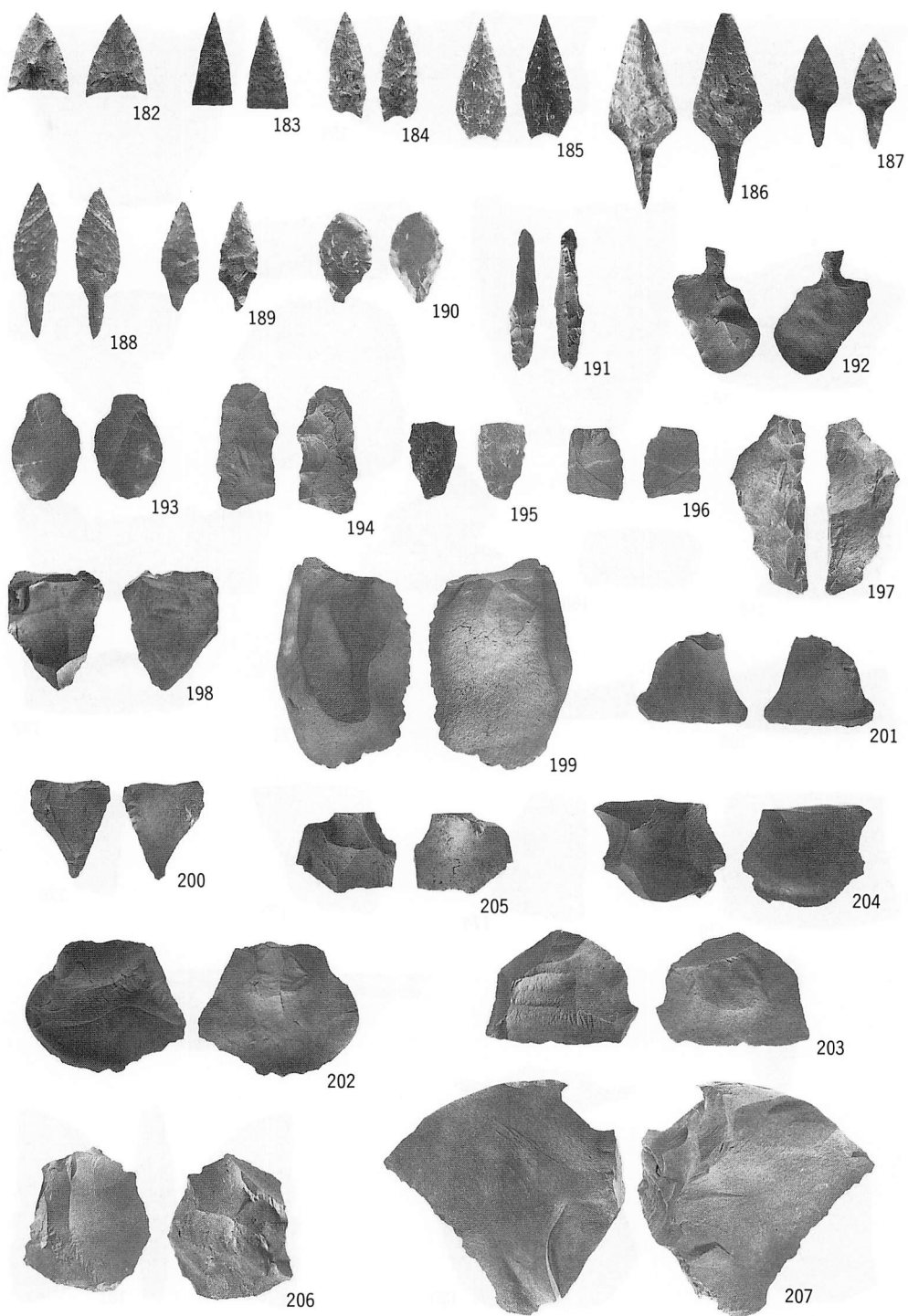
写真图版46 遺構外出土土器 3



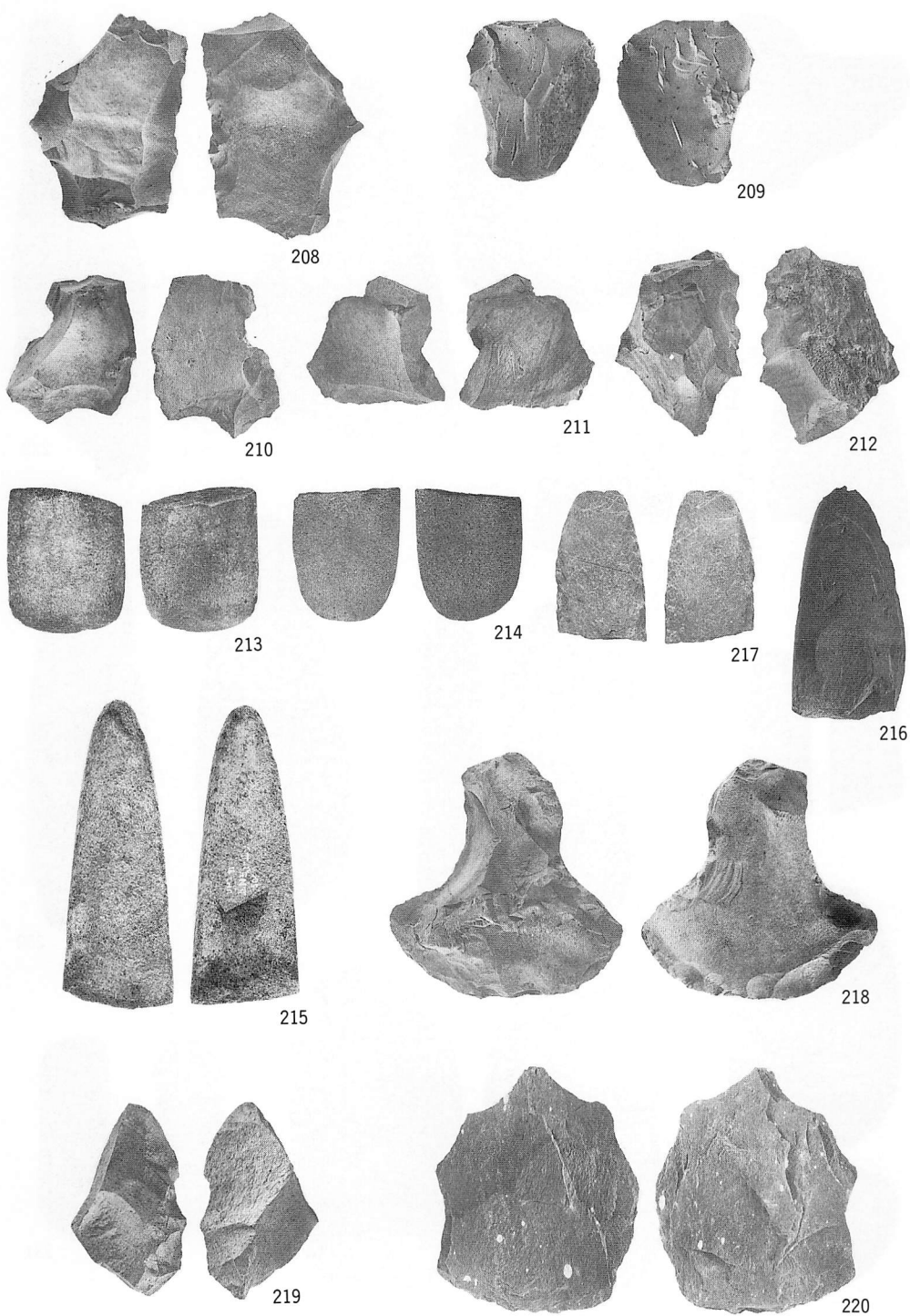
写真図版47 遺構外出土土器 4



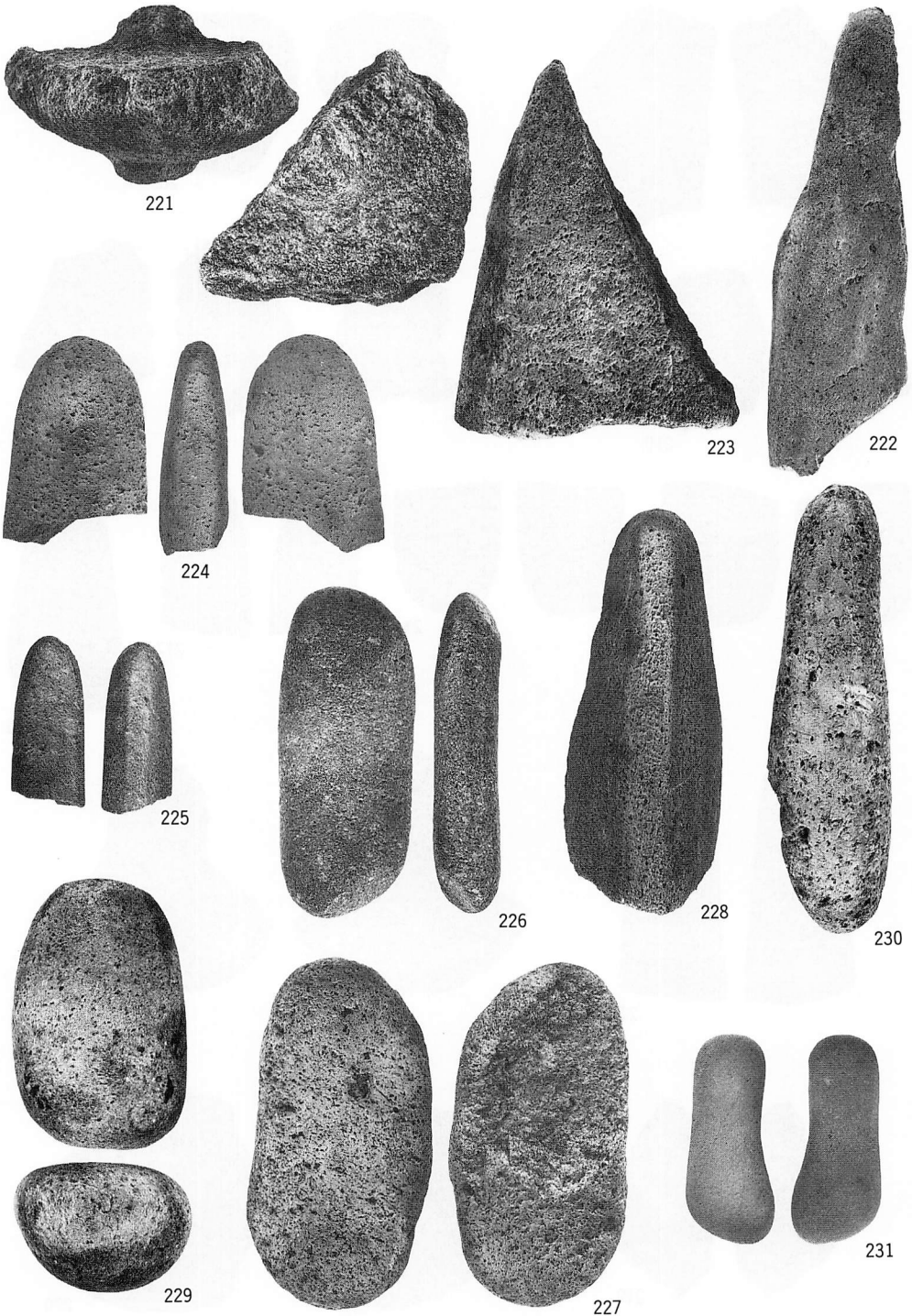
写真図版48 遺構外出土土器5・土製品



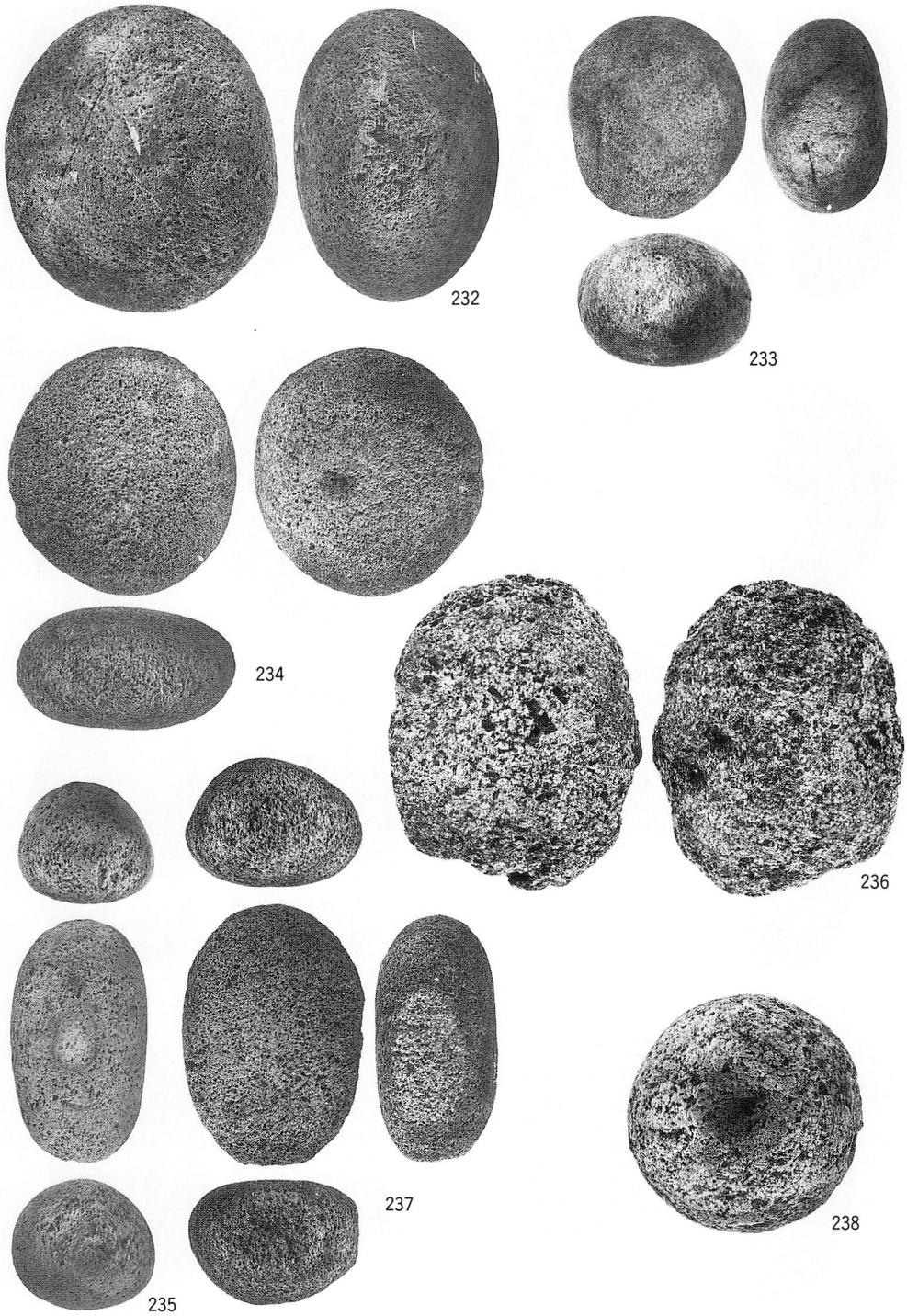
写真图版49 遺構外出土石器 1



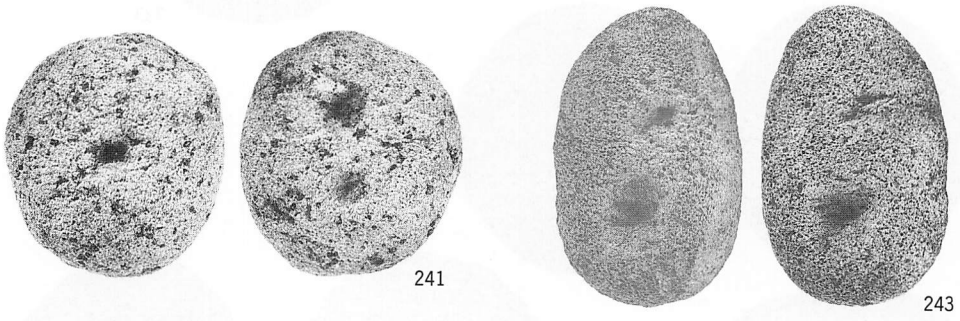
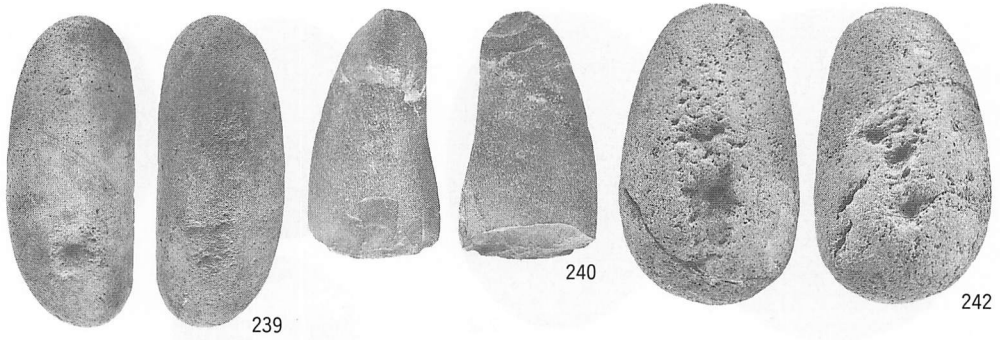
写真図版50 遺構外出土石器 2



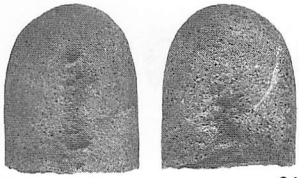
写真图版51 遺構外出土石器 3



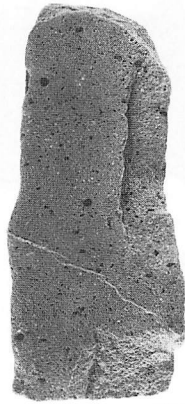
写真図版52 遺構外出土石器 4



写真図版53 遺構外出土石器 5



248



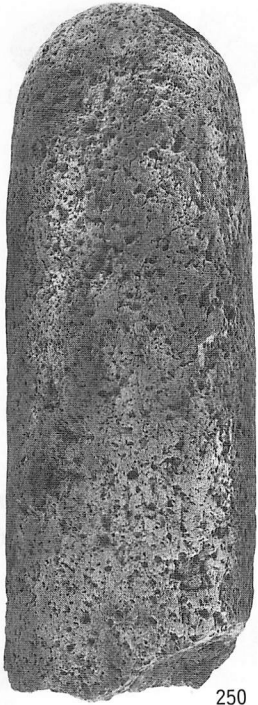
249



251



252



250



253

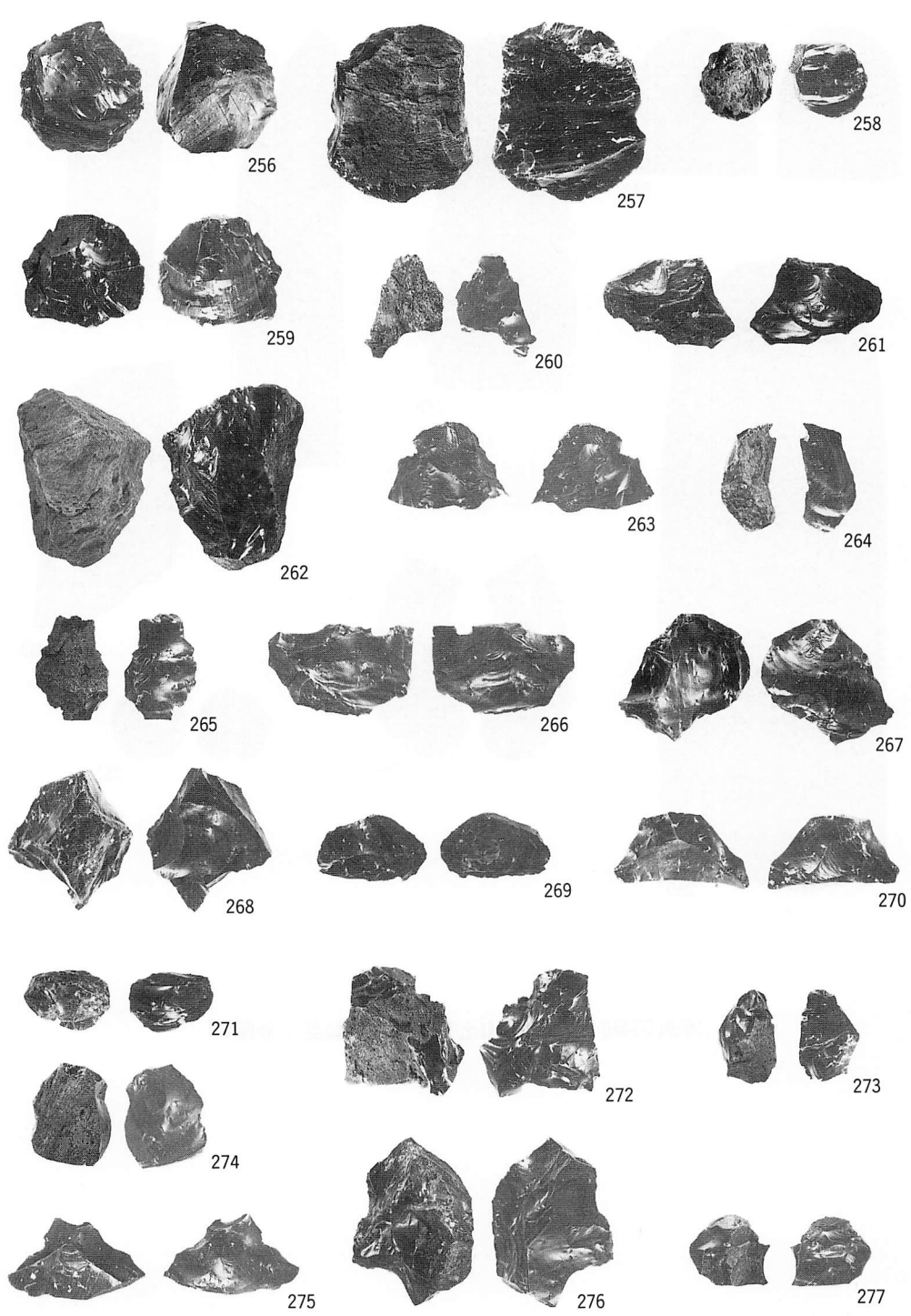


254



255

写真図版54 遺構外出土石器 6・石製品・金属類



写真图版55 黑曜石

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 所長	小笠原 喜 一				
副 所 長	高 橋 敬 明				
[管 理 課]					
管理課長(兼)	高 橋 敬 明	嘱	託	根 橋 文 一	
課 長 補 佐	森 岡 陽 一		〃	吉 田 十 次	
主 事	佐 藤 理	運 兼	轉 技 士 員	佐 藤 春 男	
[調 査 課]					
調 査 課 長	村 上 康 昭	文 專 門	化 調 査 財 員	松 本 建 速	
課 長 補 佐	鈴 木 惠 治		〃	笹 平 克 子	
〃	三 浦 謙 一		〃	花 坂 政 博	
主 任 文 化 財 員	高 橋 与 右 衛 門		〃	佐 々 木 務 彦	
〃	工 藤 利 幸		〃	金 子 昭 彦	
〃	中 川 重 紀		〃	濱 田 宏 人	
〃	藤 村 敏 男		〃	羽 柴 直 之	
〃	高 橋 義 介		〃	星 雅 晃	
〃	高 橋 正 一		〃	高 木 勉 造	
〃	渡 辺 洋 一	期 專 門	限 調 査 付 員	鎌 田 精 則	
〃	佐 々 木 清 文		〃	鎌 田 勝 悟	
文 化 財 員	斎 藤 隆 雄		〃	阿 部 葉 博	
〃	佐 瀬 司 幹		〃	千 葉 信 一	
〃	千 葉 博 司		〃	熊 倉 博 英	
〃	斎 藤 隆 幹		〃	新 倉 博 透	
〃	東 海 林 弘		〃	山 口 博 磨	
〃	佐 々 木 均 行		〃	小 山 内 元 悦	
〃	川 村 貞 格		〃	柳 田 原 敬 司	
〃	鈴 木 貞 雄		〃	菅 原 剛 樹	
〃	伊 東 邦 明		〃	工 藤 英 二	
〃	斎 藤 敏 一		〃	高 橋 浩 修	
〃	神 信 一		〃	溜 佐 藤	
〃	佐 々 木 信 一		〃		
〃	小 原 真 一		〃		
〃	酒 井 宗 孝		〃		
[資 料 課]					
資 料 課 長	村 松 義 夫				
文 化 財 員	高 橋 一 浩				
專 門 調 査 員					

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 180 集
兵庫館跡・梅ノ木台地Ⅱ遺跡発掘調査報告書
東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成 5 年 3 月 29 日

発行 平成 5 年 3 月 30 日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡 11-185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目 10-5

TEL (0196) 41-0585